
人魚と龍とヴァンパイア

ヤマタカ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

人魚と龍とヴァンパイア

【Nコード】

N4351U

【作者名】

ヤマタカ

【あらすじ】

妖^{あやかし}の王と称される「龍」。その一族である龍遠家から今日、若き青年が学園に入学した。そこで彼は十年前に婚姻の約束をした人魚の姫と再会するが、同じ十年前に出会っていたヴァンパイアの姫にも結婚を宣告された。そのまま二人は青年の嫁としてアプローチを開始していく。こうして彼の慌しくも賑やかな学園生活が幕を開けた。二人の姫君のことを考えながらも彼は学園生活を謳歌していくが、予測不可能な学園行事に翻弄されるわ、突如空から少女が降ってくるわ、それに伴い未知なる敵が現れるわで休む暇のない毎日

が展開していく。しかもそれだけで終わらず、次第に舞台は学園外にも広がっていくことに……。異世界で織り成す、恋愛に戸惑いながらも王の誇りを胸に歩いていく若き龍の物語。 ※主人公最強：チート というものではありませんが、『妖の王』です。でそれ相応の実力はもっています。

夢

最近、夢をみる。それも同じ夢を。

本来『同じ夢』を何回もみることは常識的に考えればそうないだろう。しかしながら、ここ数日は毎日がそれだ。一度きりの夢ならすぐに忘れてしまうが、何度も似通った夢をみていればさすがに記憶に定着してしまう。けれど、別に悪夢というものではなく俺が幼少時の頃に体験した出来事を断続的に区切りながら展開していくものだ。

夢の内容は大きく分けて二つ。

最初に映るは見渡す限り延々と広がる壮大な海。光り輝く海を前に、一緒に遊んでいるのは一人の少年と一人の少女。少年は俺だろう、一族特有の銀髪が光沢をなびかせている。浅瀬というのもあって二人は海沿いを走ったり砂山を作ったりと笑いながらとても楽しそうにしている。ただ遊んでいるだけなのだが、目の前の少女は本当に幸せそうで見ている方も自然と笑みがこぼれてしまうほどだ。

この時間がずっと続けばいいのに、と頭の中で何度も願いながら身体がクタクタになるまで遊び、次第に空は橙色の夕日と溶け込んでいく……。それはいつまでも続くと思っていた楽しい時間に別れが近づいてきたことを意味する。海の向こうから何十人もの集団がやって来る。きっと彼女を探していたのだろう。それを見た瞬間、隣にいた彼女は寂しそうな表情を浮かべた。今にも泣き出しそうだ。

彼女はゆっくりと歩きながら集団の方へ向かっていく。自分の中で何かと葛藤しながらも現実を必死に受け入れようとしていた。遊びながら彼女は「家に帰りたくない」と何度も呟いていたからだ。けれど、子供の俺にはなす術がなく、その後ろ姿をただ眺めている

だけだった。

そんな自分の無力さに内心悔しんでいると、ふと彼女が振り向く。そしてしどろもどろになりながらも一言一言丁寧に語りかけてきた。

「また……会えますでしょうか」

「ああ、会えるよ」

「いつ、いつ会えますか」

「そうだな。ちょっと先になるかな」

「そう、ですか」

「……」

「……」

ちょっと先という言葉に敏感に反応している。何か思う節があるのだろうか。目には涙をこれでもかとためて唇をキュッと結んでいる。どんな状況であれ、女の子がこんな表情をしている様を見るのは辛いものがある。そんなことを思ったときだった。

「あ、あの！」

「ん？」

口を、肩を震わせながらも真剣な眼差しでこちらを見ている彼女がいた。先ほどと同様、目には涙をためている。けれどその瞳は前とは強い強い意志を感じる。一大決心をしたような、自分を極限に奮い立たせているような、そんな想いを感じる。

「もし」

「？」

「もしまた会えたら」

「……？」

「わ、私と、【契り】を結んただけなんでしょうか！」

「え!?!」

「い、いえ、嫌ならいいんです!　まだ私小さいし、何も知らないし!」

「あ、いや、けど」

「でも、でも!　そうなたらいいなっていうか、そうなりたいと思っただけです」

「あ……」

「だから、だから!」

「……」

「……」

「うん」

「え?」

「うん、俺でよければ」

「……ほ、本当ですか!?!」

「ああ、いいよ」

「っ!」

―― 時間だ ――

「じゃあね」

「はい」

「また」

「また」

【【再会の時まで】】

結局、彼女の顔はもやもやしていて最後までわからないままだった

た。何故、あの時彼女からの『契り』の提案を受け入れたのか。理由を聞かれれば上手く答えることが出来ない。さらにいえばあの時の俺は『契り』の意味さえも知らなかった。

けれど、彼女ともっと一緒にいたかった。これに同意すればもっと一緒にいられると思った。また、今にも泣き出しそうなあの子を少しでも元気づけたかったというのもある。いずれにしろ、あの時の俺に出来ることはそれしかなかったのだ。

そして、場面は変わる。

そこは華やかで鮮やかな飾りが彩る、活気に満ちた都であった。

都の名は【光誕^{こうたん}】。

数十メートルはあろうかという城壁にぐるりと囲まれ、中は妖精・精霊の者らが住居を構える。その種族の数は有に二千を越え、正式な数を把握することは困難とされる。都の中では一族特有の装飾品や骨董品など、ありとあらゆる『もの』があふれかえる。賑わいも凄まじく、朝日が昇る頃にはすでに多数の店が開店とばかりに声を大にして客寄せに励む。

この世界の住人は、自分たちの住居をそれぞれ一族特有な場所に求める。深海であったり、森の奥深くであったり、空であったり……。そのためか、様々な一族が密集するいわば都と呼べる街はそうそうないものなのだ。ゆえに、興味本位や探究心、刺激などありとあらゆる想いを胸に、この【光誕】には年中多くの観光客（？）が訪れている。

そんな中、都の中心にあり【光誕】名所の一つでもある直径20メートルの巨大噴水の前で、ベンチに座りながら一人の少年と一人

の少女が会話を交わしている。少年は言わずもがなであるが、少女は先ほど海で一緒に遊んでいた子ではない。顔は見れないのだが、言動や立ち振る舞いが明らかに違う。しかし、今はそのようなことを考えている暇はない。

「何が間違っているというのだ！」

声を荒げながら少女は目の前の俺を睨む。その瞳を見ながら穏やかな口調で少女に答える。

「全部だよ。その考えは上に立つ者として間違ってるよ」

「な！？ 我が一族は【地の王】と呼ばれし名誉ある妖ぞ！ 他の者を従わせて何が悪い！」

「従わせるの意味がそもそも間違っている。そのような考えでは皆離れてしまう。真に付き従ってくれるは、その者の『力』ではなく『心』だよ」

「心、だと！？」

二人の周りは妖や精霊が行き交っており、楽しそうな声や会話が見事な演奏を奏でている。しかしその素晴らしい演奏も彼らの耳には入らない。代わりに二人だけの虚無な空間が形成されている。聞こえるは自分の声と、相手の声だけ。不満を募らせる少女は怒りと共に己が信念を少年にぶつける。

「心などで従う者など少数だ。数えるほどしかない！ 我らの信条を理解できる数少ない同胞と思ったが、とんだ低俗の者であったな！ さぞかし下種な一族なのだろうな！！」

「下種だろうとカスだろうと構わないさ。君がなんと言おうともその考えは間違っているよ。今はそれで正しいのかもしれないが、必ず近い将来君は後悔する。俺はそれを救いたい」

「救いたい？　ハハハッ、何を絵空事を」

「君は本当に力で従わせることが正しいと考えているのかい？」

「無論、当然だ。我が一族に従う者らは皆、過去に我らとの決闘で敗れた者たちだ。ゆえに――」

「ならばもう一つ質問しよう。その敗れた者らは絶対に君たちに従ったのかい？」

「無論……！　と、うぜん……だ」

はつきりと、何の迷いもなく即答してきた彼女が言葉に詰まる。

明らかに彼女の言葉が区切れ区切れとなり、意思に迷いが見られる。

「君の一族は自分たちに忠誠している者らを『力』で従っていると勘違いしている。ある意味驚きだ。普通、そんなこと考え付かない。よほど君の一族は過去に何かあったんだと思う。それが未だに君たちを縛り付けているんだ。……力だけで従うなんて、あるわけないじゃないか」

「ある！　嘘を言うな！　貴様、父上と母上がおっしゃったことを愚弄する気か！」

「そんな気は毛頭ない。でも、今日俺が言ったこと、どうかもう一度考えて欲しい。君は一族の呪縛に生きる必要はない」

「何をさっきから言っているのだ！　我には……私には、さっぱりわからない！」

自分のことを『我』と言っていた少女は、半泣きになりながら必死で少年の言葉を否定する。彼女の威厳や信念が徐々に崩れ始めているのだ。『我』から『私』に変わってしまったのがその証拠だ。

まだ小さく、幼少の子にとって親の教えは絶対である。親が黒といえどそれは黒であり、白といえど白である。子は親を何よりも信

頼し、それを糧とする。

しかし、今それが自分の力では肯定できないものとなってしまった。幼い自分の力では、目の前にいる少年の言葉を論破することができないのだ。悔しい、悔しい、悔しい。けれど、どうにもできない。どうしようもない。どうすることもできない。誇りを胸に堂々と生きてきた彼女には、今の現実と向き合う勇気などなかった。

「私は間違っただけで――」

必死で自分の考えが間違っていないと言い聞かせるしか今の自分を保つ方法がない。

しかし、俺はなおも言葉を続ける。それは何故なのだろうか。相手の女の子を泣かせたいのか。それとも彼女同様、自分の信念をぶつきたいのか。

「間違ってるよ。君は間違っている」

いや違う。そんなことではない。俺はあのとき……彼女を……。

「でも、それを認めたとき、君は本当の意味で【王】に相応しい者になれる」

「え？」

「【王】とは絶対な存在。揺るがない、揺るぎない存在。それは何者にも負けぬ唯一無二のもの」

「唯一、無二……」

「でもそれは、【王】だけでは不可能なんだ。『一』の数字にどんな凄い力があつたり、価値があつても、それは所詮『一』なんだ。相手が自分より大きな数字だったら、もがく事は出来るけども勝つことは出来ない」

「……」

そう、自分だけでは無理なんだ。周りが、皆が必要なんだ。俺はそう教えられてきた。

俺もまた親の教えが全てだった。でも今の自分の考えが彼女より間違っているなんて思わない。むしろ……。だからこそ、彼女を助けたかった。救いたかった。支えたかった。

何故なら俺は、俺の一族は――

「支える、支えてくれる数多の存在が必要なんだ。そうして初めて『一』は無限の数へと形を変えられる。けども、支えてくれる者らに対して、いつまでも心を開かないようでは道は開かれないうままだ」
「私は。私は心を開いている！ 付き従う者らにいつも！」

「開くやり方を間違っているんだよ……考えるんだ。よく考えるんだ。君ならできる」

「開く、やり方？ わ、わからない。私には、私には……！ うううううああああああああ！！！」

「大丈夫。できる。君ならできるよ」

―― 時間だ ――

「それじゃ、僕は行くね」

「ま、待て！ 私はまだ答えを出していない！」

「なら次に会うときまでに答えを出して欲しい。俺もまた会いたいよ」

「本当だな！？ また会えるのだな！ きつとだぞ！」

「ああ、会えるよ。きつと会える」

「よし、よし！ ならば必ずお前と会うことを誓う！ 必ずだ！

我が誇りに懸けて……！」

「うん、俺も、我が天^{いたが}きに懸けて」

「また！」

「また」

【再開の時まで】

夢はそこで終わる。これ以上見たいと思っても、強制的に俺は夢から覚まされるのだ。

そして徐々に視界がはっきりとしてきて、俺はいつもの朝を迎えるのだ。

※ ※ ※ ※ ※

夢。青年が幼いとき体験したあの出来事。遡るは十年前。

結局一度きりの出会いとなった。あれ以降、二人には会っていない。けれど彼は不思議で仕方なかった。何故かまた会える気がしているからだ。それも近いうちに。

目を開ける。見上げた先にあるのは天井。一字の漢字が刻まれし天井。

ゆっくりと起き上がり辺りを見渡す。特に何も無い、いつも通りの静かな部屋。

大きな欠伸をして立ち上がり、寝巻きから服に着替えて部屋を出る。

今日は旅たちの日である。若き青年が家を離れ、見知らぬ土地で学園生活を送るための。

部屋は主を無言で送る。しばらくは帰ってこない我が主。

けれどその後ろ姿は日に日に成長し、もはや彼が背負いし一族の重みを全て背負える程の若者へと成長した。無言ではあるが、部屋

は青年の旅たちを心から祝福した。これからの彼の人生に、出会いに。

送り行く部屋の天井に刻まれし文字は……【龍】。

人間の所業に絶望し異世界へと辿り着いた妖と精霊。その者らが住むこの世界の頂点に君臨する一族。

その一族から、今日、一人の若者が旅たちの日を迎える。

スラリとした体格であるが身体は程よく引き締まっており、無駄な肉は一切ない。シャープな顔立ちに光輝く銀色の髪。龍の一族伝統の簾模様すだれを編みこんだシンプルな服装を、彼以上に着こなせる者はいないだろう。

しなやかでかつ美しさも感じさせてしまう、その若者の名は――

「さて、行くか」

龍遠　ハク。

旅立ち

随分と涼しい朝だった。

俺の一族は家を天空に構えており、太陽の光を何の弊害なく受けることが出来る。今は春だからか気温は低く、外の空気もひんやりとしていた。起きたばかりの者には中々の刺激になるだろう。余談だが、家は友人曰く「宮殿」とのことだ。家じゃねえよと何度も言われたことがある。確かに少し大きい気がする……来客が迷子になることも少なくない。

また、そんな龍遠一族には従者たちが大勢いる。皆、俺たちの世話を喜びとしていて、いつも頭が下がる思いだ。感謝の言葉はいくらしても足りない。

無駄に広い廊下を歩いていると、掃除係の沙織がいた。俺を見た途端、綺麗なお辞儀をしてくれる。朝は彼女との会話から始まるというてもいい。

「おはようございます、ハク様」

「おはよう沙織。今日も朝からご苦勞様。いつも感謝してるよ」

「いえいえ！ これは私めが心からやりたいことなので……」

「それでも、さ。本当に感謝してる。今日からしばらく会えないけど、家のこと頼んだよ」

「は、はい！ ありがとうございます！ お任せください！」

家には従者が大体百人いるはずだ。実際、俺・父・母しか家には龍遠の者がいないのでこんなにも多くの従者は必要ないと思うのだが……。どうしても働きたいと彼らが言うので働いてもらっているが何だか悪い気もする。そのことを以前母さんに相談したら「彼らがしたいのだからよいですよ」と返された。まあ確かにそうだが。

朝食をとるために居間に行くところには父さんと母さんが既に座っていた。俺を待っていていたらしい。席につくと俺たちに朝食が運ばれてくる。当然周りには食事の補佐係の者らが数名いて、毎度のことだけどやはり照れくさいな。それにしても本当に楽しそうに彼らは働いてくれる。女性にいたっては視線が合うと恥ずかしそうに顔を逸らす。

「ハク」

「何？ 母さん」

そんなことを考えていると母さんがいつも通りの口調で話しかけてきた。彼女は息子の俺に対しても丁寧語で話しかける。唯一違うのは、父さんに対してぐらいだ。

「ついに今日旅たちの日を迎えますね」

「ああ、そうだね」

「緊張していますか？」

「いや、むしろ楽しみで仕方ない。寮生活も初めての経験だ」

「そうですね。なら良いのです。しかしハク、貴方は龍遠一族の者。そのことを忘れてはなりません」

「わかってるさ母さん。それ何回も聞いた」

「まだ32回しか言ってます」

「……」

真顔でそう答えるのは母さんの長所でもあり短所でもある。

この石頭……じゃなかった融通さをもう少し柔らかくできればな

……。昔から全然変わらない。

「ハク」

「ん？」

「今、融通さがどうのと思いましたね？」

「そんなわけないだろ、まったく」

おまけに心が読めるのではないかと思うほど感がいい。怖い。
すると横からもう一人の声が聞こえてくる。

「ハク」

「何、父さん」

「いつ家出るんだ？」

「……今日ってさっき母さんが言っただろ」

「言っただけか？」

父さんの人柄は母さんとは真逆に位置しており、いつものんびりしている。事なかれ主義で、放任主義で、傍観者。やることがないのか、朝から夕方まで180メートルの釣竿を垂らして毎日を過ごしてる。そんな暇人極まりない父親であるが、時々海から信じられないものを釣ってくるので侮れない。

彼は龍遠一族十三代目だ。俺がその後を継ぎ、近い将来十四代目となる。

「飯食ったら行くのか？」

「そうだな、早めに行っておきたいし……。朝食済ましたらすぐ行くよ」

「だ、そうだよ母さん！今のうちにもっとスキンシップとっておかないと！！」

「私は知っていました」

「え？　そうなの？」

父さんが聞くことは大抵すでに母さんが知っている。本当、何故

母さんはこの人を選んだのだろうか。

そう思いながら、普段通りの一家団らんを楽しみながら俺は朝食を終えた。

※ ※ ※ ※ ※

「それじゃ、いつてくるよ」

家の中にある一番広い大広間で俺は旅たちの挨拶を交わす。

見渡す限り、左右対称に従者たちがずらりと並んでいる。皆、俺が幼少の頃から世話になっている方々だ。一人一人、名前も顔も全部覚えていて。いつも楽しそうに仕事をこなし、笑顔で挨拶してくれる。俺の毎日は彼らと共にあった。だからだろうか……旅たちの喜び半分、別れの寂しさ半分というもやもやした気持ちが胸に残る。

けれども、彼らは昨日までいつもと変わらず俺に接してくれた。

また、節々に「楽しんできてくださいね」や「良き出会いを」など照れくさくなってしまう激励を何度も言ってくれた。その言葉をもらうたびに、心が幸せでいっぱいになった。どれだけお世話になっているのか、数えたら五桁はいくだろうな。

「皆も、元気で」

この家で過ごしてきたことを振り返っていると、感傷に浸ってしまったのか少し涙目になってしまっている自分に気づく。そのことを知られまいと、慌てながらも誤魔化すように俺は皆に別れの挨拶を告げ、そして、深く礼をした。

すると従者たちから激励が飛んできた。

「ハク様ー！」

「いってらっしゃーい！」

「御武運をー！」

「龍の未来に栄光あれー！」

あふれんばかりの歓声。……なんて嬉しいことなんだろう。こんなにも俺は大切にされている。皆の期待に応えるためにも、これからの学園生活、価値あるものにしてみせる。必ず！

気持ちを新たに引き締め、俺は前を見る。あるのは2メートルの大鏡。学園から手配されているもので、長距離の移動を可能とする妖具である。今年入学する者にしかこの大鏡は移動を認めない。他の者が触っても、それはただの鏡である。後ろから声が聞こえる。母だ。

「ハク」

「ん？ 何、母さん」

「気をつけるの……ですよ」

「……ああ」

母さんは自分の気持ちを表には出さない。根が真面目だから。龍遠一族が人前で涙を見せるなど、言語道断と考えているのだろう。身体はキツチリと龍の母として堂々としているが、心は一児の母になっている。つまり、あと少しで涙がこぼれてしまいそうなのだ。口をキュッと結び、必死に耐えている。

それだけで、母からの愛情を俺は受け取った。それで充分だ。

「価値ある、意味のある学園生活にしてくるよ。母さんも身体に気をつけてね」

「ええ、ええ……！ わかって、いる、わ」

「それじゃ、行ってきます」

「行って……らっしゃい……！」

「ハク」

「ん？」

グッと涙をこらえている母さんの後ろから、スリッパをパタパタしながら父さんがやって来る。

珍しい。いつもなら朝食を済ました後はすぐさま釣りに出かけるのに。さすがに息子が家を出る時に釣りは出来なかったのだろう。仮にも父親だ。ま、どうせ母さんから鬼神の如きオーラで呼び止められたんだろうだろうが……。

そんな父さんでも俺の立派な父親だ。龍遠家に代々伝わる対術をみっちり稽古してくれたのも実は父さんだったりする。こう見えて桁外れに強いからな。正直、まだ勝てる気がしない。さすがは妖の王といえる。

「何、父さん」

「ん？ まあ、一言伝えたいことがあってな」

「へえ、父さんからなんて珍しいな。何？」

本当、一体どうしたのだろうか。いつもの能天気な表情とは一変、真剣な眼差を俺に向けてくる。

こんな表情を見たのは何年ぶりだろう。憶えていないぐらいだ。つまり、これから父さんは俺に想像も出来ない程のメッセージを送るのだ。

胸が高まる。緊張しているのか、手に冷や汗を感じる。

「ハク、お前は今日から学園生活を送る」

「そうだな」

「ゆえに、様々な困難や苦行、加えて喜びや感動を経験するだろう」

「……父さん」

「だからこそ、ハク。お前にこの言葉を贈る」

俺の肩に両手を置き、グツと力を入れる。その様子に周囲の空気が変わる。屋敷に仕える従者たちにも緊張が走る。あの母さんでさえ息を呑んでいる。大広間の雰囲気は最高潮に達していた。

……そして、大きく息を吸い、父さんは俺に熱いメッセージを送る！

「嫁さん、必ずゲッツしてこいよ！」

5分後、母さんから袋叩きにされた物体を乗り越え、俺は大鏡に手を伸ばす。

あれほどの感動が一気に冷めてしまった気もするが、まあ父さんだから仕方ない。母さんも従者たちもそれはわかっているようだ。皆、改めて俺に贈りの言葉を投げかけている。その声援を背中に浴びながら、俺の手は大鏡に触れる。

瞬間、鏡はオーロラの光を発した。それは旅たちの準備が整ったことを意味する。

「……」

母さんはさっきから無言のままだ。俺も後ろは見ない。多分、母さんは限界だろうから。

だから、後ろ向きだけど……精一杯の感謝を込めて……この言葉を言うよ。

「行ってきます……！」

そして、俺は鏡の光へと身を委ねた。

※ ※ ※ ※ ※

若き龍は鏡の中に入り、新たな舞台へと旅立った。

龍の若君は大層可愛がれて育った。それは両親だけでなく、従者たちからも深い愛情を受けていた。ゆえに、彼は知らない。彼は半分しか知らない。従者たちのことを。従者たちの本性ともいえる部分を。

龍遠　ハクは、幼少の頃に悲惨な事件に巻き込まれた経緯がある。それは彼が龍の一族であることが原因であるが、実はその時事件に加担した者たちも現在従者の中にいる。どのような事件であったか、また彼がこれをどうやって乗り越えたのか。それを話そうとする者は少ない。龍遠家としては『なかったこと』にしたいことがある。

もし、その時彼が一人だったら。確実にハクは事件を受け止めるには幼すぎたため堕ちていただろう。その時出会った五人がいたからこそ、今の彼がいる。まさにそれはハクにとって一つの転機ともいえるが、それを語るは当時ハクを支えた五人が彼の前に現れた時にしたい。

先ほどまでは、ハクに対する激励が大広間に鳴り響いていた。皆、ハクを元氣付けよう、応援しようという気持ちで心から祝福していたのだ。しかし、それはハクが『そこ』にいたからのことである。今、大鏡の前に彼はいない。彼は旅立ってしまった。それゆえ、もう隠す必要はない。自分たちの本当の気持ちを……。

それは、ハクが消えた瞬間より開放された。

「ハク様あああ!!」

「行ってしまわれたあああ!!」

「そんなあああ」

「馬鹿なあああ!!」

「明日から……何を糧に生きていけばいいっていうのよおおお」

「もう会えないのか。もう、会えないというのかあああ」

「何故行ってしまわれたのですか!! 私たちがいるではありませんかあああ」

「私達の『おかず』があああ」

「誰だ今おかずとか抜かしやがった奴は!？」

「うっせゴリラ!」

「誰がゴリラじゃあ!」

すでに述べたが、少なくともハクは常に幸せだったのではない。

が、過去を乗り越えた彼が彼らを変えたとも言える。

堪えていた気持ちが一気に爆発した。それはハクに対する屈曲しまくった愛。というよりも、暴走してしまっている迷惑極まりない感情。ハクの人柄は、彼らは心酔させるのにそう時間はかからなかった。

小さい頃よりハクは誰にでも優しくかった。人懐っこく、笑顔も眩しい。まるで天使と見違うほどの存在感は、時を重ねるごとに強くなっていき、彼らを虜にするには充分だった。幼少の頃の事件が起きた直後はそれは目に見えて変わったものだが、乗り越えた先は、ハクは一日のうちにほぼ全ての従者たちと会話している。大切にされている気持ちを受け取るだけでは気がすまないのだろう。お返しではないが、皆と一日一回は会わないと気がすまないのだ。それは幼少の頃より始まっており、従者たちにとってハクと会話することがその日一番の喜びでもあった。

それほど、彼は魅力的な存在なのだが、さすがにこれはいきすぎであると彼らも（一応）思っている。けれどハクに対する愛情は誰にも負けないという自信も同時に存在する。ハクの写真は裏市場では高値で取引されているなど、彼関連のグッズは凄まじいほどの執着心をみせている。

彼らは止まらない。が、それをハクに知られるわけにもいかない。ゆえに、こうしてハクがいないときに彼らは壮絶な激戦を繰り広げる。最初は嘆いてるだけだったが、次第に誰が彼の部屋を掃除するのか。誰が今日のハクのパジャマを洗濯するのか。誰が今朝のハクの食器を洗うのかなど、挙げればポンポン出てくるハク関連のことを己が力をもって手にいれんと、武力行使に舞台を移す。大広間は旅立ちの場から、戦いの場へと変更された。

「気になるか？」

後ろで喧々囂々している召し使い達を前に、ハクの母はずっと大鏡を見続けていた。

すると、横から優しい声がする。ふと見ると、先ほど袋叩きにしたはずの夫がそこにいた。彼のタフさは彼女が一番知っている。若いときは自分に求愛してくる夫をよく吹っ飛ばしたものだっただ。

そんな夫に対し、妻はプイッと顔を逸らす。聞くまでもないことを彼が聞いてきたからだ。

「気になる……？ 当然です。私はあの子の母なのですよ」
「そうかい」

未だそっぽを向く妻を、後ろからギュッと抱きしめる。妻の心情など、手に取るようにわかるから。

「ただ……」

「ん？」

だからだろう。自分の気持ちなど、愛する夫には筒抜けだ。もう、堪える必要はない。

声が……震える。

「あの子が元気なら……それでいいのです」

頬につたう涙を気にも止めず、妻は苦笑いをする。

「ああ、そうだな」

その涙をそつとぬぐい、再度妻を抱きしめる。もう我慢しないでいいと、無言で伝える。

瞬間、妻、龍遠 由奈は大声で泣き始めた。今まで一緒にいた愛しい愛しい我が息子。一時の間とはいえ、それは彼女にとって何よりも辛いものであった。自分の命よりも大切な息子は、今、旅立ちを迎えた。それは喜ばしくもあり、親なら一度は経験する辛く苦しいものだった。

妻が泣いている姿を無言のまま愛を込めて優しく包む夫。

空を見上げた。曇り一つない、蒼天の世界。その蒼をきつと我が息子も見ていることだろう。

夫は微笑む。大丈夫、自分の息子だ。龍という重荷でしかない不名誉な現実を、あいつは堂々と受け継いだ。自慢の息子だ。きつと次に会うときは、今より更なる成長を遂げていることだろう。それを見たい。見届けたい。見届けたい……。

「いってこい。ハク」

若き龍の父親、龍遠 戒は、満面の笑みを浮かべた。

八雲 空

光は一瞬で、鏡を抜けると目の前には大きな橋があった。

辺りを見渡すと見晴らしがいい絶景が飛び込んでくる。どうやら俺が今立っている場所は山の頂上に位置しているのだろう。頂上といてもその広さは凄まじく、一つの無人島並みの表面積に匹敵している。とても大きい。そのとてつもなく広い頂上の端に立っているため、後ろを振り向けば上から下を見下ろすことが出来た。見下ろした世界は、大地の恵みを最大限に生かした光景であった。

下を見ると緑が生い茂った森が延々と続いていた。簡単に言えば森しかないのだが、空と森だけしかないその世界は圧巻と言わざるをえない。地平線まで広がる緑の木々。どこを見てもそれだけだが、自然の偉大さを改めて教えてくれた気がした。

父なる太陽、母なる大地、女神の雨をこれほどまでに受け止め、形にした世界は見たことがない。感動と高揚が心に染み渡る。その景色に見惚れていると、徐々に自分がいる場所がどのようなところなのか理解し始める。

この学園は木々が延々と広がる森の中にあり、その中で唯一盛り上がった部分（山）の頂上ともいえる場所に建てられているようだ。何故このような辺境の地に建てているのかはわからないが、下を見れば海、辺りを見渡せば空だった俺の住まいからすると、これはこれで新鮮で初めての経験である。

目を閉じ今感じている感動を再度確認し、改めて前を見る。

橋がある。幅は20メートルほどだ。その橋は一直線に続いており、それを目で辿っていけば悠々と聳え立つ学園が見える。……というか、これは本当に学園だろうか。広さが尋常ではない。遠くか

ら見てるだけでもその大きさがわかる。いくつもの建物が連なっており、おそらく奥もそうなのだろう。入学してから中を探検するのも面白いかもしれないな。

後から知ったことだが、橋は俺の前にあるものだけではなかった。東西南北の四方に加え、八方からも架けられており、その中心に学園があるようだ。学園といっても、中には様々な施設や建築物が存在するが、その説明はまたの機会にしよう。

「よう、やっと来たか」

後ろから声がする。聞きなれた声であり、小さい頃からずっと一緒にいた俺の親友がそこにいた。

「遅れて悪いな、空」

八雲^{やぐも} 空。身長170センチで、やや黒よりの茶髪。幼さが残るものの数年立てば凛々しい風貌を匂わせる顔立ち。瞳の色は黒。ウエーブをかけた髪型は彼にとっても似合っている。小さい頃からイタズラが好きで、よくヤンチャなことをしていたが、その純真無垢な笑顔に怒ろうとした女性方はいつも許してしまう。

『雲の精霊』であり、幼馴染でもある俺の親友だ。八雲一族棟梁^{しつりよう}の長男でもある。が、本人はその座を譲り受ける気はないらしく、双子の妹に地位を譲るつもりらしい。

それもそのはず、彼は今一族とは絶縁状態にある。理由は彼の自由奔放な性格からきている。

八雲一族である『雲の精霊』は、古くから外部との接触を頑なに拒んできた。その理由は、自分たちこそ全精霊の頂点に立つ種族であると信じているからであり、他の種族は全て下種と見ている。ゆ

えによほどの事情がない限り彼らはその姿を見せない。結婚なども自分たちの一族と辛うじて関係のある極々少数の者とする始末である。

空は、そんな一族の考えに強い嫌悪感を抱いた。いや、嫌悪感どころではない。もはや憎悪に近い感情を持ち合わせている。いつまでたっても埃かぶった名誉にすがりつく、そんな醜く吐き気がする自分の一族を死ぬほど嫌っているのだ。だから彼は一族を出た。両親を殴り飛ばし、家を半壊にして。小さい頃から俺の家とは微妙ではあるが関係があったため、母さんが龍の一族が所有している家の一つを彼に与えていた。空はそこで暮らしていた。

空の両親も絶縁しているが空の安否がわかるため、このことを黙認していた。一応、感謝はしているらしい。それでも彼らは空を諦めきれないのか、定期的に八雲一族から使者が来ている。が、頑なに彼は拒んだ。機嫌が悪い時は使者ごと吹き飛ばしていた。

しかし、空が今の家に住んでいる限り、この微妙な関係は変わらない。あいつもそれは理解しているのだろう。この学園で自分のやりたいことを必ず見つけると豪語していたな。それほど空にとって八雲一族は嫌いなのだ。ただ、そんな空も双子の妹にだけは優しい名前、何ていったっけ……。残念ながら、彼女は別の学園に行く予定と聞いている。この世界では学園が二つしかないため、俺らとは違うもう一つの学園であろう。

「どうかしたのか？　そろそろ行こうぜ」

ニカッと自慢の笑顔を見せながら俺に近寄る空。彼は一族のこと以外にはとても優しいのだ。

もともと、自由奔放で楽しければそれでいいの思考の持ち主。人柄も良好、腕も立つ。何だかんだで空とは腐れ縁である。喧嘩もし

たことない、心許せる数少ない友だ。余談だが、『精霊』と言っても別段小さいわけではない。外見は俺ら妖となんら変わらない。

「ちょっと考え事さ」

「うわ、おっさんじゃん！ やだね〜ハク。老後はどうすんだ？」

「五月蠅い。お前こそ、一族と仲直りでもしたらどうだ」

「そうだな、そろそろ本気で一族まるごと壊滅してこようかね。卒業作品にピッタリだぜ」

「……はあ。相変わらずだな」

そんなことを言い合いながら、俺たちは学園に向かって歩き始めた。

※ ※ ※ ※ ※

「ハク、真二^{しんじ}たちはこの学園に入学するのか？」

「いや、あいつら四人は全員もう一つの学園に行くらしい。残念だよ」

「ま、転入しようと思えば出来ないことはないからな。そんな気い落とす必要ないんじゃないかね？」

「そうだな。ところで、妹さんもそっちの学園に行くらしいと聞いているが？」

「ああ、あいつね。何でか知らないがこっちじゃ嫌だって駄々こねてさ、結局〜」

「あっちに？」

「正解」

「何故だ？」

「こっちが聞きたいぜ。ま、別にいいんだがよ」

少し残念そうに俯く空。兄妹仲がいいだけにやはり悲しいのだろ

う。「また会えるさ」と元気づけると待ってましたと言わんばかりにすぐさま笑顔になった。どうやらわざと落ち込んで見せたらしい。面倒臭いやつだ。

それ以外にも、最近の気象関係、他の種族同士の事件、世界で起こった出来事など他愛ない世間話をしながら俺と空は学園に向かう。橋から学園にかけての長さは結構あるが、周りの風景を見ながら歩くためそこまで苦痛ではない。むしろ徐々に見えてくる学園に対して期待感が増すばかりだ。これからの学園生活に胸躍ることこの上ない。一体どんな世界が俺を待っているのだろう。考えただけでも楽しくなってしまう。

「ハク、風景だけじゃなくて少し周りを見てみるよ」

そう空に言われて辺りを見渡すと……、少し驚いた。風景にばかり気をとられて気づかなかったのだ。俺の気持ちを代弁するように空が言う。

「やっぱり学園というだけあるな。テンション上がるね」

学園に向かう際、普通橋を渡っていくのだが渡る必要がない者もいる。

橋の下は湖が広がっているが、その湖の上を滑^{すべ}って学園に向かっている者、あくびをしながら馬車に乗って空を滑空している者、まるでそこに陸地があるかのように空中をスキップしながら進んでいく者、炎の上で横になりながら移動している者、多種多様な方法で学園に登校していく者たちがそこにいた。

学園に近づいていくうちにその数は増えていく。皆、妖か精霊のどちらかなのだろうが何とも不可思議な光景である。最初は風景に見惚れていたが、今では登校していく生徒の方に目がいくばかりだ。

ここまで大勢の妖と精霊を見たことは今までなかった。いや、学園の中に入ればさらに多くの出会いがそこにはあるのだろう。

「空……」

「ん？ 何だ？」

期待、胸の高鳴り、高揚、興奮……ちくしょう、気持ちが顔に出してしまう。冷静になれと思えば思うほど、この心の臓に鳴り響く音が脳を揺らす。抑えきれない、この嬉しさ。ああ、まったくもって俺は馬鹿だな。

「楽しくなりそうだな」

どうしようもなく、その言葉が出てしまった。嬉しすぎる、その気持ちを正直に現した一言。そんな俺の言葉に最初はポカンとしていた空だが、すぐさまその顔がこれでもかというにやけ面が変わる。

「ああ、俺もだぜハク。全身全霊で謳歌しようぜ！」

「もちろんだ」

一步一步がやけに重い。それは苦しさからくるものではなく、学園に入るのが惜しいと思ってしまうほどの重み。歩く音がダイレクトに耳を通り、脳を刺激し、身体全体でそれに応える。

この日を俺は生涯忘れないだろう。記念すべき学園初日。身体が弾け飛びそうになるぐらいの期待と興奮。家を出る時の寂しさは大きかったけど、それを覆い包む……いや、飲み込むほどの衝撃が俺を襲った。その波は飲み込むだけでなく、さらなる高みの何かにグイグイと引っ張っていつてくれる。その先に何があるのか。その先にどんな景色があるのか。その先にあるのは……一体どんな世界なのだろう。

ただ、これだけはわかる。確信できる。これからの学園生活は、限りなく、俺の財産になることだと。

様々な想いや気持ちが錯綜しながらも、二人して自然な笑みを浮かべながら、俺と空は『門』をくぐった。始まるんだ。新しい何か。春の到来と桜の匂いを感じながら、俺たちは新世界へ足を踏み入れた。

クラス分け

門をくぐると少し奥に横に伸びた長い机があつて、そこに十人の受付嬢が座っていた。

どうやら、そこで名簿登録の確認をして体育館に向かうらしい。空が「さっさとやろうぜ」と言いながら空いている受付のところにグングン進んでいく。やや小走りに近い。おそらく、名簿登録なんてパパッと終わらせて皆が集まっている場所に行きたいのだろう。橋を渡っていた際の歩くスピードとは雲泥の差で空は進んでいく。

受付の方は髪を後ろでまとめた、清潔感ある女性だった。特に特徴的な外見はないのだが、仕事を着実にこなしてきた経験が身体にじみ出ている。俺らを見た途端、瞬時に姿勢を正し丁寧な口調で挨拶をしてくれた。

「入学おめでとうございます。名簿確認のため、お二人の名前をお願いいたします」

文句のつけようのない、完璧な対応である。もともとつける気もないが。空は「あいあい」と愛想よく笑顔を浮かべながら自分の名前を言った。『八雲一族』の名前が出た瞬間、眉毛がピクリと動いたが顔には出さずそのまま対応している。うん、やはりこの人はすごいな。これならきつと大丈夫だろう。

「それでは、そちらの方もお名前をお願いいたします」

大丈夫だ。大丈夫。大丈夫だって。何回思えば気が済むんだ。相手はプロなんだから、ササツと言えどそのまま綺麗な流れで受付し

てくれるさ。空みたいに軽い感じで言えば問題ない。
よし。気持ちを落ち着かせて、サクツと言うんだ。

「龍遠　ハクです」

「……」

……。サクツと

「龍遠　ハクです」

「……………」

固まっている。一時停止をそのまま形にしたような、口をポカンと開けて。

おそらく、脳は今頃「仕事しろ！」と身体に命令しているのだろうが、肝心の器が言うことをきかないのだろう。ピクピクと手や足が動いているが動作と呼べる状態にはなっていない。

ゆっくりと辺りを見渡すと隣で受付していた妖も、受付の人と一緒に固まっている。ついでに言えば後ろで次の名簿登録を待っている精霊も固まっている。……少しため息を吐きながら俺はや強い口調で再度目の前の受付嬢に言う。

「龍遠　ハクです」

「!?　は、はい！　すすすいません！」

「いや、大丈夫です。名簿登録、お願いしますね」

「か、かしこまりましたハク様！」

「いや、ハクでいいですよ。それで、次はどこに行けばいいですか？」

「え、と……！　そ、そうだ！　次は体育館でクラス分けとなっております！　右にあります通路を進んだ先に見える大きな建物がそうです！」

「ああ、あそこね。ありがとう、助かりました。それでは」

「はははい！ 御武運を！」

『おりますです』や『御武運を』など明らかに言葉がおかしい。何故体育館に行くだけで戦いにいくようなセリフを言われなければならぬのか。少し期待していたがやはりこうなってしまったか。覚悟はしていたがちょっとショックだな。

そんなことを考えながら空を見ると、口を手で押さえながら必死に笑うのを抑えていた我が親友がそこにいた。憎たらしい。こいつ、絶対面白がってる。

「なんだよ」

「いやー、べっつにイー」

「面白がりやがって」

「ククク、そんな怒るなってハク。いつものことじゃんかよ」

「それでもフォローはしてくれもよかっただろ」

「どうやってフォローすんだよ、無茶言うなって！ ククク、あくしかし楽しかった」

その後も空はものすごく嬉しそうに「受付さん超ビックリしてたな、俺の時は普通だったのに。いやー、やっぱああいうのを見れるのもハクの親友の特権ふべばあ！」などほざいていたので軽く鉄拳をかます。

体育館が見えてきたので最後に後ろを振り返ると受付嬢が集まってキャアキャア言い合っている。何のことで盛り上がっているのかわからないが……まあ、十中八九俺だろうな。一族の名が有名なのもこういうところではただの邪魔でしかない。空が喜ぶ材料にしかならない。いっそのこと、この学園にいる時だけ改名しようか。母さんにバレたら八つ裂きにされる度胸があればだが。

無理だな。諦めよう。

即座に妥協し、もう一回横でクスクス笑っている空を足蹴りし、俺たちは体育館に向かった。

「おお……」

「結構いるんだな」

体育館に到着すると、目の前には大勢の生徒たちがひしめきあっていた。

皆それぞれ自由にくつろいでおり、雑談やら友達作りをしている。見た感じ、数は大体150人程度か。先ほどの受付嬢が座っている机に置いてあったプリントを少し見ていたが、確か200番ぐらいまで番号があったはずだ。ゆえに今年入学する生徒はそれくらいだろう。あまり多すぎるのも問題だと思うが、無人島一つあるぐらいの学園において200人は少ないのかもしれない。ただ、様々な学校行事を執り行うには申し分ない広さではある。

ちなみに、俺たちが通うことになるこの学園には、上級生は『いない』。

二年を通して俺たちは学園生活を送り、そして卒業するだけだ。歳はあまり意味をなさない。もともと長寿である俺たちに寿命の概念はほぼ無用だからである。

※ ※ ※ ※ ※

妖と精霊が住まうこの世界。実は俺たちの祖先は異世界から来た。千と数百年前。祖先がいた世界には人間がいた。妖・精霊・人間……衝突などはあったものの、この三者は共存の道を歩んでいた。それは同時に長きに渡る色折々の歴史も作っていた。しかし、妖や精霊と違い、人間は『欲』に溺れてしまった。自分たちが住むに

相応しい最高の環境を彼らの武力をもって着実に世界を侵食していったのだ。最初はそのような人間に怒り祖先らは鉄槌を落としていた。共存の道を選んだ以上、それは絶対のタブーだったのだ。けれど、徐々に人間たちの力は増していきとうとう祖先らの力をもってしても彼らを押さえ込むことは不可能になっていった。

また、それだけでなく、自分らの邪魔をした祖先たちを殲滅する行動に出た。その争いは何万という血を流し、何億という命を奪った。それでも俺たちの祖先と人間は争いを止めなかった。もはや、争いの理由はどうにでもよくなり、ただただ目の前の憎き相手を打ち滅ぼしたいだけの衝動だけが彼らを動かしていた。

その時だ。ある精霊が泣きながら妖と精霊に言った。

「このままでは私たちは永遠に業火の海に飲み込まれるだけです。それでよいのでしょうか……。私たちだけならともかく、未来を生きる子供たちまでその運命から逃れられないのでしょうか……！止めましょう！ 私たちが、この争いに終止符を打つのです」

けれど、それを聞いても彼らは止めなかった。いや、厳密には止められなかった。

何故なら、もはや彼ら自身でも止める方法がわからなかったのだから。それほど狂気が彼らを侵食していた。それでも今の現状を開きたいと願ったその精霊は……己の命を使って異世界への扉を開いた。そこに全ての妖と精霊を導いて。

最初は彼らもそれを渋ったが扉を開いた精霊を始め、その精霊に感銘を受けた多くの妖と精霊の説得により、結果全ての妖と精霊が異世界へと旅立った。もちろん、それに反対または納得しない者も大勢いたが、半強制的に彼らもこの世界へと送った。それは大層大掛かりなもので、今もなおその歴史は子孫である俺たちに語り継が

れている。ちなみに、異世界への扉を開いた精霊の子孫は実は母さんでもある。俺の母さんは精霊たちにおいて最も稀有な存在ともいわれる『時の精霊』を司る。

歴史の過ちにより、俺たちは無闇な争いを固く禁じた。暗黙の了解でもあった。

また、もともとの価値観も合わさって俺たちの主な原動力は『自由に生きよう』というものとなった。これは前の世界にいた人間たちとの別離を意味する。人間たちがやっていたもので俺らが理解できないものはとことん捨てた。

ゆえに、特に仕事とか労働はこの世界にはない。それは『強いられるもの』ではないからだ。

だから別段生まれてから何かするということとは……実はなかったりする。自由に生きることにおいて、それはただの邪魔でしかないから。

が、さすがにそれではまずいと祖先は思ったのだろう。あれほど嫌っていた人間たちの催しを自分たちもやってみないかという案が各所で浮上する。つまるところ、彼らも暇だったのだ。この世界にきたからこそ、人間らの所業に少し共感できたりもした。ただ、それで争いや欲に負けることだけは遺伝子レベルで絶対に拒絶していた。まあ、もともとの考えが違うのだから当然かもしれない。

そんなわけで、この世界でも『学園』なるものが建築された。ただ、それでも全部を人間どもと一緒にするのは嫌だったらしく、またこの世界でも前の世界と同様一年が12ヶ月であるが、それを何故か倍の24ヶ月を卒業までの期間とし、二年かけて無事卒業というよくわからない構造が誕生した。よほど人間が嫌いなのか。なら何故学園作っただ。

しかし、そんな学園でも退屈であった俺たちにとっては最高の舞台であり劇場であった。同年代の他の妖や精霊と住み、競い合い、苦楽を共にする。なんとも新鮮で素晴らしいものではないか。

そういうこともあって、のんびりこの世界を生きている俺ら妖と精霊は学園という未知なる世界に興味津々である。多くの子孫を残そうと思っている人間と違い、生殖概念に疎い我々は、そこまで子供は多くない。ゆえに二年おきの学園でも入学生は200人程度なのだろう。また、もう一つの学園にも同数の生徒がいるだろうから、この世界において今年の入学制は400人ちよつとが妥当だ。

長く回想してしまったが、俺のいる世界の概要は以上だ。

付け加えておくと、この世界でも争いはある。種族同士の争いや歴史上因縁のある一族同士の争いもある。ただ、それは彼らの問題なので他者は介入しないし、本人らも他者を巻き込むことは恥としている。なんだかんだ言って共存しているところは遺伝子にそれが刻まれているのかもしれない。

まあ……その哀れ極まりない【争い】を望む輩がいるのも確かだが。そいつらの説明は、またの機会としたい。改めて言うと、以上がこの妖と精霊の世界である、【妖霊界】の概要だ。あまりこの名前を言う者はいない。「この世界」や「俺（私）らの世界」と言うのが一般的である。

※ ※ ※ ※ ※

「ハク……ハク！」

「！……ん、何だ空？」

「『何だ空』じゃねえよ！ 完全に上の空だったぜオイ。入り口にいた人の話聞いてたか？」

「え？ ……あゝ」

「ったく。クラス分けの壺のところに行けって言われたろ。しっか

りしてくれよ」

「すまん。呆けてた」

少しだけこの世界の歴史について回想していたら、いつのまにか俺は何かの列に並んでいた。

空曰く、どうやら今から「クラス分け」なるものをやるらしい。入る前に体育館の入り口にいた従業員らしき人が何か言っていたがまるで覚えていない。ま、空が聞いてくれていたから何とかなるさと思っていた自分もいたが。

体育館の様子を簡単に説明すると、入り口から奥にある壇上へ正方形の構造となっている。実にシンプルだ。そしてちょうどその中間地点に一つの【壺】が浮いている。その壺へ列が並んでいるわけだ。俺や空も現在その列に加わっている。先ほど空から説明があったが、あの壺がクラス分けの道具になるようだ。入り口から壺にかけての面積はそろそろと順番待ちの生徒が列を作っている。そして壺から壇上にかけての面積はクラスが決まった生徒で固まっている。左から順に一組二組とあり……最後は七組となっている。200人ちょっとだろうから、おそらく一クラス30人程度だろう。

ただ、そのクラス分けの「方法」が気になる。はたしてどうやってこの200人以上の生徒を速やかにクラス分けしているのか。ランダムに入れるなら入学前に学園がやっているだろう。それをやらないということ即ち……何かしらの意図があると考えるのが妥当だ。ただ、肝心の意図が全く分からないが……。

「また無駄にクラス分けの真意を探ろうとしてんだろ、ハク」

阿呆を見るような目つきで空が俺の顔を覗き込む。見事に的中しているが何故か腹立つ。

「空は何とも思わないのか？」

「別に。悪の組織やらじゃねえんだから考えるだけ無駄だと思うがね」

「ま、確かにな」

「それよりも俺は『何クラスになるか』よりも『どんな子がいるのか』の方が俄然気になる」

「ハハッ。可愛い子でもいたか？」

「んー、結構良さげな子は多いぜ？　でもドストライクな子はいないな」

別段、空は女好きはない。歳相応なだけだ。ただ親に決められた相手と結婚するような、いかにも八雲一族が好みそうな出会いは大嫌いなのだ。「出会いは必然であるべき」は彼の信念でもある。

そんな空と無駄話をしながら前を見る。壺の前に立った生徒が恐る恐る壺の中へ手を入れる。その数秒後、壺が高らかに（どこから発しているかは謎だが）手を入れた生徒のクラス名を宣告する。なんと不思議な壺であるが結構面白そうだ。ただ、クラス名を宣告される前にがつり生徒名も言われるのは悲しい。十中八九、受付の二の舞になるだろう。そうなれば空が爆笑するのが容易に想像できる。そう考えただけで少し鬱になる。

「どうやらクラスは一組から七組までらしいな。どういう基準かは知らないが楽しみだな」

「ああ、そうだな。ってことは空と同じクラスになる確率も少ないということか」

「さすがに七分の一だからな。逆になったらスゲェよ。ま、俺はそんなクラスで目立ちまくってるハク君を優しく見守ってあげるから安心してね！」

「うぜえ」

「カカカツ！ そんな怖い顔すんなよ」

上機嫌な空だ。この野郎。男だらけのむさいクラスになればいいのに。

……けれど、こんな空であるがいつも彼は俺の側にいてくれた。小さい頃から龍ゆえの俺に対する様々な苦悩を共にわかちあってくれた。そんな空だからこそ、彼は何の躊躇いもなく自分の意見を言うてくるし俺もそれに応えられる。

幼少の頃より俺と共にいてくれたのは『六人』。一人は空で、残りの五人はもう一つの学園に行ってしまった。理由はあるだろうが寂しいな。この学園で友とよべる存在を作りたいと強く思う。さらに言えば、その五人のうち四人は龍遠一族に代々忠誠を誓っている四家の子供たちである。彼らの話はいづれ語る時がくるであろう。

「おっ、ついに来たか。ハク、お前からいけよ」

「ん？ だが空の方が前にいたじゃないか。お前がいけよ」

「そんなの……できるわけねえだろうが」

「え……」

どうしたんだ空。お前らしくもない。まさか、龍の一族がどうか言うんじゃないか

「お前が先に決まったほうが、ドヤ顔で『あらハク、違うクラスだね』と言えないじゃないか！」

「そうか。それは何よりだクソ野郎」

「冗談だって」

「先いくぞ」

少しでも黄昏たそがれてしまった自分が情けない。わかっていたのに……。ま、いいか。空のこれは今に始まったことじゃないからな。さっ

さとクラスを決めて空と同じクラスになるよう祈るとでもしよう。何だかんだ言ってあいつも同じクラスがいいに違いない。顔がそれを証明してる。そんなこと、意地でも言わないだろうが。

「この壺に手を入れればいいのか」

体育館の中心にある壺の前に行く。間近で見ると何とも異様な雰囲気漂わせているのがわかる。かなり特殊な妖具だ。妖力が壺からにじみ出ている。僅かではあるが、まるで壺本来の魔力を極力抑えているような……。そんな不可解な感触が肌に伝う。

と、目の前の壺に疑問をもっても仕方ない。さっさとクラス分けして空に繋ごう。さて、俺は何組だろうか。個人的な予感としては一組と思っている。根拠はない。何となくである。

この時、運命の歯車は少しずつではあったものの動きだそうとしていたのかもしれない。

その片鱗が静かに現れようとしていたのかもしれない。

「それじゃ、よろしく」

壺に右手を入れる。このまま数秒たてば、俺の名前と同時にクラス名を壺が言うはずだ。

さてさて。一体何く……

【刻 来たり】

瞬間、壺から凄まじいほどの爆風が吹き荒れた。

雑談をしていた者、壺のクラス分けを待機していた者、クラスが

決まって前で待っていた者、入り口付近にいた従業員らしき者、そして空。全ての者が爆風に目を閉じ身体を曲げながらも今の状況に困惑した。いや、混乱したといってもいい。

女子たちは悲鳴をあげ、男子は何事かと爆風が生じた原因と思われる場所に目をやる。

従業員が何か叫びながらこちらに駆け寄っては来るが、俺と壺を前にして走りを止める。

俺は動けなかった。否、動かせなかった。壺に入れた右手がまるで重力に引っ張られるかのように強く強く壺から離れなかったのだ。いくら力をいれても決して取れず、ピクリともしない。

「ハク！」

後ろで空の音がする。眼前の状況に驚いてはいるがまずは俺の安否の確認に行動を移していた。

「大丈夫だ！ それよりこれは……」

【千と三百年以来となる。我、この刻を使命としここに存在す。今こそが命果たそう】

「何を言って……」

爆風がさらに増した。しかし、それは四方八方を吹き荒らしていた先ほどとは違い、大きな竜巻の形状となつて俺を中心に旋回する。そして激しく雄々しく猛々しく展開した後、炎に水滴を垂らしたように一瞬で消えた。

竜巻が消えた後、残ったのは静まり返った体育館。

中にいる者たちは一人残らずその中心である俺と壺を見ていた。誰一人言葉を発さず、食い入るようにただただ俺を見ていた。静寂の雰囲気な中、壺は青紫色の妖力を出しながら、壺の中身は金色に

輝く。

そして

【妖が王、龍の血を受け継ぎし者……龍遠　ハク。汝のクラス配属先を宣告する】

誰一人息をしていないような、無音と化した建物の中で、しゃべる物体は俺に告げた。

【汝を】

そう……そうだ。ここから始まったのかもしれない。

静かだが、本当に静かではあるが、確かに動き始めたのだ。

誰も聞こえなかったであろう、聞こえるはずもなかったであろう

あの音を。俺は聞こえた。

聞こえたんだ。

【南無組　配属に　任命する】

運命の歯車が動き始めた音を、心の奥底で確かに聞いた。

出会い

静寂が場を掌握した。

クラス分けをするだけのただの壺が、まるで生き物のように語りだし、俺のクラス名を発表した。

クラス名を発表するだけならまだわかるが、その前の使命云々は何だ。何を意味しているのか。

いや、それよりも……この壺は……『何組』と言った？

「南無組、だと！？　すぐに教員の方々へ連絡を！」

「はっ！」

静寂が破られた。破ったのは先ほどまで生徒たちにクラス分けの壺に行くよう促していた従業員の方々だ。笑顔で出迎え、優しい言葉で俺たちをエスコートしていた彼らの顔は、今は見る影もなく陰しい表情を浮かべている。

また、徐々に体育館がざわめき始める。理由は大きく二つ。一つが今まで一から七組となっていたはずのクラスに新しいクラスが言い渡されたこと。もう一つは、言うまでもなく俺の名前についてだろう。静寂からざわめきへ。それは徐々に大きくなっていき、弾けるように生徒たちがしゃべり始めた。各々内容は様々だが、大方同じだろう。それよりも、俺は自分に告げられた何とも不気味極まらないクラス名の方が気になる。

何だ、南無組って。永眠しろと言っても言うつもりか。

「いや、さすがにここまでとは俺も思わなかったわ」

「何だ空。随分とご機嫌だな。羨ましい限りだよ」

「そう怒るなって。さすがに新しいクラス名が発表されるとは俺も

想定外だ。面白かったけど」

「まあ、騒ぎにはなっているが一応クラス名は発表されたんだ。次はお前だよ」

「うえ！？ いや、この流れでそれはちよつと……」

この野郎、逃げるつもりだ。そうはいくか。

「いいから行けて。大親友の空君なら当然だろ？」

「いやいや、俺程度の雑魚風情がハク様の後なんてとんでも」

「……ん？」

「……。わかったよ」

諦めたのか、トボトボと壺のところへ行く空。しかしその諦め顔もすぐに回復し、とびきりの笑顔に変わる。長年付き合ってきたかわかる。彼の思考はこうだ。

くそう、ハクの奴。面倒なこと押し付けやがって。この流れで俺が壺のところに行くとか目立つこと極まりないだろうがよ。しかも周りはまだあたふたしてるし……いいのか？ 俺がやって。ここはお偉いさんが来るのを待った方がよくね？ そうだ、そうしよう。皆笑顔で万事解決！

「早く手入れるよ目立たなくなるだろ」

「お前千里眼でも持ってるの？」

「空の考えなんて余裕でわかるさ」

「うわ、男に言われても全然嬉しくねえ」

そう苦笑しながら観念したのか、軽く深呼吸をする。ただ、これで終わる空ではない。

ニヤニヤしながら俺を見る。

「まだ何か？」

「フッフッフ、ハク。お前は一つ勘違いをしてるぜ」

「ほう、聞こうじゃないか」

「お前は俺に今から壺に手を入れさせ、皆の注目の的にしたいんだろ？」

「正解。さすがだ」

「だが甘え！ 甘すぎるのさ！」

敵の考えを先読みして見事的中させたような、軍師の顔がそこにいた。もどきだが。

しかし空のやつ、一体何を企んでいる……あまりにどうでもよくて頭が回らん。さっさと手入れてくれないだろうか。もったいぶりながら空が言う。

「確かにハクの後に俺が手を入れれば次なるクラス分けの生徒であろうこの俺が手を入れればそう！ 全生徒たちの熱い眼差しを受けることは確実、だ」

『俺が手を入れれば』という言葉を二回も使っていて何が言いたいのかよくわからない。きっと頭良さそうなセリフを考えながら言っているのだろう。……こんなキャラじゃないのにな、空。どうしちゃったんだろう。普段なら陽気で明るく、多少の出来事でも動じない広い心をもっている。また自由をとことん愛するため、一見不明瞭な事柄にも落ち着いて対処し見極めることができる器量の持ち主だ。

が、今俺の前にいるのは哀れ、軍師気取りの友である。本当に今の空はある意味俺も初めてみる彼だ。おそらく、今の雰囲気は空を狂わせているのだろう。環境一つで変わるものもあると聞いたことがあるしな。早く戻って来い空。後悔することになるぞ、何故か嫌

な予感もする。

「だがしかし！ そうはならない。わかるか？ ハク」

「わからん」

「ふっ、ならば教えてやろう。何故ならば今！ 周りの皆はざわめきあっているからさ！」

「そうなんだー」

「そう！ つまり、このざわめきあっている今だからこそ！ 俺が壺に手入れても全くといっていいほど彼らは俺のことなんか気にしないということさ！！」

「言ってて悲しくならないか」

「ならねえよ！ ゆえにだな、俺はドヤ顔でこの壺の中に手入れてクラス分けを発表されるというわけさ！ くぁー残念だったなハク！ お前の考えを先読みしたこの空様の頭脳を恨んでくれ！」

本当、マジで帰ってきてくれ空。お前はそんな残念な頭じゃないはずだ。

いつものどこか抜けているが的を外さない誇り高い雲の精霊に戻ってきてくれ。が、そんな俺の想いも虚しく、空は最後の仕上げにかかる。

「さあ壺よ！ よくわからねえがハクを超目立たせた壺よ！ この空様の華麗なるクラスを見事発表してみせよ！ そうだな、出来たら声高々に発表してくれ。個人的な予想は二組だな。二つて数字結構好きなんさ。いやしかし、五組もいいな。五には守護の意味もあると聴く。なんか神秘的でいいかもしれん。いやけれど……くぁー迷うぜ！ 一体俺のクラスは何だろうなオイ！ 緊張で胸が張り裂けそうだぜ！ ま、なるようになるし、落ち着くところに落ち着くもんさ！ そいじゃ、いっちょお願いしようかね。俺は一体何組さあー！！」

【南無組】

「なんでだああああああっっっ！！！！」

空の絶叫が木霊した。

※ ※ ※ ※ ※

「まあよかったじゃないか、空」

「よかねえよ！ ふざけんなあ！ 何故に俺が今にも成仏しそうな

クラス配属なんだよ！」

ほお、貴様そんな風に思っていたのか。あとできっちりお礼をしなければな。

しかしながら、それ以上に嬉しいというのが本音だ。今まで一人としていなかった南無組に空という親友が入ってきてくれたのだ。心強いし、今後の学園生活も楽しいものになるだろう。

が、当の本人はまだ不満があるらしく、壺に向かって再選を要求している。今一度改めるべきだとかなんとか言っているが、壺は無反応だ。そんな壺の態度に段々イライラし始め、強引に再度壺の中に手を突っ込む。が、壺は改めて空に南無組を言い渡す。しかも「デデン」という効果音付きで。ますます怒りの度合いが強くなっていく空だが、南無組という壺の発言に周りの生徒たちが一様に見ていることに気づいたのか、不満たれたれな顔をしながらも重い足取りでこちらにやって来る。

「納得いかねえ」

「そんなに嫌か？ 俺と同じクラスになるの」

「そんなんじゃないよ。ただまあ……ああ、もういいや。面倒だ」

「ん。これからよろしく」

「はあ、鬱だぜ」

どこかまだ納得はいかないのだろうが、壺が決めてしまったのだから仕方がない。従業員らしき方々は南無組と壺が言った時点で血相を変えて外に飛び出して行っただし。まだ壺のクラス発表待ちの生徒も、空が先陣を切ったためか、少し安心したようで空に続いてクラス分けの為に壺のところへ行く。そうして先ほどと同じように一人ずつ壺の発表を受けていった。空の次はまた南無組かと思いきや、その後は一から七組の発表しかなく、空以降南無組を言い渡された生徒はいない。

そんな状況が続いていくと、空がややブルーな顔を浮かべる。

「おい、まさか俺ら二人だけとかじゃないだろうな」

「さすがにそれはないと思うが」

「せめて二桁は欲しいんだが、これは贅沢な悩みだろうか」

「大丈夫だ空、俺も同じだから」

クラス名を発表された生徒たちがトコトコと自分のクラスの集まりにやって来る中、俺と空は彼らの熱い視線を受けつつ壺が発表していくのを眺めている。どうにかもう何人か欲しいところだが、壺は機械的に作業をしていく。

最初はイライラしていた空も「もうなるようにしかならん」と半分諦めたのかいつもの彼に戻る。よかった、どうにもあの異常なテンションの空は俺は苦手だ。あんなの空じゃないし、彼らしくない。そんな空も気分が落ち着いてきたのかいつもの雑談や無駄話を展開し始める。俺もいつものようにその話に乗ったり相槌をうったりする。そんなこんなで大体15分程度たっただろうか。

空がふと思ったことを口にする。

極力現実逃避をしているのだろう。そんなに女子が欲しいのか。いや、俺も欲しいのだが。

ま、大丈夫だろう。さすがにそこまで異常なクラスにはならないさ、空。……多分。

不思議と、今日見た夢を思い出す。あのときの二人は今は何歳なのだろうか。もしかしたら、この学園に来ているのかもしれない。だとしたら何とも奇妙な巡り合わせか。何故か名前を思い出せない俺だ。会ってもわからないかもしれないな。

そんなことを思っていたら、南無組配属と宣告された二人の男子がこちらへやって来た。かなり特徴的な二人だ。ある意味真反対といえる。

「よお！ お前らがこのクラス配属の連中だな？」

ツンツン頭。第一印象がそれだった。

星型（☆）を分解することで出てくる、五つの三角形をそのまま頭部にべたべた貼り付けたような尖った髪型。あちこちに出ているトゲ（？）は非常に面白い。黒髪と少しだけ金髪が入り混じった髪質であり、何とも目に付く頭である。

身長は俺や空よりも低い。ただ、低身長を全く感じさせないぐらいの佇まいは彼特有の威厳がある。最初はその髪型と威圧感に驚いたが、よく見るとそれ以上に目がいくものがあった。彼の右手の薬指に緑色の。そして左手の親指以外の四つの指にそれぞれ色違いの『指輪』がはめられていたのだ。また、右腕には「8の字」に巻きつけられたアクセサリーがある。

これほど目立つ者もそういないだろう。存在感抜群の彼は、ニカリと笑いかけながら俺と空を見る。そして物珍しそうな目つきで俺を見た。

「へえ、お前が龍か」

「ああ、龍遠　ハクだ。よろしく」

「俺は空。八雲　空。これからどうも」

「おう！　俺は京極　誠。色々世話になるぜ！　ま、俺のオーラで目立たないかもしれないがそこは恨むなよ。何せ俺は最強だからな！　カカカツ！」

熱血、唯我独尊系の青年だ。自分の力に誇りを持ち、また揺るがない信念もある。

まだ少ししか会話していないがそう感じさせるものが彼にはある。うん、おそらく実力も相当のものだろう。何の妖か精霊かは知らないが、一度手合わせしてみたいものだ。見た感じ、十中八九接近戦が得意そうだな。纏っている妖力も凄まじい。

豪気千倍の誠を見ながら彼の第一印象含め感想を考えていると、後ろから子どもどした声で話しかけてきた青年に気づく。しかしその声が小さすぎて何を言っているのかよくわからない。そんな彼に気づいたのか、誠はため息まじりで青年の首根っこを掴むと「お前も早く自己紹介しろよ」と言いながら俺たちのところへ回す。

俺と空の前へ来ると「ひい！」と怯えながらも必死な表情で……けどやはり小声で彼は自己紹介を始めた。

「え……えと、この度入学しました……あの……」

「名前言えよ、オイ。ハクと空が遠慮してんだろ」

「そ、そうだね！　……えと、今日から同じクラスになります、ヴァン・シュナイゼルといいます。不束者ですが、よ、よろしくお願い……します！」

誠と正反対と思える青年。第一印象は大変失礼だが「ヘタレ」っぽい。

身長は俺と同じぐらい。髪は茶色、瞳も茶色。誠がツンツン頭に
対し、彼の髪はブロンドヘアーのようにサラサラだ。肌も白く、後
ろ姿だけ見れば女性と見間違えてもおかしくない。女装も案外似合
っているのかもしれない。

かなりオドオドしていて、目があちこちに動いている。緊張して
いるのか、挙動不審気味である。

名前から察するに、彼の祖先は下界にいたころ西洋の妖か精霊だ
ったのだろう。『シュナイゼル』という苗字はどこかで聞いたこと
があるような気がするが……思い出せない。言葉が切れ切れになっ
ているが、自分のことはヴァンと呼んでほしいと言って、もう一度
深くお辞儀をした。

そのあとは誠と同様、俺と空も自己紹介した。

現在南無組は俺と空、そして新しく入った誠とヴァンの四人とな
った。男だけだが。

「んで？ まさか俺ら四人だけってことはないよな？」

誠が怪訝そうな顔をしながら辺りを見渡す。その質問に半ば残念
そうに空が返す。

「いや、現在は俺らだけなんさ」

「マジかよ！ おいおい、さすがに野郎だけってのは嫌だぜ。俺の
存在感が薄れちまう」

「た、多分……大丈夫、だよ。ね？ ハクさん」

「いや、俺に聞かれてもな」

どうにもこうにもやはり「女子」がいないとこの飢えた男どもは
納得しそうにない。

まあ、正直言う空と誠だけが。俺とヴァンはそれよりも『こ

のまま四人だけのクラスなのか』という不安の方が強いだろう。特にヴァンは先ほどよりかは落ち着いているが、まだ辺りを見渡したり深呼吸をしたりして忙しそうだ。けれど、このままでもいいかもしれないと思いつつある自分がいる。

変な奴が入ってくるより、多少なりとも良い関係が作れそうな友人ができたほうが俺は得と考えるからだ。量より質である。誠とヴァンもやや変わっているが人柄は良さそうだし、彼らとの学園生活はとても楽しそうに思える。それでいいじゃないか。

そう思い、少し笑顔を浮かべながら、俺は改めて壺を見る。いつも通り、しゃべる物体は淡々と作業をしている。仕事熱心なことだ。

この時、俺はまだ気づいていなかった。

二人の女性が近づいてきていることを。

運命の歯車がいよいよ動き出そうとしていたことを。

この学園生活の物語が、始まるうとしていたことを。

だが来る。それはやって来る。

壺待ちの生徒があと少しで終わりそうな数になった時。

邂逅の刻はやって来た。

邂逅

いよいよ壺のクラス分けも終盤に入り、残り人数は十数名となった。

その残った生徒を食い入るように見つめる誠。じっと見つめるながら頭の中では「女子来い！」と思っているのだろう。いや、念じているのかもしれない。

そんな彼の念とは裏腹に、今クラス分けをされた女子は「二組」との宣告であった。

「はあゝ」

「そう落ち込むなって誠。まだチャンスはあるかもしれないさ」

「残酷極まりない励ましはいらねえよ、空。どうやら俺らは禁断の花園組に決定したようだぜ」

「ま、まだ何とかなるよ誠くん！ ……きっと、多分、おそらく、もしくは」

落ち込む誠を空とヴァンが励ます。しかしそんな二人の応援も誠には届かない。無理もない。楽しみにしていたクラス分けがなんと『男だけ』なのだ。歳相応の男にはこれは堪えるものがある。けれど、誠のこの落ち込みようは少しオーバー過ぎないか。ここまで執拗に女子を求めるのは、何か理由があったのかののだろうか。…まさか、な。

何にせよ、こうなっては仕方がない。大人しく認めようじゃないか。

【汝を 南無組配属に 任命する】

「!？」

俺を含め、四人の顔が一斉に振り向いた。当然だ。まさかの、である。視線を向けた直後見事に四人全員が『石』になった。野郎が待っていた者、待ち望んでいた者がそこにいたからだ。

一人の少女が口を開けて立っている。壺が言ったことに思考が追いついていないようだ。

水色の髪の少女だ。とても小さい。学園一幼く見えるのではないかと思ってしまうほどだ。変わった着こなしをしていて、袖が手まである……というか、サイズが合っていないのではないか。見た目通り大人しめの服装をしている。が、一番目がいくのはそれではない。彼女の左目である。

隻眼の少女だった。

ひし形の図形に十字の紋様が刻まれている。しばらく口を開けていたが、現実に戻ったのか赤面して壺にお辞儀をし、駆け足でこちらにやって来た。そしてとても丁寧に、男には到底不可能であろうお辞儀を披露してくれた。

「あ、あの……この度、こちらのクラスに配属となりました……水^{すい}月^{げつ} 音夢^{ねむ}といいます」

恥じらいもある笑顔は、四人にとってこれほど嬉しいものはなかった。

※ ※ ※ ※ ※

その後、緊張が残る音夢を温かく迎えた俺たち四人は順々に自己紹介をした。

かなりテンションが上がっている誠が少々暴走しかけたが、ヴァンがどうにか押し止めて事なきを得る。ヴァンも誠とはあまり付き合いが長いとはいえないらしいのだが、少しではあるが数年前から一族との交流があったようで、誠のことについては多少心得があるようだった。

時間を置き、緊張の糸もほぐれてきた音夢を空がずっと話しかける。空のことはよく知っているがここまで女子に話しかけているのは見たことがなかった。ゆえに少し驚いてもいる。自分の一族以外にはとても友好的なことはいつものことだが、ここまで一人の女性に対し、話題を振ったり笑わせようとしている彼はまず目にすることはなかった。……空も変わってきているのかもしれない。

それに対し音夢も空との話が合うのか、徐々に笑顔も見せ始めた。空は相手を笑わせることが好きだからリアクションをとり始めてくれた音夢に（内心隠してはいるのだろう）大層喜んでいる。そんな二人のやりとりをちよつと羨ましそうに見ていた誠とヴァンが現状の南無組について不満を言い始めた。

この時、俺はまだ気づいていなかった。

二人の足音が、徐々に近づいてきていることを……。

コツコツコツ————

「しかしだな、増えた方がいいがやっぱ五人はなあ、ヴァン」
「え！？」 う、うん。もう少しだけでいいから欲しいよね」

「そうだぜ。生徒、増殖してくれんかね」

「……無理だと思うよ、空くん」

コツコツコツ————

「そうだ！ なな、ハク。龍の力使って適当に女さらって」
「くるわけないだろ。……まあ、こればかりは仕方ないな」

コツコツ………コツ。

「出会いは来る時に来るからな」

そう言った直後だった。刻が来た。

爆風。そう思えるほどの風が入り口から吹き荒れた。

先ほど俺が壺に入れた際に引き起こされた爆風と比べれば弱い方だが、それでもその猛風は皆の注意をひきつけるのに充分であった。体育館にいた全員が強風に目を細めながらも何があっただと入り口に目を向ける。俺たち五人もそれは同じだった。誠は不機嫌そうな顔つきで、ヴァンは手で頭を覆いながら。

二人が各々のリアクションを取っている最中、空はさりげなく音夢の前に立ち猛風から彼女を守っていた。……なるほど、どうやら空は……。女子には比較的優しい空であるが、ここまで積極的に動く彼は初めてだな。性格は違うものの雰囲気は妹に似ているためか、それとも別の何かか。いずれにしろ面白い。

学園生活を送る中で、また一つ楽しみができたかもしれない。

爆風の原因は入り口を勢いよく開けたのと、それを開けた者の妖力によるものであろう。

そこには二人の美女が立っていた。後ろから太陽の光を全面に受けているためよく見えないが、髪の高さと辛うじて見える顔立ちから即座に判断できる。他の男子も、いや女子でさえも言葉を失っていた。十人がすれ違えば九人……下手すれば十人全員が振り返るであろう美貌。まだよく見えないはずであるのに、そう表現できる自分が怖くもあり、少し恥ずかしくもあった。

……コツ……コツコツコツ――――

少し間を置いてから、二人は歩き出す。その様子を黙って生徒全員が見つめる。

徐々に見えてくる彼女たちの姿。それが鮮明になっていくにつれ、所々で何人かの生徒たちから言葉が漏れる。それはまさしく先ほど述べた『言葉を失う』という表現のさらに上をいくであろうもの。見惚れるの最上級用語。感嘆とため息と動揺と驚きと啞然と愕然が一つになった……そんなどう表現したらいいかこちらが混乱してしまうほどの――――

絶世の美女。

「なんじゃありゃ」

「ぼ、僕が目ちゃんと機能してるよね？」

隣で誠とヴァンが視界に映る光景に打ちのめされていた。ヴァンにいたっては軽く目まいを起こしている。誠でさえも平静さを失っている。

「あれも生徒なのか？」

「……え？ あれ？ あの人、もしかして……」

空と音夢も衝撃を受けているが、音夢が少し変だ。何かに気づいたのか、それとも心当たりがあるのか。それを聞こうと俺は考えたが、すぐにその思考は中止される。

二人の美女が壺を通り過ぎてこちらにやって来たからだ。壺を通り過ぎたことにも驚いたが、彼女らが俺たちの方向に向かって来ていることにその何倍もの驚きが襲ってきた。他の三人もこれ以上まだ何かあるのかと顔を見合わせる。一人音夢だけがマジマジと二人のうちの一人を見ていた。

そして、その二人は俺たちの……否、俺の目の前で止まった。

終始無言の二人。空、音夢、誠、ヴァンの四人も無言になって見つめてくる。他の生徒も同様だ。

もう一度、再度、改めて、彼女二人を見る。

海。髪の色を言うならばそれだ。水色や青色などで表現はできない。光り輝き、まるでそのままに入っていけそうと思えるほど美しい海の髪質。ほんのり頬がピンク色で目も大きく、ただ立っているだけなのに海の欠片が空気に流れていきそう……。息を呑む美しさ。

やや恥ずかしさがあるのか、目線を下に出している。が、彼女の想いともいえる意志が彼女自身を強く動かし、その目は輝きに満ち常に俺を見続けている。きっと異性を見続けることは彼女にとって初めての経験なのだろう。恥ずかしさが理性を掌握しようとするが、それでも先ほど述べたように意志がそれを拒否している。その葛藤は初見の俺にとって並々ならぬ魅力と同時に、どこか感じ入ってしまう高揚さがあった。

歩けば『海の女神』と比喻されるであろう美女がそこにいた。

対し———

月。彼女の髪を言うならばそれだ。闇夜に照らす孤高の如き美しさ。誰も手の届かない、けど届かせたくない不思議な魅力。金色こんじきと表現するにはあまりに惜しい髪質。隣の子と同様、立っているだけで月の欠片が空気に流れていきそうなの……。まさに天女。

威厳と風格を漂わせている彼女は、悠々と仁王立ちし両手を組んでいる。そしてじつくりと俺を吟味するような目つきで見えていて、何かを確かめるようなそんな顔をしている。そして数秒後、確信が得たのかとても満足した表情で頷き、にっこりと微笑んだ。両手を後ろ腰に回し、少し前かがみになって俺をちらりと上目遣いしてくる。顔が動くたび、光沢を放つ月の繊維がこと細かくなびく。

歩けば『月の女神』と比喻されるであろう美女がそこにいた。

「お久しぶりです、ハク様」

「久しいな、ハク」

二人が同時に言う。とても笑顔で、けど少し切なそうに。期待を込めた目で俺を見ってくる。

彼女たちは一体何を言いたいのだろうか。何を思っているのだろうか。

それでも彼女らはその言葉を言ってから無言で俺を見続ける。念じるように、祈るように、願うように。海の女神は右手で自分の服を掴みギュツとこらえている。月の女神は身体で表現はしないものの目元が微かに揺らいでいる。

求めているのだ。俺に対して。

——ピシリ——

瞬間、あの夢がまるでこれ wait していたかのように脳裏を駆け巡った。

海、浅瀬、少女、別れ、契り。街、噴水、少女、別れ、名誉。

ザザ……ザザザ……！ 夢で見たあの映像が、夢でしか会えなかったあの二人の少女が、うつすらと眼前の二人と重なっていく。顔も思い出せない、名前も知らないあの二人の少女と、俺の前にいる美女が重なっていく。

……いや、まて。まつんだ。思い出せ。思い出せ！ あの夢はそれで終わりだったか？ あの夢にはまだ、続きがなかったか？ とても大切な何か、その先に続いていなかったか！？

※ ※ ※ ※ ※

「名前を！」

「え？」

そうだ。あの時、別れの際、二人とも同じ言葉を発したんだ。

海で遊んだ少女は何十人もの従者たちに連れられながら。街で出会った少女は俺が人ごみに消える直前に後ろから。どちらとも、その日はずっと一緒にいたはずなのに名前を聞いてなかったんだ。子供らしいことだ。一緒に話して遊んでいれば名前など必要ないものだったから。純真無垢な心。

少しずつ、けど確実に鮮明になってくる夢の映像。ずっと見えなかったあの顔が、徐々にはっきりと見えてくる。涙を流し、口をプルプル震わせながらあの二人は叫んでいたんだ。俺はその顔をじっ

と見つめた。見つめていたかったのかもしれない。何故なら見惚れていたんだ。とても可愛くて、綺麗で、抱きしめたくなるようなあの姿を。

思い出せ。思い出せ。あの時俺は名前を聞かれたんだ。そしてその言葉と彼女たちの姿に心を奪われた。必死で自分の名前を聞こうとしてくれるあの二人に。だから……！

「ハク。龍遠　ハクだよ」

「「ハク……」」

かみ締めるように。決して忘れぬように。心に刻むようにぐっと縮こまり身体を震わせていた。

そして再度立ち上がり、大きく深呼吸して、あの二人は言った。

思い出せ。思い出せ。その言葉を。その想いを。あの二人の顔を。あの二人の姿を。

思い出すんだ……！！

「歌姫　ルカです」

「ティア・グランツ・ミルフィーネだ」

※ ※ ※ ※ ※

映像が、顔が、雰囲気、形が、息が、全てが一致していく。目の前の二人と。

あれは夢だった。確かに夢だった。俺が十年前に出会った二人の少女との思い出だった。けどそれは、今未来を繋ぐ線上の架け橋と

なつて生まれ変わった。

「ルカ……？ ティア……？」

「「————っ！」」

がらにもなく声を震わせながら、俺は彼女たちの名前を呼んだ。
その言葉を聞いた瞬間、二人の顔がもうこれ以上ないほどの笑顔に変わっていく。長く続いた暗雲の隙間から、光輝く太陽が差し込んできたかのような。幸せそうな表情に変わっていく。

「う、うう！ よう、やく会えました……！」

「長かった。本当に長かった……！」

頬をつたう涙を気にもとめず、ルカとティアは感傷に浸る。俺もどうしていいかわからずちよつと混乱してしまつたけれど、今は彼女たちを優しく見ていることが重要なのだと思う。周りからの視線がえらく痛い気がしない。気にしたら負けだ。

喜びの涙を浮かべながら二人は笑顔だったのだが、スツとその笑顔が消える。今までの流れをぶつた切るかのようなその変わりように少々驚く自分がいた。けれど彼女らはそのようなことはお構いなしに一歩前で踏み出す。

「ハク様」

「ハク」

あの時と一緒にだ。俺に名前を聞いた時の。大きく息を吸い、想いを言葉に込める。込めて込めて……自分の人生の全てを込めて、想いを言葉に乗せる。

それは十年前から始まつた軌跡をたどりよせ、一つに集約する――

これから始まる学園生活に、その先の未来に繋げていくために――
限りある人生の中だからこそ、悠久ではない自分の命だからこそ、
後悔しないように――！

二人は、その想いを形にした。

「十年前の誓い、果たしに参りました！」

「お前を私の婿にする！」

今 物語が始まる

男子寮長、降臨

あれから数時間後、現在俺を含め男子生徒は男子寮に向かっている。

先頭が南無組なのは別にいいとして（いいのか？）、これからクラスに分かれて何かあると思っていたが、慌てて戻ってきた従業員の方が

「今日のところは寮でお休みください！ 明日また学校で連絡事項を致します！」

と汗だくで言い放つと、また全速力でどこかへ駆けて行ってしまった。原因はまず間違いなく『南無組』であろう。一体この組には何の意味があるのだろうか。と、いくら考えても仕方がないので止めとこう。今は自分がこれから二年間世話になる寮がどんなところなのか、それについて考えたほうが無難だからな。

ちなみにあの後、ルカとティアは順序は逆になったものの、改めてクラス分けテストをするために壺のところへ行こうとした。が、突如信じられないことが起こったのだ。彼女ら二人が壺のところへ行こうと足を踏み出した瞬間――

【汝ら二人を 南無組配属に 任命する】

と、壺がいきなり宣告したのである。

あれにはルカとティアを始め、生徒全員が驚いたものだ。今まで手を入れなければ判別できなかった壺が入れる事前に宣告したのだから。もはやあの二人には手を入れるまでもなくわかったということか。彼女らが南無組であるということを。それほどの『何か』を

壺が感じ取ったのか、あるいは……。

いかな、悪い癖だ。ついつい余計なことまで詮索してしまう。母さんにもよく言われてたっけ。「必要以上の模索は自滅の初手である」とかなんとか。せつかく新しい生活を始めるんだ。この癖も治したいところだな。

「おお、あれか！ 遠くからでも見えてたが、間近で見るとでけーなー！」

先頭を歩いていた誠が寮の外観について驚き半分、嬉しさ半分のリアクションをとっている。歩いていけば遠くからでもその大きさは把握できたが、誠同様間近で見るとつい感嘆の声をあげてしまうものだ。それに見合う寮であった。

男子寮は中央に位置している学園から東側に建設されている。ちなみに女子寮は西側だ。

毎回、大体100～150名程度の男子が入学するため、寮もその人数に適した造りとなっている。今年は男子が109名であるため十分な許容範囲数といえる。

学園から真東に歩いていけば横長い建造物が見えてくる。一面ガラス張りに彩られた建造物であり、そのガラスの数は4000枚以上だ。寮の中央にもそのガラスをふんだんに使用しており、正面玄関と大屋根以外にもありとあらゆる趣向で虹色に輝くガラスを盛り込んでいるそうだ。吹き抜けとなっている最上部には地上45メートルの空中径路が通っている。最上階の吹き抜けから東西へは溪谷状の階段がそれぞれ設けられていて、建築士の技量の高さが垣間見れる。

門をくぐると白鳥を模した噴水があり、その奥に寮の入り口があ

る。門の壮大さに驚き、噴水の華やかさに息をのみ、興奮が冷めな
いまま寮の入り口へ足を進めるといふものだ。

先頭を歩いていた誠はやや噴水に感激したのか歩調が少し遅くなり、結果として俺が先頭になってしまった。入り口のドアは（見た感じ）外側に開くらしく、俺がドアを開き南無組の連中を中に入れて最後に次のクラスの連中にドアの取っ手を渡せばいいな。

空、誠、ヴァンもそれをわかってか、やや小走りでこちらにやって来た。三人が来たのを確認し、俺は左によけてドアを開き、彼らの中に誘導した――

はずだった。

……目の前が真っ暗になった。先ほどまで中は明かりが灯っていたのに……何故。

俺が『それ』に気づいた際にはすでに遅し。身長2メートル級の生命体がドアを開けた俺を横切り（正確には飛んでいた）、空たち三人に向かってダイビングしていたのだ。

裸エプロン姿で。

「おおお かあああ あ え りい い い い い い い い い い

「……え？」

巨体生命体がヴァンに抱きつく。そしてそのままの勢いで、ヴァンの後ろにいた空と誠に突っ込んできた。二人は眼前に写る物体を目を大にして見る……。一秒を十秒にしたような、世の理に全力で反したような、時間を極限に伸ばされたような世界がそこにあった……。

八雲 空。俺の親友である。

その強さ、龍遠家でも大変有名で父さんや母さんも一目置いている。それはひとえに、空に対する信頼であり、また強さを認めているからでもある。多くの危機的状況に遭遇しても、己が為すべきことを的確に把握し冷静に考え行動する。雲の精霊という身分を捨て、自分がやりたいことを一切の迷いなく突き進む男である。

『自由』と『今』のためならば、命など簡単に投げ捨て死地へと入る。

その絶対的思想は凄まじく、まさに彼の生き様といっても過言ではないだろう。

そう。全てはこの世界での『自由』がため。

京極 誠。この学園で新しい友達となった破天荒青年だ。

未確定ながらその実力は相当のものだろう。壺にクラス分けされる前に既に俺と空から何かを感じさせた。その何かはまだ確認できないが、おそらくこちらの想像の一步先をいくものは間違いない。彼が何の妖もしくは精霊なのかも気になるが、一番関心があるのはそれだ。

また、短時間ではあるが彼は義理人情に熱い男でもあるということとがわかった。

『義を見てせざるは勇なきなり（人としてなすべきことと知りながら、それを実行しないのは勇気がないからということ）』という言葉をいたく気に入っているらしく、「俺がもしそのような状況に出くわしたならば絶対に勇を押し通す！」と豪語していた。

そう。彼は仲間が危機にあつた際ならば、命を投げ捨てても義の道に進むというのだ。

これは親友でもある空にも通じるものがある。なんと感動的なことではないか。俺はこんな熱い男と友達となったのだ。そうだ。友

のためならば、
彼らは全てを犠牲にできる覚悟があるのだ！

二人は避けた。

ズザアアアアアアアアアアアアアアアアアアア
アアアア……ゴンッ！

ヴァンを抱えたまま、超生命体はダイビングアタックをし、そのまま白鳥の噴水の壁にぶつかった。

そのままヴァンを愛しく甲斐甲斐しく優しく抱いたまま、ゆつくりと立ち上がる。

「**何で避けたの？**」

「あたりまえだ!!!」

二人は身構える。

この超大男は何者なのか。何故エプロン姿なのか。何故これほどまでに威圧感があるのか。何故突っ込んできたのか。何故こんなにも背筋がぞっとするのか。何故……ヴァンは生きてるか？

様々な感情が錯綜する中、二人はようやくヴァンが抱っこされて
いることに気づく。

抱っこは【抱きつく】↓【抱っこ】↓【熱い包容】↓【お姫様抱っこ】へと進化を遂げていた。

「ヴァン……！」

「あらやだ、この子、気絶してるわ」

「それ以上ヴァンに触ったら殺す！」

誠が妖力を上昇させ、戦闘態勢に入る。そんな誠に驚いたのか、巨体漢生物は身体をクネクネする。

「ちょ、ちょっと、私は無害よ！」

「有害の集合体だろうが！ 離せ！」

「もう！ せっかちな！ ほら、あんたも起きなさいよ！」

超大男がヴァンのほっぺをぺちぺちする。

「う……ん？ えと。ここ、は……？」

ほっとする誠。が。

「ヴァン……。よかった、目が覚め……。……るな！ 絶対目を開けるな！」

「誠？ どうした……の」

ヴァンが目を開ける。そこには、スキンヘッドで裸エプロン、さらに口紅をした男の顔があった。

「おはよう、ボク。私、男子寮長のマタゲスカルっていうの。よろしくねえ」

桃源郷へヴァンは旅立った。

※ ※ ※ ※ ※

「マダガスカル？」

「マダガスカルっていうらしいぞ」

「股が透ける？」

「マダガスカルという名前なんだそうだ」

俺たち……いや、男子全員が目の中の男に困惑していた。何人かの生徒が彼の名前をこそそと呼んでいるが動物でもなければ卑猥な言葉でもない。

マダガスカル・キュアリフレ。32歳(♂) 身長2メートル18センチの超大男である。裸エプロンをしていて、星マークのスリッパを履いている。スキンヘッドで眉毛は無く、口紅をし、オネエ言葉を話す。体格は筋肉質でエプロンがサイズに合わず、ピッチピチ状態になっている。ちなみに独身である。知りたくなかった、どうでもよかった。何故捕まらないんだ。

そんな彼(彼女?)を前に、現在男子全員は食堂にいる。

一番前にマダガスカルが立ち、寮の決まり事やルールを説明している。しかしながら、皆その話など一切耳には入っていないだろう。理由は簡単、あまりに驚異的な存在に目を向けざるを得ないからだ。

「——てなわけで、説明は以上で終わりよぉ。何か質問はあるかしら？」

「……………」

終始無言な皆。仮にあったとしても言えない、言いたくない。けれど徐々に冷静な自分に戻っていくと、いくつか気づいたこと

が出てきた。まず寮全体がとてつもないほど綺麗なことだ。埃一つない床、窓、廊下。説明を辛うじて聞いていたが、なんとこの寮は彼一人だけでやっているらしい。信じられない。

次に最初は掃除だけと思っていたことが、食事や生徒のバックアップも彼が行っていること。

さらには寮と学園を代表する五人の賢者と呼ばれる一人に彼が選ばれていること。

最初は皆、マタゲスカルさんの見た目だけに注目していたが、次第に彼の評価がどんどん上昇していく。見た目はあれだが中身は申し分なく完璧に近い。さすが寮長だ。

話を始める前は沈黙していた生徒たちも、自分たちの部屋に戻る際は一応の受容は出来たようだ。

今は俺と空も自分の部屋に荷物を運びに二人で寮の廊下を歩いている。

「しかし、最初はどうなるかと思ったが……なあハク？」

「そうだな。最初見たときは俺も背筋が凍りついた感覚だった。ところで空、部屋どこにする？」

「ん〜？ どこでもいいって言ってたよな寮長。器の技量が垣間見えるな。でもクラスはまとまってくれとも言ってたから誠とヴァンを探そうぜ」

「了解だ」

「……いいのか？」

了解だ、と言って俺は空と一緒に二人を探そうと一歩進んだ時だった。後ろから空が神妙な声で投げかけてきた。振り返ると、先ほどとは打って変わって真面目な顔をした親友の姿がそこにあった。

「このまま、あのお嬢さん二人の告白を受け入れれば色々面倒なことになるぞ」

「……」

「面倒なことっていうのは何もこの学園内だけの話じゃねえ。長引けばあいつにも伝わる……」

「ああ、わかってる」

「それでもいいのか？」

とても心配そうに、心からの配慮を込めて空が質問を投げかける。本人も、俺に今の質問は不粋だとわかっているのだろう。けれど、ことが大きくならないうちに収集できるのであればそうするべきだと無言のメッセージを送ってくる。

だから、俺も本音で返す。

「あいつは、まだ俺の嫁と決まったわけではない」

「そうだな。お前のおばさんやおじさんもそう思っているだろうな。けど、あっちはそう思ってないぜ」

「ルカとティアに出会ったのはちょうど十年前だ。あいつと出会ったのも十年前だ」

「だからどうした？ 二人とは違い、十年前からずっと付き合いがあるのは事実だ」

「そうだな……けど」

「けど？」

空も本意ではない質問を続けてくる。俺が今どうしたらいいのか、はっきりと決めていないことを知っていてもなお、続ける。彼なりの優しさだ。また、もう一つの学園にいるあいつに対しての配慮もあるのだろう。空にとって、この質問の突き詰めが早急な俺への解決方法と踏んでいるのだ。

以前にも回想したが、幼少の頃より俺と共にいてくれたのは『六

人』。一人は空で、残りの五人はもう一つの学園に行ってしまった。その五人のうち四人は龍遠一族に代々忠誠を誓っている四家の子供たち。

そして、最後の一人が『あいつ』である。

「親父がさ、今日家を旅立つときに言ったんだ」

「……何て？」

「嫁さん、必ずゲットしてこいよ！　ってさ」

「……はは、おじさんらしいぜ」

「だろ？　だからさ、もう少しだけ考えてみたいんだ」

「それが今のお前の考えなんだな？」

「そうだ。悪いな、優柔不断で」

別にいいよ、と手をヒラヒラして空は返す。

これ以上は無理と判断したのか、いつもの彼に戻る。こういう空の性格は昔から変わらず、よく助けられたし、今でもそれは続いている。嬉しくもあり、どこか……こそばゆい。

「ま、この世界じゃ、一夫一妻でも一夫多妻でも全然問題ないからな！」

「おいおい」

そうだ、俺たちの世界では妻を一人とろうが何人とろうが本人たちが認める限りさして問題ない。

下界の人間たちは『法律』というもので区切りをつけていたらしいが、俺たちにはそういう概念はない。ただ、一族の慣習や暗黙の決まりごとはあるから、強いていればそれが一族限定の『法律』と呼べるものかもしれない。

もちろん、龍遠家にもそれはある。代々、俺の一族は……

「うちは一夫一妻だぞ。暗黙のルールっぽいけど」

「わかってるさ、だから聞いてんだろ？　これでいいのか、ってさ！」

「結局そこに行き着くんだな」

「親友なりの気配りさ。ま、どういう道に進むかはハクが決めることだから強くは言わないけどさ、後悔はしないようにな」

そう言って空は俺を追い越してテクテクと誠とヴァンを探しに行く。

空、ありがとう。お前には本当に感謝してるよ。これからよろしく頼む。

そして、俺が迷ったとき、また今のように激励をとばしてくれ。俺もお前が苦しんでいるとき、必ず助けると誓うよ。それが俺らの関係だから。絆だから。

頭の中を今一度整理でき、落ち着きを取り戻した俺は、小走りで空のところへ向かった。

どうやら、俺達は寮の最上階の部屋になるらしい。

※ ※ ※ ※ ※

現在、私こと『水月 音夢』は女子寮にいます。

南無組を宣告された時は頭が真っ白になって、しかも男性だけと思っていました。けれど、その後二人の女子が入ってくれてとても嬉しいです。正直、一人では心細かったので……。

しかもそのうちの一人に、私と小さい頃から仲がよかった歌姫ルカちゃんがありました。本当は一緒に行きたかったのだけど家と学園を繋ぐ大鏡は一人用だったので、現地合流となっていました。だ

から無事再会できてとても嬉しかったし、しかも同じクラスになれるなんて……！

ここで一つ、私のことについて説明させていただきます。

私、音夢は『水の精霊』です。水の精霊は【六稟^{ろくりん}】とも呼ばれ、精霊の中でも有名な一族です。六稟とは水、火、風、土、氷、雷の六つの精霊を合わせた通称です。それぞれ独自の文化や風習を形成していますが、どの一族も六稟というものに誇りをもち気高い精霊として知られています。

私はその水月一族の三女なので、実際のところ跡取りとかそういう一族でのあれこれはあまり関係ありません。結構、自由奔放な暮らしをしてきました。ただ、私は……隻眼を生まれてすぐからずっと付けていました。理由は隠している左目に関係があるそうなのですが、詳しいことは私もよくわかりません。けれど、この使い道なら知っています。

そんな隻眼を付けた女の子だったからか、小さい頃はよく苛められていました。毎日泣いてばかりいました。そこを助けてくれたのが……ルカちゃんでした。家族以外の初めて出来た心許せる友達。今でもルカちゃんとの仲は良好で、頻繁に歌姫一族とも交流があります。

かなり省略してお話しましたが、私についてはこんなところです。あまり大きく言えることもありません。ただ、この学園に入学することについてはとても楽しみにしていました。いっぱい友達を作って色々な方とお知り合いになりたい。そう思って来ました。素晴らしい学園生活になることを心から願っています！

「……以上が私についてです。よ、よろしいでしょうか？」

「うむ、わかった。ありがとう、感謝する」

「バッチリだよ音夢ちゃん！」

今、私の部屋には三人の女子がいる。一人は私、もう一人はルカちゃん。そしてあと一人は……。

「よし、次は私の番だな」

そう言って金色の髪をなびかせた彼女はゆっくりと立ち上がる。

女子寮長の説明も終わり、各々自由な部屋に行ったあとは同じクラスになった者同士仲良くしようということで急遽私の部屋に集まることになった。と、いっても南無組は女子三人しかいないからすぐ集合できたけど。

部屋にいるのは、私とルカちゃんと、今立ち上がった女の子。名前は――

「私の名前は、ティア・グランツ・ミルフィーネ。【ヴァンパイア】一族棟梁の一人娘だ。この学園に来た目的はただ一つ、ハクを私の婿にするため。ティアと呼んでくれ」

風貌、佇まい、容姿、どれをとってもその美しさは一級。孤高の姫君。

妖の中でもその地位や名誉を知らぬものはいない。一時期は天上無常、狷介孤高と自分の意志を第一に守り、他と協調しない一族とまで揶揄されていた妖……ヴァンパイア。

しかし現在はその考えを改め、他の一族と交流したり自分たちの文化を提供したりと、その揶揄は現在では廃れています。なんでも十年前から彼らの考えも変わっていったらしいです。原因はわかりませんが、とても喜ばしいことだと思えます。

最初見たときは息を呑みました。あまりにも美しすぎて。ルカちゃんも私たちの間では『海の女神』と称されていました。彼女もその称号に負けず劣らずの美貌を兼ね備えています。

ただ、今の発言から少し違和感……というか、体育館でも同じことを言っていたような……。しかもその発言はティアさんだけじゃなく、もう一人も同じようなことを言っていたような。

そんなことを思っていると、私の横に座っていた彼女が何も言わず立ち上がる。そして――

「私は、歌姫 ルカ。【人魚】一族一棟梁の一人娘です。この学園に來た理由はたった一つ、ハク様の妻として参りました。どうぞよろしくお願い致します。あ、私のことはルカと呼んでくださいね」

身なり、風体、相好、どれをとってもその可憐さは一級。清楚純麗な姫君。

彼女の一族もまた、妖の中では知らぬものはいない。容貌に加え、彼女たちから発せられるその歌声はいかなる難聴にも届き、また生死の境にいる者をも救いゆくといわれる甘美なる声域。交流したいと望む一族は多々いるが、彼女の一族は深海に住居を構えているため、中々それを実現することはできない。実際、私のような水関係の妖または精霊でないと彼女たちに会うことはできないのだ。そんなある意味出会うことが非常に困難とされる妖……人魚。

私の最初にして最大の親友（と思っていた）です。

特にルカちゃんは一族の仲でも容姿、歌声、性格と人魚史上最高と称されています。『海の女神』と絶賛されるのも頷けますね。ティアさんと出会うまで、彼女と同クラスの美女はこの世にいないと思っていましたから。

誰に対しても優しく、健気で。一生懸命どんなことにも取り組

もうとするその姿勢は多くの男性を虜にしています。彼女を是非一度見たいと軽い縁談から、婚姻の話まで持ってくる妖や精霊も後を絶えません。ただ、その婚姻関係の話は全て断られています。世間ではずっと不思議と思われていたのですが、私は知っていました。そしてその理由ともいえる事象が今日の前で起こっています。

ごめんね、ルカちゃん。正直言うところ……ちょっと怖いです。現在の状況。

「あの、二人はお知り合いなんですか？」

恐る恐る笑顔でお互いを見詰め合っている二人に質問する。その質問にこれまた笑顔で返してくれるルカちゃん。でも怖いよ。

「ううん、今日が初めてだよ音夢ちゃん」

「私たちが出会ったのは、受付のところだな」

「受付？　というと、名前を申告するあそこ？」

「うん、そうだよ」

そこでようやく二人が出会った話を教えてくれた。といっても簡単にだけど。

二人とも遅れて学園に到着してしまったので、やや駆け足で受付のところに行ってきたそうです。ちょうど同じタイミングで。そしてすぐさま受付をしようとしたところ、名前の欄に驚きの人物が。長年想い続けてきたその名前。すぐさま自分の眼に飛び込んできたそうです。

「ハク様！？」

「ハク！？」

「「え？」」

同時にその人物の名前を言って、これまた同時にお互いを見合う二人。

しばしの沈黙の後、何も言わずに二人は相手の心中を察したそうです。すごいよね、女の感ってやつかな。私も女なんだけど。

その後、すぐさま受付を済ませ、無言のまま二人で体育館へ。そして視界に飛び込んできた、十年前からずっと会いたかったあの人のもとへ進んでいき、彼から自分の名前を確認し、あの言葉を言ったそうです。あえて相手から自分の名前を言わすところが同じ女の子として感服します。私には無理です。絶対無理です。無理ったら無理です。絶叫して終わりです、はい。

そんなことを考えていると二人が見つめあっていることに気がつきます。

……空気が引き締まる。ピシリッ、って感じで。本当に今酸素あるのかなって思うほどギュウウウウと縮まされて凝縮されて濃縮されたような。そんな有無を言わさぬ迫力がそこにありました。

二人はじつと見つめあいます。ひたすら、沈黙の中。

それは何を思っていることなのか、何を考えてのことなのか。蚊帳の外にいた私にはわかりませんでした。けど、これだけは言えます。二人とも『本気』なんです。目からそれが伝わってきます。

そしてお互いに握手をし、少し雑談をした後、二人とも自分の部屋に戻っていきました。

一人、私は自分の部屋で大の字になって天上を見ていた。

「すごいな、二人とも。大人の女性って感じだったなあ」

明日から、あの二人想い人のため一生懸命頑張るんだろうなあ。

何か色々大変そうで、多分だけどそれに自分も巻き込まれそうな予感がする……。喧嘩とかもしそう、修羅場とかも。修羅場なんて本でしか読んだことないよ。でも、それでも好きな方のためなんだよね。

ちらりと、頭の中に空くんが出てきた。あれ？　なんでだろ？　恥ずかしい。

そんなこんなで、私の学園初日は幕を閉じた。一日で起きた出来事は凄すぎた。とてもじゃないが整理できないほどだ。でも同時に、楽しすぎて仕方がない。一体どんな学園生活が待っているのだろうか。期待に胸が膨らむ。膨らみすぎて破裂してしまいそうだ。

「明日は自己紹介とかするのかな。ううー、楽しみ！　きっと今日以上の何かが待っているんだよね。緊張して眠れないよ」

そう、明日もまた学園が待っている。この生活が続く限りずっと。終わりはやってくるだろうけど、それでもいいのだ。この時間を有意義に、確たるものにすればいいのだ。うん！

ドキドキが止まらない中、ゆっくりと睡魔が襲ってくる。次第に閉じていくまぶた。

確かに、このときは明日の『何か』に期待を込めたものだ。実際、次の日もそれは応えてくれた。見事に。見事に。……み、ごとに。

そう、確かに自己紹介はした、一応。ただ、その舞台が異常でした。ああ、戻れるのならこの初日だけでよかった。絶叫する必要もなかった。けどまあ、これが新しい生活なのだ。頑張って受け止めるしかないよね。ファイトだ、私。

希望と期待とワクワクが入り混じる中、自然と視界が消えゆく中。私は自分を鼓舞した。どんな学園生活になろうとも、自分をしっか

りもって毎日を価値あるものにするように、と。事実、次の日からそれは現実のものとなる。価値あるもの以上の舞台が、待っていたのだから。

学園生活は まだ始まったばかりなのだ。

最初の学園行事

「ああ、頭痛え」

「それはこっちのセリフなんさ誠。まったく学園初日から無理やり『酒』飲ませるなんて」

「お前ら二人はまだマシな方だ。ヴァンに至っては半死だぞ」

「だってあいつ弱すぎじゃね？ 朝見た時は100%死んでると思っただぜ」

現在、俺らは寮から学園に向かっている。ただ、そのうち三名は昨日の酒がまだ残っており二日酔い気味だ。それもそのはず、学園初登校記念日だがなんとかで誠が酒を持ち込み、皆ベロンベロンになるまで飲ませまくったのだ。おかげで俺と空、主犯の誠もフラフラである。ただまあ、もう一人よりは遥かにマシな方だが。

「くったくよお！ 重えんだよこいつ！」

「文句言うなさ。お前が原因なんだから」

「空に同じく」

酒が弱く、かつ気の弱いヴァンは誠の格好の獲物だった。コップ一杯で耳まで真っ赤になり、二杯目で半落ち。3杯目で意識不明。そんなこと知ったことかと誠はなおも飲ませ続け、止めようとした俺と空もほぼ無理やり飲まされた。結局、騒ぎを聞きつけたマタゲスカル寮長によってなんとか事なきを得たのである。

ただ、一番の被害者であるヴァンは、朝様子を見に行ったときに仰向け白目、口から泡を吹いていた。あやうく死者を出してしまうところであった。罰として、マタゲスカル寮長から（寮長にとってはお褒美でもある）愛の抱擁・20分を誰の助けもなく受けさせられた。そんな彼は今、未だ瀕死状態のヴァンを背負い登校している。

マタゲスカルからの言いつけである。

「っただあー、うぜえ！ 起きろこの貧弱野郎！」

「ふげっ!？」

いい加減疲れたのか、飽きたのか、誠がヴァンを振り落とすのに
そう時間はかからなかった。

※ ※ ※ ※ ※

てっきり教室に行くと思っていた俺たちは意外なところへ誘導さ
れた。

なんと、昨日集まっただけの体育館に再度集まってくれと受付嬢
の方に言われたのだ。皆不思議に思いながらも素直にそれを聞き、
約200名の生徒全員が現在体育館に集まっている。自然と各クラ
スずつに別れていき、それぞれ1〜7組、そして南無組へと集まっ
ていった。

まだ頭痛がするが、それも弱くなっていく。ヴァンはまだフラフ
ラだ。目がぼんやりしている。

「皆様、おはようございます」

「おはよう男子諸君」

「あの、お、おはようございます」

しばし四人で雑談をしていると、ルカ、ティア、音夢の順に女子
三人がやって来た。その瞬間、体育館中から視線が突き刺さる。主
に男子からであるが、俺たちが来たときは何故か女子から視線を向
けられていた。ゆえに、現在は男女問わずといったところだ。その
視線を受けながら、俺たち四人も朝の挨拶を女子と交わす。うち現
実に戻っていない半死の彼はしどろもどろに言っていたが。

そんな雰囲気は誠は満足そうに享受している。皆の視線を受けることに高揚しているようだ。フンフーンと歌いながら鼻が伸びまくっている。隣でヴァンがへたり込んでいる姿と対極的なその位置関係は中々のシュールであった。空は笑顔で、かつ優しく音夢に話しかけ、音夢もそれに少し恥ずかしそうな笑顔で応えていた。ルカとティアはズンズンと俺の方へ向かってくる。

「今日もいい天気ですね、ハク様」

「そうだなルカ。学園にはもう……慣れたか？」

「いえ、まだまだです。ハク様はもう慣れましたか？　というより、少し具合が悪そうに見えるのですが」

「ん！？」　ああ、これね。ちよつと昨日酒を飲みすぎてしまつて……」

顔に出てたか。もう大丈夫と思っていたのだが。酒というのはこれだから怖い。余計なものまで身体から出してしまう。酒は飲んでも呑まれるな、とはよく言ったものだ。

「フフ、あまり無理はするなよハク。お前は大事な私の婿なのだからな」

「そうですよ、ハク様は大切な私の夫なのですから」

瞬間、笑顔の二人から火柱が散った。やけに綺麗だった。んなこと考えている暇はないな。さっさと収拾しないと。

「喧嘩はそこまでしてくれ。昨日言ったように、俺は現在嫁をとる気がない」

「はい、存じております。ですから」

「お前の覚悟が決まるまで、その判断材料として私たちは自分を提

供しているのだ。文句はあるまい？」

そうだ、昨日彼女たちの婚姻宣告を受けた俺は、今言った言葉を彼女たちに送った。父さんから嫁が何だと言われているが、今はまだそのことについては全く考えていないのだ。……すまん、訂正する。少しは意識している。ただ、もちろん、嫁探しは真剣にやるつもりだが、学園生活をそれ全てに注ぐのは不利益だと思う。軽く見るつもりはないが、それ以外にも大切なことがたくさんあると俺は考える。

すると彼女たちは当たり前のように「ならば決めるまで私たちを見てくれ」と言ってきた。あまりにも当然のような受け返しに正直驚いたものだ。彼女二人も俺の答えを予想していたのだろう。まったくたいしたものだ。同時に、自分が少し情けなくなったのは内緒だ。

「文句はないよ。ただこう毎日されると気が滅入るんだ」

「まあ、随分と偉そうですね」

「ああ、まったく。さすが王は違うな」

「……」

しかも二人とも結構強い。色々な意味で。いや、下手に相手の顔色を伺うよりもこちらの方がいいのではあるが、二人で一斉射撃されると中々『きく』ものがある。判断材料として自分を提供してくれるのは嬉しいが、それって自分たちのどちらかを選ぶのが最初から決まってるってことではないだろうか。もし、そんなことを彼女二人に言ったら……。

これは思ったより早い段階で結論を出したほうがよいのだろうか。嫁を決める以前に、俺の精神がもちそうにない。誠は「さっすがハク様、羨ましいですわぁ」と茶化してくるし、空はほぼ確実に俺関係で音夢と話に花を咲かせている。ヴァンは死んでいる。いや、

多分生きてる？

ルカとティアは俺のやうろたえている姿を見ながらクスクス笑っている。どうやら二人で釜をかけたようだ。女とは凄いものだと痛感する。そんな二人の行動と昨日の酒がまだ残っているのか、少しため息をついてしまう。すると、ティアがそつと腕を組んできた。

「ちょっと、ティアさん!？」

「ん？　なんだルカ。ハクがやや辛そうなので私が支えているだけだぞ。妻として」

「最後がいりませんよ、最後が。なら私もします!」

「ちょ、おい!　一人で充分だ!」

「嫌です!」

視線が痛い。そこら中からくる視線が痛い。ただ見られてるだけののにこれほど痛いものなのか。何か怨念のような情も感じとれる。もし視線に殺傷能力があれば俺は今日が確実に命日となっていただろう。何故かその視線を送る連中の中に『誠』がいたような気がするが気のせいだと思いたい。お前何やってんだ、南無組だろ。溶け込みすぎてるぞ、同化してるぞ。

後ろで空と音夢のどつとした笑い声が聞こえてきた。

「そうなんですか」

「そうなんだよ、あの羽が生えた蛇。笑っちゃうだろ、昔からあんなんだよ」

おい空。あの野郎、後で殴る。ぜってー殴る。誰が羽が生えた蛇だ。生まれて初めて言われた。

そんな他愛ないやり取りがあって、数十分がたった頃、体育館の入り口が大きく開いた。そこに立っていたのは8人。おそらく各ク

ラスの担任になる方々だろう。生徒が入り口を見つめる中、スタスタとクラスが集まっている前にやって来て、代表して俺たちの前に立った男がマイクを取って軽くお辞儀をした。

< アー、アー、ようこそ新入生諸君、入学おめでとう！ でね、さっそくなんだけどさ >

よく通る声だった。それ以前にマイクの男は中々目立つ風貌である。

髪は黒と茶色が半々といった感じで、天然パーマが無造作に頭をおおっている。身長は結構高めで、175〜180センチの間あたりか。髪と身長はたいしたことないのだが、問題は服装にある。

< 今ちようにいい感じにクラスで集まっているから、皆にプレゼントがあるんだ >

上半身はスーツである。整った顔立ちであるため黒と白のスーツはとても似合っている。ネクタイを外せばダンディなお兄さんに変身するだろう。高身長であり身体つきも問題ないためスーツの魅力を最大限に引き出している印象だ。ただ、問題は下半身にある。上は見事なまでの着こなし。正直女子であれば人目を見てしまいたいと思ってしまうだろう。そのはずなのに、下半身は……。

< なくに、きっと皆、喜んでくれるよ。10人単位用のものだから、一クラス三つになるかな。だから、快く受け取って欲しい！ >

シワだらけのジャージであった。しかも緑色。この上なく目立ち、合っていない。

せっかく上が完璧であるのに、下のジャージのおかげで好印象が一気に底辺まで落ち込む。女子も最初は男前な上半身に心躍るのだ

が、視線を下げるとその顔が『ありえない』という表情に変わっていく。その変わりようは、正直とても面白く南無組の女子も例外ではない。後に聞いた話ではあるが、最初女子三人も彼を見たときは『悪くない!』と思ったらうれしいのだが、数秒後『悪い!』にベクトルが方向転換したようだ。悪い、は言いすぎであるが、いかんせん着ている本人がかっこいいと思っているのだから始末に終えない。

彼の説明はこのぐらいにしよう。とりあえず今は、第一印象が残念気味なマイク男の言葉に耳を傾ける。どうやら、俺たちに何かプレゼントがあるらしい。今日学園に来る前に空と話していたが、俺と空の予想では、今日の学園の行事はおそらく自己紹介だ。であるため、そのプレゼントはきつと自己紹介がスムーズに、または良い流れに進むような『もの』だろう。

だから、そんな自分たちの予想がほぼ決まって少し浮かれ気味となっていた。空と顔を見合わせ、お互いニヤリとする。そしてマイク男がそのプレゼントの中身を言いいそうだ。顔には出さないように、心で少し喜びながら、その答えを俺は待った。

＜ そいじゃ、いってらっしゃい＞

直後、体育館の生徒全員が消えた。

そして、記念すべき最初の学校行事が開始された。

学園行事【?】

パチクリ。いや、もはや驚きを通り越して嘔然である。

ついさっきまで俺たちは体育館にいたはずだ。ほんの数秒前まで。確か受付嬢に体育館まで行ってくれと言われて、到着後南無組のメンバーと談笑してて、ルカとティアから冷たい口撃を受けて、ティアに抱きつかれ周りから突き刺さる視線を受けて、そして……そうだ。確か先生（と思われる）方がやって来たんだ。そうしてマイクでスピーチして。

気づいたらここにいた。見渡す限り蒼い空の、天空の上に。

「色々と突っ込みたいんだけどな」

ため息をつきながら辺りを見渡す。皆も同じように。無理もない、正直皆にとっても色々とおかしなことだらけだ。つい先ほど起こったことも凄かったが、現状の位置もなかなか凄い。

何故ならば、只今俺たち7名全員が空の上に『立っている』のだから。

「なんか透明な床が下にひいてあるみたいな感じですね。ティアさんはどう思いますか？」

「ルカと同じだな。私は空が飛べないから下を見たくないが……あー、何故空の上に立てているのか。一般的に考えれば何らかの物質が私たちの下にひかれていると予測するのが普通だろう。もつとも、それを確かめるすべは持ち合わせていないが」

「し、下は見ないほうがいいよね、ルカちゃん？」

「うん、音夢が見たら多分失神するかも。音夢は私の方を見るよう

にしてね」

女子三人が出来るだけ落ち着いて今の状況を分析している。頼もしい限りだ。ルカとティアも先ほどまで俺としていた騒動の時の彼女らではない。冷静にかつ慎重に現状を把握している。

対して俺ら男子四人は、と。

「ついに俺は青空も飛べる存在へと進化を遂げた……か。まいったぜ、神をも超えちゃったな」

「おーい、ヴァン、生きてるかー？ ダメだ、意識なくなってるさ。仰向けで寝てたから直で空から下を見たっばい。いよいよあの世に旅立つ五秒前だぞ。『おみやげ』何頼もう」

「あ！ 俺、三途の川の水がいい！」

「さすがさ誠！ お目が高い！」

「まうなく、先ほど神超えちゃったからね」

「……」

まるで天地の違いだ。同じ男として情けなくなってくる。俺はこうはならない。

しかし、一瞬にして俺たちを、ひいては（おそらく）クラス全員を移動させるなんてどうなってやがる。誰かの術か、いやそれは無理だな。そんな妖と精霊は聞いたことがない。だとすればあの体育館。前もって用意した場所に移動できる術式を盛り込んだ建築物というわけか。たいしたものだ。

天空の風景は見慣れているのであまり動揺はしなかった。今俺らがいる場所が雲よりも高い位置にあるのは少々驚いたが。ゆえにかのりの高さであると推測される。何か情報はないかと辺りを見渡している、一通の手紙が落ちてあることに気づく。俺がそれを拾うとヴァンを除き南無組全員が後ろからその手紙を見る。手紙にはこ

う書かれていた。

《親愛なる南無組生徒の諸君へ。

いやー、一人の教員として色々と考えたけどさ！ え？ 何をか
って？ そりゃあ『皆の交流を深めるためには何をしたらいいか！』
に決まってるじゃないか。

でね、俺は考えた。そりゃもう必死で考えた。考えて考えて考え
て……こりゃあ、もう死ぬ思いをしてもらうっきゃないと思っただ
けよ。やっぱ仲良くなるには同じ境遇を生き抜いた者たちに限るか
らね！ ステキすぎて涙でちゃう。でね、まあ大体10人単位で一
つの催しを用意して、それぞれを各ステージに送ったわけ。

南無組以外は一クラス30人弱だから三つにわけてそれぞれステ
ージに飛んでもらってるよ。それで、早くゴールした順からポイン
ト制で振り分けして、記念すべき最初のクラス対抗試験にしたわけ
！ 俺頭いい！ けどさ、南無組は7名しかいないから君たちが
もらったポイントを3倍することで他のクラスと同じようにしたよ
！ でもね、それだとなや君たちが有利かと思うからさ！

一番きつい試験を用意させていただきました！ やったね、かつ
こいいぞ！

試験は簡単！ さっきも書いたけど出来るだけ早くゴールするこ
と！ そんだけ。

君たちには一番きつそうな試練に相応しいステージを用意してい
るよ。そだね、わかりやすく言うと『陸・海・空』をイメージして
る感じ。今君らがいる場所は『空』のステージ。どうやったら次へ
進めるかはすぐわかるよ。お楽しみね！

ではでは、君たちの素晴らしい学園生活を祝して！ 皆良い子に

頑張るんだよ！

南無組 担任 石田 健次郎》

「……何じゃこりゃ」

空が手紙を見ながら小さく呟く。半分呆れているが、半分どこか楽しそうだ。さすが何事もプラスへと転換していく男。この試験もすぐさま一つのアトラクションとして認知したようである。段々と彼の顔が笑顔へと変わっていく。

そんな空をよそに、ルカとティアは手紙の意図していることを模索していた。

「わざわざこんな試験を用意する必要があるのでしょうか」

「ないな、全くもって。おそらく交流を深めることを目的にしているというのは嘘で、私たちの能力を調べることが真の目的だろう。

生徒の能力を調べるのは教員としてはごく当たり前のことではあるが」

「そうだとすると、『死ぬ思い』というのはやりすぎですよ。本当に死んでしまったらどうなるんですか」

「……まあ、確かに」

「それに、手紙の最後にある『どうやったら進めるかはすぐわかる』とは一体……」

ズシン……！

ルカが疑問符を言った直後であった。遠くから何か重音とも呼べる物音が聞こえてくる。

辺りを見渡す七人（うち一人は半死）。しかしそれがどこから聞こえてくるのかわからない。それでも音が次第に大きく、しかも確

実に音の生じる間隔が狭くなっていく。

「あ、あ……。ル、ルカちゃん」

「どうしたの、音夢！ いったいな……に、が……」

声を震わせながら音夢がルカの名前を呼ぶ。それに反応して音夢のところへ駆けつけるルカ。何があったのか音夢に尋ねるが、彼女は黙って前方を指差すだけだった。その先を追ってルカも視線を向ける。そして言葉が音夢と同様、途切れ途切れとなり最後を言う前に沈黙した。

原因はもはや明らかであった。俺たちもルカと同じように音夢の指差した方向に目を向けたからだ。そして見つける。いや、見てしまふ。今まで見たことないほど大きく、荒々しく、奇天烈的な……！

超巨大『蛇』がこちらに向かって突撃してきたのだから。

※ ※ ※ ※ ※

「これでいいのですか？」

「んー、何がですかチロロちゃん」

「ちゃんは止めてください」

体育館の前は先ほどとは違い、生徒は誰一人としていなかった。

現在いるのは二人。一人は先ほど全生徒の前でスピーチをした上半身スーツ、下半身ジャージの男。南無組担任、名を石田健次郎。もう一人は受付嬢の統括をしている黄色メガネで三十路手前の女性。名を八木 チロロ。名前はかわいいが性格は厳しく受付嬢たちから恐れられている存在である。

他の先生方は自分のクラスに移動していて、一クラス三チームに

分けた自分の生徒たちの動向を見守っている。本来なら南無組の担任も移動するべきであるが、『南無組』というクラスそのものが予定されていなかったため、只今南無組にクラスはない。

もちろん、この学園は大変広く空き教室もある。が、問題はそのではないのだ。決定的な要因が別にある。そのため現在南無組担任は体育館でハクたちの動向を見守っている。チロロが不機嫌そうな顔で石田に尋ねる。

「まったく、あなたが担任とは……。南無組の子たちも可哀想に」
「だって俺本来なら学年主任だってじゃん。それがいきなりクラス一つ増えるんだもん」

「子供みたいな言い訳は止めてください。……。それで？ あの子たちにはどんなステージを用意しているのですか？ 他の先生方もあなたが考えたステージには大層驚いていらっしやいました」

生徒たちが飛ばされたステージは全て石田が考えたものである。それぞれ三つ用意して、一クラスを三つに分けて各々飛ばす。どのクラスもそれは同じである。が、7名しかいない南無組は多々問題があるため特別なステージを用意した。他の先生方もそれに同意し、確認のためという舞台を用意したのか見させてもらった瞬間、全教員が凍りついたのだ。「問題ありますかね？」という石田の問いに対しブンブンと頭を振っていた様子をチロロは黙って見ていた。

「ん？ まあそんなに大変ではないよ。気にしすぎ！」

「それでは、最初のステージは何が相手なのですか？ それぐらいは教えてもらってよいでしょう？」

「ん、別にいいよ。アグランテだよ」

「！？ ……え？」

「だから、アグランテ・ダナコンダを倒すことが第一ステージのクリア条件」

「ななな、何を言っているのですか!？」

先ほどとは打って変わって豹変するチロロ。わなわなと身体を震わせながら「何を考えているのだ」と本気の睨みを石田に向ける。アグランテ・ダナコンダ。この世界に生息する蛇の中で最も残忍性が高いことで知られている蛇。その巨体は鯨も飲み干すと称されている。単にでかいだけでなく、その図体からは考えられないほどの俊敏性と高い知能をもつ。南東のずっと先にあり、未だ未開拓とされる『不緑の森』に生息している。その鱗の皮は市場では超高価で取引されるが、ほとんどの者が生きて帰っては来ない。

それをどうやって石田が持ち込んだのかも疑問であるが、それ以上はその極めて危険な生物を第一ステージに用意した石田にチロロは怒りを覚えた。いや、怒りだけではない。彼の人格そのものを疑った。狂っているのかと思ったぐらいだ。

「すぐに止めてください!」

「そんな怒らなくてもいいじゃないか。多分大丈夫だよ」

「生徒を殺す気ですか!？」　　「いますぐ止めなさい!」

「まま、落ち着いて、ね?　ほら、この用紙を見てよ」

怒り狂うチロロをなだめながら石田は一枚の紙を渡す。その紙を受け取らずにはじき返そうとしたチロロであるが、グイッと顔面に用紙を近づけられ、仕方なしに見る形となった。

「これがどうしたんですか!？」

「南無組生徒たちのメンバー表」

「知っています!　龍のご子息に加えて、人魚とヴァンパイアの姫君もいることも知っています!　だからこそ私は――」

「この子」

未だ怒りが収まらないチロロが石田をぼろくそに攻め立てようとした時。彼は一人の名前のところにチヨンチヨン、と指を置く。

「だからそれが何だ」とチロロが声を荒げながら指が置かれているところに視線を送ると……。

「え？」

「ん、気づいたみたいだね」

「ちょ、ちよっと待ってください。この子はこの学園にはいないはずですよ」

「そうだね、きっと何か理由があってこちらに来たんだね」

「本物ですか？」

「本物だよ」と笑いながら石田はマイクをとる。

< 龍、人魚、ヴァンパイアにも驚いたが、俺が一番驚いたのはこの子かな >

※ ※ ※ ※ ※

正直言って、現状の光景が半分信じられなかった。遠くからでも確認できるあの大きさ。遠くからでもわかるやつスピード。遠くからでも感じる……殺気。野生特有ともいえる純粹無垢な殺意。

あ、あ、と音夢が声を震わす。目には次第に涙を浮かべて。そんな彼女をルカが後ろから優しく抱きしめ、大丈夫だよと何度も呟きながら音夢の頭をなでる。二人の前に立つ空。指を鳴らし呼吸を整える。ティアは金色の髪をなびかせながら背筋を伸ばし右手を上げる。おそらく、彼女の戦闘態勢だろう。ヴァンは死んでいる。

けれど、そんな周りを気に留めず一人の男が前に進む。驚く一同。

空が声をかけようと彼に近づこうとするが、左手を大きく広げ空に来るなど伝える。

「問題ねえ」

たった一言だけ残し、淡々と歩いていく。

空が俺たちを見ながら「どうする？」と半ば慌てながら聞いてくる。ティアもルカも音夢もその質問にどう答えていいかわからなかった。ただ黙って彼の後ろ姿を見るだけだった。

ジュラララララララ……！！

呻き声を轟かせながら大蛇は突進してくる。やつが蛇行してくるたびに地響きが木霊し、戦意のない者はそれだけで逃げ帰るだろう。それでも彼は進む。歩く。歩を進める。

そして俺たちから大体30メートル程度進んでから、彼は止まった。首を左右に曲げゴキゴキと音を鳴らし右手で蛇に合図する。手を仰向けにし、親指以外の指を曲げる。それは「来な」という意思表示に他ならない。

瞬間、大蛇の速度が先ほどの倍近く加速する。おそらく高い知能を有しているのだろう。それとも、別の何か……野生ならではの感覚で感じ取ったのだろうか。声も先ほどのさらに大きく、怒りの色も入っていた。

< チロロちゃん、おそらく彼は南無組の中でも相当の戦闘力をもつよ >

突如、大蛇が爆進しながら首を上げ、さらに後ろに引いた。蛇が獲物を捕らえるときにみせる動作だ。普通ならその動作は止まってから慎重にやるものだが、やつは速度を殺さずに瞬時にやってのけ

た。完全に狙いを彼に定めたのだ。ほぼ同時、彼も左手を前に、右手を後ろに。身体を蛇に向かって縦向きにする。瞬間、右手の薬指にはめていた指輪がまぶしく輝く！

すでに述べているが、彼と出会ったとき最初に思ったのは身なりの奇抜さだった。右手の薬指に緑色の。そして左手の親指以外の四つの指にそれぞれ色違いの『指輪』がはめられていたのだ。また、右腕には「8の字」に巻きつけられたアクセサリーがある。これが最初出会った者なら嫌でも目に付く。その右手の指輪が、今怪しく光った。

しかし、まだ光っている段階であるのに大蛇は大きな口を2メートルは開け……！

彼を呑みこん

< 現在彼の一族は骨董品などを創る職人として知られているが……本来は戦闘を生業とする妖。そう、下界にいた頃、彼の祖先はその圧倒的な力で他を蹂躪した。その妖の血を受け継ぐ、一族の名は……>

ガキイイイイン

速度、殺意、威圧、それら大蛇から発せられた『全て』を、彼は止めた。

一步も引かず、後退せず、後ずさりせず、引き下がらず、揺らぐず！

たった一本の【槍】を大蛇の歯に当てただけで彼は止めたのだ。

！？！！？

大蛇を含め、俺たち全員が息を呑んだ。今日の前に起こったことを信じる暇がないほど、啞然として見るだけだった。大蛇は身体を震わせながら目だけは彼を睨みつける。そんな睨みに薄ら笑いを浮かべながら彼は言った。

「十秒で終わらせてやんよ」

< 京極 誠 >

学園行事【?】

ジュララララララ……!!

大蛇は後退しながら、しかし誠を睨みつけながら怒号の呻き声を天高く鳴らす。

そんな大蛇の様子を黙って見つめる誠。槍を右手でヒュンヒュン回しながら大蛇の動きを見つめるだけだった。その誠の様子に大蛇は歯がゆいのか、いきり立っているのか、もはや轟音に化した雄叫びを向ける。

「うるせえなあ。てめえ自分よりも大きな蛇に会ったことねえだろ？ だからんな偉そうな態度が出来んだよ。ったく、世界は広いっていうのによ」

明らかに不機嫌そうな表情で誠が大蛇に睨みつける。大蛇はそれでも雄叫びを続ける。

絶対殺す、八つ裂きにしてやるという言葉を決さずともやつの意志は充分に伝わってくる。その意志を半笑いしながら誠は答える。

「十秒で終わらせるって言ったのにもう経っちゃったじゃねえか。さっさと来い。冥土の土産に面白いもん見せてやんから」

ヒュンツ———

右手にある槍を軽く回す。一回転、円を描くように。

ちょうどその動作と同時期、誠の左手にある四つの指輪の一つが赤く光った。その指輪と連動するように紅色に光る円が生まれた。もちろん先ほど誠が描いた円である。

燃え上がるほど美しい円。誠はその円に左手をかざし、右手に持つ槍で射抜く姿勢をとる。いわゆる、『牙突^{がとつ}』の構えだ。

ジュラララララ……！

そんな誠の動作を慎重に見ながら、大蛇は身体を極限にねじ曲げ突貫性を著しく高めた。やつも一氣に決めるつもりだ。俊敏さと瞬発力、そして回転を込めて誠を一撃で屠^{ほふ}る算段か。

ねじ曲げてねじ曲げて、ギルギルと肉と肉を練り合わせ焦点を誠に定める。声も怒り狂っていた数分前とは違い、歓喜と狂気的情念が入り混じっている。ただ、それを見ても俺たちは誰一人として動かなかった。別に大蛇が怖かったわけではない。怖がる必要がないのだ。

何故なら、大蛇以上に歓喜に打ち震えている男がやつの前にいるから……。頬をニンマリと上げ、ぺろりと舌を出す。眼は浅ましく勇ましく、もはやどちらが搾取る側かわからなくなるほどだった。そして数秒後。両者の睨みあいが極限状態に達した瞬間――

大蛇が圧巻の速度で誠に喰らいついた！ まさに刹那！ が

「遅え」

大蛇が誠を呑み込む瞬刻、誠の槍が紅色の円を貫く。パチリッと弾ける円。ただ、それだけだったのだが大蛇は彼を呑み込むことは出来なかった。いや、語弊があったな。

大蛇は呑み込まれた。『蛇』に。円から突如として出現した、赤

い赤い……燃える燃える……灼熱の炎獄を纏いし豪蛇に！

「ごうかしやくえん豪火灼炎　——　炎なる蛇」

声も出せずに、呻き、叫びさえも灰にされる大蛇。やつを丸ごと包み込みながら炎蛇は天高く昇っていく……。俺たちはそれを息をのんで見ているだけだった。そして、誠がクルリと槍を回し、優しく地面に突き刺すと炎蛇は花火が咲き誇るが如く爆音をなびかせ空に散った。

火花と灰が微かに降り注ぐ中、誠はこちらを見ながらニンマリする。

「そーいや、まだ俺が何の妖か言ってなかったな」

背景の火花と、地に突き刺さる槍は彼の装飾品でしかない。そう感じさせるほど今の誠は気品に満ち、神々しかった。豪快無傑、天上下のトラブルメーカー。今後、常に南無組みの特攻を務める彼が妖の名は……。

「おにどう【鬼童丸】だ」

※ ※ ※ ※ ※

大蛇からの強襲も無事終わり、現在俺たちは談笑しながら歩いている。

数分前、誠が減した大蛇の灰が徐々に形をなしていき、大きな矢印となって南無組の前に出現した。最初は不気味がっていたがおそらくこれが次のステージにいく足がかりだろうと推測し協議した結果、その浮いている矢印について行くことに決定したのだ。

談笑している俺たちの話のタネは、もっぱら誠関係である。空が関心しながら誠を見る。

「しかし、誠があんなに強えとわなく、驚きだぜ」

「まあなく俺、神だしな」

ドヤ顔で応える誠に対し、ティアとルカが質問する。

「京極一家って、もしかして京印の焼き物を造っている一族の方ですか？」

「んあ？ ああ、そうだぜ。家は今、創作関係に重点を置いてるかな。戦うよりもそっちの方が性に合ってるとか親父が言ってたな」

「京印といえば相当有名な焼き物や装飾品を扱う一族で有名だぞ。我がヴァンパイア家の皿にも確か裏に京の文字があったような」

「あ、人魚^{わたし}の家にもありますよ！ お父さんお気に入りのコップがそうでした」

「おお！ 嬉しいね、これからもご蟲屑に頼むぜ」

『京印』とは、丸い小さな円の中に京という字が刻まれたものだ。皿やコップ、武器や腕輪など彼らが扱うものは幅広く、しかもどれもが一級品とされている。実は俺の家にもあって、鯉の餌やり用の皿に使われている。……それについては言わないようにしよう。

知らぬ者はいない、とされている京印だがそれを創っている一族はあまり知られていない。ふらりと現れては店を出しさっさと売ってどこかへ行ってしまおうと噂されている。ただ、彼らが構えている家が北のどこかにあるというのが数少ない情報である。

「京印にも驚きましたが、誠くんが【鬼童丸】だったのも驚きました」

「そうか？ 俺にとつちャルカやティア、ハクの方がよっぽど衝撃的だったがな」

<『妖』用語辞典>

【鬼童丸】

近畿・関西の妖。かの昔、源頼光という日本最強の妖怪ハンターがいたが、その英雄に無謀にも一人で挑んだ鬼がいた。名を鬼童丸。強大な力を持つ盗賊としても恐れられていた妖である。

頼光が弟の家に行った時のこと。家の馬小屋に鬼童丸が捕らわれていた。頼光は縛り方がぬるいとし、鎖で彼をきつく縛り上げた。鬼童丸はそれに恨みをもって頼光の命を狙うことに決めたのである。最終的には頼光に破れ、身体に矢を撃たれても斬りかかり首をはねられる最後を迎えるが、その執念は凄まじく首になっても頼光の馬具に噛み付いたとされている……。その戦闘力は圧倒的で、まともには戦えば頼光でさえも勝てたかどうか知らなかったと目されている妖であった。

「でも、京印を創っている一家って北の辺境に住んでいると聞きましたけど」

あれ？ と思いながら音夢がぽつりと呟く。その言葉に誠がビクリと身体を震わせた。

確かにそうだ。俺もそう聞いている。もしそれが本当なら、誠はもう一つの学園に行っているはずなのだ。俺らが通っている学園はどちらかというと南に位置している。ゆえにもう一つは反対の北にあるはずだから一般的に考えれば誠がこの学園にいることはややおかしい。

明らかに慌てながら誠がその質問に返す。

「んあ！？ あゝあゝ、そ……れはだな、ちよつと用事があつてな！ こっちになったんだよ！」

「そうだったんですか。色々あったんですね」

「そうなんだよ！ まったく困ったもんだぜ！」

どう考えて何か理由があるのだろうか、音夢がそれに納得しているのでもういいだろう。他の皆も察したのか、それ以上は尋ねなかった。ただ、鬼童丸は相当の強さを誇るとされていたから彼がそれに見合う実力をもっていることは周知の事実となった。

けれど、何故戦うを生業としていた妖が職人になったのだろうか？ 不思議だ。

「戦うことに飽きたんだとよ」

そんな俺（もしかしたら皆）の考えを読んでか、誠が答える。どうやら戦うだけの人生に飽きてしまったようで、誠の爺さんが別の何かを始めようとした時に見つけたのが起源だそうだ。

誠がはめている指輪なども全て京極一族秘伝の武器だそうだ。右手にある指輪には槍が収納されていて、彼が思えばいつでも出てくるよう設計してある。また、左手にある四つの指輪にはそれぞれ独自の力が宿っており、その一つが先ほど見せた炎蛇だそうだ。

「もともと戦闘が主軸の一家だからな。やっぱ武器からは離れられないみたいだぜ。へへっ」

やれやれとしながらもどこか嬉しそうに話す誠がいた。

※ ※ ※ ※ ※

十分後、天空の空を七人（ヴァンは空がおんぶをしている）で歩いていると、俺たちを先導していた矢印が止まる。ずっと床と水平な位置を保っていた矢印であったのだが、止まった後、その角度が変わる。皆不思議に思い、やや角度……つまり水平だったのが斜め下に向いた方向へと視線を移す。すると

「あの小島が次の目的地ってことか」

俺がポツリと呟く。音夢は下を見れないので変わりにヴァンをおぶっている空をじっと見つめているが、それ以外の皆は上空からちよこんと見える小島を視界に捕らえた。下は辺り一面海しかないがよく見ると矢印の向いた先には小さな島がある。

それを確認すると、役目を終えたかのように矢印はチリとなって消えた。全員で頷き、次の目的地を確認する。しかし一つ問題がある。そう、どうやって下に降りるのかである。ティアが方法を模索する。

「どこか下に降りられる穴か階段があるはずだ。探すでしょう」

そう言って皆が各自行動を開始した。空はヴァンを降ろし疲れた肩を回す。それを心配してか音夢が駆け寄り空もそれに笑顔で返す。ルカ、ティア、誠は辺りをぐるりと見渡すが俺と同様何も見つけれない。雲の上に位置しているこの場所には、何かがあればすぐ見つかる。他に何もないからだ。

そんな中、ようやく南無組で唯一違う世界に旅立っていた男が目覚めた。

うーん、とやや苦しそうな寝言を言いながら目がゆっくりと開く。おお、と空がそれを確認し皆も大丈夫かという表情で近寄ってくる。起きろボケ、と理不尽な主犯が後ろから蹴り起こし、ようやく本人

もこちらの世界に返ってきた。

「ふえ？　ここはどこなの？」

「ああ！？　見りゃわかんだろ。お空の上だよ」

「……僕、死んだの？」

「死んだんじゃないね」

瞬間、ヴァンがこの世の終わりのような顔を見せ、アワワと挙動不振に陥った。それを見た皆は少し笑ってしまう。「何で天国に皆いるの？」や「皆何で死んじゃったの？」など意味不明なヴァンの質問に笑いはますます大きくなった。

そこでようやくヴァンも誠にかかわれたことに気づき、不機嫌そうな表情になって誠を睨む。そこでルカとティアから現在の状況を説明された。最初は不機嫌そうだったのだが、徐々に今の状況を彼なりに理解してやや暗くなってしまうたヴァン。起きてても寝ても不安そうな表情は彼の長所なのだろうか。これが女性心をくすぐる……わけがないな。

説明を受けたヴァンがルカとティアに質問する。

「そうだったんだ……ところで、次はどこにいけばいいの？」

「それなら、先ほど私たちを先導してくれた矢印があたりを向いたんですよ」

「ほら、あそこだ」

ルカとティアの指先を目で追い、ヴァンが下を向いた。
パリンッ。

《……………》

全員が下を向く。いや、もう何となくそんな気がしていた。多分こうなるんだろうな、と頭のどこかで思っていた。けれどさすがにそれはひどいだろうというのもあった。当然じゃないか、ここまでするともはや笑い話にもならない。

ゆえにきつとおそらく多分かうじて大方もしかしたらあつけない……何か下に降りられる手段があるかもしれないと思っていた。けれど、やはり現実には甘くはなかったようだ。

《……………え?》

全員が言った。目の前の状況を信じられないから。信じたくもないから。

床が消えた。

舞台は、次なるステージへと進む。

学園行事【?】

《ああああああああああああああああああ》

全員の悲鳴が空に木霊する。突如として消えた床。今、自分を支えてくれる「地」はない。

あるのは空気。掴むことの出来ない、我々にとってありふれた存在。いつも一緒に、生涯ずっと側にいてくれる無意識的な気体。：そんな悠長なことを考える暇はないな。

只今、南無組一同絶賛落下中である。

「ティアさん！ 音夢が気絶してます！」

「何い！？ どこだ！」

落下している最中、ルカが南無組一同の状況を必死で確認する。すごいな、こんな状況でも周りを意識できる精神はそうそうないものだ。ルカに発見された音夢は目をつぶった状態で、まるで眠っているかのように落下していった。それを懸命に掴もうとするティア。空中で手を動かしながら音夢のところへなんとか移動しようとしている。しかし、未経験なる上空での行動は彼女にとって厳しいものであった。

ルカは他の仲間も大丈夫なのか、風圧で息を遮られながらも全力で辺りを見渡す。そして、もう一名気絶している者を発見する。

「誠くん！ ヴァンくんが気絶してます！」

「いいんじゃない？」

「よくありませんよ！！」

当のヴァンは、綺麗に眠っている音夢とは違い両手を重ねて胸の

ところに置き、白目でよだれをたらしながら逆立ちの状態で地面へ全力降下していた。まるで砲弾である。凄まじい速度で落下していく彼をしぶしぶ誠が（槍で）助け、現在誰一人欠けることなく皆で下降している……。

そう、落下しているのだ。

なんとか音夢を掴まえたティアに、ヴァンを捕獲した誠。今の現状をどう切り抜けるか必死に考えているルカに、終始無言の空。そして俺。現在の南無組全員の状況だ。

最初はケラケラしていた誠も、徐々に下にある海が鮮明になっていくにつれ、表情がやや陰しくなっていく。ただ、「うゝん」と唸った後にポンツと閃いたような顔になって、笑い出す。ルカが何かいい案が浮かんだのかと期待の眼差しで誠に尋ねた。彼はドヤ顔で答える。

「大丈夫だって、よくよく考えてみるよ！ 下は海だぜ？ 痛くはあるだろうがなんとかなるだろ」

「けれども、上空からの海への衝撃は計りしれませんよ！」

「まあゝそうかもしれんが、死ぬことはないだろ？」

「そう……ですが」

「ならいいじゃん！ テンション上げて落っこちようぜ！ ……海に濡れて下着が見えるかもしれないねえしな」

などと小声で下心全開な誠に対し、ルカは納得できない感じだ。確かに、ルカの気持ちもわかなくもないが、誠の意見は的を得ている。衝撃は相当のものだろうからその直前に海の水を……いや、それよりも音夢を起こした方がよいのではないか。空から聞いたが、彼女は『水の精霊』らしい。水を操れる彼女ならば、上手くクツシヨンを作って衝撃を最小限にすることも可能ではないか。

そう思って、ルカに音夢を起こすことを推奨しようとした時だっ

た。ルカが暗い表情でぽつりと呟く。

「……なんだか、下に見える海が変なんですよ」

「変？　どういふことだ、ルカ」

「えっと、その……。ハク様は感じませんか？　海の色というか、感覚というか」

「海のか？」

天空に家を構えていた自分としては、特に海の様子に変わった感じはない。いつも通り、落ち着いた気持ちにさせてくれる美しい輝きを放っており、何も考えずにいたい時、静かな場所で物思いにふきたい時には最高の場所といえる。

その美しさだけでなく、静かな波のせせらぎは……。ん？　あれ？　まで。ちよつとまで。いや、ちよ、ん？　俺の気のせいだろうか。俺の勘違いだろうか。

海の波、動いてるか？

「ルカとハクは色々と考え過ぎだつて！　まあ別にいいじゃねえか。俺はバッチリガッツリ準備万端だぜ！　この華麗な俺様の優美かつ超絶なダイビングを……おっと！」

誠がいつものように自分を褒め称えようとした時、彼のポケットにあったペンがスルリと落ちていった。昨日、受付をする際に記念ということで生徒全員に配布されたペンだ。最初は色々と記入しなければならぬことが多いということで、生徒たちは皆重宝している。誠も同様だ。

そんな学園生活において大活躍のペンが、今海へ向かって落下していった。誠が「おおあああ！」と呻きながらキャッチしようとするが、手は宙をかくだけで肝心のものは重力に従って落ちていく。

……この時、何故ペンの方が速く落ちていったのだろうと疑問を投げかけていれば、まだ落ち着いて対応できていたのかもしれない。

グングン速度を上げて落ちていくペン。キャップを下に向け、ただひたすら落ちていくペン。

そして、広大な世界という名の海へ、ポチャンと――

カキイン！

……ん？ あれ、今何かおかしな音がしたような。予想していたものとはかけ離れた音だったような。

皆、黙って下を向く。あるのは海……のはずなのだが、誠から落ちていった学園配布のペンが、何故か……。

海の上に転がっていた。

「おいしいiiiiiiii！！　今、変な音したよな、変な音したよな！」

「気のせいですよ、誠くん」

「何こういう時だけ現実逃避してんだよルカあ！　カキインつったじゃん！　明らかに海へ入る音じゃなかったじゃん！」

「硬質な海なんですよ」

「んな海聞いたことねえよ！　てかあるんですけど、海の上に無残な姿で俺のペンが転がってるんですけどお！」

「食わず嫌いなのでしよう」

「何でだよ！」

先ほどとは打って変わって立場が逆になっている。狼狽する誠に、素知らぬ顔して受け応えるルカ。目がキョロキョロしており、必死

に現実を見ないようにしている。

少し前にルカが感じていた海への違和感。そして俺が見つけた動かない波。どうやら、下に広がる海は偽物で、海の形（もしくは色）な姿をしている立派な『大地』のようだ。けれど凄いな。地平線まで広がって見えた海が全て大地というのか。上から見たときは延々と広がっていたあの海が、か。世界は広いな、まだこんな不思議な場所がもっとたくさんあるのだろう。世界を見てまわる旅というのも悪くない。

と、暢気なことを考えている暇はない。下が大地と分かった以上、このままいけば確実に落下速度をモロに使って地面と激突だ。ティアも険しい表情を浮かべている。どうすれば皆が助かるか懸命に考えているのだろう。ルカも次第に現実を見始め、誠と同様アタフタし始める。このままいけば、皆が助かることはまずないだろう。

ただまあ、龍の俺は空を自由に飛べるからさして問題ないのだが（皆には言わない）、自分一人だけ助かってても意味がない。海があるなら『水の精霊』である音夢を起こせばどうにかなると思っていたが、それも外れた。……となれば、もはややるべき方法はない。

ま、仮に下が海だろうと大地だろうとマグマだろうと森だろうと、『彼』にとって意味はないのだが。

「空、そろそろいいんじゃないか」

俺がぼつりと彼に投げかける。皆が「え？」と呆けた顔で彼を見る。

ずっと黙っていて、周りを静観していたその男は、笑いを必死に堪えていた。きっと、皆が今の状況をどうするか見ていたかったのだろう。きつとおそらく、いや間違いなく、彼はこれが終われば皆

から袋叩きにされるのは見えていた。けどそれを承知で彼は黙っていたのだ。

そういう男だ。趣味が悪いな。まったく。音夢から嫌われても知らんぞ。つか嫌われろ。減らず口を叩こうとする空に、俺は直球の言葉を投げる。

「いやゝ、もう少し見ていたかったんだけどなあ」

「したいのなら別にいいが、これ以上の静観は女子に嫌われるかもしれない……かもなあ。ま、俺は別にいいんだがな。水の精霊さんはどう思うかなあ」

「っっ！」

瞬く間に顔が真っ赤になる空。自分の感情が俺にバレていたのを驚いたのか、はたまた何故知っているんだと困惑しているのか。どちらにせよ、減らず口はそこまでにさせてもらうぞ、空。

今は何気に一刻を争う事態だ。あと20秒程度で地面とご対面。それだけは回避したい。

「ほらっ、さっさとやる！」

「ちっ！　ハクてめえ、後で話がある！」

顔が未だに赤くなりながらも、気持ち切り替えた空は、大きく息を吸う。目を閉じて集中し、己が力を解放する。何、俺と空のこのやり取りは今に始まったことじゃない。ある意味この会話は普段ではありふれている。お互いズバズバ言いたいことを言える関係が俺たちだ。

隣からルカとティアが、空に対して「今から何を……」と聞こうするが、俺が止める。聞く必要はない。何故なら、その疑問はすぐに解消されるからだ。

「そんじゃ、いこうかね」

準備が整った合図を笑顔で告げた彼は、右手を前に出した。

※ ※ ※ ※ ※

ここは体育館。現在、大型モニターを前にハクたちの動向を眺めている南無組担任、石田 健次郎と受付統括の八木 チロロ。ただ、そのうち一人は非常に怒っており、もう一人は頭にコブが出来ている。

頭をさすりながらその男は異議を唱える。

「まったく、叩くことないじゃないか」

「当たり前です！ 子供たちにあんな危険な大蛇と戦わせるなんて……！ げんこつ一発で済んだだけありがたいと思いなさい！」

「相変わらずチロロちゃんは厳しいな」

「ちゃん付けは止めなさい！」

怒りが収まらないチロロはキツと石田を睨みつける。それに半笑いで済ます石田。

しばらく彼女の睨み光線は続いたが、ふうと少し落ち込むようにチロロがため息をつく。最近ではあるが彼と知り合いの彼女は石田がどういう男かは大方把握している。ゆえに、彼のこういう態度や性格は今に始まったことではないと重々承知しているのだ。

だが、それでもこれはやりすぎである。プルプル震える己の拳をそっと抑える。

（大丈夫だ、落ち着くんだった私。仮にも相手は学年主任！ きつと何か意味があってやっているに違いない。まず間違はなく気分だろうけど……いやいや、信じよう！ とりあえず、もう殴っちゃだめ！）

心を整え、気持ちをリラックスさせる。大きく深呼吸し、現在の状況を確認する。

只今、南無組一同はクラス対抗試験という名目の元、こことは違う空間へと飛ばされた。その空間は何と石田の友人が作り上げた異空間というではないか。そもそも、体育館全員の生徒を一度に移動させるなんて芸当、まず不可能である。それでも、別の空間に移動させるというのも不可能と考えるのが普通であるが。

それを成し遂げた石田の友人にも興味はあるチロロであるが、今は南無組の動向だ。

あんな途方もない上空に飛ばされたのだ。驚くのも無理はない。しかもそれだけで終わらず、突如として蛇の中でも獰猛随一といわれるアグランテ・ダナコンダをけしかけるなんて……。頭大丈夫だろうか、この男と改めて石田を睨むチロロ。睨まれた本人は涼しそうな表情をしている。

ただ、あの中には龍に人魚、ヴァンパイアというこの世界においても大変有名な妖がいるから多分なんとかなるのではないかと思っってしまった自分がいた。いや、それほど彼らの力はすごいのだ。妖の中でも有名なのは何もその希少価値からくるものではない。有名となる大きな要因としてはやはりその『強さ』からもくる。その一つとして有名なのが、京極 誠の【鬼童丸】だ。

「……ま、なんとかありましたので良しとしましょう」

考えても仕方がない、と頭を切り替えてモニターを見るチロロ。もうこれ以上驚くことはないだろうと近くにあった椅子に腰掛ける。持ってきたお茶をそっと飲みながら、モニターを見る。ハクたちが落ちた。

ブウツツツ!!?

咳き込みながら我が目を疑うように再度モニターを見る。が、彼女の目は正常に機能しており、何度見てもハクたちは仲良く地上へ落下していた。あんぐりと口を開け、そのままパクパクする自分の口。

「な、ななな！ 何ですかあれは!？」

「ああ、次のステージは近くの孤島に行く試練。テーマは『海』！彼らが行きやすいように天空の床は消したんだよ」

「何をやってるんですかあなたは！ 下は海なんですよ、衝撃も尋常ではありませんよ!？」

「ああ、それなら大丈夫」

「何故ですか？」

グッと親指を立て、笑顔で返す石田。

「下、地面だから」

「……は？」

「あの地面、『絵の精霊』たちが500年ぐらい前に地上に描いた傑作、『地平線の海』なんだ」

「……………」

「ああ。ごめん。『地平線の海』っていうのはね」

520年前、地の精霊たちが一族の総力を上げて取り組んだ作品、『地平線の海』。

ただ紙に絵を描くことだけが全てではない、と当時の棟梁が神の申告（実は思いつき）があったと言い放ち、一族を集め見渡す限り大地しかない『無碍^{むげ}の地上』と呼ばれる場所で絵画活動をしたことが始まりである。

当初としては仲間から大反対があったものの、描いているうちに「あれ、結構面白くね？」という斬新な発想にいきつき、20年かけて作り上げた絵の精霊史上最高傑作と称されるものとなった。彼らの力もあって、その絵画は日照りに見舞われようが大雨に打たれようが全く色が落ちることはない。半永久的にそれはあり続ける。それを見た南無組担任、石田の友人が異空間を形成する際に『これ』も取り込もうということで全面的に採用した。全て石田の友人が創った異空間であるため、偽物であるが彼の寸分違わない能力（技術力）により、かなり正確に復元されている。

ガッキイーン……！

とても頭部を殴った音とはいえない何かが体育館に響き渡る。

「殴りますよ？」

「もう、殴っておられます……」

悶絶しながら辛うじて言葉を発す石田。それを上から見下ろすチロロ。

「と、いうことはですよ石田主任？ あの子たちはこのまま地面に激突するということですか？」

「いや、それはないんじゃないかな」

「何故です？」

「答えるからその拳を下ろしていただけると超助かるんですが」

「返答しだいですね」

「えと、ですね。当初としては下を『溶岩』にしよ——」

再び悶絶する石田。理由はいうまでもない。

ぎええええと叫び声を上げながら苦しむ石田。呼吸を荒げながらチロロがゆつくりと話す。

「蹴り飛ばしますよ？」

「すでになされておられます……」

「それで、続きは？」

「は……い。当初としてはグツグツ煮えたぎる溶岩にしようと思ったんだけど、意味ないかなあって」

「意味がないとはどういうことでしょうか」

「うん、だって彼がいるし。ほら」

「また南無組の生徒用紙ですか」

そしてその用紙を受け取ると石田がフラフラになりながら誠同様、その者の名前を指差す。

今回はチロロも名前を見た瞬間、「確かに」と頷いた。彼がいれば特に問題ないと彼女も判断したのだ。しかしそれでもあの状況へハクたちを放り込む石田のイカレっぷりが腹立たしい。とりあえずもう一回ほど蹴りこむ。先ほど蹴りこんだところと同じ部分を。

三度目の悶絶をする石田を無視しながら彼女はモニターを見る。

あれほど怒り立っていた自分はもういない。名前を見ただけでこんなにも落ち着きを取り戻した自分が少し怖かった。それほど彼の名前は空中において絶対的な力を意味する。

全精霊の中でも他との交流を限りなく遮断する彼らの長男。能力は未知数ながら計る必要がない……いや、あえて計りたいと思わせるほどの実力。その精霊出身の彼の力。

見たい。

純真なる彼女の願望は、モニターの映像となってすぐさま現実のものとなった。

彼の者、自由と今を愛する者なり――

学園行事【?】

落ちる落ちる……抵抗むなく俺たちは落下する。

空はティアが抱えている音夢を自分に渡してくれと言った。何故だと聞くティアに対し、今から発動する技を初めて体験する者は一人でないとうまく対応できないと申し訳なさそうに返す空。ややしぶったティアだが、空の真面目な表情が信じるに値すると判断し音夢を渡す。

空が音夢を、誠がヴァンを抱きかかえ、ルカとティアが呆然と見つめる中、空は蔓延の笑みを浮かべる。それは準備が整った証。自由を我が手に掌握した真理。今を乗り越える道。

皆が一人の男に注目する。もはやこの状況を打破できる者は彼しかない。そう思ったから。

その男は右手を前に、顔は朗らかに、声高々に宣誓した。

「来たれ…… ウィル・ラザード」

突如として周りが見えないほどの白い何かが俺たちを覆いこむ。いや、それは覆いこむのではなく、単純に彼の技が発動した証であった。そのまま白いものは下へ、下へと動いていき、やがて足の辺りまで移動する……そして、彼が命じたように形を具現化させた。

……落下する。7人は落下している。それは変わらない。しかし、真つ逆さまではなかった。

滑らかに、すべるように、流れるように……皆の足の下に横幅約30センチと狭いが道は延々と続いている【雲の道】を俺と空含め、南無組一同がウィリーのようにすべるゆく！

足を少し曲げ、やや右へ前かがみになり、雲の道に対し縦向きの姿勢で笑いながら蛇行のごとく曲がりくねった雲の道を縦横無尽に颯爽とすべりゆく。その姿は華麗であり、しかし豪快だ。

ティアがあたふたしながらも何とか雲の道を上手く乗れる（滑られる）よう姿勢を調整している。最初は俺もあんな調子だったわけ。グネグネ曲がりくねる雲の道を最初滑るには少しコツがいるのだ。それを習得するにはやや時間が必要である。

そんなことを考えていると、案の定、ルカが悲鳴をあげながら両手をバタバタさせている。今にも落ちそう……というか落ちる！

「きゃっ！」

間一髪、何とか彼女を両手で受け止め、彼女を抱っこした状態で俺は滑る。

あと少し遅れていたなら少々危なかった。まあ、そうなら空を飛んで助けにいくだけだが。

「あ、あの、ありがとうございます」

「いや、たいしたことはしてないよ。それより怪我はないか？」

「は、はい……大丈夫です。でも、少し怖いのでこのまま」

「ルカアアアアアア！……！」

後ろから全速力でティアが追ってきた。速い、凄まじく速い。俺より速いかもしれん。

まさかこの短期間……もとい数秒間でものにするとは。感嘆の意を表さざるをえない。

と、言っている暇はないな！俺も速度を上げる。

「ハクー！ 何故逃げる！？」

「今ティアに捕まったらどうなるか わからんからな！」

「安心しろ！ 墮 と す だ け だ」

「余計怖いわ！」

そのまま俺たちは三人仲良く(?)上空で矢印が指していた孤島へ向かった。ちなみに、後ろで誠がヴァンをお姫様抱っこしながら滑っていたのは内緒だ。誠も今すぐにでもヴァンを蹴落としたいのだが、さすがにそれでは彼がマジで永眠してしまうのでできない。しかし今の状況から全力で逃げ出したい誠。二つの感情が入り混じる中、彼は無言で理性と戦っていた。何か可哀そうな気もするが、俺はルカを抱いているし、空は音夢だ。ティアが後ろから全速力で追ってくるため、消去法で彼となる。

今、絶対に彼に話しかけてはいけない。話しかけたらアウトだ。まず間違はなくヴァンを落とす。それだけは回避しなくては！ 大丈夫だ、ヴァン。お前の命を無駄に散らせはしない。

「止まれハクウウウウ！」

多分。

※ ※ ※ ※ ※

ルカとティア、そして気絶から目覚めた音夢は今の状況が信じられなかった。先ほどまで何一つなかった大地の上に、今は延々と【雲の道】が広がっている。しかもそれは全て自分たちをすべらせるために広がっている道だ。風を切るように空を翔かける自分たちのために広がっている道だ。

とても気持ちいい。風が優しく髪をなびかせる。もう下には数メートルのところには大地があるが、それでもこのままずっと雲の道で

すべっていたかった。まるで自分が風そのものになったような、空を駆け抜ける渡り鳥になったような……そんな言いようのない心地よさを彼女たちは感じていた。

優しくて暖かい。それは決して太陽の暖かさではない。別のものだ。それが何かは、まだはつきりとはわからないが大切なのはそこじゃない。それを感じていることなのだ……。

ウィル・ラード ―― 【白雲の帝道】はくうん かいどう

空の十八番である技。雲の道を瞬時に足の下に出現させ、颯爽とすべることができる。その距離と道の横幅の広さは自由自在で、長さは最高5キロメートル、横幅は25メートルに及ぶ。

「自由」と「道」を雲と連動、具現化させた空ならではの技である。

音夢は自分が空に抱っこされていることによりやく気がついた。

みるみる自分の顔が赤くなるのを感じる中、眼前にいる男はとも楽しそうに前を向いている。何がそんなに楽しそうなのだろうと、彼の視線を追うように音夢も前を向くと、上空から見えていたはずであろう（音夢は怖くて下が見れなかった）孤島が近づいてくる。正しく言うと、ハクたちが近づいているが音夢にはそう感じた。まるで孤島が心待ちにしていたかのようにグングン近づいてきた印象を受けた。

その孤島にもう少しで到着できることに空は喜びを感じているのだ。何事も楽しく受け止めることができる男、八雲 空。音夢にも少しずつ彼の人物像がわかってきた。わかっていくにつれ、もっと彼のことを知りたいと思ってしまう自分にやや照れくさくなってしまうが、ここは素直になりたいという理性が上回る。

<『精霊』用語辞典>

【雲の精霊】

雲を司りし精霊。雲に関連する全ての事象を操ることが出来る上、独自の雲も創造できる。

精霊において力の幅は極めて応用性がきく。ゆえに雲関連のことならば彼らは雲に乗ることはもちろん、雲そのものを具現化し錬成することも出来る。

種族としての威厳、プライドが極めて高い精霊として知られている。雲こそ精霊界最強と称し他の精霊全てを下位とみなしている。しかしその実力は確かなもので、個人差はあれど総合能力値は抜きん出ている存在である。

孤島の周りは海にしか見えない絵があるが、所詮は絵なのでまわりも「陸」だ。

つまり、延々と広がる大地の中に少し盛り上がった陸地があるということ。それを絵の精霊たちがまるで孤島のように着色したのだ。近くで見てもとてもただ地面が盛り上がっているだけには見えない。海を漂う寂しい島にしか見えない。

ハクたちはそんな幻想とも不可解ともいえる孤島に着地する。

誠は着地する直前に勢いよくヴァンを放り投げ、ルカはハクが着地すると同時に降りティアの口撃から逃げる。それを追うティア。音夢は真っ赤になりながら慌てて降りようとするが、ジタバタするだけで上手くいかず、結果空から優しく降ろされる。

辺りを見渡すと、特になにもない。いや、何一つない。

一同は驚く。上空から見ればそこは森や泉がある立派な孤島だった。しかしいざ降り立ってみれば……そう、所詮は「絵」。悠久に広がる何もない大地に描かれた大規模な絵。つまり、色がついた陸。

「空から見たときやあ、どう見ても孤島だったが間近で見ればただの色付きな陸じゃねえか」

誠が不満気に地面を触りながら言う。自分の見たものがまるで間違っていたような、違う世界だったような、そんな言いようのない不安や焦燥感が辺りを包む。

とりあえず何か手がかりがあるだろうと、一同は孤島を探索する。ヴァンは蹴り起こされた。

どうも不思議な感覚に襲われるハクたち。それもそのはず、どう見ても本物にしか見えないリアルな絵画の上を黙々と歩くのだ。自分が巨人にでもなった気分である。多少はいい刺激になるかもしれないと考えるが長時間はかなり厳しい。下手すれば頭がどうにかなりそうだった。

「ハク様、向こうに看板があります」

ルカがふと何もない地面にポツンと立っている看板を発見する。風景と同化してよく見なければ発見できなかった。すかさず皆で走り、看板の文字を見る。立った一言、「ここに集まれ、次がラスト」と書かれているだけだった。

直後、ハクたちを中心に直径20メートル付近がグラグラと動く。そしてそのまま揺れていた地面が『地中』へと移動を開始した。

驚く一同だが、もう何が起ころうと多少のことでは動じない彼らになっていた。それに次がラストのため、あと少しだと皆で鼓舞し合い、士気を高める。当初は斬新で新鮮なステージに予測しがたいものであったが、ようやくそれも終わる。『陸・海・空』のうち、すでに海と空は終わっている。ゆえに最後は陸であろう。一体どのようなステージが用意されているのか。

期待やら不安やら何とも不思議な感覚を身体全体で感じながら、一同は地下へと舞台を移す。

※ ※ ※ ※ ※

体育館には二人いる。南無組担任、石田 健次郎。受付統括、八木 チロロ。

しかしながら、そのうちの一人が現在倒れている……。そしてもう一人が倒れている女性に毛布をかける。申し訳なさそうに、しかし笑いながら。

「実力行使は焦ったなあ。さすがは【鎌鼬】でもある八木一族。死ぬかと思ったよ」

<『妖』用語辞典>

【鎌鼬】かまいたち

甲信越の妖。旋風に乗って現れ、鋭い刃物のようなもので傷を負わせる妖。

鎌鼬によってつけられた傷の深さは、軽いかすり傷のものから骨まで見える深い傷まで様々である。明治7年に書かれた『想山著聞奇集』によると、鎌鼬によってつけられた傷は最初は痛みや出血などないが、時間が経過するとともに激痛となり、最後は大量出血で死亡するとされている。

岐阜県のある地方によれば、鎌鼬は三人組の神であり、一人が転ばせ一人が切り裂き一人が薬を塗るとされていた。ゆえに死亡にいたることはない。地方によっては単純なイタズラ好きな妖から、残忍極まりない妖などバリエーションも豊富な妖といえる。

「無理もないか。最後はちょっと俺も考えたからね。でもまあ……」

そう言う、石田はモニターを見上げる。映るは南無組の生徒たち。

ほんの数分前、石田はチロロから最後のステージについて質問された。しかし石田は答えない。答えればチロロがどういう行動にできるか容易に想像できるからだ。

石田の態度を瞬時に見抜いたチロロはもはや迷う素振りも見せず、にハクたちを救出に向かおうとする。石田にとってそれは面白くない、また彼が用意した最後の舞台を邪魔するただの厄介者に他ならなかった。ゆえに彼は彼女を眠らせた。後ろから彼女の首をソツと叩き、地面に倒れないように優しく抑えながら。そして今に至る。

彼女が起きたとき、自分はどうか。

それはもちろん処刑だろう。明日の朝日が見れるだろうか……。見れたらいいなあ。

そんな暢気なことを考えながら、しかし数分後に南無組一同が体験することを考えながら、石田健次郎は不気味に微笑む。ああ、なんと興奮にも似た高揚感。彼らはどんな顔をするだろう。そして目の前の事象にどう対応するだろう。

ゾクゾクとした言いようのない甘美な戦慄が身体を走る。次の、最後のステージの対象者はずばり一人だけだった。彼の力こそ、このクラス対抗試験を実施した本当の目的。それだけの為に石田はこの面倒とも不可解ともとれる試験を用意したのだ。

王。

はたして、その力はいかほどのものか。
はたして、その力は偽らざらぬものか。
はたして、その力は……。

はるか昔、下界からこの世界に降り立った際に勃発した妖たちの戦い。

もっとも強いのは誰か。短期間ではあるもののただそれだけの理由で幾千幾万の妖が武を競った。あれほど争いはしてはならないと下界の頃に悟ったというのに。……否、これはそれとは全くの別問題であった。皆、知りたかったのだ。人間がいらないこの世界で、一体誰が頂点に君臨してよいのかと。

それは単純にして明快にして簡潔にして明瞭な。

不条理を
理不尽を
嘘を
言い訳を
インチキを
偽善を
偽悪を
不幸を
不都合を
背信を
不誠実を
反逆を
免罪を
見苦しさを
みっともなさを
風評を
密告を
嫉妬を
格差を

裏切りを

逆賊を

巻き添えを

被害を

いかがわしさを

全て打ち碎き、全て無に帰すほどの、絶対的な力をもつ妖は誰か。それを争ったのは、遙か一千年以上前の話。しかしそれは今もなお語り継がれ、そして堂々と彼の妖は君臨する。この世界に。その血を受け継ぎし者が今、あの中にいる。

「見せてもらうよ。我らが王よ」

近くにあった椅子に腰掛ける。その目に映るは、ただ一人の妖のみ――

学園行事【?】

ゴオオオオオオオオオオオオオオオオ……

地響きにも似た轟音を鳴らしながら地中へと移動していく地面。宙に浮かび、ゆっくりと降りていく。

外とは違い、中はてっきり真っ暗と思っていたが地下は光る岩石が辺りを彩り、外の明るさとなんら変わりなかった。むしろまるで夜空に輝く星のような煌きで、女子三人はその幻想な世界に浸っていた。

対し、俺を含む男四人は辺りを警戒する。次がラストだとすれば、今この状況でも何かが起こることだってあるからだ。警戒し足りないことはない。何だかんだで最初のステージと次のステージで活躍したのは誠と空だった。ルカやティアも積極的に動いていたし、音夢やヴァンは性格上仕方ないとして俺は何もやっていない。正直解せない。

このクラスの一員である以上、積極的に参加しなければ。傍観癖が親父に似てきたと思うと、なんともやりきれない感情が芽生える。別にあの人を嫌っているわけではないが、いかせんあの傍観主義にしているのらりくらの事なかれ主義者のようにはさすがになりたくない。

気持ち切り替えて、俺も辺りを見渡す。

現在、俺たちを乗せている地面はおおよそ直径20メートル。そしてその地面は只今地中へと降下中である。まるで最初からあったような穴……もとい筒のような縦方向のトンネルを降りてゆく。上を見上げれば光が見え、周りを見渡せば光る岩石が視界に飛び込む。しかし何故だろうか。やはりその世界に浸っている暇はないと強く感じた。光から遠のいているからか、いよいよ最後のステージだからか。

らか、はたまた別の何かか。どちらにせよ、不安が消えることはなかった。

そして、その予感は現実となった。

……どこからか殺気を感じる。細く、鋭く暗闇と溶け込んでいる野生の殺気。

こちらを見ている。いや、伺っているのか。慎重にかつ冷静に。

誠と空もそれに気づき、顔つきが変わった。ティアも女子二人と談笑しているが同様に。ルカと音夢は幻想的な岩壁に会話が弾んでいる。今、殺気のことを言ってもかえって彼女二人を不安にさせるだけだ。俺たちがその分カバーすればいい。

ヴァンは……下降している地面の端っからひょっこり頭を出して「暗いね」と呆けながら下を見ている。まあ彼はこういう性格なのだろう。クラスに一人は必要だと思う。寝てても起きててもたいては変わらないヴァンだった。

———っ！

俺がそう思いながらヴァンを見たときだった。ヴァンは下ばかり見ているため気づいていない。地面が下に向かっていている様を気配を殺し黙って見ていた『それ』が突如としてヴァンの前方から口を開けて出てきた！ 当の本人は未だ気づかず、このままでは丸呑みだ。慌てて誠が「ヴァン！」と叫ぶ、が彼は「ふえ？」と前を見ずにこちらを向いた。走るティアと俺、間に合うか！？

「白煙回廊」

ガキーン！ と鈍い衝撃音が鳴る。ヴァンを襲ったその『牙』は彼に傷一つつけられずに空が作り出した雲の防壁によって妨げられた。あたり一面、雲の渦が転回する。それはドーム状の形を成し、

俺たちを守るようにグルグルと旋回する。

白煙回廊、空の技の一つだ。先ほども述べたように、ドーム状なる雲の渦を瞬時に作り出す。防御専門の技ながら、緊急時の際一時的に敵を閉じ込める、または囲む目的としても利用できる。その厚さは当然雲程度なのだが、空の妖力が込められておりそう簡単には崩せない。しかし、周囲全体に旋回しているため集中力が拡散してしまい、死角を集中的に攻撃されると脆い特性をもつ。けれども長年白煙回廊を研究し続けてきた空にとって、その弱点は一般の敵にはほぼ皆無とっていい。彼の研ぎ澄まされた精神力はそれを遥かに上回る。

「このヘタレ！」

「ぐ、ごめんなさい」

誠が一喝し、あわわと怯えながら謝罪するヴァン。しかし、今はそんなことを言っている暇はない。

「ハク、さっきの見たか？」

「ああ、かなりドでかい『狼』だったが……空、知ってるか？」

「知らないな。真っ黒な図体だったから気づくのに遅れちゃった」

そうだ、あれは『狼』だった。それも普通の狼とは違いかなり大きな。

毛皮は黒。目以外は全て黒だった印象を受けた。ゆえに気づくのに遅れたのだが、それ以上に気配の殺し具合が尋常ではなかった。相当の経験と野生の強さを感じた。一匹で行動しているのか？ だとすれば対策も色々と立てられるが……。

「あれはおそらく『群狼』って呼ばれていた化け物だぜ」

後ろから誠の声がした。やや嫌そうな顔で立っている彼がいた。ここで少し俺はおかしなことに気づく。誠なら、ああいう敵には『嬉しがる』ものと思っていた。最初のステージでも、大蛇に対して一歩も引くことなく対峙した彼だ。あのときのように喜んで戦闘モードに移行すると思っていたが……。

「俺、犬は苦手なんだよ。くそっ」

「そ、そうか」

意外な一面を見た気がした。後ろから空が質問をする。

「それで、その群狼……今『呼ばれていた』って言わなかったさ？」

「ああ、あいつは二十年前に一匹残らず殺されたはずだ」

「何故さ？」

そこで誠は群狼について教えてくれた。

かれこれ約二十年前。妖と精霊を襲う狼が出現した。やつらは集団で行動し、無差別に目をつけた者たちを食い殺していた。『群』という文字はそこからきている。その前は単に動物を狩りして食していたのだが、妖と精霊の肉の味を覚えてしまい、しかも依存してしまう形となってしまった。

最初はほんの小さな規模での事件だったが、繁殖力が強く、また戦闘力も高かったため2ヶ月で三十以上もの事件が相次いで起こった。事態を重くみた各妖・精霊は群狼討伐を決定。有志を募り一年かけて一匹残らず討伐することに成功した。

「ま、こんな感じかな。俺の親父も討伐に参加したって言ってたから間違いないよ。その時の群狼の写真も見てたからよく覚えてる」

「そんなやつらがここにいるのかよ……」

「空、やつらが面倒なのはその『集団性』にあるんだ。少なくとも十

匹。多いと百匹以上で構成されているところもある。お前の白煙回廊を上手く使う必要があるぜ」

「百匹クラスとなると俺の守りでも長くはもたんかなあ」

「まあ、百匹はまずねえよ。平均は二十匹ぐらいって聞いている」

それぐらいなら大丈夫だ、と少し安心した空。

ルカと音夢も、先ほど談笑していた時とは違い真面目な表情でこちらにやって来る。何を言うべきか迷っているが今は一箇所に集まっているだけでも彼女たちには安心なのだろう。ティアは辺りに注意を払っている。

おそらく、誠が言うならば敵の数はおよそ二十。多くても四十かそこらだろう。空の白煙回廊を使いながら遠距離攻撃を仕掛けていけばなんとかすると予測される。誠は苦虫を潰したような暗い表情をしていた。先ほど言っていたが犬が苦手らしい。ただ、彼なりに群狼と戦おうとしているのは見て取れる。

俺も参戦しなければな。龍として、南無組の一人として皆に貢献したい。それは俺以外の皆も同じ気持ちだった。お互いの目を見て、何も言わずに頷く。心は一緒。あとはやるだけだ。

下に降りていく地面はずっと狭い場所を移動していたのだが、特大の規模といえる場所に出た。

正直その広さは想像以上で、高さはおおよそ1000メートル、直径は……どれぐらいだろうか。向こうの端がかるうじて見えるぐらいだから、正確な長さは測りづらい。地中にこんな大きな空間があるとは思わなかった。これは自然が作り出したものなのか、それとも誰かが意図的に作ったものなのか。もし後者だとすれば、それは俺たちが最初に移動したあの上空の時から作られたものとなる。それほど大きな異空間を具現化させられる者など……。

ああ、また悪い癖だ。必要以上の模索はなんとやらだな。

宙に浮き、俺たちを移動させていた地面は終着点に着くとその役目を終え、普通の地面へと戻った。辺りを感嘆の声を上げながら見渡す俺たち。

まるで小さな星だ。どこを見ても輝く美しき岩石が星のようにキラキラと光っている。幻想的で神秘的、神話や童話の世界に迷い込んでしまったような気分だ。

近くには群狼がいるかもしれないのに、俺たちはその光景に魅了された。

しかし、それも一刻の酔いしれ――

《……っ!?!》

全員がその『何か』を即座に感じた。

今まで感じたことのない数の殺気。これは殺気なのか？ そう疑いたくなるほどの暗く、根深く、底がないドロのような意志。触れば絡め取られ、引きずり込まれ、呼吸が出来ない暗闇の世界へと永遠に呑み込まれるような獄沼の気。……落ち着け、敵の数はおおよそ二十。多くて百。空との連携をはかれば大丈夫だ。皆もそう思っているはず。

しかし、感覚が麻痺する。視覚がそれを見、聴覚が声を聞き、嗅覚が異臭を受け止め、味覚が空気を味わう。触覚は……動かない。

いつの間にいたのだ。俺たちは上からこの場所に降りてきた。その時は一切合切見えなかった。輝く岩石から放たれた微量の光は幾千幾万と合わさりこの地中空間を照らしていた。なのに、俺たちは『そいつら』に気づかなかった。何故だ。常に周りに注意を払っていたはずだったのに気づけなかった自分に腹が立つ。こんなことは今まで一度もなかった。……いや、まて。そうだ、俺が気づけなかったのだ。だとすれば、考えられることは……何者かがやつらを瞬

時に召還した？　もしこの仮説が正しいのなら、ここはやはり何者かが創りだした異空間ということになるが。

否、今はそれについて考えている暇はない！

いる。そいつらはグルリと俺たちを八方全てから囲んでいる。

唸る声。滴るよだれ。地にくい込む爪。暗眩の眼。それら全てを一体が所持し、眼前に映る俺たち七人の肉に向けられる。向けられていた。

※ ※ ※ ※ ※

ハクたちはついに学園行事、最後の舞台へと辿り着く。

そこは石田健次郎が用意した最終ステージ。彼が最も見たかった、知リたかったために手配された戦いの場。上は地、下も地。周りは光、眼前は敵。今まで三つの舞台を用意したが全てはこのためのお膳立てに過ぎない。石田はそう思っている。最初は空、次は海。最後に陸。下界に我らが祖先がいた頃、人間は自分たちの武力を『軍』と称し、それぞれ陸・海・空に分散したそうだ。

どこかで仕入れたその情報だけで石田はこのステージを作った。ただ、先ほども述べたが最初と次の二つは石田にとってはメインディッシュの前菜と変わらない。あわよくば、彼の力をそこでも見ればなと思っていた。ただそれだけのことだった。しかし彼は力をみせなかった。傍観し、皆の対処していく姿を見ていただけ。もちろん、他の妖は大いに活躍したものだ。正直、あの『雲の精霊』が学園などに入学すること事態が極めて驚きであったし、加えて六稟の一角もクラスにいる。さらには王を巡ってかどろかはしらないが人魚にヴァンパイアと、この世界において名だたる妖も学園にやってきた。

世間では多少のでっち上げや拡大解釈などでその妖以上のものを

噂として流される。それは人魚やヴァンパイア、雲の精霊も例外ではない。しかし彼らは十二分に……いや、噂以上の成果をたたき出した。賞賛の意を評せざるをえない。が、しかし。それでも彼らの中にいた『彼』は冷静に状況をみているだけだった。

それではダメだ。

ゆえに作り上げた。あの空間を、友の協力をえて。

全てはこの時のために。王のために……！

ハクたち一行の記念すべき最初の学園行事はいよいよ終焉を迎える。

クリア条件は最初と一緒に、いたってシンプル。目の前の敵を倒すだけ。

群狼、集団で行動し獲物を食い殺す狼。平均二十四で行動し連携も非常に上手い。だからこそやつらを討伐するのに一年かかった。被害もかなりの数であった。だがしかし所詮は二十たらずの集団獣だ。多くなれば百匹と凄まじいが、それぐらいの数が集まることは滅多にない。

その集団性に特化した野生の狼が最後の舞台を飾り立てる。が、少しばかりハクたちの予想とは違ったようだ。だからハクたちは驚く。驚愕する。目を疑う。けれどやつらが最後の砦、それで終わりだ。どうあろうとやつらを倒せば終わりなのだ。一言で言えばそうなのだ。そう、倒せばいいのだ。野生が群集、殺意は一級。

その数……

七千！

学園行事【?】

「笑えねーな」

俺の白煙回廊なら皆を守れると思っていた。数秒前までは。しかし、眼前の光景を見ながらその認識が甘かったことを痛感する。

舌打ちしながら辺りを見渡した。宙に浮く地面から降りる際、今いる地中空間には何もいなかった。しかし、俺たちが降り立って数秒後、信じられないほどの数の群狼が俺たちを囲んでいた。正直驚いたさ。何せ誠が言っていたのは多くて百匹だろ？　それが目の前にいるやつらの数ときたら……。百なんてもんじゃない、数千匹はいるぞ。

いつでも白煙回廊を発動できる体制で南無組の皆の様子を伺った。音夢とヴァンは身体を震わせながら呆然と立っていた。音夢の目には雫がたまり、そっと頬を伝う。……絶対に俺が守らなければ。誠はかなり辛そうだった。自分が言った情報が間違っていたのと、さつき犬が苦手とか言ってからか、今回は戦力に期待できそうにないさ。変わりにティアとルカの姫君お二方がかなりやる気ようだ。

俺の親友であるハクは、黙って前を見ているだけだった。

そこには、俺たちを中心に数十、数百、数千の群狼がひしめいていた。どれぐらいの数がいるのか検討もつかない。視界に収まるものは、光輝く岩石と狼……。それしかない。それ以外ない。あつて欲しいと思いたくなるほど、眼前の景色は残酷なものだった。

狼一匹一匹から強い殺気が放たれる。一気に襲撃されれば結果は見えていた。

だったらどうする？　このまま大人しく食われるのを待つってか？　冗談じゃないさ、生涯ラストがこんな結末、死んでも嫌だ。しかし、この軍勢、正直厳しい。さて、どうするか。

ザッ———

そう思った時だった。ハクが一步前にでる。静かに、しなやかに。たった一步進んだだけなのに、『美しい』と感じさせるあいつの雰囲気がちよっと憎らしい。あと羨ましい。

狼、そして俺たちの視線もハクに集まる。群狼は喉を鳴らし、涎を垂らしながら彼を注視する。

「空」

皆に背を向けながら静かに言うハク。その『声』を聞いた時、俺は自分の顔がハッと変わることになった。考える前に無意識に顔が変わったのだ。……いや、変わるといふのは語弊があるさ。「気づいた」と言った方がよいだろう。

その声は、いつぞやの……随分と聞いていないあの声。懐かしいとさえ思える、澄んだ轟きの声。

「皆を頼む」

この声を聞くとはいくく予想外だった。久しく聞いていない、本当に聞いていないあの声だ。あまりの突然さにしばし放心状態となつてしまった自分が恥ずかしい。けれど、すぐさま我に返った俺はハクに蔓延の笑みを浮かべた。

白煙回廊を発動させ、ハク以外の周りに雲の渦を出現させる。若干のパニックに陥りあたふたする南無組の皆。そんな彼らに俺は安心の意味を込めて大丈夫だと言った。先ほど見せた技ということで、最初は驚いた皆だったが、すぐに現状を把握してくれる。一つ思っ

ただが、このクラスの生徒は一人一人の能力が他の生徒よりかなり優れていないだろうか……俺の気のせいならいいんだが。

その考えが顔に出たのか、音夢が不安気に尋ねてきた。

「あ、あの、何か気になる——」

「そんなことより、ハク様もこの中に入れて下さい！ 殺されてしまいます……！」

けれど、不安気な音夢の言葉を途中で遮り、ルカがひどく動揺しながら俺に叫ぶ。その叫びにティアや誠もこちらに顔を向けた。群狼たちは俺たち……というよりも現在俺らを囲っている白煙の方に注意が向いている。以前として表情が陰しい彼女に涼しい表情で答えた。

「ああ、それなら大丈夫。絶対、絶対大丈夫」

「な……！ 何を言っているのですか！ ハク様が死んでしまうかも——」

「ありえないから」

「!？」

しまうのですよ、と続けるはずだったのだろう。しかし、その言葉よりも早く俺がはつきりと告げる。確信に満ち、一切の迷いがないう一言。それに対し思わず口ごもってしまうルカ。何故、俺がここまで言い切れるのか、不満で仕方のないようだ。

だから、続きを話さ。それが俺の今の仕事だと思っから。

「さっきの『ありえないから』の理由だけ……すぐ、わかるよ」

俺の視線は一人の男に向けられている。自然と、ルカと音夢もその視線の先を見つめる。

それに応じてティアも、ヴァンも、誠も……皆が一人の男に目を向けた。『すぐわかる』とは一体どういうことなのか、という互いに共通の疑問を呟きながら。

けれど、今の俺の発言は何も間違っていない。彼の奥底からゆっくりと、しかし確実に露となるうとしている妖力。それを確かに感じていたから。

※ ※ ※ ※ ※

「……ん、ここは？」

「おや、チロロちゃん、ようやくお目覚めかい？」

「石田主任？ どうしてあなた……が……って！？ ああ！」

「はいはい。落ち着いてね」

「これが落ち着いていられますか！」

体育館では先ほど石田に気絶させられていた八木　チロロが目を開きました。

そしてすぐさま少し前に自分に宿っていた怒りを全開にする。そんな彼女を石田はできるだけ優しくなだめようとするが、気絶させられた相手にそんなことを言われても普通素直に従うものではない。

怒りに身を任せ、黄金の右ストレートを見舞うチロロ。あはは、と苦笑しながらも甘んじてそれを受け止める石田。飛んで飛んで、ついでに頭部から落下して地面に転がる南無組担任。息を荒くしながらそれを確認したチロロは、すぐに生徒たち救出に向かう。

が、彼女が前を向いた瞬間、目の前に石田が立っていた。

突然のことで彼女は驚きと焦燥の声をあげ、その拍子で後ろに転んでしまう。彼女は石田を殴る際、【鎌鼬】である自分の力を使っていた。本気でやれば石田が肉片となってしまうので、多少はセーブしたがかなりマジでの拳を見舞ってやった。ゆえに彼が瞬時に起

き上がりしかも自分に気づかずに先回りをしていたことに心底驚愕した。さらにいえば、彼は無傷だ。一瞬にして石田の力量を感じ取った。同時に、身体全体で石田の妖力を感じ入る……。

「始まるよ。邪魔してはいけない」

それだけ言うと、ニツコリとチロロに微笑む石田。そのまま彼は椅子に腰掛け、モニターに目を向ける。その顔には、有無を言わさぬ迫力があつた。チロロは焦る。今自分がどうすればいいか、答えはすでに出ている。しかし、それができない自分がいた。

石田との力量の差。また、よくよく考えれば彼らの場所にいく方法を知らない自分。

彼女が今すべきことはなくなった。あとはただ呆然とモニターを見るだけだった。しかし、これが彼女に人生最大級の衝撃を与えることになるとは、まだ気づくよしもなかった。

※ ※ ※ ※ ※

ルカやティアは空の言葉を理解した。正確には、後になって理解することになる。

何故なら、理解するという「思考そのもの」が追いつかなかったからだ。それほど、眼前の景色はありえなかった。そしてその思考はルカだけでなく、他の皆も同じであった。

一步前に出る。群狼の何匹かがハクに注目するが、他のほとんどは空たちを睨んでいた。空が白煙回廊が発動したためだ。

二歩前に出る。群狼らに変化はない。がしかし、およそ半分が白煙回廊からハクへと視線を移す。

三歩前に出る。正面にいた群狼が唸り始め、殺気をハクに対して全面に出す。前足を曲げ、戦闘体制に入り、それ以上の踏み込みは

許さないという証を示す。しかしながら、それを見てもハクは歩くのを止めない。表情一つ変えない。そして、四歩目の足を上げた。

瞬間、正面の群狼が地面を蹴り上げハクに襲いかかる！……はずだった。

吹き飛ぶ賊狼。ハクを襲うために飛び掛った方向とは真逆の方向、つまり後方に。前方ではなく、後方に。無様に、哀れに、儂く、布切れのように。

ハク？ 彼は立っている。

どこに？ 四歩目のところに。

何故かって？ それは……彼がそこにいるからだろう？ それ以外、ないではないか。

《……え？》

空と石田以外の、その様子を見た者全員の言葉である。ルナも、音夢も、ティアも、誠も、ヴァンも、チロロも。ハクたちは、「え？」という言葉の数十分前に上空の床が消えた時も言った。しかしながら、今言った言葉はその呆けた言語とは天と地の差がある。完全に理解できない、意味がわからない、自然と出てしまった言葉であるからだ。

他の言葉などない。何もなし。代用の言葉などもない。あるはずがない。そう、存在しない。

眼前の光景が信じられなかったのだから！

「何が……起こっているの……？」

チロロが呆然としながら見る。その横で、石田が今日一番の笑み

を浮かべる。ついに待ち望んだものが、待ち続けた瞬間が訪れた。頬は緩む。ニンマリと、ニヤリと、ニタリと。どう表現すればいいのか困ってしまうほど、石田は高揚と絶頂の狭間にいる自分を抑えられなかった。

チロロはそれに気づかなかった。彼女の目はすでにモニターに釘付けとなり、他に意識を向けるなど、到底不可能であったからだ。つい数分前は自分は彼らを助けようとしていたはずだ。だがしかし、今のこの状況は何だ。これから起こることを予兆させるあれは何だ。彼がこの世界で最も有名な存在であるとはいえ、とても納得できるはずのない……モニター越しでもはつきりとわかるあの恐るべき甚大な妖力は一体何だというのだ!?

風が吹く——— 静かに、ゆらりと。

風が舞う——— 優しく、愛でるように。

風が散る——— そう、それは自然の摂理。

微笑みをうかべながら、青年は天を見る。大きく息を吸い、万物の愛情を感じ取る。いとみなみ自然全てを慈しむ。ああ、まっこと良きことかな我が世界の理よ。

まぶたを閉じ、この世界に感謝する。生きとし生けるものに心からの祝福を。心からの祝杯を。

まぶたを開け、右腕を前に出し、手を広げ、誓いを胸に。誇りを我に。

我は王。我は天。我は妖。我は……龍。

さあ、それでは始めよう……この物語を。天命に誓って!

「龍が天^{いたが}き、魅^み了^{りやう}せてやろう」

刮目せよ、一騎当千たるその力。己が眼に刻み込め。王の戦いが幕を開ける。

妖の王

一陣の風が吹く。それは自然が生み出したものではない。俺の妖力によって命を受けた風が創り出したもの。風はゆっくりと勢いを増していき、身体のをりをりを循環する。大気を撫で、時には大気そのものを斬るそれは母が子を守るように俺と一体となっていく……。

同時、気高い雄叫びが地界に響いた。全ての群狼が殺気を放ち、戦闘体制に移行する。今はもう、空の白煙回廊を見ている群狼は一匹たりともいない。己が殺意を狂気と共に俺に向けている。先ほど軽く飛翔させた一匹の群狼のみ、ぐったりと横に倒れている。

雄叫びは各地で上がり、何千匹もの群狼がそれに共鳴していく。空気を震わせ、大気を揺るがす。叫びは音の衝撃波と化し身体に伝わってくる。耳鳴りも加わり、狂乱と呼べる空間が形成されていく。そして、次第に獣の咆哮は静寂をなしていき、再び沈黙が訪れる。

しばしの静——— ……

「来い」

その一言で、一対数千の大乱闘が幕を開けた。敵は雪崩の如く数をいわせて巨大な塊となって襲い掛かってきた。向かってくる奴らを見つめながら、両の掌を勢いよく合わせる。哀れ極まりし玩物どもよ、葬天に座せ。願決たる我が風よ、息吹と借りて蹂躪せよ。

パンッ！

瞬間、周囲にいた群狼数十匹が100メートル先にかつ飛んだ。それでも飛んだのはたかが数十匹である。勢いに任せた群狼の凄まじさは、水たまりに真上から息を吹きかけるようなものだ。息の風圧で一瞬は水たまりの水が遠のくが、すぐさま倍以上の勢いで戻ってくる。群狼の雪崩は止まることはない。

だからどうした？

奥の奥の最延まで奴らがいるのなら……それごと我が力で斬り倒せばよい。右足を後方に下げる。我が眷属たる風が右足に集まり、足の甲の部分で回転しだす。風音は鋭く、細い。小規模であるが、俺はその威力を知っている。体術を習い始めた当初、一番最初に手にいれた技。その力、まさに舞風となりて汝を断喰す。

「ウィル・ラザード」！

俺の動作を見た瞬間、空がウィル・ラード――

【白雲の帝道】
はくうん かいどう

を発動した。空たちの周りにも当然群狼がひしめいているが、白煙回廊のおかげで皆に傷一つなかった。白煙回廊で取り巻いている状態のまま、空は螺旋階段上に増設したウィル・ラードでまず上空へ滑り行く。そのまま俺から離れるように移動していった。彼の力であれば、下方へ滑ろうが普通は滑れない上方へ滑らせようが造作もないことだ。このままいけば皆にも被害が及ぶ。

長年付き合ってきた彼だからこそ、瞬時に『そう』判断したのだ。

「――！？」

俺から遠のきながらルカやティアが何か叫んでいる。

何を言っているかわからないが大方予想できる。きっとこの場に俺を一人残したことに異議を唱えているのだろう。一応……自称嫁さんだ。俺があちら側でもそうする。しかしそこは長年の付き合いの差だ。空の方が何倍も俺のことをわかっている。別に彼女らが悪

いわけでもないし、空が理不尽なわけでもない。付き合いの長さからくるもの、それだけだ。

ゆえにそのまま俺は技へと移行する。

風が取り巻く右足を豪快に振り上げるが、空振りに終わる。いや、空振りではなくその勢いを利用するための動作に過ぎない。右足を豪快に振り上げたため俺の身体がふわりと宙に浮く。そのまま着地するのではなく、地面につけるのは「手」。つまり、逆立ちしている状態。

何も知らない者が見ればただのお遊戯だろう。正直、こんなことしなくても普通に足を敵方向へ蹴り上げれば問題ないのだが、何せ相手は四方八方にいらっしゃる。『こうした方』が目の中の範囲だけでなくあらゆる場所、全方位に攻撃対象が可能となる。それでいい。

「龍遠体術 参式」

静かに言った。いや、宣誓と言うべきか。そういえばこの学園に来て初めて龍遠体術を使うな。記念……するまでもないが最初の舞台がここか。何とも不可解、苦笑すら覚える。

が、そんな感傷に浸っている最中に群狼の集が突撃してきた。群集の中に俺が消え、辺り一帯が群狼で覆われる。空のウィル・ラードで移動した彼らからはきつとそう見えているのだろう。もしかしたらこいつらもそう思っているのかもしれない。これで終わりつか……？

甘えよ。

「渚」
なみぞ

瞬という名の刻限。刹那という名の一閃。

凄まじい轟音とともに何十匹もの群狼が四方に吹き飛んだ。その勢いは止まることをしらず何百匹の賊狼が「真空の刃」の餌食になり吹き飛ぶ。刃はただ斬るだけでなくその爆風をもって斬られた周りにいる狼どもも巻き込み盛大に斬り飛ばす。絶風怒濤の我が斬撃、その勢いはとどまる事を知らず細く鋭い風音を鳴らしながら後方奥にいた群狼にまで届く！ 数秒後、この地中空間の最端であろう各所から“渚”の衝突音が鳴り響く。

渚。見てわかるとおり、風の真空刃を足の蹴りだけで放つ技だ。といっても、風を操れるのだから当たり前ではあるが。最初これを空に見せた時は啞然としながら見ていたっけ。もしかしたら今頃上空で見ている皆も同じかもしれないな。

渚により数千の群狼のうち数百匹が消えた。どうやら、倒された群狼はこの世界からは消えるようだ。やはりこの世界は異空間によるものであったか。しかし、今はそんなことを考えている暇はない。いまだ残り何千と何百匹が俺を殺すため進撃してくる。

一通り渚を蹴り放ったため、その体制を止める。地面に足をつけ再び辺りを見渡すが、依然、群狼の集団が自分に近づいてくる。先ほどよりさらに大きく、雄雄しい怒号の雄叫びを上げながら。襲ってくるか雄叫びを上げるかどちらかにすればいいのに。後ろで雄叫びを上げる演奏係と突っ込んでくる囚人係みたいに……シニールだ。

「面倒になってきたな」

ため息をつきながらそれを見る。このままでは持久戦だ。最初か

ら気づけよと自分に少し突っ込みを入れる。まあ、体を慣らす程度にはなったから良しとしよう。長い戦いにも慣れてはいるが今は早急に現状を解決することが先決。ならば、やるべきことは簡潔一事。大きく深呼吸した後、俺の目は鷹の如き鋭い目つきに変わる。手を天に掲げる。

「……久しぶりに……やるか。空、皆を守ってくれよ」

※ ※ ※ ※ ※

ハクが“渚”を発動させようと足に風を集中させた瞬間、俺はウィル・ラザードで南無組全員を移動させた。白煙回廊で小規模のドームを形成していたから、ドームごと移動させる形となる。本来、ウィル・ラザードは涼しい風を感じながら颯爽と空を滑るものだ。その目的で作ったから、主に一人用。ゆえに幅を30センチ程度と普通は狭いものであるが、今回はドームを滑らせるため随分と横幅を長くした。

ルカとティアがもう見たことないような顔で俺を睨んでくる。……鬼の形相である。

いや、女子ってこんな顔するんさね、怖い怖い。音夢もこんな顔するのかな、あんまり見たくないなあ。と、そんなことを考えながら俺は笑顔で彼女ら二人に返す。が、それが悪かったらしい。すっげー怖い顔でルカとティアが言い寄ってきた。

「何暢気な顔をしてるんですか!？」

「そうだ! 貴様今何をしたかわかっているのか!？」

「お、落ち着いて二人とも……空くん驚いてるよ? ね、落ち着いて」

「音夢の言うとおりで、落ち着け人魚に吸血鬼。お前らがそんな

んでどうすんだよ」

「僕、トイレ行きたい……」

姫君らが怒りうる中、音夢と誠が二人の怒りを制止させようとする。ヴァンは顔が真っ青だ。大丈夫か？ ……ただ、二人の怒りもわかる。何も言わずに俺がいきなりウィル・ラザードで移動したんだ。二人の目にはハクを置いて逃げたように見えても不思議ではない。ハクのことを一般の者以上に想い、慕っている彼女たちにはむしろそう見えたのも当然なのかもしれない。

だからこそ、音夢と誠が落ち着きを提言し、見方についてくれたのは本当に嬉しかった。普通なら、空の床が割れた時のように南無組を支えてくれるのは姫君二人の役割だ。それが崩壊した今、彼女たちをカバーしてくれる存在が必要。それを請け負ったのが音夢と誠……。

良いクラスだ。心底そう思った。このクラスはもっと素晴らしいところへいける気がする。それを俺も手伝いたい。俺も一緒にいきたい。だから……！

「何も言わなくてウィル・ラザードを発動させて悪かった。けど、それには理由があるんさ」

「理由……？」

「そう。二人には本当に悪かったと思ってる。だからこそ、ほら。下を見てくれ」

そうやって俺は皆の目を下に向けさせる。

ちょうどその時だった。ハクがいた場所を核とし、群狼の群れが轟音とともにかつ飛んだ。それはもう、塵に息を吹きかけるように凄まじい勢いで。ルカやティア含め、南無組の皆が言葉を失い啞然として見ている中、群狼を斬り飛ばした斬撃はまるで戦火の如き速

度で八方に散っていく。それも一閃や二閃などでなく何十もの斬撃がハクを中心にして縦横無尽に翔んでゆく……。鋭い風音をなびかせながらもその威力は絶大で、当たっていたなくても近辺にいればその風圧で自分も巻き込まれるほどである。当然直撃した群狼はひとたまりもない。

渚は途中で消えることなく奥の奥までその刃を持続させ、各所で渚と地面が合わさった衝撃音が鳴り響く。その様子を上空から俺たちはただただ見ているだけだった。

「……な？　大丈夫だったろ？」
《……………》

俺の言葉に、皆は返さなかった。上空から見える孤高の刃なるそれは、ハクがいる場所を中心に鮮やかに咲き誇っていた。風の刃が八方に何十もの勢いで乱れ咲く。その様は怖くもあるが、怖さ以上に美しさを感じさせる。一切の隙がないハクの攻撃は、見るものを魅了させる……。誠が驚きを隠せずに、意見を述べる。

「あれがハクの技ってか？　尋常じゃねえぞあの力は」
「ああ、ありゃ龍遠体術の参式、渚っていうんさ」
「龍遠体術？」

龍の一族に伝わりし天空武術、龍遠体術。

もともと龍は神妖ともいわれる存在で、その力は他の妖とも一線を画す。下界にいた頃、彼らの祖先は四神として崇められていたこともあると聞いている。確か、名を青龍だったか。もはや妖という枠を超え、一時は神として祭られたほどだった。

それもそのはず、ハクの一族は『天空』そのものを聖域化にしている。つまり、雨、雷、風、雹など天空から生まれる事象を我が力として発動することが出来るんさ。これは本来精霊に近いのであ

るが、彼らはそれを凌駕した存在といえる。そして、その事象を体術として組み込んだ技のことを龍遠体術と呼んでいるんさ。体術は壺式から拾参式じゅうさんしきまであり、ハクはあの若さにしてすでに全ての体術を扱うことが可能だ。歴史ある龍遠家の中でも天才と目されている。

「————てな感じかな」

《龍遠体術……》

俺の説明が一通り終わると、皆ハクの逸脱した力に心から驚いていた。

それと同時に、改めて王に対する認識の甘さを痛感していると思う。皆の顔からそれがわかる。彼らが思っていた龍と、俺が話した龍は全てにおいて能力の幅が雲泥の差なのだ。本来なら風を操る妖とか、火を掌握した精霊とか、そんなものであるが彼は違う。操る、掌握する枠内が他と天と地ほど違うのだ。天空という名の大自然。それはもはや我々妖と精霊の扱っているいい領域を逸脱している。しかし現にいるのだ。

神に愛されたとも言っているいい彼らが。

————ピシリッ……！

皆が感傷に浸っている時だった。空気が打ち震える。響きという感覚が大気を通して身体に伝わった。俺を含め、南無組一同がその原因たる場所へ目を向ける。そして同時に言葉を失った。そこには、俺でさえ見たことがない『事象』が今まさに引き起こされようとしていたから。

そう、あいつと付き合いが長い俺でさえもまだ彼のことを知らないことがある。それは当然のことでありながら、どこか物寂しい感覚もある。けれど、そのような黄昏に浸っている時間はなかった。

あいつが、妖の王と呼ばれる揺るぎない真実がそこにあった。

※ ※ ※ ※

ルナと音夢はハクの戦闘力に大変驚いていたが、あくまで驚いていた程度である。ここからは、もはや「驚く」という言葉は意味を為さない。何故なら、今まで彼女らが考えていた『常識』が根元から覆されることになるからだった。

先ほどまで、上空は地だった。厳密に言えば、地中空間……巨大な洞窟内にいるわけだが、仮にハクがいる場所を下にするなら、空たちがいる場所は上空といえるだろう。改めて言うが、先ほどまで上空は輝きを放つ岩石が彩る地の天井だった。しかしながら、今、天を覆うのは世界に色を添えてくれるような「明」なるものではなかった。

現在、空たちを乗せた雲はウィル・ラードを滑って可能な限り遠くに離れるよう移動していた。ハクからではなく、群狼からでもない。天空に現れたものに対してだ。

「あれは、いったい……」

後ろを見ながらティアがつぶやく。その横で空が答えるが、ややその顔はひきつっている。

「俺も久しぶりに見るからはつきりとは言えないんだが……」
「だが？」

「おそらく、一気に決めるつもりなんだろう。ちょっと俺も今まで見たことがない規模での技になっているが……。できるだけ遠くに離れないとこっちがやばい。あのバカ、終わったら一発殴ってやる」

少し不満気な表情になる空であるが、その顔はちょっと嬉しそうだった。いや、嬉しいのか不満なのか、戸惑っているのか……実の

ところ本人にもよくわかっていなかった。彼にとっても初めての体験が今起こっているのだから。

天空を覆っているのは、もはや光る岩石ではない。暗黒に染まった、雲といえるのかどうかも定かではない、『闇雲』が天を覆いつくしていた。群狼の群集がハクに突撃していくが、彼の周りを風の渦が竜巻の如く守護しているため接近することは不可能だった。群狼たちにも疲労の色が見え始めるが、突撃することを決して止めない。まるで、これから起こることを予知し、決死の覚悟でそれを阻止するかのようだった。

闇闇と同化し渦巻く雲。所々から雷が足を出し、耳を塞ぎたくなるほどの轟音も頻発してくる。まるでそこから魔王が出てくるのではないかという絶空なる天がそこにあった。辺り一帯を渦のように回転する闇雲。ゆっくりと、しかし確実にその規模は大きくなっていく。そしてついに、闇の大きさが群狼の群集がひしめいている大地の面積とほぼ同じぐらいになった。それを感覚的に理解したハクは、いよいよ最終段階に入る。

「……クラス対抗試験か。色々あったが、今思うと楽しかったな。ありがとよ……また、会おうな」

天に手を掲げたまま、詠唱を唱える。

「憧憬^{しょうけい}を終結し、せして刹那にて業炎と化すは天妖の定め——
来たるべきは永劫、去るべくは天命。かくて降臨するは覇豪の轟^{はち}き。龍遠体術 捌式」

「万雷^{まんだら}」

※ ※ ※ ※ ※

雷が天から地へ落下した。しかし、それはもはや「雷」と呼べる代物ではなかった。

南無組の皆も、闇雲から発生するのは雷だと思っていた。今までルナたちが考えてきた「雷」は一本の閃が瞬速の勢いで地面に落下するものであった。一瞬だけそれは肉眼で見えて、すぐさま消えてしまう。それが「雷」だった。その「雷」がルナたちが知っている『常識』だった。

空は少し違った。彼は“龍遠体術 捌式 万雷”を知っていた。彼の知る万雷はハクのすぐ横に1メートル級の闇雲を瞬時に召還。そこから鳥や狼に見立てた雷が出現し敵を攻撃するというもの。ゆえに、きつとあのドでかい雲からたくさんの形を成した雷獣が現れるのではないかと予想していた。

音夢もまた、南無組とは少し違った。彼女は六稟の一角である『雷の精霊』とも親交がある。ゆえに彼らの力も知っているため、多少は雷系の技に詳しかった。彼女の予想としては、鋸を型とした雷槍を何百本と飛雷させるものだった。

が、二人の予想は間違っていた。出てきたのはいたってシンプルなもの。

闇雲から地面に落下した雷は……「一本の閃」ではなかった。ましてや雷獣でもなく、雷槍でもない。

大きな。巨大な。超超超巨大な、群狼全てを覆う大きさの、膨れ上がった風船のような。

今まで見たことがないぐらい馬鹿でかい【固体化された雷】だった

た！！！！！

《ええええええええええええええええええええええええ！？》

空を含め、南無組一同全員が驚愕した。何故に雷が固体化されているんだよと突っ込みたい気持ちと、そもそもあれ何！？　というごく当たり前の疑問。さらにはあれだけの規模となる雷を創り上げたハクの妖力。全てにおいて彼らは圧倒された。

時を同じくして体育館。絶句と驚愕のダブルパンチを喰らったチロロは啞然としていた。モニターが砂嵐の雑音で辛うじて見える状態であった。それでもはつきりと見える。信じられないほど巨大なあの雷を。ハクが少し前に見せた“渚”にも驚いた。同じ風を操る妖として自分の力を圧倒的なまでに凌駕している彼に。しかし、これはそれ以上だった。もうどう反応していいのか言葉を失ってしまった。

対し、石田は黙ってモニターを見ていた。彼の薄ら笑いは変わらない……けれど、目は違っていた。とてもではないが、先ほど余裕をみせていた目とは明らかに違う。予想の範囲を軽々と上回ったハクに対するその目は、一体何を意味するのか。

膨れ上がった閃光。影などかき消すほどの輝き。多くの者を魅了し、息を飲ませたそれは、地へと堂々と降臨し、眠っていた深きエネルギーを爆発させた。

帰還

静寂な体育館。そこにいるは二人。先ほどまで見ていたモニターは石田が撤去した。

二人の目の前には直径5メートルの『陣』が展開しており、そこから僅かな光が漏れている。その光は徐々に輝きを増していき、最後は目をつぶってしまうほどの眩しさを放つ。

受付統括、八木チロロは陣の光に一度は目を閉じるものの、輝きが収まったあとは食い入るように視線を戻す。そこには、南無組の生徒七人が多少ボロボロになりながらも皆元気に立っていた。今の状況にやや混乱しているものの、周りを見渡せばそこは見覚えのある体育館。自分たちが無事帰ってきたことを確認すると、七人全員が安堵の表情を浮かべた。

※ ※ ※ ※ ※

“万雷”で数千はあろう群狼を全て葬った。おかげで辺り一面、真っ黒な焼け野原だったのだが……ふと、自分が立っていた場所から陣が展開し始めた。空たちの方を見ると彼らのところにも同じような陣がある。どうやら、この世界ともようやくお別れのようにだ……。

なんだか長かったような短かったような、そんな気がしながらほっと一息つくと、すぐ目の前が体育館の景色へと変わる。あまりの早さに驚き半分、これまでのことを考えればこれぐらい造作もないのだろうなと思えたのが半分だった。

南無組の皆からは安堵の表情が伺える。「やっと終わった」とい

う顔だ。音夢とルカは手を取り合い飛び跳ねながら喜びを分かち合っている。それを見ていたティアも二人から手を取られ半ば強引に一緒になって飛び跳ねる。最初は遠慮していたティアも、次第に表情が柔らかくなっていき、なんというかほっこりしている。

ヴァンは「あうあう」と言いながら床に横たわり、そこを誠から「お前何もしてなえだろ」と突っ込みの蹴りを見舞われていた。いつも通りながらこの二人のやりとりは面白いな。当たり前のように蹴られるヴァンに蹴る誠。それを笑いながらも一切止めようとしないう空。俺含め、七人全員が無事戻ってこれでよかったと彼らを見ながら心底思った。ああ、本当によかった。

「おっかえりい〜！」

「おかえりなさい、南無組の皆さん」

すると、後ろから声がした。振り返ると一人の男と一人の女が立っていた。

男の方はマイクを持って俺たちに「いってらっしゃい〜」と異空間に送り出した張本人だ。もう一人は誰だろうか。見たことがない女性だ。歳はまだ若い方だが、ちよっと若作り……している？ 黄色のメガネをしていて、髪を後ろで丁寧にまとめている。う〜ん、あまり歳関係については考えないほうがよさそうだ。何故かそんな気がした。

しかし、どことなく威厳や風格があり、何かしらの『長』を任せられていそうな気がした。あくまで気がした程度だから、強くは言えないが。そんな失礼な(?) ことを考えていると、誠が二人に質問を投げかける。

「誰だお前ら？」

「紹介が遅れたわね。私は受付統括長、八木チロロです。あなたた

ちの生活と勉学の手続きを主に担当しています。これからよろしくね」

「八木ってことは……えと、【鎌鼬】の一族の方ですか？」

「そうよ水の精霊さん。私の一族は風の精霊とも交流があるから六稟であるあなたも知ってたのかしら？」

「あ、はい。そうです」

「光栄ね」

ニコリと笑顔で返すチロロさんに、音夢は顔が赤くなりながら下を向く。左目の眼帯をつんつんと触りながら恥ずかしそうにしているが、ちよつと嬉しそうだ。

六稟の一角である音夢は他の六稟精霊とも交流があるらしく、それに派生する妖にも一通りの知識はあるようだ。ただ、あまり主張しない性格なためかその知識を披露する場はなかなかなさそうであるが。

対してチロロさんは音夢を気に入ったのか、そのまま水の精霊について質問し始めた。彼女にとっても音夢には興味があるのだろう、投げかける言葉に優しさが感じられる。そんなやりとりを後ろからルカとティアが参加し、女性四人組での会話に花が咲いている。

「いやー、やっぱ女子っていいね。いるだけで癒されるわー」

「で、お前も誰だよ？ 確かマイク持って俺らに演説していたやつだよな？ 俺らの担任か？」

「大正解！ 何を隠そう、俺こそ君らの担任——」

「豪火灼炎 —— 炎なる蛇」
「え？」

紅色の円を描き、そこに槍を突き刺す。炎を纏いし蛇の出来上がりである。

誠が瞬時に召還した炎蛇が唸りながら石田先生に突っ込んだ。ゼ

イゼイとしながら間一髪でそれをかわした学年主任が駆け足でやって来る。

「死ぬかと思ったんですけど!？」

「あたぼうよ。俺らをあんなわけわからんところに飛ばしたんだ。これぐらい当然だろ？」

「そうですね、誠くん。受付統括として許可します。もう一発お見舞いしてもかまいませんよ」

「ああ、もうやった」

「うえ？」

どこからそんな声を出したのか、なんとも暢気な声を石田主任が呟くと、後ろからのそりと炎蛇が顔を出す。どうやら、地面・空中どこでも円さえ描くことが出来れば発動条件は満たされるようだ。いつの間にやったか知らないが誠はすでに石田健次郎の後ろにある地面に円を描いていた。

改めて、彼の底意地の悪さと戦闘力の高さを確認できた。

その後、炎蛇は彼を再三追い詰めるが全て避けたことにより結局のところ、石田は無傷のままであった。息はものすごく荒いが。それに満足したのか、誠は炎蛇を引っ込める。わざわざ爆発させなくても彼の意思のままに消すこともできるようだ。ただ、消す前に「全て避けやがるとはな……」と多少驚いていた誠がいたことは俺以外見ていない。汗だくのまま石田先生が俺たちに言う。

「はあ……はあ。えと、ですね。皆さんに連絡事項があります」

「んあ？ 何だよこら」

「今日の学園行事は……ぜえ、ぜえ。これにて終了だよ。各自クラスの友達との交流も出来たと思う。これを機会にもっと仲良くなっ
てほしい……はあはあ。です」

そうして、長くもあり短くもあった最初の学年行事が幕を閉じた。

※ ※ ※ ※ ※

只今、私こと水月 音夢は女子寮にいます。あれから男子と女子で解散し、寮に戻った私たちは休憩や夕食をとった後、現在ゆっくりとくつろいでいる……はずだったのですが。

何故か、夕食の後はまた私の部屋に集合ということになりました。何でも、反省会らしいです。

「それで、今日あったクラス対抗試験での我々の戦果だが……」

「はい。見事に『何もやらなかった』ですね」

「で、でも、ルカちゃんとティアさんは一生懸命やってたよ！ 皆が不安にならないように気を配ったりして」

「最後のハクが戦う際、私はハクを信用しなかった……」

「私です。さらに言えばハク様を援護する間もなく終わってしまいました」

はあ、と一緒にため息をつく姫君さん。昨日と今日での二人のテンションの違いにこっちまで暗くなってしまう。ただまあ、信じるべき想い人を信じれず、さらには自分が今回何の成果も出せていなかったのなら、落ち込んでも仕方ないのかもしれない。

……あれ？　そういえば、私、何かしたっけ？

でっかい蛇が来たときはビクビク震えて、床が消えた時は気絶して、最後の群狼では空くんの後ろに隠れてて……。もしかして、ほとんどやっていない自分に気づきます。

「はあああ」

「どうしたの音夢？ 深いため息なんかついちゃって」

「そうだぞ、ため息は幸せを逃がすと言う。あまりしないほうがよいぞ」

それをあなた方が言いますか。自分のことになるとホント、ダメなんだから。

最初は落ち込んでいた二人だったけど、次に名誉挽回すればいいと鼓舞し合うと、さっさと反省会を終了して今日の感想を楽しく話し出した。私はというと、思い出した自分の不祥事に痛く沈んでおります。どうしてこうなんだろ、私。この眼帯を外せばまだ何とかなったかもしれないのに。

……今更悩んでも、後の祭りだよね。気持ち切り替え……れないよお。はぁ。

気づけば二人は天空の床が消えた際、ルカちゃんがハクさんに抱っこされていたことについて揉めだしていました。ルカちゃんに対して積極的に攻める吸血鬼のお嬢様に対し、体育館でハクさんの腕に抱きついたことを盾に防戦する人魚のお嬢様。

何だかなあ、ねえ。ここに空くんがいれば絶対そっちにいつてるな、私。

このまま私は二人の毎度毎度の喧嘩に付き合わないといけないのだろうか。それは嫌だなあ、二人には申し訳ないけど。さすがに毎日がこれだと気が滅入っちゃうよ。

今更だけど、もう無理だけどさ。新しい生徒とか、入ってこないかなあ。

そうですね、なんかこう――――

空から女の子が降ってきたり……して。

なんてね。そんなわけないか！ あはは、現実逃避もほどほどにしないかね。なんでこんなこと考えちゃったんだろ、不思議だなあ。起こるわけないのにね。

窓を見れば綺麗な星空が広がっています。本当に今日は色々なことがあった。すごく疲れてしまいました。ゆっくり寝て、明日に備えないとね。そろそろ二人の喧嘩も止めて、暖かい飲み物でも一緒に飲もうかな。

一日大変だったけど、とても充実した一日でした。

ピシ、ピシシィ—————！

その時はまだ、私たちは知りませんでした。

悠久なる空から、亀裂なる何かが訪れようとしていたことを——

降ってきた少女

それは少し過去のお話……。ある、男の子がいました。

まだ小さく、毎日泣いている男の子がいました。いつも一人ぼっちな、男の子がいました。

その子は身体も弱く、身なりも華奢なため、いじめっ子には格好のターゲット。しかもただ単に外見だけで彼らのターゲットにされていたのではなく、その理由としては男の子の一族が原因でした。

……いえ、もしかすると、原因のほとんどがそれだったのかもしれない。

「おい！ お前本当に——の精霊なのかよ！」

「うっそだぁ！ 全然見えないぞ、嘘つきに決まってる！」

「そうだそうだ！」

男の子は泣いていました。まるでそれが当たり前のように、目から大量の涙を流していました。

自分が何故こんな目にあわなければならないのか。毎日毎日必死で考えてもそれはわからず、いつもいつもおじいちゃんのところへ行っていました。彼にとって、おじいちゃんは唯一の肉親なのです。

そんな男の子を、おじいちゃんは優しく抱きしめてくれました。

それは彼にとって、何よりも嬉しく、また心温まる場所でした。

おじいちゃんは問います。お前はいつも泣いていると。そんなにワシらの一族が嫌なのかと。

男の子は答えます。一族が嫌とかそういうものじゃないと。あの一族の血をひいているはずなのに、自分はその『力』を一切解放できていない。ただ無駄に生きていくだけの、大層な肩書きがくっついているだけの精霊に過ぎないのだと。

それを聞いたおじいちゃんは困ります。とても困ります。男の子が言っていることは本当なのです。彼らの一族ではむしろそれが当たり前。解放できる者の方がごくわずか……。しかも、その解放条件は非常に困難なものなのです。おじいちゃんは、黙っていつものように男の子を抱きしめることしか出来ません。

おじいちゃんは知っています。男の子が世界で一番優しい心をもっていることを。誰にも負けない美しく透き通る心の持ち主であることを。しかし、男の子は泣き続けます。自分が一族の血縁者というだけでいじめられる毎日が、永遠に続くのではないかと思ってしまう毎日が、苦痛で仕方ないのです。それを見ていたおじいちゃんは、ずっと言おうか言おうまいか迷っていましたが、ついに彼にある言葉を託す決意をします。

「ヴァンや、一つ……お前にプレゼントがある」

「プレ、ゼント？」

「そうじゃ、お主にだけ、特別に教えてあげるわい。これはとても大切なもので、お主にとって誰よりも価値のあるものじゃよ。だから、困った時、辛くなった時はの——」

この歌を歌うがよい。それがきつと……いや、必ずお主の『力』となってくれる。

そしてこの歌と、お主が真の窮地に立たされた時、その『力』はお主を開花させてくれるだろう。

♪♪

隠せない君を探している それはずっと側にいるのに
微笑んでくれるその顔は ずっと僕を支えてくれる
夢の中で溺れたとしても あなたはきつと助けてくれる

だから僕は 必ず君を …… ♪〜♪

「ここから先が思い出せないんだよなあ」

青年は夜空を見ながらそつと呟いた。それは少し過去のお話。成長した青年にとって、少し恥ずかしくもあり、寂しくもある、そんな過去。

青年はもう一度歌う。思い出すように、思い出せるように。きっとその続きが、いつか必ず蘇ることを願いながら……。

※ ※ ※ ※ ※

最初の学園行事があつてから次の日。結構疲れていたのか、夕食と風呂に入つた後は特にすることもなく就寝した。気持ちがいいベツドの上でゆっくりと身体の疲れを癒すことができた。

そして現在、俺たちは全力で学園に向かっている。もっと言えば走っている。

それもそのはず、2日前に誠がヴァンにした飲酒騒動で彼は男子寮長ことマダゲスカルに約一週間20分間のハグを強制されることになったのだ。てっきり昨日だけだと思っていたが実は一週間だったことに驚愕した誠は力の限りそれから逃げようとするが、尋常ではない身のこなしの寮長に無事捕獲。それでも逃げようとあの手この手で脱出する誠を愛情をもってゲツチュするオカマ。

そんなこともあって、結構ギリギリな時間帯になってしまった。愚痴を言う誠を空が慰めている。

「あの腐れオカマ野郎！ いつか絶対ぶつつぶす！」

「それは無理だと思うんさ、誠。あの身体能力……只者じゃないぜ」

それでも誠は友達だ。彼一人残して学園に行くことはできない。彼もそれを感謝しているのか、顔を下に向けながら俺たちに「ありがとよ」と聞こえるか聞こえないかぐらいの小さな声で述べた。その言葉に俺たち三人は黙って、しかし笑顔で返す。

そろそろ学園も近い。時間も間に合いそうだ。朝から大変ではあったが結果よければ全て良しという。誠には申し訳ないのだが。それはそれとして、今日は学園で何があるのだろうか……。

ちよっと期待してしまう自分がいた。

ピシ、ピシピシィ———！

「……ん？」

「おら、さっさと行くぜ。オカマ野郎にも腹が立つが、あのへらへラ教師に遅刻なんぞ言われる方がその何百倍も俺は嫌だからな」

「って主犯のお前が言うなさ。にしてもハク、何ぼおっと突っ立つてんのさ？」

「ん、ああ、いや……変な音が聞こえなかったか？」

「「変な音？」」

空と誠が同時に言っただけを見渡す。後ろの方からヴァンが肩で息をしながら必死に走ってきている以外、特に目新しいものはない。学園の門前に立っている俺たちの周りにはもう誰もいないのだ。皆すでに学園内に入っている。

それでもさっき何か変な音が聞こえた気がした。なんというか、こう……亀裂音のような、地割れの音のような。あまり良い予感のしない音がしたはずだった。しかし再度辺りを見渡しても、そのような場所はおろかさっきの音も聞こえない。ヴァンが到着したのと同時、誠が言う。

「気のせいじゃね？」

「んゝ、そうかもしれない。しかし確かに聞こえたんだが……」

「ぜえ、ぜえ。ど、どうしたの皆？　もしかして、僕を待ってくれたとか」

「そいじゃ行くぜ。遅刻間近だ」

「うえ！？　ちょ、ちょっと待って！」

そうやって再び走ろうとする俺らを懇願の表情で見るヴァン。そんな彼を知ったことかと突き進もうとする誠。さすがに忍びないのか、空が空中に浮かぶ雲をチョココンと出し、ヴァンに乗れと合図する。

天にも昇る顔になったヴァンは、残りの力を振り絞り宙に浮かぶ雲へ乗ろうと小走りした。

その時だった。

ピシ、ピシピシピシピシ——！！　　ビシイ、バキイイイイイイイ！！

《！？！！？》

俺を含め、四人全員が一時停止する。その何とも言えぬ、炸裂音の方へすぐさま目を向けた。

……正直、ものすごく驚いた。上空の、雲がある高さぐらいのところで……つまり、何もない空中で『ビビ』が割れていた。しかもそれは次第に大きく、おぞましく割れていき、まるでそこにガラスがあるかのようなものだった。

啞然としながら俺たちは見る。さすがにこれは予想外すぎて、どう対応していいものか困惑するしかない。てっきり建物が少し壊れ始めているものかぐらいにしか思っていなかった。だからそれがあまりにも意外な場所で、かつ意外すぎる規模での事象だったから、もはや言葉にならなかった俺たちを誰が笑えよう。

一応驚いた、という衝撃は時間が数秒たてば頭が『喝!』をいれて(正確には意識が戻る)今の状況を再度冷静に把握し始める。

……いや、冷静に見てもそれは変わらなかった。どこからどう見てもヒビが割れていた。そのヒビが一定の大きさになると、ヒビは欠け始め、パラパラと残骸が崩れゆく。その中は真っ黒であり、地獄の入り口かと思ってしまうほどだ。

「……あ、の。僕、先生方に知らせてきたほうがいいかな……」

「知らせてどうにかなるんかよヘタレ大魔神。俺らと同じ反応するだけだぜ」

「ででで、でもあれ、どうするの!?!」

「知るか。ったく三日連続でわけわからん物事に付き合わされる身にもなれってんだ」

誠とヴァンがそんなやりとりをしながらも、二人ともヒビが割れている場所から目を離さない。

それは俺と空も同様で、とりあえず今はあの不可解極まりない事象を見ているしかない。ヒビから割れた欠片は星屑のように煌きながら落ちていく。割れた場所は相変わらず真っ黒であった……?ん?

「空」

「なんだ、ハク」

「願わくば、俺が今から言う言葉を否定してくれ」

「いやあ、それは無理だろうな」

真っ暗なはずだ。というか、よくわからんが相場的にはああいう場所の奥は真っ暗と決まっているはずだ。光ないのだろうし、真っ黒の方が雰囲気であるしな。異論はない。黒であるべきだ、うん。

ただ、その黒であるべきヒビ割れの中から、何やら『黒色に染ま
っていない』ものが見えてくる。それはとても小さいものの、徐々
に大きく、形が鮮明に見えてくる。

口をあんぐり開けるヴァン。「はあ？」といかがわし気に見つめ
る誠。苦笑しながらも頭をかく空。そして自分の目が正常なのか再
確認する俺。

ゆっくりと……『それ』は見えてくる。確実に、鮮明に。

白い着物のようなものがやけに目立つ。パタパタと袖が空気の抵
抗を受けながら大気を撫でている。まだよく見えないが、目視でき
るのはそれぐらいだ。ただ、これだけはわかる。

バッキィィィン———！

暗闇の、暗黒なる世界からやってきた『それ』は随分とこちらの
予想の斜め上をいっていた。

光に照らされ、身体全体が露となる。四人全員が目大にして、
口を開け、一步後ずさりをし、がっちりと眼前に写る光景を確認し
た。

ヒビがまるで砂金の如き美しさを放つ。空を舞う砂金は、ただ宙
を浮遊するだけでなく『それ』の印象をより強く、より美麗に際立
たせる。朝の優しい光も手伝って、神々しいとも感じ取れた。

運命とは己が「命」を「運ぶ」と書く。ではその命は、誰が運ぶ
のだろうか。

神か？ 自分か？ はたまた第三者か。もしかすると、大切な
はそこではないのかもしれない。

真に意味するは、そのような運命と感^じる事象に巡^り合^つた時、
どう対応するか、である。

俺はどうなのだろう。『彼女』はどうなのだろう。これを運命と呼ぶのだろうか、それとも試練と呼ぶのだろうか。それもまた、感じ取^つた者^しだ^いと言^うべきだ。なにはともあれ、また新たな事象が目^めの前^{まへ}に現^あれたのだ。

天を舞^まう少女。天を見上^{みあ}げる男^おども。全く絵にはなりそうもないが……。まあいいか。

空から少女が降^ふつてきた。

少女の正体

朝日に照らされた廊下。その道を揚々とスキップしながら進む男。名を、石田 健次郎。学年主任であり、南無組担任でもある。今日からいよいよ本格的な学園生活の始まりだ。昨日はあの後チロロから小一時間ほど説教を受け、さらに帰りぎわ階段から転げ落ちた。おまけに運悪くそこを他の女子に見られ……。あはは、と苦笑いするものの、女子特有のあの何とも言い難い視線ビームを受けたのであった。

一体自分が何をしたというのだ。ただ単に南無組の力がみたいからちよつと過酷なステージに送り込んだだけではないか。そうだ、自分は何もしていない。どこから見ても、生徒から常に尊敬されるであろう完璧な教師ではないか！

「……なんてな」

と、適当な言葉を見繕い、相手を誤魔化す。それが石田健次郎。ヘラヘラと、おなじみの薄ら笑いを浮かべながら石田は教室の前に立つ。なんの因果か、彼らはこの学園に集まった。ならば私は見届けよう。その過程を、その先を……。誰も悟れぬ、不気味な感情を胸に抱きながら、高らかに石田は教室のドアを開いた。

「はいはい、皆、おっはよう！」

誰もいなかった。

「……」

※ ※ ※ ※ ※

あれから数十分後、女子三人含め、南無組全員が現在保健室にいる。

ベッドで横たわるは一人の少女。それをぐるりと取り囲む俺たち。容体を見ているのは保健室の先生である癒水 絹衣いやしみす きぬいさんだ。紫色の髪を両端で結びツインテールにしている。顔は童顔なのだが、身長が175センチと、ほぼ俺と同じだ。女性にしてはこの高さは相当なものだと思う。前髪の左にカチューシャを付けており、なんだか俺たちと同じ生徒のようだ。違うのは、白衣を着ていることぐらいか。

俺たちが少女を保健室に運んだ時「あらあら、遅れて入学した子？」と言った際はかなり驚いたものだ。後から知ることになるが、彼女は生徒全員の名前と顔を覚えていたそう。彼女いわく、別に普通らしい。まだ入学して3日しかたっていない……というのに。素晴らしい教師だと思う。この方が南無組担任ならよかったのに、とクラス全員が思ったことは言わないでおこう。

「それで、空から降ってきたこの子を無事助けてこちらに運んできたってことでいいのね？」

「はい、そうです癒水先生」

「絹衣でいいわよ、たいして年齢違わないしね。そうでしょ、龍のご子様？」

「あ、いえ、さすがにそれは……」

大人の女性というべきだろう。余裕があり、おちつきもある。母さんとも違う、不思議な感じだ。

そんなことを考えていると、ルカとティアが賞賛しながら俺たちに近づいてくる。それに答える誠と空、そしてヴァン。俺は癒水先生の横にいるため、その会話を聞く側となる。

「それにしても皆さんすごいですね。落ちてきた女の子を傷一つつけずに助けるなんて！」

「うむ、いきなりそんな場面に出くわせば多少、動揺するものだ。素晴らしい」

「ま、ままままあな〜！ 当然だろ、なあ空？」

「うえ！？ と、当然じゃないか！ ねえヴァン？」

「僕、落とされたん」

「「うわあああああああ！！！」」

慌てて二人がヴァンの口を塞ぐ。その様子を不思議そうに見るルカとティア。

「落とされ……なんですか？」

「いやいや、何でもないさ！ な、誠！」

「おうとも！ 男四人、一致団結して彼女を救ったぜ！」

言えない。あの時、少女が空から降ってきた時。

誠が自分の槍でヴァンの服を背中から通し、ヴァンを勢いよく少女目掛けて投げようとした。誠いわく、空中で無事キャッチしてそのまま少女の下敷きになれと命令していた。無茶苦茶だと抗議するヴァンに対し、全力でやれやれと応援する空。俺が止めようとする間もなく、誠はヴァンをフルスイングして投げ飛ばす……はずだった。

が、投げ飛ばす前にヴァンはスルリと槍から抜け、そのまま飛んでいき、横にあった橋の下にある湖へ見事に落下していった。「あああああ」と悲しい叫び声を出しながら落ちていくヴァン。あまりの予想外さに、誠と空は「おお〜」とわけわからん感想を述べていたので、空にさっさと助けて来いと命令して俺は少女の方へ向か

った。

無事、なんとか少女もヴァンも救出し事なきをえるが、何故か少女より散々な姿のヴァンが横にいた。

結局のところ、「少女を助けた」のは俺だけである。二人の様子を怪訝そうにみる姫君ら。

「何か怪しいですね」

「そうだな……」

「そんなことないさ！ 男の友情を舐めちゃいけないよ？」

「おうよ！ まさに俺の作戦通りともいうべき結果になったぜ？」

「何故疑問形で返すのだ？」

そんなこんなで最終的に空と誠の不祥事がヴァンの口から明かされ、ルカとティアから説教を受ける男二名。その様子をちよつと嬉しそうに見ているヴァンに、どう反応しているのか戸惑いながら少し笑っている音夢。当の本人らは苦虫を潰したような表情で姫君二名の説教に耐えていた。

その後、癒水先生（やはり名前で呼ぶのは難しい……）が連絡していたのか、受付統括長、八木 チロロさんが到着する。八木さんは癒水先生の先輩らしく、二人の間には厚い信頼関係が築かれていた。

すぐさま状況を把握した八木さんは石田に連絡。何でも、このような非常時に一番役に立つのは何とあの男らしい。驚く南無組に苦笑しながら「気持ちわかるわ」と言う彼女がいた。

「それで、絹衣。彼女はずっと眠ったままなのかしら？」

「はい、チロロ先輩。一応【枕】も変えてますよ」

「彼女の容態が変わったところは？」

「特にありませんでした。ですから、今は安眠できる枕の“癒織”ゆせん」

を使用しております」

「うん、問題ないわ。さすがは【枕返し】一族棟梁の愛娘ね。完璧よ」

「それほどでもありませんよ」

当たり前のような顔をしながらも、先輩に褒められて少し嬉しそうな表情を浮かべる癒水先生。

幼い外見もあってか、どうも先輩と後輩というよりも、親子……！？ 何だ、殺気と悪寒が……！

「何かあったかしらあ、ハクくん？」

「い、いえ！ 別に！」

千里眼でももっているのか彼女は……。恐ろしい。やはり、彼女に対して年齢関係のことは止めておこう。例えばそれが『考え事』であつてもだ。命がいくつあつても足りない。

それはそれとして、そうか、癒水先生は【枕返し】の妖だったのか。確かに、保健を担当する者としてピッタリかもしれない。

<『妖』用語辞典>

【枕返し】

四国の妖。人間が寝て起きると、たまに枕が足の方へあるときがある。

寝相が悪いだけなのだが、昔の人はこれを妖怪の仕業だと恐れた。枕返しの発祥はこれからきている。枕返しの伝承は日本全国に存在し、その姿も坊主であつたり少年であつたり、はたまた美女であつたりと様々である。

昔の人は夢を見ているときは魂が身体から抜け出ていると信じていた。これは彼らにとってはもはや『常識』であり、疑うことをす

る者はほとんどいなかった。そしてその夢を見ないように、すなわち魂が身体から抜け出ないようにする道具とされていたのが枕だったのである。

他国では枕など所詮寝るための道具に過ぎないが、日本では全く違った。今もなおその根源たる『ものには魂が宿る。ゆえに大切に扱うべき』という考えは我々の心に生きている。今一度周りの『ものの』に感謝するのもよいものだろう。

「【枕返し】が作る枕はどれも最高級の品で、滅多に手に入らないと評判ですよ」

「あら嬉しい。龍の方にそう言ってもらえるとなんだか嬉しいわあ」

そうだ。【枕返し】は戦闘能力が一切ない。しかし、彼らが作り出す枕はただの就寝道具ではない。

病気で苦しむ者が彼らの枕で寝れば、時おり奇跡としか言いようのない事が起こり、病気が治る場合もあるという。また、傷を負った者が彼らの枕で寝れば、普通では考えられない速度で傷が癒えるという。なんとも不思議な力だ。

ただ単に『枕』しか扱わない一族であるが、彼らはそれに誇りをもち、並みならぬ想いを宿している。母さんがどうにかして彼らの枕が欲しいとあの手この手で頑張ってみたものの、結局彼らの枕は手に入らなかった。もしかしたら、彼女に頼めばなんとかなるかもしれない。しかし、母さんのことだ。もし送ったらお札にと龍遠家総力を挙げて盛大に祝宴を開くだろう。さすがにそれは癒水先生に失礼だ。……卒業する時に頼むのが一番だな。

「はえ、はえ……。やっと見つけた。皆ここにいたのね」

保健室のドアが開き、かなり疲労気味な石田教師が入ってきた。そういえば、教室には誰もいなかったはずだ。つまり彼は無人の教室に行ったということか。……彼の性格上、きっと声高らかに教室のドアを開けたに違いない。そして出迎えるは一人もない教室。ちよつと申し訳ない気持ちになった。

その後、チロロさん（チロロと呼べと命令された）が今朝起こった出来事を石田に話した。

てつきり笑うかと思っていたが本人は黙ってそれを聞いていた。時々頷きながら、ベッドで寝ている少女を見て。チロロさんの話がひと段落すると、石田からいくつかの質問を受けた。ヒビ割れはどのような形をしていたか。ヒビが割れた際に見えた中はどんなものであったか。そして、一番最後に受けた質問が……。

「誰が最初に気づいたのかな？ そのヒビ割れに」

「俺だが」

「そう、ハクが最初に気づいたんだね」

「ああ。……それが何か意味あることなのか？」

いやいや、別に。と適当にはぐらかしながら石田はベッドの方へ歩いていく。それはまるで俺から避けるようで、彼女のことに關して、俺に意味があることのように感じた。

それが何の意味かはわからないが。彼のこのどこか意味深のある、けど抜けている素振りは一体何なのだろうか。素でやっているのなら仕方ないが、もしこれが全て計算のうちにやっていることだとしたら。ただの適当第一な教師ではないことは確かである。

「それで、彼女が一体何故ヒビ割れの中から出てきたかわかりますか？ 石田主任？」

「んー、さすがにそれはわからないよチロロちゃん。けどまあ……」

そう言って石田は少女の顔に手を置く。うゝん、と唸りながら目をつぶるが静かにそれは大きくなっていく。彼の妖力だ。石田から発せられる妖気がふつふつと少女と石田の身体を巡りゆく。しかもそれは周りの窓が揺れ動くほどの妖力である。

「彼女が『何なのか』ぐらいだったらわかるよお」

「!? 本当ですか？ では、彼女は一体――」

パチクリ。

チロロさんが少女が何なのか聞こうとした時だった。パチツと目が開く。ゆっくりとではなく、勢いよく少女の目は開眼された。その様子に保健室にいた全員が気づき、チロロさんも言葉を止める。

「気がついた!」と南無組の皆が一斉に喜んだ。ずっと意識がなかったため、いささか不安ではあったが……。よかった、無事目が覚めて。チロロさんと癒水先生が少女の容体を確認しようところらにやって来る。しかし、その動きは突如として止まることになる。それは俺たちも例外ではなかった。何故なら……。

ヒュッ――――

石田の前に一つの紙が宙に浮かぶ。それは紙であり、紙でない代物。【封^{ふた}】であった。

たった一枚、それが石田の前にある。ただの紙なら問題ない。しかしその封は違った。文字が書かれている。一字の文字であるが、それが何を意味するかはすぐさまわかった。そして同時に、その文字を見た全員が凍りつく。

封を出したのは少女。今まで眠っていた、純黒の髪をなびかせる

少女。

眼は開眼した直後とは違い、揺るぎない闘志が宿っていた。まるで炎が灯っているような。

彼女がした動作はベッドから目にも留まらぬ速さで起き上がり石田の前に封を浮かべる。

それだけだった。それだけだったのだ。たったそれだけの動作で

「爆符」

耳を塞ぎたく爆発音を轟かせながら石田が後方へかっとなだ！！！！

《なっ！？》

驚き、焦り、不安。理解できない眼前の事象に戸惑う俺たち。彼女が出した封に刻まれし文字は「爆」。文字通り、爆発を呼び起こす紙であった。

今この場で起こった出来事を誰一人理解できなかった。何故彼女が石田を攻撃したのか。何故彼女は封を持っているのか。そして何故彼女から……一切の妖力が感じないのか！？

「ててて……。効いたよお。さすがと言うべきかな」

「石田主任！ ご無事ですか！」

「あいあゝい、大丈夫だよチロロちゃん。それじゃ、皆に紹介するね——」

あれだけの爆発をもろに受けたのにも関わらず石田は平気な顔をして立ち上がる。腹からはモクモクと煙がたっているが他はこれといった外傷はない。どんな身体してるんだ彼は。

しかし、それに驚く暇はなかった。彼から告げられる、驚愕の言葉が今の驚きを遥かに凌駕したからだ。その言葉とは……！

「彼女、【人間】だよ」

《……………。にんげえんんんんん?!?!?!?》

一人の少女の出現により、俺たちの学園は大きく揺れることになる。

それはこの学園が創立して以来、最大にして最悪にして最高の……ものであるが、俺たちはまだ知らない。今はただ、目の前の少女に啞然とするしかないのだろう。

この世界に、人間が舞い降りた。

前兆……

空から少女が降ってきて。あれから一週間がたった。

いきなり石田教師を吹き飛ばした時には驚いたものだが、今ではあのような騒動はなく、平和に学園生活を送っている。彼女のその後について……といっても一週間でしかないが一通り説明しておく。

まず、少女はこの学園の生徒ということになった。クラスは南無組。彼女が人間ということを知っているのは南無組と石田、チロロさんに癒水先生。それだけだ。生徒はおろか、他の先生でさえもこのことは知らない。人間がこの世界にいるということは結構大変なことだからだ。未だに人間を毛嫌いしている妖や精霊もいる。てつきり俺たちはそう思っていたが、石田は違うことを言った。

「おそらく、この子は『神隠し』にあったはずだ」

神隠しとは下界にいる人間が突如として消える現象をいう。人間ではない俺たちにとってそれはもはや死語であり、使う機会はまずない。ゆえに石田から説明されるまでその言葉自体、知らなかった。けれど、今説明した神隠しは人間側にとっての解釈に過ぎない。つまり、神隠しは本来下界にいた我々の祖先が人間をこちら側に招き、結果としてあちら側には「消えた」とされるものだ。我々に魅入られた者。または連れ去られた者。はたまた迷い込んだ者。様々であるが、結果として人間があちら側から突如として消えることは同じである。

しかしながら、今回は違う。今、我々の世界と下界は断絶している。ゆえに、神隠しが起こりうることはまずないはずだ。けれど現

に人間の少女がこの世界にやってきた……。考えられることは一つしかない」と石田は言った。

「何かしらの原因があつて、彼女がこの世界にきたんだろうね」

「原因って……偶然じゃないのか？」

「結果には必ず原因があるんだよ。逆も然りさ。彼女がこの世界に來た以上、必ず何かあるはずだ」

石田が言うには、神隠しは実は今回が初めてではないという。過去にもそれと似たような事象が確認されており、非常に酷似しているため神隠しであると石田は断定した。しかし、問題はそこではなかった。石田にとって、神隠しうんぬんが危険視する必要はないという。では、何が問題なのか。

「これはまだ断言できるものではないのだけれど……今まで神隠しがあつた際、ほぼ間違いなく周囲で異変が確認されている……はずなんだ」

「はず、というと？」

「何かしらの痕跡はあるんだけど、それを確認できる相手がいない。もしくは行方はわからないことがほとんどなんだよ」

それが石田にとって最も注意すべき問題だった。

今まで、人間が降り立った。という事象が確認されたことはあるが、それから数日して、ほぼ確実にその事象が発生した場所を周辺に不可思議な現象が起こったそう。しかも、調査や原因解明に訪れた者が行っても、対象の足取りが全くつかめずに終わるらしい。

何とも不思議であり、不気味でもある話だ。けれどそれは事実だと石田は言った。

「君たちには伝えておきたい。近々、何かしらの事象が発生する。」

それは間違いないだろう。そのことを各自記憶に留めておいてほしい。頼れる生徒は、君たちしかない」

いつもの彼とは違う、芯のある教師がそこにいた。

「多分だけどね」

前言撤回。

※ ※ ※ ※ ※

「お、ハクではないか。今日も銀髪が目立つのお」

「おはよう小鳥。もう学園には慣れたか？」

「無論じゃ。小鳥は今日も元気じゃよ！」

安倍^{あべの} 小鳥^{こどり}。それが彼女の名前だ。

ショートで純黒の髪。身長は150センチと大変小さい。目はクリリッとしていてお人形のようなのである。巫女服を愛用しており、こちらの世界に来た時も着用していた。年齢十三歳と、外見同様、精神年齢もまだ幼い。ただ、何故か話し方が爺くさいところがあって、結構特徴のある少女だ。

とても活発な子で、目を離せば一人でズンズン進んでいく。自然とお目付け役となった音夢が毎日彼女のお守りを頑張っている。歳相応な発言や行動もあるが、時おり皆を驚かせる鋭い一言も放つため侮れない。俺たちの中では最年少ながら、存在感は自称神である誠といい勝負かもしれない。

今はもうこの世界に慣れてしまった彼女であるが（一週間で慣れてしまったことにそもそも驚くべきなのだが）、最初は大変だった。

無理もない。

小鳥が目覚めた際、彼女が石田を攻撃した原因はよくよく考えれば当たり前であった。起きたら目の前に見知らぬ男がいたのだ。しかも上半身スーツ、下半身ジャージだ。顔もしまりがなく、何を考えているのか皆目検討つかない。見てて楽しい思いをすることはなく、疑心暗鬼に陥ってしまいそうだったのだ……と、彼女が言っていた。

《あゝ、なら仕方ない》

それを聞いた皆の言葉である。わりと本気で落ち込んでいる石田がいた。

彼女は最初、石田を吹き飛ばした後は次に近くにいた俺に狙いを定めようとしたが、それを癒水先生が「だゝめ」と言って抱きしめる。いきなりの出来事に驚いたのか、癒水先生の豊満なバストで息ができないのか、ジタバタと動いていた身体が徐々に固まっていく……。ギリギリのところ解放され、呼吸することに全力で集中していた。

さらにそこを半ば強引にチロロさんが小鳥を寝かせた。最初は反抗していた小鳥だったが、【枕返し】お抱えの専門枕“癒織”の力により、時間をかけて落ち着きを取り戻していく。そして、ゆっくりとだが彼女と対話できるところまでこぎつけた。

「何者じゃ、お主らは……」

毛布の下から頭をひょっこり出しながら話す少女。とても可愛らしく、可憐な子だ。改めてみると、その愛らしさが彼女の動作一つ一つから感じられ、男であっても素直に「かわいい」と思ってしまう。

ルカ、ティア、音夢の三人がうずうずしている。おそらく、思い切り抱きしめたい衝動に駆られているのだが理性がそれを全力でくい止めている最中なのだろう。……ぷるぷるしだした。大丈夫かこの三人。そんな三人をよそに、チロロさんが小鳥に質問を開始する。

「あなたについて教えてほしいことがあるの」

そこから、少女がこちらにくるまでの経緯と、彼女が何者なのかがあった。

小鳥は、下界でいう「鎌倉」と名称される時代から来たそうだ。チロロさんいわく、まだ下界でも未発達な文化な時代であるという。明かりも蝋燭や月の光を用いており、移動も馬車や徒歩。俺たちが知っている下界の話とは、随分と……まだ若い時代のようなうだ。

そのことより驚いたのが、彼女の名前だった。厳密には名字である『安部』についてだ。

俺たちはもう下界についての知識がないため、下界の時代がどうこう言えないのだが、そんな俺たちであつても安部という名字は知っている。だが、下の名前が記憶と合わない。そこでチロロさんが小鳥に親族について尋ねた。すると……

「ああ、なんじゃ、お主ら爺様については知っておるのか」

「爺様？ 何故そう言えるの？」

「普通の者なら小鳥の親族についての質問はほぼ爺様についてだからじゃよ。有名であるのもいささか困るのお」

「それで……爺様のお名前は何ていうのかしら」

「なんじゃ、知らぬで聞いたのか。変わつとるのお。安部清明じゃ」

安部清明。天文道を駆使し占いに長けていたとされている。また、人間の領域をはるかに逸脱した力を持っていたとされる人物。通称、

陰陽師と呼ばれていたらしい。ただ、詳しい事項についてはほぼわかっていない。……というよりも、俺たちがただ知らないだけなのだが。

それでも、そんな俺たちでも彼の名前は知っている。正直、下界の人間なんて知っていることは皆無に等しい。だが知っている。それほど安部清明は妖や精霊である我々にとって非常に『強い』人間であったことは間違いない。確か、妖が全盛期を誇っていた時代も平安や鎌倉と聞いている。ずっと遡れば、もしかしたら我々の祖先も彼と面識があったのかもしれない。何とも奇妙な巡り合わせである。

「それで？　小鳥はいっぱい話たぞ、次はワシの番じゃ。ここはどこのじゃ？　変わった服を着ておるし、このふわふわする布団は何ぞや？　上にあるあの眩しい球は何なのじゃ？　お主ら何か変な違和感を感じるが何者じゃ？　それにここは――」

堰を切ったように、流水を止めていた岩をどけたように、一気に彼女から質問が飛び出した。

質問は途切れることはなく、次から次へと投げかけられる。未知なる世界へ一人放り出され、周りは知らぬ者しかいない。自分以外が全て異形といっても過言ではない。

そこからゆっくりと、時間をかけて、最大限の配慮をしながら、俺たちは彼女の問いに答え始めた。

※ ※ ※ ※ ※

「まあ最初は驚いたものじゃが、慣れてしまえばどうということはないぞ」

「……だといいいんだがな」

「なんじゃ、お主は自分を責めておるのか？」

昼の廊下を歩きながら会話する俺と小鳥。あれから一週間がたち、現在は特に大きなトラブルもなく平和に過ごしている。が、それでも小鳥のこれからを考えればやや辛い。どういう因果か、彼女がこの世界に来てしまった以上、様々な面で生活に支障をきたすはずだ。

女の子であるから、大部分は南無組の女子と癒水先生とチロロさんがどうにかしてくれるが、肝心な『下界に帰る方法』は全くわかっていない。つまり、このままいけば彼女は永久にこの世界にいることになる。それだけは避けたい。しかし、石田いわく現時点において彼女の情報を外部に出すわけにはいかないという。小さなミス（情報漏れ）が、大きな災害をもたらすからだそうだ。ゆえに、龍遠家の力を使うこともできない。

「龍遠家に協力を仰げば確かに力強いけど、もうちょっと待ってほしい。俺の方でどうにかやってみるよ」

今は石田の決断に任せるしかないか。彼にも何か思い当たるところがあるようだったし。

「さて、ハク！ 今日でも元気に遊ぶのじゃ！」

「遊ぶ……か。まあいいか」

小鳥が降ってきて一週間がたち、俺たちの警戒も緩やかになっていった。

何に対しての警戒か。石田が言った、『神隠し』についてだ。

——人間がこの世界に降り立つと、それから数日して、

ほぼ確実に何らかの不可思議な現象が起こる――

最初はえらく警戒したものだ。いつ起こるかわからないのもあって、また、何が起こるのかも予測できないこともあって。しかしこの一週間。小鳥がもっている優しさ、可憐さ、可愛らしさが自然と俺たちの警戒心を解いていく。石田の情報が間違っていたのではないか。そう思ってしまうこともあった。そう思えるほど、平穏だったからだ。だから、だから。

俺たちは、その前兆に気づいていなかった。彼女……つまり、人間がこの世界に降り立つことがどういう意味であるのかを。

そして、それは――――突如、訪れた。

怪、始まる

安部 小鳥が妖と精霊の世界に降り立って八日目。

早朝、他のクラスの男子生徒が他愛無い日常会話をしながら橋を歩いている。

「やっぱ一番人気は人魚の姫かな」

「ぼっか。ヴァンパイアの姫君も相当レベル高いぞ。特に女子からはすごいらしいぜ」

「しかしその二人、龍に惚れてんだろ？ あの体育館での告白聞いたか？」

「当たり前だ。全生徒が聞いてただろあれ。全く、羨ましい限りだぜ」

男子寮から学園へ向かうには橋を渡っていく必要がある。

本来なら、様々な妖や精霊がいるため、各々自由な方法で移動するものだが友達が出来てからは皆一緒に行動するようになっていった。彼らにとって、学園という多種多様な種族が集まる場所はそうそうないものである。ゆえに、一言で『友達』といってもその価値は大変重要だ。

他愛無い世間話も、ハクに対して羨ましいとは言っているが内心はそんな学園模様を楽しんでいるともとれる。この世界で最も有名な龍がこの学園に來ていること事態、驚きであるがその他にも名だたる妖・精霊がいるのだ。彼らの会話もネタが途切れることはない。

ただ、それでもやはり納得できないのか。実はこの一週間で少数ではあるが、ハクに戦いを挑んできた者らがいる。

今のハクの羨ましすぎる状況に領けない者。人魚かヴァンパイアの姫君の心を手に入れたいと画策する者。純粹に王へ挑戦したい者。

いくつか理由はあれど、どれも単純で安易なものだった。……この学園の男子は、少し馬鹿が多いのかもしれない。ちなみに、ハクの全勝である。

そんなこともあって、野蛮ではあるものの学園は毎日が活気に満ちていた。皆、まだ一週間ちょっとしか経過していないというのに、ハク関連を含めても、今後の学園行事に期待を膨らませているのだ。この世界における大部分な生徒たちの特徴といえよう。

「たださ、俺ちょっと気になる子がいて……」

「!?! マジか! 誰だよ!」

「正直に話せよ! おっと録音機能が付いた時計どこにあったかな」
「お前ら……まあ、いいや。えっとな、前から二番目の――」

ドプウン……

「二番目の誰だ!? って……あれ? 勇気、どこいった?」

だからこそ、彼らは知らなかったのだろう。無理もない。

今日起こることが学園行事ではないこと、そして明らかに常軌を逸していること。全てにおいて、イレギュラーであること。考える暇もなく、途方にくれる余裕もなく、それは静かに訪れた。

学園が始まって十一日。人間である小鳥が降り立って八日。石田の予想は見事に的中した。だが彼らはまだ気づいていない。その恐ろしさと、不可解すぎる事象の前に。

※ ※ ※ ※ ※

おかしい。……変だ。

今日、学園に来る際、いつものように俺たちは男子寮を最後に出た。理由は言わずもがな、誠の飲酒騒動だ。今日が『マタゲスカル

の誠専用ハグ』は最終日を迎える。最初は逃げ回っていた誠であったが、もう最後あたりになるとほとほと諦めているようだった。ゆえに彼がマタゲスカルから逃げる時間もなく、比較的早い時間に学園に來れたと思う。

しかし、一步学園の門をくぐった時。何か違和感を感じた。昨日とは違う、不穏な空気。

ただ、その原因が何なのかは全くわからなかったし、違和感といっても空気が変と感じる程度。特にどうこう言うほどのものでもないと思った。けれど、クラスに向かう際……他のクラスを通るのだが、いつもとクラスの中が違った。それは感覚的なものでもなく、先ほど感じた空気のようなものでもない。目で確認できることだった。

生徒が少ない。

いつもならクラスの席を一通りの生徒が座っているものなのに、明らかに今日は人数がおかしい。

俺たちでも気づくのだ。中にいる生徒たちもクラスの友達がいないうちに疑問や不安を抱いている表情をしていた。クラスの中では、「――がまだ来てないんだけど見てないか？」という声がちらほら聞こえる。一つの教室ならまだしも、その声は一から七組まで同様だった。

違和感が大きくなっていく。思い違いかもしれない、という考えからそれは確信へと変わっていく。

南無組に到着すると、俺たちのクラスはほとんどがそろっていた。ただ、ヴァンは現在図書館にいる。この一週間で図書館の司書と仲

良くなったのか、頻繁に本を借りるようになっていた。女子はルカにティア、そして音夢……。

「小鳥は？」

「お水が飲みたくなったりとかで、給水所に行きましたよ」

「そうか……ところで、皆、今日何か感じないか？」

「ハク様もですか!？」

俺だけじゃなかった。このクラスにいる全員が『それ』を感じていた。

この胸がざわつく感覚。これからのことを予兆するかのような不穏さ。こうなっては、もはや間違いないだろう。皆で一斉に頷く。するとそこへ小鳥がやって来た。危機感に対しては小鳥に話すべきではないだろうと石田が言っていたし、俺たちも同意であったから彼女は何も知らない。が。

「おお、ハクたちではないか。おはようゝなのじゃ」

「おはよう小鳥。どうした？ 顔色悪いぞ」

「うむ……何だか朝から嫌な感じがするのじゃ。それにのお」

「それに？」

「何で、隣のクラスには生徒が一人もないのじゃ？」

※ ※ ※ ※ ※

駆ける俺と空。急ぐは職員室。ティアとルカ、音夢には小鳥を守る意味も込めて教室にいるよう伝えた。誠はヴァンを連れ戻して来

ると図書館へ走っている。

小鳥のあの一言が放たれた直後、俺と空が急いで隣の七組へ走った。扉を開けると、あるのは無人の教室。先ほどまで、俺たちが南無組へ入るまでは生徒が教室の半数を占めていたはずだった。しかし、今は誰一人いない……。

全力で職員室へ向かう俺と空。まずい、まずい。これは非常にまずい。嫌な予感が確実に鐘を鳴らしていた。いや、もう予感でも何でもないな。ついに来たというべきだ。例のやつが！ 職員室を開けると同時、石田が学園に響き渡る学校放送を使いアナウンスしていた。

< ういゝ。生徒含め、この学園内にいる全ての妖・精霊の皆様へ。未確認の不祥事が発生したため、直ちに体育館へ移動してください。なるべくまとまって行動してね。……大至急だよ >

「石田！」

「おっと、ハクと空じゃないか。気づいたようだね」

「遅すぎるかもしれないがな」

「そう……ともいえるね。ただ、今はこの不可解な現象を黙って見ているわけにもいかない。打開策が出来るまで、生徒たちの安全を確保しないとね」

「七組が全員消えてるぞ……」

「！ ……そうか。七組の担任もそこにいたはずなんだが、遅かったか」

一体何が起きているのか聞こうと思っていたがそれは叶わないらしい。石田も今の状況に困惑しているようだった。だが、少しでも被害を抑えようと学園にいる教員方と協力して生徒たちの安全を最優先としている。

まずは皆の安全が最優先だと俺たちに南無組の安否の確認を託してきた。石田も主任として先導を立たねばならない。二つ返事で了解した俺と空はすぐさま体育館へ向かう。ここなら、南無組へ向かうより体育館に向かった方が早い。

不安、恐怖、焦燥、危惧、ざわめき……。体育館へ移動していく生徒たちからそれが伺える。

体育館でそれを見ていた俺たちだが、一向に南無組の皆が来ない。パラパラであるが、一組から六組までクラスが集まっていく。その数は、明らかに俺たちが朝南無組に向かう際に見た人数とは違っていた。不安が大きくなっていく。……まさか、な。

「ハク、どうしてここにいるんだ!？」

「ティア？」

そう思った直後、ティアと小鳥が体育館入り口から走ってきた。まるで目を疑うかのような顔をしていた。一体全体何なのだと焦燥しながら彼女に問う。……くそっ、何だこのざわめきは。

「何で二人なんだ。ルカと音夢はどうした？」

「何を言ってるんだ？ お前がここに来る途中で南無組に忘れ物をしたからルカと音夢に付いてくるよう言ったではないか」

「……なんだと？」

おい、まて。ちょっとまて。何を言っている？ 何を言っているんだティア。

俺はここに来るまで南無組とは誰とも会っていないぞ。男子はおろか女子にもだ。ずっと空と一緒にいたし、逆に空以外とは……。まて。まて。まて。そんなことがあるのか。そんなことがありうるのか。

「……ティア」

「な、なんだ」

「俺は今まで、ずっと空といた。空以外とは、職員室に向かう後から一度も会っていない」

「な、何を言っているんだ。私は現に聞いたし、確かにこの目で見たぞ—— お前の姿を」

ぞっとした。

背筋が凍るとはまさにこのことだと思った。ありえないと思っていたことが現実のものとなる。消えていく生徒に加え、俺がこの学園にもう一人いるという証言。……嘘だ、ありえない。ありうるはずがない。冗談にしては度が過ぎている。

だがしかし、今起こっていることは……！ 俺と空の顔を見たティアが口を震わせる。もはや何も言わずとも、それは伝わっていた。自分が見た相手が、本物ではなかったことを。だとするならば、残してきた二人は———

「——っ！」

空が何を言わず、しかし頑なな表情で駆け出した。それを大声で止めようとするが聞く耳をもたず走っていく空。迷っている暇はないと、あいつが全力で駆けていくのを俺とティア、小鳥が走って追う。

小鳥がいるためか、徐々に空との距離は遠くなっていく。かろうじて空が南無組の教室に入る直前を確認し、俺たちも南無組へ走る……！ 扉を思い切り開けた。

「はぁ、はぁ。……皆……」

出迎えてくれたのは、無人と化した教室だった。

※ ※ ※ ※ ※

全てが後手にまわったということなのか。俺たちに打つ手はないのか。

どうしようもない後悔が頭から離れない。何がいけなかったのか、どこで間違ったのか過去を振り返っても改善すべきだった点が見つからない。

「ハク！」

その時だった。後ろからティアに一喝された。

「気をしっかりもて。お前は龍なのだぞ？　こんなところで後悔しても仕方ないはずだ。今すべきことを考える、違うか？」

「……そうだ、そうだったな。悪い」

「いや、謝る必要はない。自分に化けたやつがルカたちを狙ったと知れば普通は動揺するものだ。だが」

「ああ、今はそんなことをしてる暇はない」

「そうだ。……ふふっ、今の顔、素敵だぞ」

「ちやかすな」

ティアに激励をもらい、今一度心を落ち着かせる。

ふと見ると、下から小鳥が不安そうに俺を見ていた。この世界にきてまだ日が浅い。右も左もわからない日常にようやく慣れてきた矢先、この事件。正直、不安で仕方ないだろう。それなのに俺がしっかりしないでどうする！　仮にも妖の王と呼ばれし妖だぞ。今すべきことは弱音を吐いていることじゃないだろうが。気をしっかりもて。

現状を把握しろ。これで南無組は俺とティア、小鳥に……もう二人はどこだ。

「はふう、はへえ、ようやく見つけた。よかったよお」

「ヴァン!? 誠はどうした、確か図書館に行ったはずじゃ」

「え? うん、うん、さっきまで図書館にいたんだけど、いきなり司書さんが消えちゃって。あたふたしたら誠が走ってきて『急いで南無組に戻るぞ!』って。それで誠が先行して走ってたら誠も……」

「消えたのか?」

「うん、きつと速すぎて置いてかれちゃったんだね。走ってる途中に校内放送も流れるし大変だったよ。体育館に行けばいいんだよね。ところで、皆はどこ?」

「「……」」

「どうしたの? 怖い顔して」

キョトンとする彼に今朝から起こっている事件を一通り説明した。

朝から生徒が一人ずつ消え始めていること。隣の七組全員が消えたこと。急いで職員室に向かい、石田から体育館に集まれと指示をもらったこと。しかし、いざ体育館で皆を待っていると……。そこから先はティアも加わって説明した。

小鳥の件を石田から聞いているヴァンは即座に事態の重大さを理解した。同時に、顔がみるみるうちに青くなっていく。……この不可解な怪。まるで犯人の手がかりが掴めない。あの空や誠までが簡単に消えるなんてことがありうるのか。

落ち着け、状況をまとめろ。もつと的確に、明確に、惑わされない真の理を導き出せるように。

敵の目的はわからないが、その目的を成し遂げるためにとっての方法は『消す』ことにある。どんな方法で、いかなる用途をもつ

で行っているかは現時点では判明できないが間違いなく敵は俺たちを消せる。それも生徒だけじゃなく、教員や学園関係者までもだ。しかしここでおかしい点がある。

なぜちまちま消しているのだ？ 消すことが目的なら俺たちが寮で寝ている隙にまるごと消してしまえばいい。寝ているのだから逃げすることも出来ないし反撃も無理だ。何かしらの行動をとられる危険もない。しかし敵の目的は俺たちを消すこと。

……学園内でないとできない？

消えたと報告があった最初はわからないが寮にいた時は誰かがいないなんて誰も言わなかった。

だとするならば、おそらく敵は学園内部に潜伏している可能性が高い。しかも、消す方法は学園内でないと不可能ということになる。そして今、俺たち生徒を消し始めた。目的は消すことになるのだろうか、ただ消すだけなら……

！！！！

さて、落ち着け。もし、もしもだ。

やつが俺たちを消すことが目的で、かつちまちま消すしかできないのは何故だ。

敵の消す範囲がある程度限定されるからじゃないのか？ 学園内部となれば様々な施設があるだろうし、朝から関係者や生徒が時間もバラバラで移動を始める。広範囲に消す力がなければそれは不可能。

ならば、一度に集めれば……？ 生徒、教員、関係者全てを一度に集めることができたら……？

七組が一気に消えたのは一定領域の者を消すことができるか『試していた』のだとしたら!?

「戻るぞ!!」

「ど、どうしたのだハク。いきなり大声を出されれば私とて驚いてしまうぞ」

「敵の狙いは体育館だ!」

「な、何? どういうことだ?」

「最初から一度に集めるためだけにやっていたことだったんだ! 全てやつの思惑通りにことが動いている! 敵は俺たちを消すことが目的のはず。だとするならば、今、体育館に集まっている皆は――」

《!?!》

「急ぐぞ!!」

※ ※ ※ ※ ※

はぁ、はぁ、はぁ……! 間に合っていてくれ、頼む。間に合っていてくれ!!!

ひたすら走る、走りまくる。何故今まで気づかなかったんだ。何故ここまで頭が回らなかったんだ。落ち着いて考えればこの結論に辿り着けたはずなのに! クソッ! 今は後悔している暇はない。急ぐしかない!

体育館の入り口が見えた。まだ中は明るい。希望はある!

「皆、無事か!?!」

――。

ガラリ。

俺たちが開けた扉の反対側にある扉が開いた。立っていたのは、石田と受付統括長。

「ハク、ティア、小鳥、ヴァン。もうわかっていると思うが、覚悟は出来ていると思うが改めて言おう」

時間は動いているのだろうか。この世界は本当に機能しているのだろうか。

そう思えるほど、立っているこの場の全てが止まっている気がした。

「今、この学園に残っている妖・精霊は――」

学園に入学してはや一週間と一日。色々あった。本当に楽しかった。

けどこれは何だ。本当に今自分が体験していることなのか。本当に今俺の眼前に写っている光景なのか。こんなことが……っ！

頼む、どうか、神と呼べる存在がいるのなら――――

それを嘘だと言ってくれ。

「俺たち 六人だけだ」

学園創立史上 前代未聞の怪が始まる

私が、見えますか？

あれから数十分が経過した。

現在俺とティア、小鳥にヴァンは四人一緒に行動している。目指すは体育館から校舎を経由して行ける場所。今いるところから北西に建築されているという『我意の塔』である。理由は小鳥のたった一言から始まった。

「あっちから……何か『不なるもの』を感じるのじゃ」

人間である小鳥。彼女と俺たちでは身体の仕組みや感覚が違う。

我々には全くわからないもの、理解できないものであっても、彼女にとっては重大な何かという場合もある。しかも、この状況下でそれを言われれば、間違いなくそこには何かがあるはずだと思うのは道理である。

小鳥の発言に頷いた石田が笑顔で返す。

「よし、それじゃ小鳥ちゃん一人で行ってみるかい？」

「いや、さすがにそれはまずい。俺も行く」

「私もだ。小鳥を一人にするわけにもいかない」

「ぼ、僕も一緒に行きたい……かな」

と、四人で行動することに決まったのだ。

石田とチロロさんは残って今後の対策を思案するという。全員で行動するべきでは、とティアが提案したがそれをチロロさんが「やるべきことがあるから」と優しく断る。彼女なりの考えもあるのだろう。

とにかく、今はやるべきことを迅速に行動していくしかない。敵

がこちらを攻撃してくるのなら、全力をもってそれを排除してみせる。もはやこの学園にいる生徒は俺たちしかないのだから……。これ以上、敵の思惑通りにさせるわけにはいかない。

目指すは、体育館より北西の方角。我意の塔。

※ ※ ※ ※ ※

ガラララララ……。ピシャン。

ハクたちが我意の塔に出発してから数分後。体育館に残っているのは二人。

石田はどこか呆けた表情で体育館の真ん中で立っていた。上を見上げ、視点も定まっていない。対し、チロロは黙々と歩き、あることをしていた。顔を見上げたまま、石田がおもむろに笑う。

「いや、まいったね。まさかこんな展開になるとは」

「……」

「敵がここまでわからないと、我々は打つ手がないかもしれないね」

「……………」

ヘラヘラと、お決まりの薄ら笑いを浮かべながら石田は言う。いつもなら、チロロがその発言に対し厳しいツツコミをいれるのだが……。今の彼女は沈黙を続けながら黙々と体育館内を歩き回る。

石田はそのまま見繕った言葉を淡々と投げ続けるが、彼女は全く聞き耳をもたず自分のなすべきことをしていた。最初は一人でしゃべっている石田も、次第にそんなチロロを眼で追うようになる。

「ところで」

「……」

「君はさっきから何をしているんだい？」

石田はさっきからピクリとも動かない。ただ突っ立っているだけで、顔と目と口以外は動いていない。対し、チロロはハクたちが我意の塔に出発してから終始一貫してあることをしていた。それは一切の隙もなく、迷いもない実に単純なことであった。

体育館中の窓を閉めているのだ。

そして、体育館のありとあらゆる窓を閉め切った後、チロロはゆっくりと石田の前へ歩いてゆく。その様子を「どうしたの？」と言いながら石田が一步步近づこうとした――その時

「ふうぜんかぎよう
風漸華業」

石田の後方より絶風なる刃が彼に襲い掛かる！

身体はそのままに、目だけ後ろにグリンと動いた石田は他に動くこともなく、その刃に無残に叩きつけられた……。無数の刃は一人の生き物だけに突貫し、辺りは割れた床と埃が舞うだけである。

風漸華業。【鎌鼬】であるチロロの技の一つ。風の刃を特大な大きさへと変化させ敵に振り下ろす疾風妖技。ハクの“龍遠体術 参式 渚”との違いは何をしなくても、瞬時にそれを作り出し、かつ自分の半径10メートル以内ならどこからでも出現させることができるものである。

石田はその刃に何も出来ぬまま餌食となった。その状況を、チロロは黙って見つめるだけであった。身体は動かさないが、目とはとも生徒の前では見せることのない覇気が宿っている。鋭く睨み、彼女の身体全体からふつつつと妖力が循環する。彼女は今自分がなすべきことを強く感じていた。いや、決心しているというべきか。

何故なら

「へえ、ひどいな。こんなことをするなんて」

割れた床と煙をパタパタと払いながら、石田は立ち上がる。服は汚れているものの、傷一つついていない。いつものようにヘラヘラと笑いながら一步前へ踏み出す。その目には、先ほどまで一緒にいた受付統括長が映る。

「君が敵だったなんて、思わなかったな」

「……」

「ふふふつ、まさかの真実だね。これはハクたちには見せられない状況だ。だから体育館中の窓を閉め切ったのかな？ 彼らに見られないように。でも、ハクたちはもうかなり遠くに移動しているだろうからそんなことをしなくても――」

「随分とよくしゃべるものですね」

「はははっ、いや、そうかな？ でも何故こんなことをするんだい？ 話によってはまだこちらも返す言葉があるのだけれど……」

「どういう方法かはこちらも理解できていないのが実情です」

「？」

敵がチロロだったことに、一応の驚きをみせていた石田の表情が止まる。

「まさか本当にこんなことになるとは私も驚くばかりです。あの方には全てお見通しだったのかもしれませんが」

「何を……言っているんだい？」

先ほどまで余裕をみせていた石田の顔つきが変わる。

「窓を閉めた理由……それはこの体育館の窓を全て閉め切れば外部

に妖力が放たれないよう設計されているからと事前に教えてもらったからですよ。彼らに何の迷いや不安を出さないよう送り出すために」

「話がみえてこないんだが」

顔を斜めにし、石田がチロロの周りを歩き始める。じつくりと視線はチロロのままにしながらも、思考は何か別のことを考えているような素振り。じつと見つめていた視線を、一瞬だけ一番近くにある扉に向けた。

ドンッ！

ただそれだけで、石田の前に風刃が振り下ろされる。

「貴様を外に出すわけにはいかない」

「ふーん……ちょっと勘違いしてるかもしれないなあ。お互いにね。今、俺と君はそれぞれ邪な感情を抱いているね。しかしそれは本当なのかな。もしかすると」

「全部で三点」

石田が話を終える間もなくチロロは発言する。そして、手を前に出し、三本の指を突き出す。

「生徒が消えていく最中、貴様は生徒を集中させるために体育館へ向かえと放送した。当初、それは当然の対応だったかもしれない。疑問を抱く余地もなかった……。しかし、問題はその後にある」

「何か――」

「まるで準備が整ったと直感したように、貴様はいきなり席を立ち体育館へ向かった。そしてハクたちの前で即座にこう言った……『この学園に残っている妖・生徒は、俺たち六人だけだ』と」

「それがどうかしたのかい？」

「何故六人しかいないとわかった？」

――ピシリッ

空気が変わる。今まで流れていた余裕のあるぬるい大気が、瞬時に凍りつく。もはや石田に笑顔はない。無表情に、何ら感情を読み取れぬ顔へと変貌していく。それを黙しながらも眼光を向け続けるチロロ。しかし、石田の表情は瞬時に消え、ニコリと笑う。

「俺の能力でね、君にはまだ教えていなかったけどそういう力が」

「二つ。安部 小鳥が北西の方角に違和感を感じたと発した時」

有無を言わず、言葉を続ける受付統括の長。

「貴様は『一人で行ってみるか？』と言った。まるで、一人で行かせたいように。一人でなら打つ手があるかのように」

「違うよ、それはあの子を尊重したかったから」

「三つ」

前に突き出した手は、三つだった指がすでに二つ折られ、あるのは人差し指のみ。

そのまま、チロロは歩き出す。コツコツと、自前のヒールを体育館に響かせながら、一個体の前に立ちはだかる。そして……今まで一番豪気があり、堂々たる言を放つ。

「あの方は……石田主任は、私のことを絶対に『君』だなんて呼ば

ない。絶対に。あの方の予想は全体的中した。敵が成り代わるなら、自分であると。自分以外にありえないと！」

ヒュオオオオオオオ……と、チロロの周りに風の渦が旋回し始める。

【鎌鼬】であり、受付統括長。そして、主任である石田のパートナーを託されてきた彼女。普段は文句を投げかけ、隙あらば蹴り飛ばし、サボっていたならぶっ飛ばしていた自分の上司。

しかし、同時に彼女ほど石田を信用してきた女性もない。その意味深な雰囲気を出しながら、彼女だけにわかる空気を毎日チロロは感じていた。だからわかる。だからこそわかる。

目の前の生命体は、断じて彼ではないことを！

「あの子たちのところへは行かせない。受付統括長の名にかけて、主任から承った命の誇りにかけて！」

先ほどみせた風刃とは比べ物にならないほどの風の集合体。床そのものを粉碎しながら巨大な竜巻が石田を襲う！ その光景を再び無表情で眺めていた石田は……巻き込まれる直前、表情を変えた。

「ゴミが」

※ ※ ※ ※ ※

その頃、ハクたち一行は北西にあるとされる我意の塔へ進んでいた。我意の塔へ行くには校舎と校舎を繋ぐ廊下を歩いて渡らなければならぬ。ハク一人でなら飛んでいけがいいが四人一緒となると、飛行中攻撃されれば自分以外の守りにも徹する必要がある、あらゆ

る面で危険といえる。

結果として徒歩での移動。幸いにも、今現在でハクたちにこれといった障害はない……が。

「本当に俺もいなくていいのか？」

「いいよ！ さ、さすがにトイレまで一緒に来てもらうわけにはいかないし……それに……」

ちらりとヴァンが小鳥を見る。その視線に「ん？」と疑問気に顔を傾ける小鳥。

この状況下で小鳥が言った北西から感じる『違和感』。まず間違はなく、そこに何かあるのだろう。彼女が人間であること、それが今起こっている怪の原因であることは明白だった。

だからこそ彼女は、彼女だけは失うわけにはいかない。打つ手もなく、打開策も講じられない現在においてそれだけははっきりとヴァンにもわかっていた。

ゆえに、自分が一時的に離脱して皆を危険な目に合わせるぐらいなら。一人で行動したほうがいい。

トイレであるが。

「何かあったらすぐ言ってくれよ」

「あはは、うん。僕も消えたくないからね」

そんな、冗談にもとれないセリフを残してヴァンはトイレの中へ入っていく。未だかつて、トイレに行くだけなのにこれほど緊張感が張り詰めたことがあっただろうか……。おそらく、今世紀最大級の出来事だろう。

ヴァンがトイレの中へ入った……瞬間。小鳥が後ろを振り返る。

それは辺りを警戒してというものではなく、直感的なものであった。この世界における自分のイレギュラーっぷりは充分理解している。それに派生するいくつかの点も……。実は、それに関してはハクたちに話していない。

何故ならば、それを話しても特に意味がないからである。彼女だけに『わかること』であり、彼女だからこそ『感じられる』こと。やはり、間違いない。敵は――

「ハク、ティア。前方より不なるものが接近してくるぞ」

「何……!?!」

二人は驚きの表情を浮かべる。互いに顔を向け、アイコンタクトで確認する。

当然だ、もし敵がこちらに接近してきたのならば……なくてはならないものを二人が感じられなかったのだ。それはこの世界においてもは当たり前のものであり、なくてはならないもの。ゆえに、小鳥の言葉に二人とも半信半疑であった。が！

「グロオオオオオオオオオオオオオオオ!!!!」

とても生き物とは思えぬ、全身黒闇に覆われた化け物が両手両足を地に付けながらヤモリの如き動きで接近してきた！ハクとティアは驚嘆する。正確には、ありえない事象を目の当たりにしていた。先ほど彼らが思っていたことがまさに現実となったのだ。感じられなかった……はずなのに。

そう、それは至極当然のもの。ハクたちにとって、世の理であるもの。

「何故あいつから『妖力』を感じないのだ!?!」

妖気、妖力……それが、眼前の化け物から一切感じなかった。それは同時に、ハクたちの常識を打ち壊すのに充分であったもの。化け物はハクたちがいる校舎の廊下、窓、天井全てを揺らしながら轟の破叫とともに突進してくる。

ハクとティアはほぼ同時に行動に移した。ハクが“龍遠体術 参式 渚”で天井を斬蹴。その間にティアは小鳥にこちらに来るように叫んだ。なおも怒号の如き声を出しながら突進してくる全身真っ黒な化け物は周囲の校舎を破壊しながらその勢いを止めることはない。早急な行動が必須となる。天井に穴を開けたハクは二人を担いで飛ぼうと先にティアを見た。

「お姫様抱っこを所望する！」

……改めて、ハクはティアと小鳥を抱いて空へと飛ぶために今度は二人一緒に見た。

「お姫様抱っこを所望する！」

「お前はこんな時に何を言っているんだ」

「所望する……！」

「……わかったよ。小鳥、俺の後ろから抱きつくんだ」

「了解なのじゃ！」

そのまま、小鳥を背中からおんぶする形で、ティアをお姫様抱っこする形でハクは空へと飛んだ。

小鳥を落とさないよう最大限の注意を払いながら上空へと移動するハク。化け物はそんな三人を天井の穴を通して校舎から見上げていた。感傷に浸っているティアがポツリと呟く。

「私はこのままの学園生活も悪くないと思えてきたぞ」

「落としていいか？」

「ハクよ、ヴァンはどうするのじゃ!? このままでは……」

「今、ヴァンが襲われればひとたまりもない。だからあいつの注意をこちらに向けないと。ヴァンの救出はその後でするべきだ」

「なるほど。しかし、敵がこっちだけに注意を向けるかのう」

そう小鳥が言った直後だった。激しい破壊音と共にヤモリのような格好で移動していた化け物が大ジャンプをかましてきたのだ。そのままハクたちと同じぐらいの高さまで飛んだ黒い生物は両手を大きく広げ、ハクに狙いを定め――

「ちっ!」

二人を担いでいるためか、反応にやや遅れはあるもののハクはその攻撃を避ける。空振りに終わったものの、そのまま落下し廊下の上部分に着地する物体。そのままの目はハクを食い入るように睨み続ける。どうやら、敵の注意をこちらに向けることには成功したようだ。

「この状態じゃ戦えない、このまま塔へ向かうぞ。ヴァンのことは……その後だ!」

自分の判断が間違っているかもしれない。そう思いながらも、今は小鳥を塔へ無事届けることが最優先だ。トイレに一人で向かうヴァンもそう思ったのだろう。ハクは即座に決断すると二人を抱えたまま塔へ飛翔する。その後ろから必要に迫って来る化け物と共に。

龍は、塔で迎え撃つしかないと飛びながら次の為すべきことに集中していた。

※ ※ ※ ※ ※

「△□★○fじよ×◎▼◇ふおrんm!?!?!?」

ハクが塔へ向かった直後、ヴァンは絶叫していた。それはもう、とても言葉で言い表せないほどの絶叫ぶりで、この世の言語を用いているとは到底思えぬ叫び。

それほど、彼にとって死ぬほど……死んでるんじゃないかと思えるほどの魂の雄叫びであった。

その事象は……彼の友であるハクにとっては、ルカとティアに出会ったものと同義。

当のヴァンにとっては、人生最大の転機。

「あ、あ、ああ……」

今後、彼の人生を、人生そのものを大きく干渉するその事象。他でもない、きっと彼だったからこそ起こりえた必然の邂逅。

時は若きヘタレが学園に入学して十一日。場所は悲しくもトイレ。しかしその天命、まさに来たるべきして来たと言うべきか。それもこの世の理が一つ。

何にせよ、それは一人の青年、ヴァン・シュナイゼルにとって――

『私が、見えますか?』

運命の出会いに他ならない。

出会い×八帝将

僕こと、ヴァン・シュナイゼルが何故南無組に入ったのか。

それは全くわからない。というか正直入りたくなかった。あんな個性的で有名な妖・精霊たちがいるクラス、僕なんかがいるべき場所じゃないよ。なのに、何であの壺は僕なんかを南無組に決めたのだろうか。迷惑極まりない。おかげさまで周りからは変な目で見られるし、持ち前の存在感のなさを存分に発揮できていない……。

入学する前は、ごく普通のクラスでごく普通の生徒を楽しもうと思っていたのに。

「とりあえず、トイレ済ませないと」

そんなことを考えても仕方ないよね。わかってる、わかってるよ。けどさ、ずっとこのままっていうのは少し辛いものがあるよ。

だって僕は……僕なんか……『力』をもたないただの――

「グロオオオオオオオオオオオオオオオオ！！！」

「な、何！？」

そう思った直後だった。廊下からとてつもなく大きな、飛び上がってしまうほどの雄叫びが聞こえてきた。その声は徐々に大きく、荒々しくなって近づいてきている。そ、外に出るべきだろうか。でも僕が今出て皆の迷惑になったら……。どうしよう、どうすれば皆の邪魔にならずにすむだろうか。

何をすれば『お荷物』にならないか考えていると、突如廊下から破壊音が鳴った。同時にハクくんの妖力も感じる。おそらく、彼の力で何かをしたのだろう。数秒後、彼の妖気が空に向かっていくの

を感じた。ああ、きっと空へ移動したんだ。小鳥ちゃんを無事塔へ送り届けるために。

よかった、僕を見捨ててくれて――

……。あれ、どうして、目から涙が出るのかな。当たり前のことなのに。こんな僕なんか普通はほっとくに決まってるじゃないか。……期待していた？ 彼が僕を助けてくれるのに？

馬鹿か、何様だ。僕風情がそんなこと考えていいはずがない。きつと僕をおとし皿にして塔へ向かったんだ。なら僕のすべきことは一つ、身の程をわきまえること。それが僕。

そう理解したはずなのに、外はドスゴスとさっき地響きを鳴らしながら近づいてきた何かが遠くへ移動して音が聞こえる。え、どうして。僕を身代わりにしたんじゃないの？ 何で……。

「僕を助けるために？」

ま、まさか。そんなことあるわけが――

と、とととにかく外に出ないと。状況を確認しないと。結局トイレの用事は出来ないまま、僕は廊下へ出ようとした。洗い場を通ればすぐ廊下だ。すぐ……

『聴こえますか？』

……。何、今の声？

辺りを見渡す。誰もいない。当然だ、学園はおろか、トイレなんか他に誰かがいたら。きっと空耳だったのだろう。しかし随分と綺麗な声だったな。空耳にしてはなかなか素晴らしい声だった。

『私の声が、聴こえますか？』

そうそう、こんな細く透き通った声で……。

「ほ？」

『私の声が聴こえるのですね？』

「ほえ、え、ええ！？」

『ここですよ、ここ。窓をご覧くださいませ』

これは絶対に見ちゃいけないんじゃないだろうか。

見たら絶対あれだよ、あれだよ、あれに間違いないよね。というか窓って洗い場にしかないよ。すぐ隣にある窓しかないよ。

……いやいやいや、見ちゃいかんでしょ！ ここには誰もいない！ そう、誰もいないんだ！

あれ？ 誰もいないなら別に見てもいいじゃない？ そうだよ、それで今の恐怖を追い払えばいいんじゃないか。まったく、僕としたことが。自分を見失なんて……よくあることだ。鬱だ。

で、でも誰もいないなら見ても問題ないよ。自分を信じて、頑張ろう！ くるりと一発、窓を見る。

「……」

『ああ、やっと逢えた。ずっと願っていた方によく逢えました』

「……」

『見えるのですね、私が。ああ、何と嬉しいことなんでしょう。天にも昇る気持ちです』

「……………。スウツ——」

空気を限界ぎりぎりまで吸いました。

『私が、見えますか？』

※ ※ ※ ※ ※

ん？ 今、ヴァンの声が聞こえたような……。気のせいかな、黒いデカブツは追ってきてるし。

最初見たときはかなり驚いたな。普通、この世界の住人なら近づいてくれば多少の妖気や妖力を感じるものだ。あれほどの破壊力をもちながら突進してくるには、まず間違いなく妖力が必要。しかしやつにはそれが一切感じられない。

何かしらの方法を使っているのだろうかわからないな。

「ハク、ハク」

未だ追って来る黒いやつを背に、小鳥が俺の名前を言いながらチヨイチヨイと服を掴んでくる。

「何だ小鳥？」

「ワシらがおるこの学園は、ハクらの世界ではとても貴重なもののじゃろう？」

「ああ、そうだな。とても有名で、知らない妖・精霊はいないぐら이다」

「だとするならば、普通このような不祥事を考えて何かしらの策を用意していそうなのじゃが」

小鳥の言うことも最もだ。だがしかし、別に何も策を弄していないわけではない。

正確には、一応この学園にも世界から『緊急時』に備えて対策が盛り込まれている。それは別段学園内に罠を仕掛けていているというものではなく、はたまた援軍を近くに常時待機させているわけでもない

い。

極めてシンプルだが、とても興味深いものだ。それは、一つの機関として設けられているものの、実際俺たちがその内部の関係者にあつたことはない。あるという事実は知っているが、中身に関しては全くわかっていない。しかしながら、その機関は確かに存在する名を――

「『八帝将』……?」

「そうだ。それがこの学園を含め、世界の『八大都市』を守っている機関だ」

「なんじゃ、八大都市とは?」

小鳥は知らなくても当然だ。まだ俺たちの世界にきて日も浅い。一週間で大方のものは理解してもらったが、これはまだ彼女に話していなかった。

以前も回想したことがあるが、この世界の住人はありとあらゆる妖・精霊が住んでいる。

ゆえに住居としている場所も様々で、俺の一族が天空に住まいを構えていたり、ルカの一族が海底の奥底に住んでいるなど千差万別である。だからこそ多くの妖・精霊が一度に集い、かつ生活している場所は極めて少ない。この世界において、そのような場所が確認されている『都市』が……。

「八つしかないのか!？」

「そうだ。あとは一族特有の場所で住んでいるやつらがほとんどだな」

「ふむ。ん? それと先ほど申した『八帝将』と何の関係があるのじゃ?」

「都市っていうのは色んな妖や精霊が集まる場所でもあるんだが、

同時に周りとのいざこざも絶えなくてな。単に平和に暮らしたいと思っている者もいれば、私利私欲の為に悪事を働く輩もいる」

「何じゃ、人間と変わらんではないか」

呆れた顔で小鳥が呟く。口を尖らせ、少し幻滅したようだ。

どうやらこの世界を彼女なりに一定の評価をしていたのだろう。

苦笑気味に言葉を続ける。

「まあな。ただまあ、人間よりかは問題が起こる回数は少ないと思う。けれどもやはりそれでは都市としての機能が正常に行われないゆえに――」

「都市を守る機関が創られたと？」

「そうだ」

それが『八帝将』。世界における八大都市の治安や秩序、規律まで主に担当している。

文字通り八人で構成されており、それぞれが都市の長を任せられている。強力な権限を委譲されているため都市によってその色合いもかなり違う。異常に発展した都市もあれば、武術に固執した都市もある。貿易が盛んな都市もあるし、特に何もせず住人たちの好きなようにさせている都市もある。

そして、ここで一つ小鳥が思いつく。それは至極当たり前の疑問。

「……ハク。その八帝将じゃが」

「そうだな。八帝将は都を守る為に存在する。その機関を何故今話しているのか」

「うむ。ワシは学園の不祥事に対する策はないのか、と尋ねたはずじゃよ」

「ああ、わかってるよ。だから話したんじゃないか」

「……？　つまり、えと。もしかして」

「そうだ。この学園も、八大都市の一角さ。正確には学園都市とされる」

この世界において、都市の定義は「様々な妖・精霊が集い、住居を構え、一つの集合体として成り立っている」こと。つまり、俺たちの学園も都市の定義に合っている。

補足を付け加えるならば、都市らしい店や施設もちろんある。無人島並みの大きさであるこの学園には、まだまだ多くの設備や建物がある。それに派生して多種多様な妖・精霊もいる。けれど、今はまだその九割が稼動していない。理由は簡単で入学生たちを学園に馴染ませるためにある。

まだ自分の身の回りもわかっていない生徒にとって、一度に全てのことを受け止めるには酷とされる。

ゆえに、残りの九割の施設、設備、建物が稼動するのは俺たちが入学して2ヶ月後となっている。一通り説明すると、納得したのか「うんうん」と頷く小鳥。

「なるほどのお」

「まあ、その肝心な八帝将の一人も現在はいないみたいだがな」

「この学園を任せられているやつじゃろ？」

「……のはずなんだがな。実際この学園都市を統治している八帝将を俺たちは誰も知らない。会ってみたい気もするが今は無理だろうな」

そうだ。よく考えれば不思議だ。八帝将はその権限ゆえに人柄（人じゃないけど）や頭脳も他の妖や精霊を逸脱していると聴く。だがそれだけで彼らが八帝将になりえる要素にはならない。個性的や奇抜的とも称される八帝将だが、一つだけ彼らに共通しているものがある。それが……。

圧倒的な『強さ』だ。

だからこそ「将」なんて文字も入っている。他を寄せ付けぬ、突貫した力が彼らの象徴でもある。

そんな彼らの一人がこの学園にいて、あっさりとやられてしまうものだろうか。けれど、石田は断言していた。「この学園にいる生徒は、俺たち六人だけだ」と……!?

何で、残っているのが六人だけだと――

「気づいたか、ハク」

「ティア、知っていたのか？」

「もちろんだ。だから私たちが塔へ向かう際、石田とチロロ統括長に聞いた。一緒に来ないかと」

そうだ。四人で行くと決めた時、全員で行動するべきでは、とティアが提案したがそれをチロロさんが「やるべきことがあるから」と優しく断っていた。

「もしチロロ統括長も敵ならば、不安要素の我々を集団で動かすわけにはいかない。必ず付いてくるはずだ。だがしかし、彼女はそれを断った。チロロ統括長はこちら側と考えるのが妥当だろう」

「チロロさんは石田が敵とわかっていたのか」

「おそらくだが。だからこそ彼女は残ったのだ。やつをあそこに縛り付けるために」

「……」

チロロさんはそこまで考えて行動していたのか。すごいな、俺はそこまで思慮が回らなかった。

彼女なりの考えもあるだろうが、はたして一人にして平気だっただろうか。……いや、それはチロロさんに失礼だ。

「案ずるな。あの若さでこの学園都市の『統括長』を任せられているのだ。実力もあるだろう」

「そうだ、な。それに石田そのものが敵とは限らない」

「ああ、敵は我々に化けられるのだ。石田即ち敵という結論は安易すぎるだろう。そしてなにより」

「彼女が、負けるわけがない」

「その通りだ」

優しく微笑みかけてくれるティア。傲慢の月髪が天空を舞う。

今、俺たちにできること。可能であること。それがわかっている時点で、やるべきことは決まっている。その道にぶ厚い壁が立ちただかっていようとも、一步たりとも引くわけにはいかない。

皆と巡り逢えたこの学園。断じて崩させはせぬ。一人の生徒として、龍として。

それは俺はもちろん、ティアも小鳥もヴァンも一緒なはずだ。自分一人残して自らの使命を貫こうとしているチロロさんも然り。

ならば今は信じるしかない。信じぬくしかない。彼女の想いと、決心を。

そして俺たちは進むんだ。皆のために、絶対に。

塔が見えてきた。大理石を十六層に分けた、円柱型の塔である。

高さもさることながら、堂々たるその風貌は自らの意思を体現化しているとも評される。ゆえに「我意の塔」。

いいいよだ。俺たちがすべきこと、必ずやり遂げなければ。そしてチロロさんが到着した時に笑顔で出迎えよう。彼女はきつと来る、大丈夫だ。

信じるんだ。

※ ※ ※ ※ ※

ハクたちが塔まであと数分といった時。

場所は体育館。

多くの生徒を収容できるそこは、すでに本来あるべき形を成して
いなかった……。

周りの建物も半壊、社会の縮図とされる学園施設は見る影もなくなっていた。

そんな荒れた場所に、二人の影――

一人は悠々と立ち、もう一人は……たった今無残な姿で地に斃れ
……消える――

残された一人は黙って北西の方角へ頭を向けた。

「……ひひ」

佇^{たたず}むは、石田に化けし異形。

残り、五人。

金色のティア

ティアさんより、ルカさんより長い髪。腰以上まである超ロング。二重まぶたにすごく大きな目。唇からちよつとだけ見える歯がとてもかわいらしい。フリフリのパジャマにはデフォルメされた熊さんの就寝イラストが上下とも描かれています。

今まで聞いたことがないほどの丁寧な言葉遣いに加え、身なり全体から漂う「涼」な雰囲気。後ろ髪がマントのように左右大きく広がりが神々しさを際立たせる。空中にふわりと浮かぶその姿は妖や精霊を見慣れている僕にはさほど驚くことじゃないけど、その外見の美しさや気品さを軽々と超える衝撃が一つあって……

彼女の身体、半透明なんですけど……

『私が、見えるのですね？』

「見えません」

『ふふ、ちゃんと返答して下さっているではありませんか』

「みみみ……見栄万選みえまんせんだなあ、最近の僕」

『それは少し無理がありますよ』

クスツと笑い出す彼女。年齢は僕と同じぐらい……？　けど、なんかすごく大人びてて綺麗だ。

——って暢気なことと思ってる暇はない！　普通におかしいでしょ！　妖・精霊多しとはいえ半透明な身体している一族なんて聞いことも見たこともないよ！

「え、えとですね」

『はい。何でございましょう……と言いたところですが残念ながら時間ありません。落ち着いて聞いて下さいませ』

「え、どうということ？」

『これは主様にしかできないことです。このまま私たちが行動を起こさなければ、我々は全滅、皆殺しにされるでしょう。それを阻止せねばなりません』

「ちょ、ちょ、ちょっとまって。話がみえないよ。それに僕は君が何なのかも……」

『何をおっしゃいます？ 主様は私が見えているのでしょうか？ それだけで充分ではございませんか』

「……それは……」

『即ち、主様は』

「ちがう」

はつきりと言った。それだけは絶対に断言しなければならぬから。

僕がその言葉を鋭く放つと、彼女は静かに口を閉じた。そして透き通るような真珠の眼でじっと見つめてくる。……ドキドキします。でも、僕は彼女が言うような精霊なんかじゃない。……なれない。

『……お名前、お聞かせ願いますか？』

「ヴァンだよ。ヴァン・シュナイゼル」

『童子宮 わらしみや きょうこ 京子と申します。京子とお呼び下さいませ。急ぎましよう、ヴァン様』

「行くって、どこへ？」

『先刻も申しましたとおり、私たちには時間がありません。移動しながら説明いたします。こちらへ』

そう言うと、京子さんはスゥーと浮きながら移動を始めた。僕はその後を静かに追うだけ。

彼女は敵かもしれないのに、僕は京子さんの後ろを黙って付いて行く。……わからない、普通はこんな不思議な相手、信用してはいけないはずだ。

でも、どうしてだろう。足が自然に動く、顔が前へ向く、少し気持ちいが楽になる。僕は彼女から「安心感」をもらっている気がする。ずっと側にいてほしいと思ってしまっ自分がいる。正直に言えば、僕は彼女が「何なのか」知っている。けどそれを認めるわけにはいかない。このどうしようもない螺旋の苦悩に、いつか活路を見出せるのか。

その答えは、まだわからない。

でも、辿り着けるのにそう時間はかからないと思えた。

ヴァン様。あなた様はきつと自らの一族の縛りに苦悩されているのでしょうか。

無理ありません、あの一族であるならば至極当然。私も軽率でした。あなた様のことをもっと配慮して発言すべきでした。

ですが、ですが。ヴァン様、あなた様は気づいておいでですか？

私が『見える』ということは、すでにあなた様の精霊としての力が、花が、木が、全てが、咲き開く刻に近づきつつあるということ。あなた様は気づいておいでですか？ 気づかれておいでですか？

今はその刻ではありません。ですが、そう遠くありません。むしろあと僅かというべきでしょう。

来たるべき刻運の時。それは必ず訪れる。ならば私は支えましょ

う。それが運命なのですから。

よかった……私の運命の相手がヴァン様のような方で。心より嬉しゅうございます。

であるならばこの命郷、どこまでもずっとお側に……お慕いすることを……誓います。

※ ※ ※ ※ ※

ヴァンがいた場所から数分後、ティアと小鳥を抱っこした状態で俺は塔に着地した。

てっきり、あの黒い化け物は追って来ながら何かしらの攻撃をかけてくると思っていたのだが、叫号して追って来るだけで特に何もしてこなかった。……それどころか、驚くべきことが起こる。

「消えていくぞ」

ティアが俺の腕から降りると同時にそう言った。つられて小鳥と一緒に後ろを見ると、追ってきた化け物の身体が気体となって消えていく。一体なんだったのだ？ わざわざ襲ってきていざ追いついたら消える。……「消える」？ そういえば、この怪そのものはほとんどが消えることから始まった。今もそうだ。生徒たちのように瞬時に消えるわけではないが、やつは消えていく。

やはり、この塔に関係があるのか。

ギイイイイイイイ……

塔の門が勝手に開いた。誘っているということだろう。小鳥が言った不なるものがここにあることは、まず間違いないだろう。敵は、この中にいる。

ティアと目を合わせ、頷く。俺たちのすべきことは小鳥を全力で

守り、敵を排除すること。これに尽きる。そして、必ず皆を救い出す。最善の一手。小鳥を真ん中に置き、二人で囲むようにして塔へ入る。

「ハク、ティア。言っておかねばならないことがあるのじゃ」

「何だ？ 小鳥」

「ここに来る前まで、ずっとワシの感覚で『おそらくそうじゃろう』と思っていたことじゃが、ここに入って確信した。敵のことじゃ」

「敵がわかったのか!？」

「うむ、間違いない。……というより、ワシだからこそわかった。よいか、敵はこの世界の住人ではない。敵は――」

プツン。

黒。それだけの世界が広がった。

「いやあゝ、まさかこの場所を即座に当てちまうところ、恐れいたぜ」

辺りの様子を伺う暇もなく、前から知らぬ声が聞こえる。

前を向きながらも周りの状況を確認。先ほどまで塔へ入った場所は、今は何もない黒だけの世界となっている。地に足がついているところを見ると、奈落のような底なしの場所ではないようだ。

だが、あとは光がない真っ黒な空間。そして、前から二つの灯火が宿る。その炎が徐々に近づいてくると同時に、声も大きくなる……。

「正直、あの人間と数匹の妖・精霊を残してじっくり遊ぶつもりだったのによお。まさか一発で見抜かれるたあさすがに予想外。遊ぶ

暇もないってもんさね」

「……ティア、いるか？」

「無論だ、ここにいる。だがしかし」

「小鳥がいないか」

「ああ」

小鳥の言葉が途中で途切れた時点で予想はしていたが、やはり。今さっき小鳥を守ると決めた直後だっただけに、これはちょっとショックでもある。後で小鳥に謝ろう。

残るは俺とティアのみか。そして予想通り、徐々にこちらに近づいてくるやつからも『妖力・妖気』を一切感じない。小鳥は消える直前何と言った？俺の耳が聞き逃していないはずなら、こう言っただけだ。

この世界の住人ではない――

「こおんにちは」

随分と風変わり、酔狂な姿。宙に浮きながら座っていて、脚を左右に開いた形にし、さらに足首を交差させる座り方……いわゆるあぐらをかいている状態。加えて両手首にはそれぞれ鎖が巻かれており、その先の鎖が下に垂れ最端より灯っている炎がゆらゆらと揺れている。

髪型はオールバック、髪色は赤・緑・青・黒・黄色と信じられないほど派手だ。耳からは十字架を模したアクセサリーが五本以上繋がっている。服は髑髏が口を開けた画を着ているがところどころ色落ち・破れがあり、まるで髑髏が叫びながら泣いているような画になっていた。

「おい、何か言えよ。だんまりは嫌だぜ」

「お前が今回の怪の原因か？」

「うん？ ……あー、まー原因っちゃ原因だが、根本たる原因は他にあるぜ」

「何故だ」

「俺はあのガキがこっちに來たからその代償として封印を解かれたに過ぎねえからなあ。もともとあのガキがこっちの世界にこなけりや俺はずうっとこのままだったわけで」

「封印……？」

「ま、別にいいじゃねえか。色々化けたり消したり楽しかったし。そろそろ全員消してまとめて殺して俺も元の世界に戻りたいしよ」

……察するに、小鳥がこの世界に來たことで学園に封印されていたこいつが自由になったってことか。ほかにも『消してまとめて殺して』ということは、まだ皆は殺されていないということになる。おそらく、消されて他の場所に監禁されている。

だがしかし、こいつが結局何者なのかそれがわからない。おおよそ、下界の者だろうが……人間がここまで奇抜で面妖な姿をし、あまつさえ学園全員を消せるほどの力があるだろうか。

答えは、否。ゆえに……同時にその答えに辿り着いたティアが言う。

「貴様、こちらの世界の住人でもなければ、下界の住人でもないな」
「お、なんだよ金髪の姉ちゃん。当たり前だぜ。だがそれがどした？」

「貴様の発言を察するに、今回の騒動は貴様一人が単独でやったというわけか」

「おお、さらに大当たり！ いや姉ちゃんやるねえ。さっき半殺しにした女とはえらい違いだぜ」

……女、だと？

「石田に化けたのも貴様か」

「おうよ、なかなかの演技だったっしょ？ てかバレてたのね。まいったぜ、化けることに関しては結構自信あったんだけどな」

「皆はどこにいる」

「ん？ さてね」

「そうか」

そう言つて、一步前へティアが進む。凜とした姿、煌く金色たる髪、光る紅の眼。

対し、同時ににっこりと笑う異形。頭を真横にし、そのままの状態でティアを凝視する。

「ま、最後にあんたで遊んで帰るのも一興だね」

「そうしろ、落胆はさせんぞ」

「おお、かっこいい。ならそっちの男はムサイからさよなら」

！？ 異形がこちらを見た。瞬間、後方へ翔んだが足元より現^{いで}し黒い物体にグルリと巻きつかれた。その速度たるや下の黒い物体を見、前方へ視線を向けるよりも速く……。

飲み込まれる。呑み込まれる。そうか、皆はこれにやれたのか。自分が『のまれる』と気づくよりも速く……。なんということだ。当然言葉を発するなどというものは一切出来ぬまま、俺は闇へ取り込まれた。

なわけあるか。

「迅欄」
じんらん

「な!？」

やつの後ろへ回り込む。正確には移動する。

……おいおい、わざわざこっちを向く暇があるのかよ。さっきの余裕はどうしたんだ。別に構わないが。この程度なら、特に問題ないさ。

「渚」

斬蹴の脅威からは逃れられんぜ。

※ ※ ※ ※ ※

ハクの“参式 渚”により異形は前方へ吹き飛んだ。吹き飛んだ後もゴロゴロと地を転がり続け、なんとも無様な格好である。

その様子を苦笑しながら見つめるハクのところへティアが近づく。

「すごいなハク、なんだ今の瞬速は！ それも龍遠体術の一つなのか？」

「まあ……な。結構しんどいからあまりやらないが」

「恐れている。いや、素晴らしかったぞ。妖の王に違わぬ実力だ」

「そんなじゃないよ。それに、同年代で俺より強いやつもいるぞ」

「!？ 本当か？」

「ああ、俺は別に最強でもなければ無敵なんかでもない。一人の妖だ」

そう言ってハクは微笑む。ティアはそんなハク的笑顔が何よりも好きだった。

十年前、彼と別れる直前に見せた彼の笑顔は、ティアにとって何よりの宝でもあった。その笑顔がもう一度見たいから、もう一度自分に向けてほしいから彼女はここまで頑張れてくれた。

心底、学園に入学してよかったと思うティアだった。

ハクの強さはそんなじゃそらの妖・精霊では歯が立たない。しかし、彼はそれでも自分が最強であると思ったことはない。理由は大きく二つ。一つは最強などという幻想に酔いしれる自分が嫌いであり、もう一つは……現在、彼を負かす存在が一人いるからであった。しかも、異性である。

「が……あ、くそっ……」

ヨロヨロと、斬蹴された背中を触りながら異形が立ち上がる。ティアが少々驚きの表情を浮かべる。

「なんだ、まだ生きてるのか」

「一応主犯だしな。多少の手加減はしたがまさかここまで無様にぶっ飛ぶとは思わなかった」

苦笑まじりに、皮肉もこめてハクは言う。

敵の先ほどの発言、『半殺しにしてきた女とはえらい違い』というのに強く嫌悪していた。十中八九、チロロのことである。彼女の安否も心配だが、ここまで自分の関係者を享楽まじりに弄んだ異形を許せるはずもなかった。

だがしかし、それと同時にふと疑問も生じる。この程度のやつに、チロロが後れを取るだろうか……。それに未だわからぬ妖力・妖気ゼロの理由。先ほどハクを消そうとした時もやつからそれは感じなかった。変わりに、もやりとした……言いがたい奇妙な感覚は感じ取れた。

まさか、これがやつの……？

「あああああつあああああああああつああああ！！！」

咆哮。

「うっぜ！ うっぜ！ 超うぜえええ！！ 少しでも遊んでやろう
と思ったのによお！」

「元気だな。それによく吠える」

「ああああ！？ てつめ、マジふざけやがって……！ 後悔させて
やる。ぜってー後悔させてやる！ “アギトロス”！」

その言が放たれた直後、ハクの周囲を四方箱詰めにしたデジタル
なるものが出現。ちょうど、ハクをロッカーに閉じ込めたようなも
のとなった。

ほとんど彼の自由を奪った形となり、これでは“参式 渚”も放
つことが出来ない。黙ってその様子を見るハクだが、特に焦る必要
はなかった。やろうと思えば壊せるが、少し興味が沸いたのだ。そ
れは、別に異形の力ではない、この空間にいるもう一人の力である。

「なるほど？ その状態ではさすがに我が夫も自由は奪われるとい
うわけか」

夫という単語に関しては突っ込みをいれたいが、それで彼女の士
気を下げてもな、と彼は思いとどまる。女性はとても楽しそうだっ
た。理由は簡単である。

眼前の敵を華麗に成敗し、囚われの身となったハクを助けるこの
局面。誰も助けぬ、誰も動かぬこの現状。きっと捕らわれの身とな
った彼はこう思っているだろう。『助けて！』

「素晴らしい」

テンションだだ上りの自分をなんとか押さえつけ、今すぐハクを助け抱擁してもらいたいという理性を全力で引き戻し、一分一秒でもハクといられる状況を作り出せる方法はないかと模索する脳をシャッフルし、平常に誘う。

視界に映るは異形。この学園に起こった怪の張本人。やつをなんとかすれば、この微妙に長かった劇も終幕を迎える。二人きりというのも捨てがたいが、やはりライバルがいなくてはつまらぬだろう。それに、自分自身、早く皆の顔が見たい。

「おい女あ！　まずはてめえからだ！　グチャグチャにしてその男が泣き叫ぶ様を存分に味わわせてもらう！」

「構わんぞ」

「だろうな！　だがいくら謝ろうが……てあ！？」

「それが出来るのであるならな」

歯で、指を切る。

鮮血たる一滴の雫が地へ沈む。

金色^{こんじき}たる髪がざわめく。

それ即ち宴の始まり。

妖力が空間を蹂躪する。

地より徘徊し冥郷の奏が掌握す。

「さて……」

紅の眼は何を視る。持ち上げた右手は何を掴む。

其が妖、遙か昔、下界の西洋にてその名を知らぬ者はなし。

下界よりこの世界へ来た直後、妖らより始まった王を決める争い。

龍が王と決まる前、実は龍は『天の王』と称されていた。それが『妖の王』となっただけ。

では、天の王と称されていた時、世界は天だけであつたか？

否。

世界は天と地があつて成り立つもの。ゆえに――
当時、もう一つ王と称される妖がいた。名を……

「はじめようか」

地の王、ヴァンパイア。

絢爛鮮凜たる戦いが始まる――

月の女神

凜……。暗く、根深い誘いの空間。

二つの灯火が唯一明かりを意味し、相対するは異形と妖。それを上空より見るは、長方形のデジタルなるものに箱詰めされた龍。身動きが取れないとはいえ、二人の様子を見るには全く支障がない。

異形の眼前に立つ女は、自らの齒で切った指の血を一滴落とす。彼女がした動作はそれだけで、血を落とす以外にしたことはない。しかし、ハクは理解する。ティアにとって、今の行動が全ての準備を完了させたということ。

「ギギギギ！」

まるで球体を掴むような動作をする異形。指はピクピクと動き、両手より青紫の静電氣が見える。

そして、そのまま左右の手を引き離す。同時、異形の前より一本の『槍』が出現す。かなり独特なデザインがされており、槍というよりも展示される模造品のようなものである。だがしかし、刃先より感じる威圧は殺傷力の高さを物語る。

「まずは……その胸糞うぜえどてっ腹に風穴をお！」

挨拶代わりのような言葉だが、実はこの一撃で異形は終わらせるつもりであった。

大きく振りかぶり、醜い笑みを浮かべながら異形はフルスイングする。

豪々と空を斬りながら一直線に弾道する槍。驚くことに、獲物の女性に届く前にその形は変わっていく……。回転も加わり相手を突

き殺すころだけに特化した武器へと変貌した。

圧巻なる速度と破壊力に、立ち尽くす女は為す術もなく……？
立っているだけであった。

――碎ける

端から端まで、矢先から取っ手まで余すことなくそれは崩壊した。
あるのは紅。赤く赤く……どこまでも「紅く薄い壁」である。それが女性の、ティア・グランツ・ミルフィーネの前にあるだけである。

「……は？」

呆けた表情で唾然とする異形がそこにいた。自分が渾身の力を込めてぶつけた槍が相手に当たるところか、薄っぺらい紅の壁に阻まれ、あろうことか粉々に粉碎されたのだ。無理もない。

理解できないというより、信じたくないものであった。

異形が投げし槍の名は“グロス”。意味は「不可避」。文字通り、やつの人生において一度も貫けぬことがなかった自慢の槍である。投げ放てば一撃必突となって敵を射抜く……天威無双の槍であった。避けられるはおろか、碎け散るなんて。考えもしなかった。

「終わりか？」

ゆつくりと、上からぼろぼろと崩れてゆく紅の壁より女性が見えてくる。

壁は最後は塵となって空へ消えていく。それは鮮やかであり、美しくもあった。目を瞑り自身が出現させた壁の逝く末を感じる月

の女神の表情は、まさに見惚れるを体言させるものであった。

ハクはその動作だけでも目を奪われた自分に驚く。本当に、彼女は凄い。動作一つ一つが美術的価値があるのではないかと思えるほど、綺麗だったから……

「……………」

身体を一瞬小さく丸め、地を蹴り後方へ飛ぶ異形。

……やばい、やばい。桁違いにやばい。頭の中は警告のブザーが鳴り響くのみ。

「くそっ、くそ！　せつかく封印が解けたってのにまだ一週間じゃ力が出せねえ……！　さっきの槍も実力の三分の一しか出せてねえ……」

小声で、ぼそぼそと今の状況を悔やむ。

封印が解けた一週間、彼は自分の力を回復することだけに全力をおいたが、それでも現状は全盛期の三分の一。異形は甘かったのかもしれない。これだけで充分だと思ったことと、それ以上にこの学園に在籍する生徒の「力量」の違いを。

どうするべきかグルグルと必死で思考を回転させるが、答えは出なかった。さらに――

「もう終わりのかと尋ねているのだが？」

「！」

「……なんだ。やはりこの程度か。うむ、時間をかけていいから全力の攻撃をしてきて構わんぞ。さして意味もないだろうが、な」

「……っ！！」

ティアは先ほどの一撃で異形の実力を計った。結果は、「取るに

言わなくても、それは伝わってくる。力が回復していないとはいへ、ここまで侮辱された自分自身に煮えくり返りそうな己がいる。

その言葉は、異形を挑発する意味もあった。ティアにとつて、やつを考えさせてはいけない理由があつたからだ。何故なら……

挑発は成功となる。

先ほどと同じである。異形の上空より槍が出現……であるが、数
がやや違っていた。一本一本全てに時間差、威力の程を計算し尽く
し、殺傷なる舞を魅せるが如き……槍の波。

槍。槍槍槍。槍槍槍槍槍。槍槍槍槍槍槍槍。出現し、出現し尽す
槍の軍勢。その数、四十六本。

「ほお……本気ではないか。面白い」

「ふふふつ、塵も残らん、な。かすり傷も負わすことが出来なかつた者が言うセリフではないな」

どこまでも挑発に乘せられた異形。どうやら、口喧嘩では彼は相
当弱らしい。

四十六の棺がガクンと地へ降り、その速度を止めぬままありとあらゆる方向より突撃した。地の王と称された妖の眼前は、残像が行き来し殺傷する命を受けた棒の数々。

……右手を前へ、大きく開く。微笑む女性、髪がふわりと浮く。
妖力が……爆発する！

「ブラット・ガルーテン」

槍の軍勢はそれはもう圧巻の舞であった。

正味、上空で見ていたハクでさえも槍全てを滅すことは出来なかったであろう。もし彼があそこにいたのなら、「破壊」ではなく「回避」することを決断していた。あまりにも予測不可能で難解なものに初見で正面から挑むのは愚策といえる。

けれども、地の王は違った。

回避するどころか、一歩前へ出るヴァンパイア。ハクも異形もその行動に驚嘆する。畏怖し立ち尽くすならまだしも、歩み寄る行為は理解し難いものである。

数秒の間隔。異形の“グロス・タメリオン”が発動し、ティアが一歩前へ進むまでの間……3秒。

次の1秒は槍の軍勢が彼女に突撃する瞬間。彼女を刺し殺す瞬間。身体を射抜くだけ射抜く瞬間。

そして同時に――

碎ける瞬間

「……………」

異形は沈黙する。

何を言おうか、何を考えていいのかわからない。わかるはずもない。わかりたくもない。

“グロス・タメリオン”は彼の奥儀のようなものである。力が回

復していないとはいえ、一本一本に計算しつくした数刻なる世界。どこから来るのか、どの速さで移動するか知っている者は異形のみである。

彼がいた世界……『冥界』において、この技を受けて生きた者はいない。ましてや……全ての槍を、一本残らず、形も残さず、原型さえも崩壊させることなど

「あつてたまるもの……か」

眼前に広がるは『園』。紅の色を宿した、地より現^いでし鋭利なる棘。棘。棘。その数……

「一千と四百本だ、異形なるものよ。数での勝負がご希望だったか？」

彼の前に彼女は見えない。当然だ。あるのは自分が浮いている高さと同じぐらいまで伸びた棘。

それしかない。

それ以外ないのだ。右を見ても左を見ても、あるのは己が先ほど発動した槍を地より貫き、破壊し、跡形もなく滅した紅の刺剣。その数、彼女の言葉を借りるならば一千と四百。対し、自分が先ほど出した槍の数は？ ……ああ、四十六か。

「ふ、ざける、な」

「嘲笑などしていない。失礼な奴だな」

「……っ！ ふ、ふざけるな！ 何だこれは！？ 何なんだよこれは！？」

「美しいだろう？ まるで薔薇の様だろう？ 私のお気に入りだな。ただ、残念ながら本当に薔薇は出せないから『園』という表現を入れているのだ。“ブラット・ガルーテン”。意味は『鮮血の園』だ」

パチンツと指を鳴らすと一千を超える鮮血の庭園は瞬時に塵となつて消滅する。

『魔力』を使い果たした異形は、宙に浮くことも出来ず地へペタリと落ちる。そこへ歩み寄る地の王。

「私の血は大地へ一滴落とせばそれだけで準備が完了するのだ。後は私の妖力で如何様にも出来る。壁を出現させることも、庭園を築くことも。……後ろから、貴様を射抜くことも」

一步一步進みながら言葉を重くしていくヴァンパイア。

「さて？ そろそろ終わりにしよう」

「……っ！」

コツツと歩くを止めた月髪の妖。目の前には、学園を怪という名の混乱に陥れた張本人がいる。

対し異形は必死で考えた。全脳細胞をフル活動させ今の打開策を死ぬ気で模索した。しかし、答えは出ない。あまりにも、彼女の力が凄まじすぎたから。

どうする、どうする。このままでは冥界に還るところか俺は殺される。嫌だ、嫌だ！ 死にたくない、死にたくない、死にたくない！ 還りたい帰りたい返りたいかえりたい。

けど、どうすれば……

「終わりだ」

「!?!」

ティアが、地より一本の剣を召還す。そして異形目掛けて振り下ろした！ 彼女は異形を殺すつもりはない。殺してしまえば皆を助

ける手段がわからなくなってしまうからだ。ゆえに先ほどの“鮮血の園”で奴を殺すことはしなかった。致命傷の手前あたりで済みます。その時、異形に最悪の案が生じた。否、実は今ティアが言った言葉で思い出した。

それ即ち、ティアが恐れていたことでもある。挑発した理由も、全てこの発想に至らせなかったための布石であった。しかし、彼女は一つのミスを犯す。それは、今の一言。

『終わりよ』

数十分前、体育館で鎌鼬の女にトドメをさされそうになった時も同じことを言われた。

異形は、体育館で実はチロロにもその圧倒的な力でねじ伏せられていた。力が戻ってないとはいえ、敵の予想以上の強さに負ける一歩手前であった。

しかし、彼は思いつく。土壇場で一つの案を思いつく。自分が助かり、かつ優位に立て、そして何より……敵を恐怖に陥らせる方法。それは――

「仲間を殺すぞ？」

「っ！」

ピタリと、剣が止まる。異形の目の前で。

恐れていた、最悪の言葉。簡単に簡潔で安易な発想。しかし、しかし……！ 終わりの一言。

「いいのか？ 俺を殺せば仲間は助からんぜ？」

「ぬかせ、それは貴様を殺した後にやる」

「くくくつ、あいつらは俺様の『魔力』で練り上げた特殊な空間で閉じ込めてある。この世界にいる以上、俺以外に解くことはできませんぞお？ お前らも感じていただろ、俺から一切の妖力が感じないことを」

そうだ、異形は確かに能力を発動していた。しかしその際ハクたちは妖力なるものを感じ取れなかった。当然といえる。彼は冥界の住人。そして冥界の者は妖力なんてものは使わない。あるのは、『魔力』と呼ばれしもの。

どちらもその世界の住人にとっては身体より発するエネルギーに他ならない。しかし、質合いが違うのである。双方自らの能力を行使するのに必要なものであるが、質たるものが違うため、お互いに感知することはできないのである。

笑いが止まらない。蹴り飛ばされるティア。

「っが！」

「ひやはははははははは！！ どうした女あ？ 俺を殺すんじゃないかよ！」

「ティア！」

「おっと動くなよ優男。てめえが動いたら捕らえてある奴らを殺す」「っ！？」

形勢逆転である。何故もっと早く思い出さなかったのか。この方法であの鎌鼬とかいう眼鏡女もボコボコに出来たではないか。

それはもう無様に、滑稽に、思う存分^{なぶ}捌ることができた。最高に楽しかった。結局はこいつらは仲間を助けるために来たのだ。ならばそれを盾にすれば当然……

「何もすることはできねえよなあ！」

「っああ！」

地面に横たわるティアの腹を力の限り蹴り上げた。苦しそうに腹を触りながら悶えるティア。その様子に歓喜する異形。待ちに待った、望んでいた舞台が今眼前にある。

最高だ。倒れるティアの髪を掴み持ち上げる。悲鳴をあげながらも睨む吸血鬼。

「おお怖。だがまあ、俺もあんま『魔力』残ってなくてよ。時間かけてゆっくりは殺せないんだ。残念だぜ。……だからあ」

パチパチッと異形の右手が光る。現われしは一本の槍。

「――！」

「理解が早くて助かるぜ。お前やっぱいい女だなあ」

「ティア！」

「だからてめえは動くなって言ってるんだよクソ男！二度も言わせんなよボケ。テメエが動けば仲間死ぬんだからな！」

（どうすればいいか、答えは出ている。奴の言葉は嘘だ。

チロロさんもこの言葉に負けたのだ。敵が皆を囲っている以上、手出しは出来ない。

だったら俺のやることは……！しかし、もしそれが本当だとしたら……！）

ハクは今自分がどうすべきか苦悩した。

答えは出ているのだ。このままではティアが殺されてしまう。しかしティアを助ければ皆が。

事実、ここで仮にハクが異形を退けても、彼とティアの力では異形が作り出した魔力の創造物を消すことは出来ない。魔力と妖力の

壁は想像以上に厚いものであった。

けれど、それを例え知っていたとしてもハクは目の前の女性を見殺しにはできなかった。

が――

ティアの目が、ハクのそれを阻止した。彼女の瞳が、そう言っているのだ。

皆を助けてくれ

「――っ！ ティア……！」

自分はどうすればいいのか、今何をすれば彼女を救えるのか、どう行動すれば皆を……！

思考は螺旋階段が如き永遠に答えが出ることはなかった。そしてそれは今絶対的に必要な時間を容易に喰らう。異形の槍が完成した。

「はい、それじゃあ……さよおならあ！」

「っ！」

バキンっ！ 砕ける音が響き渡る！

今はそんなことを悩んでいる暇はない。目の前の女も救えず、何が出来るといふのだ。ハクは一人の男として、当然のことを選択した。しかし、ハクは砕いた長方形の箱から出れなかった。何故だ、箱は粉々に壊したはずなのに……！

「ギャハハハハ！ てめえが壊すことぐらい予想済みだってお！ 予め五層の箱にしてあんだよ！」

この時、ハクは悟るべきだった。

敵が魔力で作っている以上、自分は捕らえた皆に手出しできないと。事実、そうである。しかし、今彼は破壊した。自らを囲っていた箱を。魔力で作られたはずであろう箱を。何故か。

その理由として、塔へ入る直前に一人の人間が施した術式であったことを。悟るべきであった。

けれど、今の彼はそこまで行き着くことはできなかった。優しさ、甘さは龍遠　ハクにとって最大の弱点である。彼もまた、一人の男に変わりなかった。しかし同時に、ハクが強くなる材料でもある。彼は、まだまだ強くなれる。身体的にも、精神的にも。

けれど、その成長は一人では無理だ、不可能だ。だから……！

「ティアあ……！！」

「いい加減『妖』には飽きたんだよお！　死ねえ！」

ドスッ……！

ポチャン。

※ ※ ※ ※ ※

俺は本当に甘い。ぬるい。無様だ。

龍……。この世界で王と称される妖。そもそも、王って何だ？
偉い奴か？ 強いことか？

違うだろ、そうじゃないだろ。王ってのは、そんなことじゃないだろ。

結局、俺は目の前の女一人救えない屑だったのか。その程度だったのか。

……嫌だ、そんな自分で終わるなんて嫌だ。納得できるわけがない。してたまるか。

砕く！ 五層とか関係あるか！ ぶっ壊す！

奴の右手にある槍。この位置からどうにかなるか、“迅欄”で間に合うかギリギリか！

やるしかない……………！？

何だ、あれ？

※ ※ ※ ※ ※

ハクは自らを囲っていた箱五層まるごと破壊した。

今、自分がすべきことはティアを守ること。瞬時にそう判断できればと悔やまれるが、それは彼の成長と共に培っていくであろう。

ハクは視界に槍を捕らえる。神速を可能とする“龍遠体術 伍式 迅欄”を発動させればギリギリ間に合うかどうかの境であった。迷うなんてもの、思考するまでもなく彼は……………？

発動させる直前、止まった。

槍は、ティアの身体を射抜くとはなかった。

「……あ？」

正確には、身体を射抜く手前で『阻まれた』のだ。

何に？ 液体に。

どんな？ 透明な。

一言で言うとうと？ ……水。

「「水？」」

三人が同時に言った。誰一人、今の状況に答えが出せなかったが、そのうち二人は悟る。

自分たちは知っている。一人だけ知っている。「水」に関する者を。一人だけ知っている！

「そうですか。『妖』には飽きたのですか」

瞬間、異形は信じられないほど上空へ吹き飛んだ。理由は地から出現した濁流が如し水の押襲。

高々と打ち上げられた異形はグルングルン回転しながらペチャリと落ちた。魔力もほぼゼロのため、空中に浮かぶことも出来なかったのだ。

それでも今の状況に理解できないのか、すぐさま前へ向く異形。あるのは未だ出ている濁流。

「何だあ！？」

「妖に飽きたと発言されました、そんなあなたに朗報ですよ」

濁流が徐々に落ち着いていく。同時、徐々に見えてくる。

その姿は、小さいながらも確かにそこにいた。

水色の髪。小柄な体格。手が袖で見えないほどの小ささ。けれど纏いし妖力は多大、巨大。

水が弾け飛ぶ。水蒸気となって、霧となって散開する。

それを扱いしは一人の少女。南無組の少女。六稟が少女。左眼に隻眼を付けた少女。

「この世界に存在し、もう一つの種族——」

啞然と見る異形。驚きを隠せない龍とヴァンパイア。しかし二人の顔は最高の笑顔へと変わっていく。

それは同時に解放された証。消された、いなくなってしまった皆が解き放たれた証。

不利だった局面が有利となり、また不利となってしまった今の局面を一気に盛り返した証。

そして……！ この奇天烈極まりない怪が終わりに近づいた証！

其が少女の名は

「精霊がお相手しましょう」

「「音夢！」」

水月 音夢、参戦———！

before ピリオド

衝撃的だった。ハクとティアにとって、これほど驚きと喜びが同時に感じることはなかった。

もはやこの学園内において残っているのは自分らとヴァンのみ。戦闘するヴァンを想像できないため、眼前の異形を止めるのは自分たちしかないと思っていた。

しかし、今いるのは誰だ？

もう消えてしまったはずの生徒。異形によって別空間に移動させられてしまったはずの精霊。もしかすると永遠に会えないかもしれないとさえ思った……友。

ニコリと彼女は二人に微笑んだ。

「よかった……間に合って。危機一髪でした」

「音夢か？ 本当に音夢なのか!？」

「はい、私ですよティアさん。二人とも無事で本当によかったです」「それは私のセリフだ! ……う、うう。心配したんだぞ」

ほっとしたのか、目からスウツと一滴の雫が流れゆく。

ハクも上空から降りてきて、二人に駆け寄る。

「皆は無事なのか？」

「もちろんです。ただ、捕らわれていた空間より出るとき皆、別々のところへ飛んでいってしまったから少し離れているかもしれないかもしれません」

「いや、無事ならいいんだ。しかしどうやってこの空間に入ったんだ？ ここは一応あいつの……」

ここが異形が作り出した空間なら外部から入ることはできないはずとハクは疑問に思っていた。

その質問にも笑顔を絶やすことなく、順当に返そうとする音夢。しかし――

「ウギャラららああららあじょヴおうんめじゃあら!!!」

甲高い怒号がハクたちがいる空間に響き渡った。

もはや異形に残っている魔力はない。だがしかし、この現状を彼は絶対的に受け入れ難いものであった。納得できない等という、生易しいものではない。起こった事象そのものを否定する勢いであった。

ゆえに異形は最後の手段をとる。

奥儀ではない。文字通り全てを投げ捨てた、魂を引き換えに起こす手段。

このままいけば自分の敗北は明白。ならばもう、自分が還る方法など模索する意味はない。還えれないのだから。決まってしまったのだから。それならば、もはやこの命、今捨てようが後に捨てようが同等の価値しかない。

だから……!

「iiiiiiiiiiiiiiiiiiii!」

ブチリッ、と異形は両耳に付いていた十字架のアクセサリーを引きちぎった。右に二つ、左に一つ。あまりの勢いに取れた後の耳は血が滝のように流れている。しかし彼は気にも留めない。これを使う以上、もはやこの身体など無意味となるからだ。

それ即ち、異形がいた『冥界』においても禁断の技。他の世界にいる時のみ発動できるもの。なれど、冥界の住人にとっては死を意

味する。何故ならば……

己が魂を対価とするからだ。

三つの十字架を投げる。鮮血に染まった十字架はクルクルと回りながら地面に落下した。

同時、十字架は消え青白い煙とともにそれは現れた。

「我が魂の盟約に於いて汝らを召還す……！」

三者三様同一であった。瓜二つ、いや三体いるため瓜三つというべきか。

体長おおよそ4メートル、鎧を全身に着ており顔も見えない。右手には身の丈ほどの巨大包丁を携え、鎧のあちこちには返り血が付着していた。

冥界の最下層【ドトリギリ】と呼ばれる、囚人たちを収監する監獄が存在する。その監獄を守りし三者がいる。彼らは収監される者らには決して手を出さないが、一度出ようとする者には躊躇、情け一切なく殺す。必ず殺す。絶対に殺す。……殺すことだけが、彼らの使命。

「ヤレ！」

異形の命令とともに、冥界より召還されし門番は一斉に飛んだ。もちろん、狙うは三人の妖と精霊。ティアとハクが構えようとするが、その前にいた音夢がそれよりも早く、それよりもはっきりと行動にでた。印を結び、彼女の力が発動する。

「水模みずもに浮かびし小弟たる縄を与えん……“水練すいれん供花”」

ドパアと、音夢の足元より水があふれ出る。その水はティアとハ

クの足元を通り過ぎ、彼女を中心に直径10メートル級の水溜りが形成された。その速さたるや、まばたき一回分に等しい。

そしてそれだけに終わらず形成された水模より蔓が生える。もちろん水で作られたものだ。シウルシウルと小刻みに動いた後は一瞬だけピタリと止まり……目にも留まらぬ速さで蔓は向かった！その先は全て同じ……上空より落下してくる、三体の異形より振り下ろされた肉斬り包丁である。

「ハッハア！　んなもんで“ガリオロス”どもの肉斬り包丁が……！？」

蔓は何も一本や二本ではない。三体に向かつていったとはいえ、数は一体につき三十は超える。しかも一本一本が信じられないほどの強度を誇り、引きちぎろうとしてもビクともしない。それを操るは、左眼に眼帯を付けし少女であった。見える右目で彼女は全ての蔓に的確なる命を送っていた。

異形は驚愕する。

彼女が捕らえている者らは、冥界の監獄における番人だぞ？　それを三体同時に止めた……だと？

異形の眼に映りしは、なんとも可憐な少女であるというのに。

<『精霊』用語辞典>

【水の精霊】

水を司りし精霊。六稟が一角。水と称される気体・液体を自在に操ることが可能。

もともと水の精霊の先祖は、氷の精霊の先祖と同じである。しかし、長き歴史に渡り水と氷の識別・認識が変化。結果として水と氷を司る存在も別れていった。

一族の多くが聡明・落ち着きがあり争いを好まない。

水に関係する人魚やそれに準じる妖・精霊とも頻繁に交流しており、どことも分け隔てなく接する一族である。ただ、自身の天敵・相反ともいえる『火の精霊』とは極力避けたいとしている。彼らが作りし「極水」と呼ばれる水は料理や飲料水に最適であり、わざわざそれを求めて足を運ぶ者も多い。

余談であるが、音夢は水月一族の三女である。跡取りは長女が、次女は人魚であるルカの歌姫一族の元で働いており、特に彼女はやるべきことはない。それゆえ父より大層可愛がれている。が、最近「うざい」と思い始めている自分に悩んでいたりもしている。

普段の彼女からは想像も出来ない様子に、ティアとハクは心底驚いていた。けれど、音夢の“水練供花”の元来の強度は今現在、かなり低下している……。異形によって別の空間に幽閉されていた時、様々な妖・精霊が何とか外に出られないか模索したものだ。それは音夢も例外ではない。結局、魔力と妖力の狭間の厚さにより全て徒労に終わった。それゆえ、実際のところ音夢の妖力は底をつきかけていた……。ゆえに――

「……クッ！」

「何のために魂を代償にしたと思ってる！ さっさとその糞水女を殺せ！」

残り数秒。ほんの2，3秒で“水練供花”は崩れる。

異形も、異形が召還せし“ガリオロス”もそれを直感した。所詮はただの

「ハーツハツハツハツハツハアアアア！！！！」

突如、黒き空間だった場所に地響きが鳴る。グラグラと、地面が横に縦に揺れる。

何事か辺りを見渡すハクたちの中、一人の少女だけがクスリと笑った。自分のなすべきことは別段眼前の敵を倒すことではない。そう、あくまで時間稼ぎを出来ればいいのだ。

割れる。

地面が、異空間が、黒かった周りが、全てが砕け散る。

砕けた直後、場所は我意の塔最上階となった。どうやら、ハクたちが塔へ入って異形の空間にいた間、どういう構造かは知らないが塔の最上階へ移動していたようだ。

その砕けの中心にいるは一人の青年。赤く燃える、轟々と燃える、圧翔の爆炎を纏いし炎蛇に乗って地より出現した青年が現れる。おなじみの、ツンツン頭。

「空間が、砕けただと!?!」

「面白いことやってんじゃねえかよああん!? 俺様も混ぜろよ!」

「誠!」

ティアがその姿を確認し、感嘆の声をあげる。

炎に纏いし、“豪火灼炎——炎なる蛇”を発動させ颯爽と登場した誠が参戦した。

炎なる蛇は地より出現したと同時に、真上にいた三体のうちの一体を丸呑みにしそのままの勢いで壁に突進した。呑み込まれた“ウロボロス”の一体はそのまま灰へと変わっていく。

「ああ? 物足りねえなあ……」

啞然と見ていた異形はすぐさま残りの二体に命令する。

「な、何してやがる！ さっさと」

「龍遠体術 玖式」きゅうしき」

風。

吹き荒れるであろう風が一つの焦点へと集結していく。

上昇気流のように、まずは一点の場へ向かっていく。気流と違うのは、そのまま上昇せずにその場に留まることであった。

巻き込み、巻き込まれ風という風が集まりゆく。そよ風も風も猛風も爆風も激風も全てが収束する。風という風そのものをほんの小さな球体に……妖力によって具現化された丸い丸い球へと変えていく。濃縮し、圧縮し、凝縮する。それ即ち敵をなぎ倒すものではなく、多勢に無勢の際に使用するものでもなく、足止めさせるものでもない……。

超克一点特化型・収束一極弾道体術。其が狙うはただの一なる点のみ。

限界まで練りこんだ球風の塊。名を

「風塊」かぶたるま」

ありとあらゆる風を一極に集中し、具現化された風の球体をハクは蹴り飛ばす。

直撃するは二体のうちの一体。ちょうど腹の下真ん中にそれは命中し、そして――

「ガ」という言葉だけをそこに残し、直撃した一体は時速200キロオーバーでかつ飛んだ……。勢いはそのまま、塔の壁にぶつかり、砕き、破壊し、まだ勢いは終わらず上空400メートルはあろう最上階よりその生命体は『飛翔落』した。

ものすごく飛んで飛んで……やっと落下した、時にはすでに……それは己がいた世界へと消えていった。どうやら、意識を失

うかそれに準じるものであれば敵は消えるようである。

……………。

三体のうち残りの一体となった“ウロボロス”はそれを黙った見ていた。カタカタと鎧が震える。

当然だ、あまりにも理不尽で場違いな強さ。彼は敵の技量を肌で感じ、盟約に背き緊急召還返しを発動させ――

「ギ、ギギギイイイイイ」

る前に最後の一体は消えた。

否、取り込まれたのだ。盟約の条件として、約に背きし者は召還した者の命に絶対となる。異形は“ウロボロス”が還る前にすぐさまそれを実行した。つまり……

盟約を背いた以上、何をされても文句は言えない。ならば、その『魂』――

『俺によこせえ』

魂を食し、糧とする。魔力、極限解放。

「グロス・タメリオン・天蓋爛漫」

その様をハクたちも理解する。

敵が魂を食せばどうなるかはおよそ予想がついた。自分らと同じ妖力、総じて魔力が自らのエネルギーと同じなら、その発生源ともいえる魂を食せば。

強大な魔力が手に入る。それこそ、やつの力を完全復活させるほどの。

“グロス・タメリオン”の総数は四十六、だった。

が、今は違う。魔力を回復し、本来の力をも戻った異形。もはや何も恐れるものはない。恐れるはずもない。だからだろう、彼は発動させた。自分でも不可能と考えていた、最大級の槍の大演舞。数はもはや……わからない。

「終わらせようぜ」

決着の時は、近い。

※ ※ ※ ※ ※

「チロロちゃん、大丈夫う？」

「ちゃんは止めてください」

「ハッハッハ。いやいや、結構マジで、大丈夫？」

「はい、問題ありません。ご迷惑をおかけしました」

「うんにゃ。チロロちゃんが無事なら俺は全然いいんよ」

「……そう、ですか」

「あれ、照れてる？」

「照れてません！」

「ハッハッハ。怖いなあごめんごめん。それじゃあ、チロロちゃんが元気になったということで一っ」

「はい」

「「お返し、しにっこうか」」

出陣するは、ヘラヘラ男と受付統括長。

変態と石田と決着と

異形は形を変えていく。

俺を始め、ティアや音夢、誠もそれを黙って見ていた。

両耳からの出血は止まり、やや曲がった角が額の左右より生える。腕に巻かれていた鎖は碎け散り、パラパラと地へと落ちていく。上着も破れ、異質な文様が上半身に浮かび上がり五色の髪は肩まで伸びる。華奢だった身体つきは、今や剛勇な肉体となっていた。

異形は目を瞑ったまま動かない。槍はその数をまだまだ増やし、かつ姿を変えていく。どうやら、作り出した槍をさらに改造しているようである。つまり、こちらに時間がある。

「ああん？」と睨みを利かせながら誠が言う。

「変態しやがった！」

「……変身の間違いだろ」

「同じだったの。ま、それは置いといて……ラスボスらしいじゃねくか。テンション上がるぜ」

「一応、聞いていいか。誠」

「あん？ 何だよ」

「戦えるのか？」

「もちろん、無理だ」

「……………やっぱりか。」

異空間に閉じ込められていた時、黙って中で何もしない性格とは到底思えない。おそろく、渾身の妖力で異空間を破壊できないか色々試したはずだ。もう、ほとんど妖力は残っていないだろう。さきほどの“炎なる蛇”は大方、火事場の馬鹿力に近いものだろう。彼ならそれぐらいはやってのけるはずだ。……と、なると。

「音夢もか？」

「はい。ごめんなさい……」

「謝らないでくれ。さっきのことは本当に感謝しているんだから」

「そうだぞ、音夢。もしもあの時助けてくれなかったら、私は死んでいたかもしれないんだ。この借りはいつか、必ず……！」

「借りだなんて、そんな。当然のことをしたまでですよ」

えへへ、と少し笑う音夢。

彼女の助けがなければ、ティアはかなり危なかった。本当に来てくれて良かった。

ティアは大丈夫だろうか。正直、充分戦ってくれた彼女にはこれ以上無理はさせたくないが。っと思つてティアを見ると、「任せろ」と言わんばかりの誇らしげな顔で応えてくれた。ありがたい。しかし、この現状……どうしたものか。

天を覆いつくす槍。

空中で見下ろす異形の後ろには、それこそ塔の天井が見えないぐらいの槍があった。さきほどティアと戦った時には精々三十か四十分ぐらいだったが。魂を喰すという気色悪いことをするだけはある。

二人で戦うには、音夢と誠を守りながら戦^やることになるか。

一方を守りに、一方を攻撃に分担するのが妥当だな。なら、俺が

「お、いたいた」

後ろから突如バゴンツと破壊音が鳴り『雲の道』が出現した。俺にとって見慣れた、何度も見てきたそれだ。親友の十八番である“ウィル・ラザード”。上へ滑り登って来た雲の精霊、八雲 空が登場した。

「やっと見つけたあ……って、何あれ？」

「ラスボスだよ。俺様も今確認したところだ。変態しやがったんだぜ」

「変態？　そうか、あれ変態なのかさ。まじドン引き」

誠のフリに軽く乗りながら答える空。

その横から、ややおずおずしながらも音夢が質問する。

「え、と。空くん、ルカちゃんは？」

「ルカ嬢なら下で保健の……あー、癒水先生だっけ？　と一緒に看病してるよ」

「で、颯爽と登場したお前は何しに来たんだ？」

「おいおい、ハクちゃんどうしたのさ、機嫌悪いね」

「ちゃん言うな。人手が欲しいんだよこっちは。空、戦えるのか？」

「無理」

「マジで何しに来たお前」

アッハッハ、と笑う空。異形は未だ目を瞑ったまま。あと数分で全槍が変形を完了する感じた。

こちらとしては戦力が欲しいところだ。空の“白煙回廊”があれば皆を守るだろうが、彼の妖気を視るに、それを作り出せたとしても長くはもたないだろう。強度も低そうだ。

ふう、と溜息をついて対応策を考えていると……ん？

何で、“ウィル・ラザード”消してないんだ？

邪魔だろ、妖力もないのに。

「俺が来た理由は、このためなんさ」

右手を力強く握る。もうそんなに残っていない彼の妖力を振り絞

るように。

同時、空が作り出した雲の道が動き出す。……音が聞こえてくる。それは滑りゆく音。登りゆく音。こちらに向かってくる音。

ニカッと笑いかける空を前に、“白雲の帝道”を駆けて来た二人が参上した。

少し見慣れた、最近知り合った、その二人が参上した。

「やほお、皆、元気い？」

「五人とも、無事なのですね。何よりです」

石田 健次郎と、八木 チロロが現れた。

※ ※ ※ ※ ※

「これ、どういことなの……」

『どうもこうも、ヴァン様の力ですよ』

「僕、触っただけだよ」

『まだ赤子程度の力しかありませんが、それで充分。魔力にとって、この力は未知ですから』

「いらないよ、こんなの。それに、この程度なら生まれた時からあるよ」

『そうですか。今回はそれが功を為したようですね』

大きな溜息と同時に、ペタリと座る。

その横に、ふわりと着地する付き人。

「皆、無事かな」

『感じるのでしょうか？ 皆様の妖気が』

「うん」

『その妖気は、何と言っていますか？』

「……。ふふっ」

苦笑。そうだったね、と横にいる付き人に言う。
でしょ？ と付き人もその笑顔に応える。

「大丈夫そうだって」

『はい。私にもそう伝わってきます』

「僕の力、皆にばれないよね」

『きつと人間なる少女の力と判断されますでしょう。問題ありませんよ』

「そっか」

もう一度、深く大きな溜息をつく。

青年は願う。どうか、この力、永遠に解放されませんように。誰にも悟られせんように。

しかし付き人は願う。どうか、この力、必ず解放されますように。彼の道標となりますように。

双方の願いは真逆ながら、根元は同じである。延長なる先も然り。ならばいずれ……結果は出るであろう。双方の願いを成就して。

※ ※ ※ ※ ※

空の“ウィル・ラザード”に乗って「我意の塔」最上階へ登って二人が到着した。

石田と、チロロさん。チロロさんは他に目もくれずいち早く俺たちのところへ来て皆の安全を確認する。一人一人を目で確認し、最後にニッコリと笑った。

対し、石田は「ん〜？」と辺りを見渡しながら嫌でも目に付く異形の姿を視認。数秒だけ異形を見ると、すぐさま顔をこちらに向け大げさなりアクションをしながらやって来る。

「皆大好き、学年主任こと石田あゝ健次郎。只今参——」

「ヴァンくんがいませんが、彼はどちらに？」

「トイレ辺りにいると思います。ちょっと色々あって」

「そうですか。いえ、無事ならそれでいいのです」

石田のセリフに有無を言わさぬ態度でサクッと割り込むチロロさん。
ん。

無事だった。

彼女の服はところどころ破れてはいるものの、命がどうこうというわけでもなさそうだった。異形が半殺しにしたなどと言った時はどうなるかと思ったが、こうやって目の前に現れてくれると、正直ほっとする。チロロさんが無事でよかった。ティアも同じように、緊張の糸が切れたような感じだった。

そっとチロロさんが近づく。

「もう大丈夫ですよ、よく頑張りましたね。後は任せなさい。彼に」

「僕う！？ いや、それはちょっと……」

ええ、と驚き半分、苦笑半分のニヘラ顔をしながら石田がチロロさんに突っかかる。

そんな石田の足をヒールのカカトで軽く踏み悶絶する様を見下ろす彼女は虫を見るかのようにだったが、同時にとても楽しそうだった。やはり、この二人は一緒に……な。

ヒィヒィと呻きながらも石田がヨロヨロと前へ出る。本当、忙しい主任だ。

「私が『陵辱』されたんですよ。仇を取ってください」

「陵辱って……ぷぷぷ。チロロちゃん淫乱。ただ殴られただけで

——」

「ヒールアタック」

「あだぁ！」

「とにかく。一応あの変態に言いたいことがあるのでしょ？」

さっさとあんたのやることやれよ、と睨みを利かす彼女を後ろに、やれやれと進む石田。

パチリ。

異形の目が開いた。

「もういいか？」

「あえ？　もしかして待っててくれたの！？　いやぁ嬉しいなあ」

「今の俺にとって時間稼ぎは無に等しい。せめてもの情けをな」

「うわ、超かっけえ。あ、でも一応、学園代表として挨拶はしようかと思ひまして……」

「いらぬ」

……槍が、落下する。

それはもう槍と表現するべきものではなくて、一種の壁というべきものであった。

音もなく、予兆もなく、ただただ無下に落槍するそれ。俺を含め、空、誠がなんとかそれを迎撃しようと身体を動かそうとした――が。

チロロさんがそれを目で制止した。する必要はない、と俺たちに伝えた。同時、彼女は「よいしょ」と右手に持っていた袋を仰向けにする。中に何か入っていたようで、二つの物体が袋から落ちた。槍は落下してくる。それは確かなのだが、それよりも俺たちは袋から投げ出された物体に目がいつてしまった。

それは、実に間の抜けたというか拍子抜けというか、こちらの予想の斜め上をいくもの。

1箱のトランプ52枚と、やや分厚い書物が一冊。
それだけだった。それ以外なかった。

「言っただでしょう？ 『後は任せなさい』と」

そうチロロさんは言って満面の笑みをこちらに向けてくれた。

何かこう、彼女の笑顔に二つの種類があるように思える。一つは広く使っている笑顔。普通に嬉しい時に普通に使う笑顔。けど、今俺たちに向けている笑顔はそれじゃない。もう一つの笑顔だ。

それは、ある一人の男に対してのもの。おそらく、この男以外の用途には使わないだろうもの。

俺たちの前に立っている、ヘラヘラした男に対してだけ使っているであろう笑顔。

落下する。

槍は降下する。もはや数がわからない、壁と表現するに近いそれが墮下する。

対し、男は立っているだけであった。

対し、男と常に一緒にいた女はそれを温かく見守るだけであった。
対し、俺たちは呆然と眺めるだけであった。

特に、それ以外の描写はない。なかった。

「……面倒だなあ」

たった一言、彼はそう言った。

その言葉を言い終わった直後だろうか。槍が俺たちに直撃した瞬間は。俺の耳が彼の言葉を聞き取った否かの間だったからきつとそうなのだろう。今では確認しようがないが、状況的・客観的にみて

間違いないと思う。

ガキーン！ と槍が突き刺さる音が周囲全体・四方八方・視界全域から聞こえた。

……聞こえたただけだった。

――――

あの時の秒単位の風景を、俺はきつと忘れないだろう。忘れることなく、できないだろう。

石田が言ったあのセリフと、槍が襲ったあの刻限。その間だけで行われた圧巻たる劇。

本が、宙に浮かんだ。

スウ……と浮かび上がると表表紙がパラリと開く。そしてそのまま思い切り開き裏表紙と表表紙がピッタリとくっついた。つまり、本を開くというよりも開くだけ開いて裏表紙と合わせる格好だ。当然ながら本の中のページは全開となった。まるで円を形にしたような具合に均等に。かなり分厚い書物だったのだろうか、後から聞いた話ではページ数956枚。とんでもない枚数である。いや、今はそんな枚数のことで気にしている暇はなかったな。

全ページが、散った。

約一千に値する、本の中なる頁が、散開した。

それが何をしたか。これ以上語る必要はないと思う。書物の横にチョココンとあった、袋から落ちたもう一つの物体、トランプは、本のページが散開したと同時に『主』のところへ迅なる速度で52枚全てが向かった。

その流れ全てが、先ほどの言葉が言い終わる間に行われた。

随分と描写が長くなってしまったが、それが俺の見た全貌だ。これからは、今起こっている状況について語りたい。それはもう、本当に。……くそっ、まったく。大したもんだぜ。

「皆さん、石田主任が先ほど言った言葉を思い返していただきますか？」

眼前の景色を満足そうに眺めながら、チロロさんが言った。

先ほど言った言葉？ 『面倒だなあ』の一言だろ？

「その前の言葉です」

見透かすように、彼女は言った。

俺たちは顔を合わせながらも一言前の言葉を思い出す。正直、憶えていないな。何か意味深な言葉だったならまだしも、普通の言葉だった気がするし。石田らしい、のほほんとした言葉だったような。

あゝ、何だったか。思い出せ。俺の頭はそこまで残念な仕様じゃないぞ。

思い出せ。

槍が降ってくる前だ。異形が『いらぬ』とか恥ずかしいセリフを言う直前だ。

思い出せ。

『あ、でも一応、学園代表として挨拶はしようかと思ひまして……』

これだな。……って何だいつも通りの言葉じゃないか。

いやに急かすから一体何だと思ったのに……。いつもながらの、

普段どおりな飄々とした感じで自分の立場としての挨拶をただけじゃないか。『学年主任』として挨拶しただけじゃないか。

……ん？ 学年……主任と言った……か？

学園代表？ がくえんだいひょう？ 学園（都市）代表？

※ ※ ※ ※ ※

ハクたちの周りには槍がある。槍が突き刺さる。

けれど槍の刃先に彼らはいない。白な、本のページがあるだけである。そのページが、まるで亀の甲羅が如くの形となって皆の周りをぐるりと覆いつくしているだけである。

彼らの前に突っ立っていた男は、生徒を守る為に書物の全ページを彼らに使った。

ちなみに、彼はいつも側にいる女性に「いらない書物お願い」と言ったが彼女が持ってきたのは世界に二つとない男の宝物『禁断の性・完全版』である。それを知るのもう少し後になってからであるが。

皆を守る代わりに男が自分を守るのに使ったのはトランプ。52枚の、どこにでもある普通のトランプ。

問題は、そんなものが。

そんな手で切れそうな柔な物が。

天を覆いつくさんがばかりの槍の攻刺を全て。

傷一つ つかずに 防いだことである。

妖力・妖気が男を循環する。それを直で感じ取ったハクたちは息を呑んだ。

そして、あろうことか、異世界より来たりし異形までもが、『それ』を感じ取れた。感じ取ってしまった。眼前の男から。

槍が、慎重に、引く。

信じられないというように、ゆっくりと、時間をかけて引く。ページが、螺旋階段のように旋回した。

パラパラパラパラ……！

はたしてこれは現実なのだろうか。

もはや言葉もなし、と言わんばかりの光景は、一体何なのだろうか。けれど、そんな感想お構いなしと、知ったことかと石田は、優しくも意地悪そうな顔をしながら開口した。

「この学園が代表。並びに、学園都市代表」

我意の塔最上階。その舞台にいる者は全て……二人を除いて全て。目を大にして見る。

「加えて、学年主任兼、男子寮内土・日トイレ掃除係」

書物の中身とランプが、螺旋階段の形をなして宙を舞う。

白面一概となる其が光景は、見るもの全てを見惚らすだろう。

そして同時に、いざ敵となれば、その景色は絶艶なる世界の幕と同義なり。

男は、笑った。常に側にいる女も、それを確認し、笑う。

「そして、この世界たる都市の治安・長を務めたる八人が一人」

照らすは、夕方の光。

「八帝将、『白帝』。石田健次郎だ」

※ ※ ※ ※

一枚が舞う。トランプが舞う。トランプに描かれるはジョーカー。切って、刻む。斬って、刻む。奇って、刻む。

他のトランプは石田の周りをゆっくりと旋回している。書物のページは俺たちを守るように制止したままだ。先ほど螺旋階段のようにグルグル動いていたが、今はそんな状態。現在動いているのは、たった一枚のトランプだけだ。

そう、たった……たった一枚の——『紙』。

焼いてしまえば消え、破ってしまえば儚く落ち、濡れてしまえば形を無くす、紙。それが、今は恐るべき速度で、仰天必然の力で、天井を覆いし槍を、斬壊していた。

異形は無表情だった。

笑ったり、怒ったり、発狂したり、快楽に興じていた前とは違っていた。……いや、もうそんな表情は許されないと思っているのかもしれない。何故ならやつは絶対的な自信があったからだ。

魂を喰し、魔力を全回復させ、もはや恐れるものはないとしていたからだ。

そんな自分のおそらく最大級の軍勢が、今。操作する暇もなく反撃する暇もなく終わらされている。

そう、たった……たった一枚の——『紙』に。

<『精霊』用語辞典>

【紙の精霊】

紙を司る精霊。紙という創造物である以上、全て彼らの支配下に置かれる。

紙は、下界にいた頃より人間にとって親しまれてきた産物である。

それは妖・精霊にも同じことであつた。長い歴史の中、紙はその形、用途を変え様々な文明・文化の発展に貢献してきた。また、歴史をひも解く上で彼らの存在は無視できないものである。

いふなれば、彼らあつての今であろう。それほど……紙とは、価値あるもの。意味あるもの。

これまでも、これから、紙は未来を歩む上でなくてはならないものである。だからこそその存在。

この世界の紙の精霊、石田一族はある程度慎ましく生きている。表舞台に立つことなど、滅多にしない。彼らはその歴史的な背景ゆえ、表舞台より裏方に徹することを好む。それはこの世界にきても変わらない。世界の現状を、行く末を、過去を、今を。その紙の力と共に未来へ託す。それこそが彼らの誇りであり、生きる意味であるからだ。

だからこそ、彼らが作りし紙はそこらの紙とは一線を画す。別次元と言ってもいい。見た目は普通の紙であるのに燃えない、破れない、濡れない。そんな紙を作るなど造作もない。他にも本や巻物、贈り紙に葬儀・祝宴紙。それぞれ適所に必要な時、それを極限に生かす紙を作り出す。彼らに依頼される紙の要望はどれも困難で理不尽なものばかりであるが、それが『紙』に関わる以上、彼らは責任をもってその任をやり遂げる。

あなたの周りにも、紙はあるだろう。ふと辺りを見て欲しい。必ずあるはずだ。きっとあるはずだ。

その紙は、『あなたのため』に存在しているもの。どうかそれを、少しでもいいから、感じ取って欲しい。それこそが、彼らにとって最大の喜びに他ならないから。

「さて、こんなもんかな」

石田が言い終わった。いや、やり終わったが正しいか。

時間にして秒単位で二十。それぐらいだった。彼の実力から考えれば当然かもしれないが、それでもやはり驚いてしまうものだった。槍が。天井をその存在で視界から消していた槍が。無くなった。斬られた槍は己が在りかを自らで為すことはできず、塵となって消えていった。もちろん、異形は他の槍を生み出そうとした。実際に生み出していた。けれどそれを含めて斬られたのだ。異形が出すよりも早く、石田の紙が斬り終えることで追いついたのだ。追いついてしまったのだ。

スウウウウ……トン。

異形が床に着地する。相変わらずの無表情で、石田を見続けたままで。

もう、彼は終わったしまったのだ。あらゆる意味で、終わったしまったのだ。やるべきことがない。笑うことも、泣くことも、現状に打ちひしがれることも、負け惜しみさえ言うことも……。

終着したのだ。今。

この世界における、都市の治安を任せられている、八人の将が一人によって。

「う、う、ううううう！」

プルプルと身体を震わせ、小さい呻き声を徐々に大きくさせ。

「うがあああああああ！！！」

異形は、飛びついた。

もうどうすることもできなかったのだろう。どうしようもなかったのだろう。

今、彼を立たせる支えとなっていないものはない。何一つ、ない。

あるのは自分がいるという事実だけ。そんな彼にとって、できることなんて……。

それでも、異形は俺たちに襲い掛かった。その悲しみを、鋭く尖った爪と、歯に込めて。

石田は何もしない。俺も何もしない。動いたのは、二人の女性。異形に弄ばれた、女性。

「今の貴様は不憫だが、一応けじめはつけさせてもらおう。それと……」

血を一滴垂らし、右手を前へ。

瞬間、血より直径30センチ程度の赤い円柱柱が出現。真っ向より突っ込んできた異形の腹ど真ん中に見事命中し、「ぐが」と言っただけとは真反対の方向へやつは飛んでいった。反動とはいえ、あそこまで飛ぶとはなかなかの威力である。

「私を蹴るなど、まったく恐れ多いことだ。私は攻めるのが好きだが、攻められるのは夫だけと決めている。悪く思うなよ」

そんな、どう聞いても俺に対して（実際、わざわざ振り返って俺を見ながら）言ったティアはふふん、と誇らしげに自慢の髪をなびかせる。

彼女にとって、これまでのやつに受けたもろもろを清算できたのだろう。満足そうだった。

対し、異形はかなり上空へ飛んだようだ。それに向かって、もう一人の女性がティアが作った円柱柱を駆け上りそのままジャンプする。黄色い眼鏡を右手でクイツと上げて、颯爽と飛び上がる。

「体育館で最後に言った、あのセリフ。もう一度言っておきましょうか」

チロロさんは空高く飛び上がりながら両手を挙げる。

同時、彼女の上より特上特大な刃が出現。でかい、石田が引くほどでかい。多分、「あれ、いつか俺にも使うかもしれない……」と思ってるな。顔が青ざめている。すまんが、確実に使うと思うぞ、石田。

異形もそれを見るや否や槍を二つ自分の両手より生み出した。まだそんな余力があったのか。

けれど、そんな槍などもう意味はない。

異形が放つよりも早く、石田がこれからの彼女への対処法を考えるよりも早く、夕方の光が消えゆくより早く、風の刃は振り下ろされた。せめて異形にできることは、叫ぶこと……だけだった。

「終わりよ」

そう、おそらく体育館でも言ったであろうそのセリフを最後に。

決め手たる一撃は放たれた。

最上階の床を崩壊させ、そのまま下の階へ落下した異形。大丈夫、まだ生きている。殺しはしない。それでは意味ないからな。

パラパラと、埃を払いながらチロロさんは笑みを浮かべる。

一緒に笑顔になる俺たち。その笑顔は一つの終幕を意味する。

やれやれ、よくわからなかったがどうやらこうやら。なんともこうにも。

この複雑でありそうで、単純でありそうな怪も。ようやく……。決着がついたようである。

やるべきことはまだあるが、これからのことを考えるとちよつと大変かもしれないが。

それでもやっぱり。それでもまあ、ね。

この一言で、許してやろうじゃないか。まあ、いいよそれで。

「疲れたあ」

皆無事で、皆笑顔なら。終わり良ければ全て良しってことで。この怪事件も、悪くないさ。

今日は、よく寝れそうだ。

ある少女の物語

後日談というか、そんなところを話そうと思う。

あれから2ヶ月が過ぎた。

学園内にいた生徒と、学園関係者は全員無事だった。幸いまだ学校が始まって日も浅く、学園都市が賑わうようになる2ヶ月後ではなかったからそこまで大きな混乱はなかった。けれど、一時的ではあるが別空間に幽閉された皆にとって、あの日の出来事はかなり精神的にくるものが予想された。ゆえに、学園側も「優しい嘘」をつくという判断にいたったようだ。

つまり、今回の不祥事は学園行事の一環であったがその途中でミスが発生。結果別の空間に急遽皆を避難させる形にしたという。本当のことを話せば人間という小鳥を公表しなければならなくなり、彼女の身の安全が危なくなる。それゆえ、石田を始め俺たち以外……他の教師でさえ事実とは公開されなかった。

本当にそんなことで大丈夫なのかと皆不安だったのだが、石田はいつものエヘラ顔で「大丈夫、大丈夫。こういう場合の対処は僕、天下随一なの」と自信満々に言っていた。生徒たちには多少の不安や疑心が漂っていたが、別段自分たちを幽閉しても何のメリットもないし、これも学園側の普通起こらないミスを体験できたと考えればちょっと面白いかもしれない。と、こちらが少しおどけてしまうほど彼らはポジティブ思考だった。もちろん、少数派はそれでも納得がいてなかったようであるが。

以前も回想したが、俺たちの価値観や世界観は無意識的に「今を

どう生きるか」を最も大切にしていることにある。

それに伴い、生きる上での色々なハプニングを前向きに受け止めるある意味豪快な思考は、今回最大限に生かされたといえる。つまるところ、楽しければいいじゃないかと彼らは思うのだ。

もし俺が彼らの立場だったとしても、別に自分に危害は加えられていないし、自分たちを思って隔離してくれたのならそれでいい。学校側も色々あるだろう、それぐらい多めに見てもいいじゃないか。と思って素直に納得してしまうだろう。ボロボロになった体育館を見れば尚更だ。自分たちがあそこにいれば危なかったと感じさせてくれたし、返って非難させてくれてよかったと思うかもしれない。

最終的に、一段落したから問題なし。と結論付けた生徒がほとんどだった。

先生側や学園関係者にはどう説明したのか実際気になるところだが、まあそれは石田に任せるとしよう。彼ならきつとやってくれるはずだ。何せ、八帝将の一人なのだから。世界で八人しかいない者の意見となれば、多少は優遇されるだろう。

そこに（生徒、関係者問わず人気・人望がある）チロロさんが加わればまず問題ないはずだ。

そんな感じで、今回の不祥事に関わる周りの対応は終わりにしよう。皆の楽観的で聡明な人格であることに感謝して。一人、小鳥だけが「よくこんなので納得できるのじゃな」と言っていたが、まあ気にしない。それが我々なのだから。人間である小鳥にとっては、とてもじゃないが理解できるものではないことは確かだろう。その点に関しては……。申し訳ない。

色々あった怪であり、収束に向かっているのだが、もちろんちょっと変わったこともある。

一例を挙げるとヴァンだ。あれ以来、何だか彼は独り言が多くな

った気がする。一人でいるのに突然ぼそぼそと話し出すし、いきなり驚いたり暗くなったり、明るくなったり。ちょっと怖い。それに、何だか彼からちょっとした違和感も……。んー、ただそれが嫌な感じはしないし、まるで空気を掴むような感覚。それに感じたり感じなかったり、自分で言っておきながらよくわからないものなのだ。ちょっと変だけど、ま、気のせいであろう。

※ ※ ※ ※ ※

先に申ししておく、これからやや衝撃的な事実が発覚する。それは小鳥のことで、彼の爺にあたる人物に対してだ。最初聞いたときは「ありえん」と皆が思ったが、そうでないと小鳥の不思議な力の説明にならない。人間が一人では俺たちのような『力』をもたないことは、さすがに知っている。しかし、彼女は『魔力』関係の事柄を知っていて、そして『魔力』をもっている。何故そうなのか、それが明かされるからだ。そしてその事実が、とても衝撃的なことだったのだ。

話を戻すと、実際のところ問題は別にあった。それは言わずもがな、今回の怪事件の原因であり発端者、異形についてである。

チロロさんの特大風刃で下の階まで振り落とされた異形は、しばらくの間意識を失っていたが一人の少女がほっぺをペチペチすることで目を覚ます。

「ッ！　ここは……！？」

「おお、起きたわい。元気かの？」

「貴様！　下界の小娘！」

「元氣そうじゃな。ではさっそく本題に入ろうかのお」

異形は小鳥が施した術式によって魔力を使えぬよう制限されていた。縄でグルグル巻きにされた異形は、小鳥の後ろで控えている俺たちを含め、睨みを利かせる。対し、小鳥は「ふんふふん」と鼻歌を歌いながら異形と話を始めた。

「ただの糞ガキじゃねえとは思っていたが、まさかここまでとはな」「惚れたかの？」

「死ね糞ガキ。命乞いはしねえ、殺せ」

「ふむ。ではさっそく」

「!？」

「おろ？ 殺せと言っておいて何じゃその顔は？ まさか、助けてもらえるとも思ったかや？」

小鳥には全てやつの思考が見えているように思える。本当に十二歳の少女なのかと思えるほど、今の小鳥からは見えぬ『庄』が感じられた。異形もまるで自分の心が見透かされているような気分になったのだろう。ギリツと噛みながらまっすぐ小鳥を睨む。

その異形に、小鳥はまさかの提案をする。

「お主がいた世界、つまり冥界に還れる方法があるのじゃが、どうじゃろ？」

「な、何だと……!？」

「おやや？ 今殺せと言った者がする顔ではないのおく？」

どっちが悪者がわからない構図になってきた。

「貴様の思惑はわかっている！ どうせ俺が無様にすがつたところを笑いながら拒否するんだろうが！」

「そんな趣味の悪いことはせんわ。ただ純粹に還そうと思うたのにお主が殺せとか言うからじゃろ」

「な、なら本当に俺を還してくれるのか!？」
「うむ」

パアアアとまるで後光が射したかのような表情になる異形。こうして見ると結構面白いなこいつ。

どう考えても罠と勘ぐるのが普通なのに、もう自分が還れる気になった異形は、嬉々としながら独り言をぶつぶつ言い始めた。

「ククク。そうか、俺は還れるのか……!」

「んで。さっそく準備に取り掛かりたいのじゃが、よいかの？」

「当然だ! さっさとしろ、俺は気が短いんだ!」

「では、ワシと契約を」
「断る」

ズバリ。きっぱり。はっきり。くっきり。

息をするな、と言われて断る、と返すような見事な切り替えし。

間髪入れずの問答だった。ここまで流れるような切り替えしはそうそう見られるものではない。ちよつと面白かった。

首をかしげながら小鳥が尋ねる。

「およい。どうしたのじゃ? ただ契約してワシの『下僕』になるだけじゃろう?」

「どこが『ただ契約』だ!! この誇り高き俺が、んな屈辱的なことをするか!」

「しかしこうするしか方法がないのじゃがお」

「だとしても、俺はやらん!」

「立場的に面倒なことになるのじゃよ、お主には還ってもらわんと」

「だったら!」

「そうじゃな。だったら」

ヒュツと小鳥の後ろから『封』二十枚が浮遊する。「え？」と呆ける異形。

「おい、おい。まさか」

「契約の仕方は簡単じゃ。お主の了解があればよい。では」

「ままま、待て」

「そもそもお主はこの学園内にいる者らの魂を全て使おうとしたのじゃ。それに対する『おしおき』がなかったしのお。これはこれで良しとしようではないか」

「わわ。わかった。貴様の」

「“爆符”」

その後のことは、まあお察しの通りである。「あんぎゃー」と泣き叫ぶ異形がそこにいた。

大方異形のリアクションを予想していた小鳥が“爆符”をこれでもかと投げつけ木っ端微塵に爆裂。「おお、楽しそうじゃん俺も混ぜろよ」と後ろから誠も参戦し、日頃チロロさんに殴り飛ばされまくっている石田もなんだかんだで参戦。三人そろって不気味に笑いながら楽しく『罰』を執行していた。

最終的に土下座しながら契約を懇願する異形を前に、午後茶持って来いよと命令する三人だったが、さすがにやりすぎだと遅れてやってきたルカやチロロさんに説教され、事態は収拾に向かう。つまり、契約承認である。

「しかしありえねえ……！　そもそも人間如きにそれほどの力があるなんて」

苦々しく、半泣きの状態で異形は言う。まあ、気持ちはわからないでもない。後でわかったことだが小鳥は塔へ入る直前、俺に『魔力』を打ち消す術式を宿らせていた。どんな方法かは皆目検討つか

ないが、そんな素振り、少しも見せていなかったのだ。

というよりも、そもそも彼女は人間のはずだ。俺たちが知っている下界の人間は、何の力も持たないものと聞いている。けれど、今現実にいる小鳥は術式はもちろん、魔力さえ保持している。どういうことだろう。その問いに、一言。何ともないように、淡々と答えた小鳥だった。

「そりゃあ、ワシの爺様、人間じゃないもん」

《……。はあ!!?》

彼女の爺にあたる、安部 清明。人間とは思えぬ摩訶不思議な力を持っていたとされていたらしいが、なるほど。そういうことだった。彼は、『冥界の住人』だった。何の因果か、何を目的にしていたかは定かではないが、冥界から下界にやって来たそうだった。

冥界から俺たちの世界ならまだしも、冥界から下界に『異世界渡り』することはほぼ不可能とのこと。ゆえに、下界に着いた時点で持っていたほとんどの力を無くしたそうだった。それでも、残った彼の力は下界の人間にとって未知なるものだったらしい。その血を受け継いだ少女が、安部 小鳥だそうだった。まったく、そんな重大なことをさらっと言えるあたり、彼女らしい。

その後のことは特に回想する必要はないだろう。無事小鳥の契約を終えた異形は難なく冥界へと還っていった。契約することにより、小鳥の下僕となる代わりに召還されていない時は元の世界へ還される。この法則を無理矢理にはあるが行使したためだ。

ちなみに、何故やつがこの世界にいたかというのは最後まで異形は口にしなかった。小鳥が思うに、「来た方がいいが還れなくなったんじゃない。あいつ馬鹿そうじゃな」だそうだった。異世界で大暴れし

ていたところをその頃の妖・精霊に封印される。そこでずっと眠っていたらいいのに、何らかの理由……で……。

ん？

「何故、やつの封印は解放されたんだ？」

ふと、疑問が生じる。そもそも、今回の怪を起こした犯人は異形であるが、どうやってやつは封印を解いたのだ。いきなり不意に解放されるなどありえないだろ。その疑問を石田がにこやかに答える。

「いい質問だねハク。まあ、思うに小鳥ちゃんが来た影響かな」

「ワシが？」

「うん、まあ多分だけだね。昔異形を封印した僕らの先祖が自分たちの力ではあいつを元の世界へ還せないと判断して、異世界より来たりし者に任せようとしたんだろう。他の地域でも人間が降りた後には不思議な現象が起きたのはそれが原因だね」

素早く誠が反応する。

「さてよ。ってことは、他の地域で起きたことってのは」

「うん、間違いなく冥界より来たりし者が、もしくは人間が降り立ったけどもそこに封印されていた冥界の住人が元の世界へ還るため、魂を集めようとした痕跡だなあ。きっと犠牲者も出ているだろう。人間が降り立つという保障はどこにもないのに、まったく、とんでもないものを残して逝ってくれたもんだよ。僕らのご先祖様は」

はあ、と大きな溜息をつきながら石田は言う。これで原因はわかったとしても、過去起きた事象を思うとなかなか苦しいものがあった。おそらくだが、降り立った人間も犠牲になったと考えられる。

まこと、悲しいことだった。何ら罪のない人間らには、本当に申し訳ないことをした。

「けれど、僕らのすべきことは落胆することじゃないからね」とすぐさま前向きになった石田はさっそく今回の怪でわかったことを的確にまとめ、八帝将を通して広く世に知らせるようである。やや時間はかかるだろうが、今は最初の一步ということだろう。石田曰く、異形が封印されている場所も特定できるよう探ってみると言っていたし、ここから先は彼らの仕事かもしれない。龍遠家も参加すると申し入れたが、頑なに断れた。こういうものに他の一族は関わってはいけないそうだ。

ただ、小鳥がその流れをじっと聞いていたのはとても印象的だった。

彼女なりの考えもあるのだろうか。何か、その封印に対して小鳥は深刻そうに考え込んでいた。

後に、これがきっかけで小鳥が世界中の封印を解く旅に出るということになるのは、俺たちは知るよしもない。そしてこれが、彼女がこの世界に神隠しされた本当の理由であって、同時にその旅が元の世界へ還る方法でもあったとは。

しかし今は知らない。わからない。そしてその話もまた、別のお話。

想いを繋げていく、ある少女の物語。

※ ※ ※ ※ ※

そして時間は2ヵ月後へ。

学園都市も徐々に活気をみせ、本来の姿へと戻っていく。崩壊した体育館や周辺の施設もなんなく復旧。学園行事やそれに準じる催しにも慣れていく生徒たち。都市ということもあり、娯楽施設やそ

の他様々な建物の機能もいよいよ活性化されていく。

盛り上がっていく俺たちの学園。

そして、この物語は一つの終局を迎える。

それは決まりきっていたこと。最初から、定められていたこと。

だがしかし、いきなりそれが転がり込んでくるわけではない。断じてない。

ここで一つ、この話をしたいと思う。正直したくないが、しなければならぬのだ。

それは、最終的には、物語に関係することに繋がるのだが、いかせん恐ろしいほどに……あー、えっと。うーん……あれだ。そうだな。…………一言で言う。

こほん。

ラブコメとゲイとBLと変態とレズと勘違いと妄想と百合とホモと連鎖と非道と慰めと恋愛な。

うん。それが、一度に起こった……あの日のことを。語らなければならぬだろう。

申し訳ない。突拍子もないこと極まりないが、どうにもこうにも、俺たちの物語はここで一つ。

ウルトラ大バカ騒ぎへと移行します。

もういいでしょ？

……ハク。ハク。

まったく、キミはいつもそんな感じだよ。己おれの話を読みもしない。いやはや、己も大概な存在だがキミも負けず劣らずの在りシロかな。驚嘆恐れいる。

ん？ そんなことはないって？ 絶対ないって？

またいつものそれか、キミという妖は口癖のようにそう言うね。

絶対ない……か。

別に構わないさ。キミが何と言おうと、どんな明証を挙げようとか。己もまた相も変わらずこの言葉をキミに贈るだけだぜ。

“絶対なんてものは無い。あるのは可能性の狭間なんだよ”

真理は時に有限であり期限があるんだよ、ハク。

同時に愚かであり哀れでもある。ハハハ、少しキミには早かったかな、この話は。

おいおい、そんな顔をしないでくれ。それとその目つきも止めてくれ。確かに己はこんな言葉遣いだし、自分のことを「己」と書いて「オレ」とか呼んでいるが。

一応、女の子なんでね。

“幾千幾万幾億幾年、不動たるは、己だけさ”

おっと、またキミには難しい話をしてしまったぜ。己もほんと罪

作りな女だ。

それでも喜んでるよ、己。そりゃあもう身体中の熱が蒸発しちゃうほどに。キミと話してるんだ、当然至極に変わらない。今この時、己はキミと話せた奇跡で死んでしまいたいそうだ。

死にたくはないが、ね。

けどそれぐらいの、想いさ。

キミだけに捧げる、気持ちさ。

ああ、ハク。己は後悔してる。もっと早くキミと会いたかった。

もっと早くキミと巡りたかった。何故、五歳だったのか。キミと出会えた歳が何故に五歳だったのか。

己は毎晩^{うな}魘される位の苦痛を味わうよ。

願わくば、生まれた瞬間より一緒にいたかった。

ハハハ。

“狂ってる”

ホント、己は狂ってる。自分で二回も言うんだ。それは間違いないね。

でもな、ハク。それはあくまで表向きの言葉なのさ。普通はこの言葉、裏向きにすべきなんだけど、己はそうじゃない。わざわざ隠す必要もないからね、キミに隠し事なんて耐えられないよ。

狂いは表向き。なら裏は？

“愛してる”

愛してるよ、ハク。

相支してる、とも書くね。相手を支える……と書いて『相支てる』だ。

中々洒落てるじゃないか。さすがは己だ、わるくないぜ。

“ 相支てる ”

うん、これもまた己の素晴らしい語録の一つに認定しよう。今日は良い日だ。

いや、キミと話してるんだ、良い日は必然だな。ハハハ、己としたことが。

あ、そうだ。

そうだった。

一つ忘れていたよ、ハク。

ずっと言い忘れていたんだ、言い遅れていたんだ、ハク。何、大したことじゃないよ、そんな気構えなくていいさ。ちよつと、言いたいことがあるだけなんだ、一言だけさ。

ハハハ。

あのね、ハク。

“ もういいでしょ？ ”

※ ※ ※ ※ ※

「アツツ！ー！！」

……ハア、ハア……ハア。

夢か。夢、だよな。

「……」

辺りを見渡す。あるのは部屋。男子量、最上階にある一室。

まだ呼吸は乱れたままだ。当然か、まさかあいつの夢をみるなんて。望んでもいない、祈ってもいないのにこの状況。確かに、あれは、あいつだった。いつもは男口調で変な話し方をしているのに、途端に女の子らしい可憐な喋り方になる。眼も、顔つきも、匂いも、感覚さえ歳相応な女性へと変わる。

間違いない。必然か、当然か。わかりきっていたことだ。学園入学から2ヶ月が過ぎた。

『2』は、あいつの好きな数字だったな。

今日でちょうど2ヶ月。ちょうど……だ。

もはやわかつていたこと。わかりきっていたこと。だからだろ、ゆえにだろ。

それでも俺はこの学園に行くとしたんだ。ふと、親父が言っていた言葉が脳裏をよぎる。『嫁さん、必ずゲットしてこいよ!』。

ああそうだ。そうだよ親父。

嫁さん、決めたよ。

でも、これでいいのかな。

だってそれは、本当に、龍遠家の暗黙ルールを破ることになるんだぜ。

「おっす、ハク」

部屋を出て、窓から外を眺めていると隣の部屋から親友が出てきた。

まだ太陽の光もまばらな時間帯。ちよつと気になる。普通なら俺や空、というか生徒はまだ眠っている時間帯だから。

俺の空気を察してか、空はやや恥ずかしそうに、頭をモシヤモシヤしながら言う。

「妹の夢を、さ」

「……そっか。確かもう一つの学園にいる……」

「そゆこと。さすがにビックリしたぜ。んで、そんなお前は何黄昏てんの？ 龍様よ」

「あいつが夢に出てきた」

「……そっか」

ふむ、と頷く空。

どうやら自分の夢と何か関連性があるのか思考しているようである。しかし、別段夢の話であるため繋げようと思っても無理な話だ。少し考えて、その仮定はないかと判断したようである。けれど。

顔は一連の流れを悟ったような顔つきであった。神妙とも取れる表情で空は言う。

「入学してからちようど2ヶ月だよな」

「ああ、俺も今そう思っていた」

「なら、それはもはや『そう』なんじゃね？」

「なんだよ、やけに匂わせるじゃないか。誤魔化すなよ」

「まあね。……ただまあ、他のやつがそれを聞いたら『たった2ヶ月で』って言うだろうさ」

「ハハ、違いない」

「『よくぞ2ヶ月、なのにな』」

二人が同音同語を開口した直後、強風が窓を揺らす。ガタガタと、カタカタと。

お互い見合うのみ。そう、もはやわかりきっていたこと。

「決めたよ」

俺は空に告げる。

「龍遠家・暗黙ルール、ぶっ壊す」

「おほほ！ そりやすげえ。ま、なんとなくわかっていただけだな」

特に驚く素振りも見せず、空は言った。彼には最初からわかっていたのかもしれない。

ありがたい。

「ま、なるようになるさ。どう転ぼうが、動くのは絶対にあいつからだ」

「そうだな。むしろ覚悟を決めただけ得と考えるべきか」

「違いねえ！ そんなじゃ、俺は二度寝決め込むさ」

「おお」

そして、再び一人になる。

おっと、朝空はさっきと違い随分と明るくなってきたな。明けない夜はない、か。

.....。

幼馴染。空を含めて六人。

うち五人はもう一つの学園へ。さらにその中の四人は、龍遠家に代々仕える守護家。

なら、もう一人は……？

俺が、一度も勝てない相手。最強なんて誰が決めたんだか、あいづのためにあるような言葉だ。

異性。

女性。

そして、俺の……。

「来る。そういうことだろ？ 千尋」

今日はきつと色々凄まじい一日になるだろうな。なんとなくわかるよ。

お前も今日、動くんだろ？ わかってるよ。

何年一緒にいたと思ってるんだ。

だからさ、だからな。

「覚悟、決めた」

開演の予鈴が、太陽となって俺を照らした。今日は、学園入学からちょうど……。2ヶ月である。

ラブコメとゲイとBLと変態とレズと（以下略）

本来なら、少し前に言っていたドタバタ騒ぎに突入するのだが、いかんせんあいつの夢を見てしまった以上、物語を一気に展開していかねばなるまい。しかし、その展開は今日、即ち学園入学してからちょうど2ヶ月過ぎた日の夕方に一気に始まるので、そのドタバタ騒ぎは朝から夕方にかけてあったことも付け加えておきたい。

ゆえに、前置きとしてドタバタ騒ぎの概要を話しておこう。

何、別段ひどかったというものではない。ただの勘違いから起こった、騒ぎに他ならない。

基本、俺たちの学園は朝の9時から授業が始まるのだが、それまでは極めて自由で学園の広場や休憩場所、教室で皆のんびりしている。当然ながら俺と空もその広場にある噴水前で今日見た夢について話し合っていたのだ。

議題はもちろん、今日如何にしてあいつが行動に出てくるかである。

ちょうど2ヶ月な今日のことだ。確実にあいつはアクションを起こしてくるだろう。しかしながらあの『単騎独立型化け物女』のことだ。こちらの予想など軽く超えてくるに違いない。ゆえに、どんなことがあっても平常心を忘れないようにしないと、とそんな有り触れた結論を空としていたことだった。

「やっぱ、この考えはヌルいな。俺は隙だらけだなあ」

「俺もさ。どうにもこうにも収まりが付かねえよ」

そんな、本当にどこにでもある、いち男子二人の会話だ。

俺と空にとって……というか、普通の男子にとっても特に問題は

ないだろう。別段、上の会話の中でおかしなことはない。断じてない。けれど、その二人の会話をこそっとたまたま(?)聞いていた、ルカとティアにはこう聞こえたようである。

「やっぱ……俺は『好き』だ……」

「俺もさ。どうにもこうにも……よ」

「「!?!?」」

当然、俺たちはそんなこと知らない。

しかし、『隙だらけだ』をどんな頭がしているのか知らないが上手く処理して『好きだ(らけだ)』と聞こえた彼女ら二人の耳はある意味凄まじいと言えよう。

そして、悲しいことにその返事に空は『俺もさ』と返している。

彼女たちにとって、それはある意味驚嘆極まりない事情だった。

「ティティティ、ティアさん!？」

「おおおおお、落ちつけルカ! 冷静になるんだ!」

「ここ、これが落ちていてられますか!？ い、いえ、以前から『もしかしたら』とは思っていましたが、まさかそんな」

「わ、私もだ。いやに仲がいいし。べ、別段仲がいいのは素晴らしいことなのだが度が過ぎているというか」

「そうですね! そうですね! あの二人いつも一緒にいますし」

「まま、まさかハクが私たちに気がない振りをしているのかもしれない……」

「「そっち系?」」

……………。

「私、死にます」

「落ち着くんだルカ！ まだ早計すぎる！」

「でも、でも！ 私もう生きている意味がありません！」

「私がいるだろう！ 友達がいるだろう！？」

「ティアさん……」

「大丈夫だ。私がなんとかしてやるから」

と、ここまで聞けば単に俺と空のあらぬ関係を勘違いしたアホな人魚とヴァンパイアの話で済むのだが（済むのか？）、問題はここからであった。

ルカとティア、二人の問答を後ろからこそつとたまたま（？）見ていた一人の女性がいた。

「ま、まさかルカちゃんとティアさんがそんな関係だったなんて……！」

水の精霊である。

「『私がいるだろう』なんて、ティアさん大胆……！ で、でもルカちゃんも結構本気みたいだし……。どうしよう、ずっとあの二人はハクさんが好きだと思ってたけど、まさかこんな。で、でもずっと一緒にいればそんなことだって。ええ！？ どどどうしよう。私、もうどうすればいいかわかんないよ！」

一人、妄想パワーを最大限に発揮した精霊の女の子は誰も止めることなく急行発車で加速していく。もはや彼女の妄想を止める者は誰もいなかった。いてほしかった。

が、さらにこれは連鎖する。

その妄想少女、音夢の後ろより、一人のツンツン頭がこそつとた

またま（？）見ていたのだ。

「おおおい、まさか音夢のやつ！ ルカとティアを影でこっそり見ながら『もうどうすればいいかわかんない』だとお……！ こ、これってあれだよな、あれだよな！ 三角関係とかいうやつだよな。しかも女の三角関係……だど？ 信じられねえ！ レズの三人組みだど！？ 変態もいいところじゃねえか！」

さらにその後ろからこそつとまたま小鳥が……。さらにその後ろからヴァンが（以下略）

エンドレス。

そして簡単に言えば。

ラブコメとゲイとBLと変態とレズと勘違いと妄想と百合とホモと連鎖と非道と慰めと恋愛な。

関係が完了したのであった。

※ ※ ※ ※ ※

ふう。いや、大変申し訳ない。

つい2ヶ月前では白熱した戦いをしていたこともあって、何とも疲れる事態になってしまった。しかもこの話を本来なら五話以上に渡って綴ろうとしていたのだから始末に終えない。

それはともかく、一応ながらそれぞれの勘違いの形態図を軽くまとめしてみた。以下の通りである。

俺と空をBL関係と勘違いしたルカとティア。

ルカとティアをレズ関係と勘違いした音夢。

ルカとティアと音夢が三角関係だったのかと勘違いした誠。

誠が音夢に恋していると勘違いした小鳥。

小鳥が誠に恋していると勘違いしたヴァン。

そして、遠巻きにヴァンが小鳥をじっと見つめているのを俺と空が発見。ついに幼女に手を出そうというのかと勘違いした『俺と空』。そしてそんな俺と空をBL関係と（以下略）。

……つまるところ、南無組一同、綺麗な輪になって勘違いの図式が完成したのである。

そんな図式が授業が始まる前に完成してしまったのだからもう大変。

何故かクラス内で不穏な空気が流れ、加えて『そうか、あいつも色々あるんだな』と歳相応で盛大な勘違いをした南無組一同はアホな悟りを開く。さらに『そっとしておくのが友達だよな』とわけのわからない結論に達した連中がほとんどだった。

泣くほど、馬鹿な連中である。

しかし、そんな連中であっても全員ではなく、納得できない者もいた。というか、彼女らがいなければ俺たちは最悪、ずっと上にある勘違いをする可能性があった。本当、彼女ら二人には感謝し切れない。

姫二人である。

「ハク様！」

「ハク！」

業を煮やしたのか、我慢できなくなったか。もし我慢できなくなったのなら彼女ら二人の我慢度は朝からお昼までというとても短い度合いになってしまうがまあ仕方ない。

ルカとティアが昼食をとっている俺のところへやって来た。

ちなみに、この学園には食堂が完備されており、好きな食べ物を選ぶことが出来る。料理を担当している方々も、もちろん妖や精霊で大変ありがたい限りだ。……ただ、俺たちに働くという概念はな

いから毎日のようにメニューが変わるのは忍びない。飽きが驚くほど早い方々なのである。

ま、それは置いといて。

今日のお昼である天井を美味しく頂いていると、姫様二人がやって……来た瞬間、机を勢いよく叩き鬼の形相で俺を見てきた。当然ながら生徒中がそれを見る、見る、見る。料理していた関係者（先生方も）含め皆が何事かと視線を向けてきた。

正直、一番驚いたのは俺だ。

「な、何？」

「正直におっしゃって下さい！」

「そうだハク！ 正直に話すのだ！」

「だ、だから何を？」

学園に入って2ヶ月。ここまで切羽詰った彼女二人を見たことはなかった。

ゆえに、一体全体何事かと隣で食べていた空や誠も目を大にして見ている。右手には口まであと数センチの食べ物を止めて。器用な連中である。

そんな男どもを無視して、二人は一緒に言った。

「「私たちに隠していることがあるでしょう！？」」

「なっ！？」

正直、ここで俺が直感したのは今日みた夢のことであつた。

だってそうだろう？ あんな夢をみて今日おそらく何かしらのアクションがあると思っていたのだ。そういう俺の顔が表に出ている何らおかしくない。

普通、そう思うじゃないか。

普通、そう思うじゃないか！

だからこの後言った俺は断じて悪くない。断じて！　だってそれは彼女ら二人を落ち着かせるのと、今は言うべきじゃないと判断したからだ。だから、だから。決して俺が不謹慎だったわけじゃないぞ！

優しく言ったつもりだ。

「ちょっと、二人には……まだ早い、かな」

「「ッ！　早イイ！？」」

「え？　あ、うん。その、順序があると思うし」

「「順序オ！？」」

……あー、当然か。彼女らが考えていることと、俺の考えていることは違う。天と地ほどだ。

空も一体どうしたんだと何か言おうとしたが、それよりも早く。それよりも迅族に二人は言った。いやあ、それにしても勘違いや偶然というものはどうしてこうも。恐ろしいものなのだろうか。

「なら、やはりハク様と空くんは……」

「え？　俺とハクがどったの？」

「うむ、仕方ない。しかし、私はハクがどんな性癖の持ち主だろうと構わんぞ」

「性癖？　何を言ってるんだ二人とも。はっきり言ってくれ」

「そ、そうですか。なら勇気をだして！」

「うむ。私も、将来の妻として誓おう！」

「？」

ここまで続くと何かしらの予兆する思うな。まあその予兆は夕方から起こるのだが。けどさ、もう少しマシな予兆でもよかったと思う。

そんな、俺のささやかな希望をあざ笑うかのように、二人は、声を大にして。

開口した。その言葉を。

「二人が！　ゲイな関係でも！　全く問題ない！！」

……言った。言ってしまった。

食堂中が静まり帰る中、彼女ら二人は言った。

啞然としてみる一同。食堂一同。南無組の生徒はもちろんのこと、他の生徒、関係者、教師、石田、チロロさん、癒水先生、ほぼ全て。

この数秒後、ルカとティアと俺と空を除いた全員が同じリアクションをとるのだが、まあ……な。

現実とは、かくも恐ろしいものである。あいつも夢で言っていたな。

真理は時に有限であり期限があるんだよ、ハク。

そうだな、確かに有限で期限があると思う。たった数時間後にそれが証明されるとは思わなかったよ。お前はどこまでも凄いな。何でも見透かしている。しかし夢のことまで介入されてはこちらとしても立つ瀬がないぞ、かなり。

ああ、どうか笑わないでくれ。クスリともしないでくれ。

だってこれは勘違いから来るものなのだから。彼女らはもちろん、俺や空も悪くない。

誰も悪くない。

ゆえに、悲しい。泣きたくなる。どうしよう、龍がゲイとか洒落

にならんだろ。新ジャンルすぎる。母さんが聞いたら確実に俺、殺される……。八つ裂きにされる。骨も残らんとと思う。

そんなこんなで、この螺旋は午後へと突入するが、大丈夫だ。

そう、例の夕方がやって来る。だからもう少し我慢してほしい。

我慢は大切だ。

そうだ、だから今は、今だけは、皆のリアクションを甘んじて受けよう。喜んで受けよう。

大丈夫だ、問題ない。

[illegible]

すまん、正直に言う。
ちよつと泣いた。

静かに、確実に

あれから、それはもう大騒ぎとなった。

俺と空のゲイ疑惑が全生徒に知れ渡ることになったのだ。それぞれ生徒によってリアクションは違い、爆笑する者、ドン引きする者、何故か泣き出す者、喜びながら抱き合う者。

特に、最後の抱き合う者は圧倒的に女子が多かった。何を期待しているのか知らないがとても悲しい気持ちになった。

それから学校は次の授業が休講。全クラスである。何でだよ。

全力で俺と空の関係を問いただす皆。その中にはもはや生徒だけでなく学園関係者や石田の姿もあった。何気に少し興奮気味なチロロさんもいた。途切れ途切れであるが、「どっちが受けなの？ どっちが！？」と執拗に聞いてきたのは今でも怖いものがあった……。

それからは。出るわ出るわ。

俺と空がゲイなのかどうか。ルカとティアから問いただされていると音夢が恐る恐る小声でぼつり。

「で、でも。ルカちゃんとティアさんって付き合ってるんだよね……ね？」

お？ ん？

矛先が、皆の矛先がグルンと回転。同時、先ほどの雄叫びが再度食堂に響き渡る。

もう、ぐっちゃぐちゃである。意味不明、理解不能な顔をする姫二人に質問の押襲。どう答えればいいか、というか何故そんなことを音夢が考えているのか全くわからない様子の二人であったが周りとはそんなこと気にしない。どうでもいい。

問題は、それが本当なのかどうかということだ。さらに、最悪のタイミングで誠がぼつり。

「しかし、よお。音夢とお前らはその……あれだよな。三角関係なんだよ、な」

後のことはお察しの通り。もう描写する必要もないだろう。

どこまでも続いていく螺旋の悪循環。誰も止めようもなく、誰も止めることもなくそれは続いていく。ああ、まったくもって。今日は厄日なのだろうな。

全ての問題が解決するまで。三時間以上かかってしまった……。溜息しかでないのであった。

※ ※ ※ ※ ※

ここは、学年主任であり八帝将である石田 健次郎の一室。

先ほどまでは、南無組が起こした騒動をそれは楽しく一緒になって興じていた。まさかハクと空がゲイの関係であったとは。そしてそこから芋ズル式に出てくる勘違いの嵐。さらにチロロがBL好きというのも発見でき、石田にとっては最高のひと時に他ならなかった。

……この時まででは。

「ふむ」

一枚の書状を見ながら、眉を寄せる石田。

置かれたコーヒーにも触らず、じっと見つめていた。横から、コーヒーを淹れたチロロが心配そうな表情をしながら語りかける。その顔には、先ほどまで狼狽していた面影は影一つなかった。

「これは一体、どういうことでしょうか……」

「ん。おおそ『そういうこと』だろうねえ」

「一枚目のものならまだわかります。学校が二つある以上、当然のことでもあります。あちらの学校に合わなかった生徒がこちらに来る可能性を考えれば、至極道理でしょう。ですが……」

「二枚目かい？」

「はい。そのような行事は前代未聞です。しかも一週間後とは……。さらにその原案を提示した者は『いち生徒』だと書いてあるではないですか。名字は書かれておりませんからどの妖か精霊かまではわかりませんが、それだとしても私には到底理解しかねます」

「ま、普通そうだよね」

椅子から立ち上がり、窓を見る。

石田にとって、この事態の流れ。およそであるが予想はついている。龍遠家に関する事情は八帝将の身分のことであって彼の耳にも入っていた。

だがしかし。

この手際のよさ。畏怖すら感じる。

……こちらも、迅速……いや、神速に匹敵する対応にでるしかあるまい。

「出るよ、チロロちゃん」

「で、出るって、どこにですか!？」

「決まってるじゃないか。この行事、舞台とするには僕とあっちの学園にいる都市代表以外にも、二人の八帝将の力が必要だ。そして同時に、これの本末を聞きに行く必要がある。地形的にも、あの二人なら都市が近いし必ず参上してくれるはずだ。そうだな、場所は『光誕』にしよう。連絡、頼めるかい？」

「は、はい! お任せ下さい!！」

すぐさま石田は部屋の扉を開く。

事態は急を要する。

然るべき対応を即座にやらねば、これは取り返しのつかぬことになるだろう。石田が、ではない。彼が受け持つ、一人の青年が、である。それはこの行事を提案したと書状に書いてあった『生徒』の名前を見れば一目瞭然であった。……自分一人の力では到底どうにか出来る問題ではない。

悩む暇があるのなら、動け。

「さて。まさかあの一族の血縁者とはね。ハクくんも大変なこった」

紙で創り上げた鳳に乗り、白帝は飛翔する。

向かうはこの世界最大の貿易都市『光誕』。かつて、ハクとティアが出会った場所。

※ ※ ※ ※ ※

無駄に長く感じた一日の授業(?)も無事終了。

それぞれが寮に帰ったり娯楽施設へ向かったり、学園都市ということもあって都市へ遊びに行く者らもいる。都市については、また今度詳しくしておきたい。

簡単に言えば、だだっ広い無人島の南側に学園がぽつんとあって、その後ろにはまさしく都市と呼ぶに相応しい施設が並びだっている。もちろん、無人島ではなく実際は森の中にある大山の山頂部の面積である。しかし、ずっと暮らしているとあまりにも広いためここが山の山頂部であるということ忘れてしまうのだ。

現在……『夕方』。

俺たちはそれぞれ寮に帰宅するため、門前のところへ来ていた。そこから男子は東へ、女子は西へ別れるのだ。本当はもっと色々

したかったのだが、さすがに疲れてしまった。誠と小鳥がうな垂れ、ヴァンがとぼとぼ付いて行く。

「ああ……今日は死ぬほど疲れたぜ」

「まったくじゃ。結局今までと何ら変わらんかったではないか」

「そ、それでよかったんじゃないの、かな」

ぶーぶーと文句を言いながら歩く二人。フォローするヴァン。そんな三人の後ろからやはり疲れ気味な皆が続く。

「でも、ハク様が空くんとまずい関係でなくてよかったです」

「まったくだ。私も冷や汗ものだったぞ」

「わ、私もルカちゃんとティアさんに迷惑かけちゃったし……」

女子三人がそれぞれ意見を言う。

その言葉の中にはどこかほっとした感じも含まれていた。俺と空は溜息まじりに返答する。

「まあ、俺らも変な会話をしていたのがまずかったしな」

「それもあるさ。もちっと考えて言うべきだったさ」

「ところで、だが。ハク」

「ん、何だティア？」

「結局、何の話をしていたのだ？」

……話すべきだろうか。ちらりと横を見る。頷く空。

そうだな、もうそろそろ、話すべきか。いや、今朝にでも話すべきだった。俺と空の弱い物腰が今回の不祥事を引き起こしたのなら、皆にきちんと言うべきだったのだ。

もう、自覚しなければならぬ。

もう、覚悟しなければならぬ。

もう、決意しなければ――

全てを、言う決断を。

もうあいつはすぐそこまで来ている。どういう方法で来るかは知らないが、来ることは絶対だ。

俺たちが何と対するかを、皆に話す時が、今なのだろう。

「あのな」

ギイイイイイイイイイイ……

《ん？》

クルリと、俺を含め皆が振り返る。

音がしたのは門の方だった。いつもの、開門の際に生じる音だ。ただ、俺たちが見た門は真南の方。

今、俺たちがいるのは門前であるが、そこには三つの門がある。

二つは東西にあるさっき述べた男子寮と女子寮を繋ぐ門。この門が学園と寮との間に立つ。そしてもう一つが真南の門。主に『接待用』として用いられる門で、最初俺と空が来たときはここから学園に入った。

その真南に位置する門が、開いた。普段は開かない門が。

……………。

三人。

遠くに見えるが、かろうじて見えるが、三人いることは確かだ。さすがに性別とまではわからないが、一人はかなり身長が高く、髪も足ぐらいまでありどう見ても女性だろう。髪の色は何と言うか白と光る水色のような感じで、音夢の髪色の水色を結構な度合いで

薄めた感じだ。それと白が混ざり合い、夕方の光に照らされ光っている。

もう二人は……ちょっと見えないな。一人の女性がかなり目立っているせいか、残りの二人は夕方の光も手伝ってここからではよく見えない。

皆の意見を聞こうと横を見た……その時だった。

ダアッン！！！！

凄まじい音と共に、一人の青年が走った。

逆方向に。

門から逆方向に。つまり学園に向かって走り出した。さっきまでは寮に帰るはずだったのに。その速さたるや学園入学して2ヶ月経つが、その期間中見たこともないぐらいのスピードだった。いや、そもそも彼が対象から逃げる、ということ自体がまずありえないことだった。

走り出したのは、誠だった。

驚いたことはもう言うまでもないだろう。皆が驚いた。だってあの誠が、あの天上天下唯我独尊男の誠が、何も言わず一目散に逃げ出したのだ。驚かないはずがないだろう。走る誠を見ながらとりあえずティアや空がどうしたんだと叫ぶが彼は聴く耳持たずという感じでとにかく走っていく。

呆然と見るしかない俺たちであったが、まあ、その呆然もすぐ消える。

「「氷なる蛇」」

通り。

通り過ぎる。

通り過ぎる何か。

ヒュオオオ——と後から風が遅れてやって来る。服がバタタタと風の煽りを受け激しくなびく。その様を、驚愕と焦燥な感情で体現する俺たち。皆の横を通り過ぎて行ったのは、氷だった。形を成した、氷だった。具現化された、氷だった。

蛇だった。

蛇といえば、2ヶ月前にクラス対抗試験とやらでいきなり別空間へ飛ばされた際、天高くある場所から眺めていた俺たちを最初に襲ってきたのも蛇だったな。確かそれを撃退し、呑み込み、灰にしたのも蛇だったな。誠が操る蛇だった。確か名を……“炎なる蛇”。

つくづく蛇と所縁ゆかりがあると思う。だが、それは俺たちではなかった。所縁があるというのは間違いで、所詮俺たちは蛇に関連するところが『ほんの少し多めに』周りで起こっただけだったのだ。真に所縁があるのは、他ならぬ彼だった。脱兎の如く逃げ出した、彼だった。

あつという間に、追いつかれる誠。

「うおおおおおおおおおおお！」

激しい衝突音と共に誠は氷の蛇に突撃された。

そのまま土埃が辺りを舞い、徐々に鮮明になっていく……。見えるは、カッチコチに標本化された京極 誠であった。ものの見事に、彼は氷の世界の住人となった。巨大な塊である氷の中に「出せ」と身体全体で表現しているポーズのまま氷漬けになっていた。

何も出来ぬまま、誠は凍らされた。

一切合切、抵抗出来ぬまま。

抵抗すら、虚しく無に変えられるように。

「さっきのが零華さんの『あれ』なの？」

「ええそうよ、きつと突然の再会に嬉しかったのね。走り出すほど恐怖かんきしたのでしょう。私もとっても嬉しいわ」

「歡喜の字が違う気がするけど。ま、何にせよ無事到着できたネ、お兄ちゃん」

「ああ、千尋に連絡しておくか」

ザッ……………。

門の向こうより歩いてきた三人が、俺たちの前で止まる。厳密には、俺の前で止まる。

三人のうち、二人は女性、一人は男性。

女性のうち、一人はさきほど述べた身長が高く雪のような髪質の女だ。俺よりも高い身長で、保健の癒水先生と同レベルのバストを持つ。顔立ちは冷静な面持ちでシャープな印象を受けた。腰も細く、足も長い。女性としては完璧なプロポーションと言えるだろう。この女性から、先ほど俺たちの横を通り過ぎた氷の蛇と同じ妖力を感じる。

残りの男女二人は、正直、顔がそっくりだ。

双子のようである。

が、彼らの様子を詳しく見る前に、男が言った……。

「貴殿が龍遠　ハクでいいな？」

「ああ、そうだ」

「ふむ、千尋から聞いていた通りだな。なるほど、なかなか面白い」

「千尋……からか」

「ん？　そこまで驚かないのだな。これも千尋が言っていた通りか。いやはや、さすが我が主、ここまでお見通しとはな」

「お兄ちゃん。感傷に浸ってないで用件言わないト」

「お、そうだったな」

「あとその侍風のキャラ作りは止めた方がいいヨ」

むぐつと顔をしかめる男であったが。

すぐさま持ち直し、顔をこちらに向けた。そしてまっすぐな瞳で、俺を見ながら、開口した。

「初めまして。我々は『転入生』だ」

自分から言うセリフなのかと、この雰囲気と言うセリフなのかと。皆がそう思い皆が驚く中。三人は笑顔を向ける。

だが、俺にはわかる。

全てはもう始まっている。

終章の序曲が、ゆっくりと開演された。

結婚しよう（前書き）

【前書き】

今回、この小説で初めて挿絵を用いております。

挿絵が苦手な方は、お手数ですが『戻る』を推奨します。

これからも挿絵を使うのか、と聞かれますと『あと一回だけ』使います。それはこの小説が始まった時から決めていたものです。とても感動的で綺麗な挿絵です。今話で使う挿絵とは全然違うものになります。

使うべきか相当迷いましたが、視覚的にインパクトがあるべきだと思い、用いることと判断しました。探すのに大変苦労しましたが、見つかってよかった……。

二回だけなら挿絵いいよ、という方へ。

大変嬉しいですが、本当にありがとうございます。作者としましては正直挿絵は苦手でありまして、矛盾してるなあと思いつつ挿みしました。ちょっととして冒険心でもあります。結論としましては、温かく見守って頂ければ幸いです。

それでは、いつも読んでくださっている方と、挿絵バッチコイという方に感謝を込めつつ。

本文をどうぞ。

結婚しよう

「うおおおおおおおおおおおおおおおお」

バッキン……！ と後ろの方から何かを破壊した音が盛大に響いた。

振り返ると、巨大な氷の塊に封印（？）されていたはずの誠が自らの妖力を使って無理矢理破壊していた。辺りにゴロゴロと氷が転がる中、ぜえぜえと呼吸を乱しながらゆっくりと歩く誠。

そして、数歩進んだ後、ギリツと噛みながら先ほどの雪色髪の女性を睨む。

その様を、満足そうに興じる彼女。心の底より嬉しそうだ。対し、誠はマジギレである。

「零華あ！ てめえ何のつもりだ、ごらあ！！」

「あらあら、そんな睨むことないじゃない。怖いわ、とても怖いわ。怖すぎて凍っちゃいそう」

「てめえが凍るわけねえだろうが！」

「ふふふ、会いたかったわ誠」

会話を察するに、二人は知り合いのようである。

ただ、何故か誠が彼女から逃げていたような気がするし、複雑な関係なのだろうか……。そう思っていると、雪色髪の女性がクルリとこちらを見て、一礼する。

「初めまして、九条^{くじょう} 零華^{れいか}と申します。零華で構わないわ。私の紹介はこれぐらいで充分。ああそうね、一つ大事なことがあったわね。

多くが北国の伝承であるが、中には九州からの伝承もあり、昔の日本が今より寒かったことが伺える。

言い伝えとされる雪女の話はほぼ一緒に、人間にとってはかなりやっかいなものであった。何故なら、伝承の中の雪女はほとんどの確率で人間を殺そうとするものであったからだ。基本的なもの出会った男の精気を吸って殺してしまうものだが、中には呼びかけに答えた場合や、谷底から落とされるといったものもある。

雪女が一貫して美女という姿をしているのは他でもない、考えた人間が皆男性であったことと、女性の処女性が具現化されたものとされている。雪の純白は純真無垢の処女を現しており、その処女が性に目覚め男を求める形を妖化させたという背景も存在する。どの時代でも、男が女に抱く幻想は同じようである。

「貴方が私と同じ学園にいないとわかった時、それはそれは悲しんだわ。必ず再会して殺^だしめてあげようって決めたの」

「おい、今明らかに言葉がおかしかったぞ。抱きしめるが違うだろ」「わざわざ学園まで変えて。ひどい人ね。そんなに私のことが好きなのかしら」

「どこをどう考えたらそうなるんだよ……!」

どうやら、誠が本来もう一つの学園だったのに、こちらにしたのは彼女が原因だったようだ。

一応、本人が望んでいるので零華と言おう。雪女とはまた有名な妖が来たものだ。北国の妖として彼女ほど有名な妖もないだろう。北、雪、寒さの代表格ともいわれる妖、雪女。まさか誠の嫁さんだったとはなあ。

クラス分けの際、誠が散々女子に飢えていた理由がやっとわかつ

た。こういうことだったのか……。

「でも、これで一緒ね誠。ずっとずっと一緒だわ。たっぷり虐待^{あいつ}してあげる」

「最悪だ……死にたい」

半泣きのつんつん頭が、そこにいた。

※ ※ ※ ※ ※

「お兄ちゃん。零華ちゃんの用件を終わったことだシ、私たちも仕事しないト」

「ん？ ああ、そうだったな。龍遠 ハク、お前に我が主から手紙を預かっている」

「手紙？」

そう言って、双子の兄が懷より一通の手紙を出してきた。

というか、彼ら二人は自己紹介をしないのだろうか。見たところ双子なのはわかるがそれ以外わかることは……。いや、『我が主』という部分だけで結構わかることはあるか。

千尋の一族に仕える守護家、か。龍遠家と同じように、あいつの一族にもそれはある。ただ、確かあそこはうちの守護家が四家だったの対し、三家だったはず。目の前にいる二人を一家だとすると、残りの二家はあるにいないのか。

まあ今はそんなことを考える時ではない。

特に何も感じられない、一通の手紙を俺に突き出された。……それをどうするか。

「おいおい、受け取らないのか？ 龍遠 ハクよ」

「いや、そうじゃない。一つ聞くが、これには文章が書かれているか？」

「おお、さすがだな。その質問も千尋が言っていた通りだ。ゆえに俺も答えよう。残念ながら、『何も書かれていない』のだ。ちょっと不思議ではあるが、千尋は渡せば充分と言っていた」

「……そうか。悪いが、その手紙を地面に置いてくれないか」
「？ まあ、いいが」

そう言って、双子の兄は手紙を地面に置く。妹の方も不思議そうに眺めていた。

後ろで喧々囂々していた誠と零華もひと段落したのか、こちらにやって来る。南無組の皆も俺の後ろで今の様を疑問気に見ていた。

おそらく、空を含め俺の言ったことが理解できないのだろう。誰もわからないのだろう。当たり前であるが。

“『理解できないこと』と『理解しないこと』は、無機物と有機物ぐらい違うものだけ”

理解できないだけ、まだマシさ。

と、千尋なら言うだろうな。あいつと行動を共にしていけば、それは次第に『理解しないこと』に変わっていく。最初は理解できないからしようと努力するのだが、あいつはそれをする意味がないと変えていく。……何を言っているんだと、意味不明だと感じるかもしれないが、事実なのだ。

何故なら、理解しようとする行為自体が馬鹿馬鹿しく感じていつてしまうから。

それほどの力を、彼女はもっている。

どんな理不尽な事象だったとしても、彼女なら仕方ないと、思ってしまうから。

そうして、彼女は独りになるのだ。一人ではなく、独りになるのだ。

「ありがとう。それじゃ、『読』ませてもらうよ」

「？ ああ……」

皆、不思議そうだ。疑問そうだ。

正直、双子までも不思議そうにするのがちょっと以外だった。彼ら二人ならこれから起こるだろう事象も何となく予想できると思うのだが。それとも、事前に千尋から何か言われているか、だ。俺が手紙を触った後何を言うか、とかな。

そしてそれも、きつと正解なのだろう。

まったくどうして、お前は凄いよ、千尋。ゆえに、だから。

今は。

その予想に、道理に。

まんまと引っかかってやるよ。

> i 1 1 1 6 1 — 1 5 7 4 <

飛ぶ。

跳ぶ。

翔ぶ。

全員が、とんだ。

俺以外、全員が、その場から離れた。思い切り、力の限り、大地を蹴り、後方へとんだ。

全員が

驚愕する。驚嘆する。驚異する。驚倒する。驚天する。
恐怖する。恐慌する。恐懼する。恐惶する。恐悦する。
畏怖する。戦慄する。萎縮する。狼狽する。硬直する。

《……………》

何も、言わない。言えない。言いたくない。

ただ妖気が出ただけなのに。

一通の手紙から、溢れ出ただけなのに。特に何の能力も無い、紙切れから発せられたただけなのに。

皆が、心を、伏された。

手紙に込められた、絶大な情念を前に。

※ ※ ※ ※

「なるほど、な」

そう言うと、龍遠　ハクは手紙を捨てた。

その様を、彼から十メートルは離れているであろう皆が慎重に見入る。自分の背中からは、今まで感じたこともないほどの汗が溢れ出る。冷や汗、などというものではない。

死……という言葉を、生まれて初めて体験した。

いや、そもそも体験出来ないのだが……。まさに、そんな感じだった。

「ハク、様」

「ハ、ク」

声を震わせながら、一言一言振り絞るようにしながら、ルカとティアが言う。

未だ身体をドロリと手紙から放たれた妖気が蹂躪するが、必死な思いで彼女たちは言った。その言葉を受け、ハクはくるとこちらを向き、嬉しそうな表情で返した。

彼の言葉からは、二人を慈しむような優しさがあった。

「大丈夫だよ。ルカ、ティア。今感じた妖気がもう一度出ることはない。安心していいよ」

その言葉を受け、二人を始め全員が安堵の表情を浮かべる。しかし、双子は例外だった。

皆がハクの元へ歩き始まる中、双子は信じられないという顔で龍遠　ハクを見ていた。

全て、千尋の言った通りだったからだ。

“この手紙を受け取る前、きっとハクは『文章が書かれているか』と聞くはずさ。だからその時は何も書かれていないと答えてくれ。それだけでいい。それだけで充分さ。そしてハクは己の手紙を受け取った直後、こう言うだろう。『なるほど、な』ってね。まるで全てを予想していたような表情で。全てを悟ったような表情で。そうして最後はいつも通り、手紙を捨てて、優し気な顔で皆にこう言うのさ。『大丈夫だよ』ってね。ん〜ん、まったくもって……

嘘ばっかりな奴さ。ハハハッ”

正直言うと、二人は恐怖していた。誰に？ 決まっている。

ハクにだ。

千尋ではない。もとより千尋の異常性など、最初からわかっている。彼女の理不尽さなど、世界の理を真正面から否定するより安い。ずっと付き添ってきた二人ゆえに、彼女のことは他の者より何十倍、何百倍と理解しているつもりだった。

だが、こいつは何だ？

目の前のこいつは、何だ？

何故あれほどの妖気を受けて、平然と笑っている。立っている。話している。ここに来る前まで、千尋はいつも通り笑っていたはずなのに、あの手紙にははつきりと彼女の想いが込められていた。詰められていた。目の前の男に対する、情が。

気色悪かった。頭が狂っていると思った。ある意味、千尋よりイカれている。ある意味、いち生命体として逸脱している。限りなく、間違った方向に。

「不思議か？ 俺が笑っているのが」
「「!？」」

そう、龍遠家の若者は言った。全てを見透かした眼差しをもって。

「無理もない。俺もまたおかしいからな。けど、けれど……それが間違っているとは思ってないぜ」

まるで、千尋と対しているかのようにだった。

そのセリフは、まるで千尋そのもののようだった。ゆえに悟る、理解する。

千尋が唯一、愛する者が、こいつなのだと。こいつ以外、ありえないのだと。

自分の主と同等に戦えるのは、こいつしかないのだと。

※ ※ ※ ※ ※

「龍遠 ハク」

集まった皆の質問に可能な限り優しい声色で対応していると、後ろから双子の兄が言ってきた。

皆も空気を読んだのか、無言になる。

「ん？ 何だ？」

「お前は凄いな。色々な意味で、狂っているが、凄い」

「ハハハ、まあな。自分でもそう思うよ。でも、それが俺なんでね」

「お前がこの学園を選んだ以上、『こういうこと』になるというのは予期できたはずだ。そして実際にやった。つまり、こちら側も

そう捉えていいのだな？」

「もちろんだ。そのためにやったからな」

なるほど、と相槌を打つ二人。

合点がいったようだ。何かは知らないが、彼らなりの考えに結論が出せたようだ。

「千尋と、ぶつかるともりか？」

「俺としてはそうしたくないし、するつもりもない。が、きっとそうなるだろうな。あいつは『自分』しか認めないだろう。俺も最初はその疑問に答えていた。けど、それに疑問があつてね。んで、その疑問に答えがないかと思ひこの学園に来たんだが、二人の姫様と出会って確信したよ。俺の最初の考えは、間違つてたと」

「対決は避けられん、か」

「ああそうだ。むしろそれが必然だ」

「あの、ハク様？」

「趣旨が全く見えないのだが」

双子が心底なるほどと納得していると、後ろからルカとティアが語りかけてくる。

うん、そうだ。言わねばなるまい。色々遠回りしたけど、たった二ヶ月だったけど。

答えが出せてよかった。

だから、前を向かねば。対決するために。彼女たち、いや、皆の力が必要だから。

「ルカ、ティア」

「あ、はい」

「お、おお。何だ」

……改めて見ると、二人とも本当に綺麗だ。

初めて会った時、それはそれは美しく、海と月に譬えたのが懐かしいな。思えば、あれから始まったのかもしれない。父さんの言葉も同じように頭によぎる。

『嫁さん、必ずゲッツしてこいよ!』

……ハハ、おい父さん。やっぱあんたは凄いよ。

こうも早くその決断を予想していたんだな。だから言ったんだろ？
俺が逃げないように、曲げないように、間違えないように。

ありがとう。

だから、頑張るよ。俺、頑張るよ。

「結婚しよう」

さあて。

いっちよ、運命と戦うとしますかね。

集まるは、四人の八帝

夜。

あと数日で満月になろう夜空を見上げながら、俺と誠と空とヴァンは寮の屋上にいた。

数時間前、俺がティアとルカにプロポーズをした瞬間、二人は卒倒したこととでちょっと騒動になり、とりあえず今日は帰宅しようということになる。そのまま二人を寮へ送り、俺たちは男子寮へ帰って夕食、風呂の後四人で屋上に上がり酒を飲もうということになった。

誘ってきたのは、誠と空とヴァンだった。

三人とも、笑顔で俺に話しかけて来てくれた。

怒涛の展開ともいえるあの流れの後、いくつかの質問はあったが、それはどれも俺の身体や気分のことを聞くばかりで、今起こっている事の顛末を聞くようなものはなかった。

それは同時に、待っているということになる。

「……悪いな」

そう、月を見上げながら俺は三人に言う。

「気にすんな。どっちかつつーと俺はあの冷鉄女が来たことの方が重大だぜ」

「ま、誠。あの人ってやっぱり誠の……。その、お嫁さ」

「あ？ 何だヴァン？」

「いえ。何でも」

「まゝ、とりあえず、俺こと空様は様子見てやつでいかせてもら

うさ」

四人で飲む酒は、ここ2ヶ月定期的にあったが今日の酒はまた違って感じた。

今彼らに話してもいいが、それは女子がいる明日にしたい。その方がより正確に伝わるからだ。女子を前にして話すのと、男子を前にして話すのでは、たとえ同じ内容であろうとも多少変わってきたしまうから。

それは、言い逃れをする可能性があることということ。

しかし、女子の前ではそれが出来ない。きっと無駄なプライドが許さないだろうから。はっきりと、正面から、話さなければならぬ。俺と、千尋のことを。

だから――

「明日、全部話すよ」

「おお、そうしろ。全然構わねえよ」

「ハクくんが話したい時でいいよ」

「まあ、何かあったら親友として俺も補足してやるさ」

「ああ……ありがとう」

男四人、ムサイながらも何とも言えぬ男気的なこの雰囲気。いいな、すごく。

そう思いながらコップにある酒をクイツと飲んだ、そんな時だった。

「いや、これだけは先に話しておかねばなるまいだろうよ」

後ろから男の声が聞こえる。それは、今日転入してきた生徒。千尋の家に仕える守護三家が一つ。けれど、だからといって俺に敵対心があるようではなく、むしろ好意的に接してくる印象を受ける。

何だあ、という感じで誠が振り返り、それに続いて俺たちも彼を見る。

野暮でもあるが、今日中に言っておくのが道理だろうと彼は言った。

「これは仕事のうちではないし、正直言えば龍遠　ハクに手紙を渡すことで俺の仕事は終わった。ゆえに、これから先は俺の個人的な事情に他ならん。だが、遅かれ早かれ知ることになるろう。一週間後、お前たちに関わることもあるからな」

「前置きはいいんだよ、さっさと用件頼むぜ、ゴラ」

「威勢がいいな、京極　誠。まあいい、今頃俺の妹もあっちでこのことを話しているだろう。それ即ちやや衝撃的なことであるが、龍遠　ハク」

「何だ」

それまで余裕があった表情を一変させ、小さく息を吸い双子の兄はまっすぐ俺を見た。

彼の意志は、今だけは千尋の守護ではなく、一人の男のものであった。

「はつきり言おう。今から言うことが、千尋がお前に用意した『舞台』だ。最初聞かされた時は千尋らしくないとも思ったが、ある意味ストレートなものと解釈できる。全て、これで決めようというものだろう」

「そうか。……わかった。それは何だ」

「……揺るがんな、まったく。本当に恐れいる。それはな——」

※ ※ ※ ※ ※

ハクに内容が告げられた次の日。

時間は午前十時。場所は『光誕』。八大都市にして世界最大の貿易都市でもある。

数十メートルはあろうかという城壁。中は妖・精霊の者らが住居を構える。貿易都市ということもあり、都の中では装飾品や骨董品、その一族でしか作りえない貴重な『もの』が何千という妖・精霊によって取引されている。相も変わらずここの賑わいは凄まじい。

ただ、今日は違った。

いつもは早朝から店の商人が金切り声を上げて客寄せに励むはずであった。しかし違う。皆、ひそひそと『商売どころではない』あることに夢中だったのだ。噂か、はたまたデマか。どちらにせよ、おおよそそれが合っていることは間違いない。けれどやっぱりそれは確かか。どう考えても憶測ではないか。

そんな堂々巡りのような不思議な言伝が、都中に広まっていたのだ。

「おい、聞いたか？」

「もちろんだとも。何でも、今日この光誕に『八帝将』が来るらしいじゃないか」

「場所はおそらくラビリスだろうが、問題はその数だろ」

「ああ……四人、だもんな」

「歴史を振り返っても八人中半分が集まるなんてこと、まずなかったぜ」

「おうよ。いったい、何が起ころうとしてるんだろうな」

自分が気になる、または興味があることはあつという間に広まっていくもの。それは妖・精霊とて人間と同じである。ましてやこの世界を統括する八人のことだ。知りたくないというのが無理なことだ。

ラビリンスとはこの光誕において統括を請け負っている八帝将が一人、『紅帝』が本拠地としている塔のことだ。都の中心にそれは建っており、象徴ともされている。

どこから出たか不明ではあるが、所詮は噂。けれど、それには必ず最後に引っ付いているものがある。

「近いうち、何かが起こる。これだけは間違いないこと」

何かが起こるということが確実とされ、さらには今日八帝将が集まるかもしれないという噂。広まるには充分すぎる材料だった。そして残念なことに、その噂は……

おおよそ、当たっていたのであった。

※ ※ ※ ※ ※

コツコツコツ――

響くは、ラビリンス最上階の通路。下界より持ってきた知識で作った仮装エレベーターでしか上がれない階。仮装といっても、内臓された妖力で浮く床によって移動するものであるが。最上階に着くと、視界に入るのは一つの通路。それ以外ない。

左右一定区間に蠟燭があり、辛うじて見える廊下を歩く。まるで自己催眠をかけられているかのようでちよつと怖い気もするが、単純にこの通路を考えた者の趣味である。最近はラベンダーの臭いが出る蠟燭がお気に入りのようなのだ。そしてたどり着く先は……

扉。

この都市の長がいる一室。

ギィィィィィィ

扉を開ける。見えてくるは奥行きのある部屋。十メートル近くあ

る縦長のテーブルと、周囲にある彩り豊かな飾り物が通路を歩いて来た者の小さな恐怖心を和らげる。落ち着く雰囲気とその部屋にはある。

さらに奥には個人用の部屋があるのだが、それに続く扉は今は閉じられている。

左右それぞれ五席と、上下に二席。計十二席。

光誕に関わる重大な会議や討論の場にも使われる場合があるが、年に一回あるかないかの頻度。けれど、普段の手入れは決して怠らず、常に万全な状態で存在する。そう、たとえば、今この時のためのように――

視界に入るは、二人。

「ようこそ『磁帝』様。北の学園よりはるばる御足労いただき、大変ありがとうございます」

椅子から立ち上がり、微笑みかけてきたのは一人の女性。八枚もの着物を羽織り、姿勢正しく、かつ礼儀正しく一礼する。赤く燃えるような『紅和服』という光誕名物の着物を好んで着用している。

髪は黒、後頭部で小さく結び清潔感ある髪型をしている。顔は細めで眼はやや大きく、ちらりと見える八重歯が可愛い。下界にあったとされる『日本』という国のイメージをそのまま引き出したような女性だ。流行りものを集める趣味があり、現在は蠟燭にはまっているが数年前まではランプであった。最近では口紅に興味があるらしい。

わずか二十一という最年少にして八帝将となった若き才女。その力はもちろん、カリスマ性は光誕の住人にとって絶大な人気となっている。

世界貿易都市、光誕の長。

『紅帝』、わたきぬ渡絹しず静。

「おお、やつと来たか。遅すぎだ、待ちくたびれたぜ……ま、観光は楽しかったがな」

遅れて立ち上がるは一人の男性。

その体格は大柄であり、横幅は平均の三人分と等しい。オールバックであるが前髪だけ斜め上に突き出している。どう頑張ってもその部分だけ勝手に突き出すと本人は嘆いている。髪色は紺。

体格もさることながら、彼の腕周りも凄まじい。通常の五倍はあろうかという引き締まり、鍛え抜かれた上腕。顔や腕、というか身体全体に切り傷があり威風堂々たる気概を放つ。眼は鋭く、ただ瞳はどっしりとしているなんとも屈強な男。

世界武闘都市、義蘭の長。

『豪帝』、ガロウ・クロンゼル。

二人の様子を二度見して、扉を開けた者は満足そうな表情を浮かべた。

当然ながら、その者も八帝将の一人。管轄都市はハクが通っている学園とは違う、もう一つの学園。北に位置し、氷山が隣接する湖に建設された、学園都市。

髪は金髪。瞳は緑。髪型はくちやくちやで無造作であるがそれは彼が外見の身だしなみに全く興味が無いからである。彼にとって、自分の身体は『動く機械』に過ぎない。自分の脳だけ確保できていれば、首から下などどうなっても構わないのだ。当然、髪型も然り。

その卓越稀な才能は八帝将、否、この世界随一。

石田がハクたちに用意し学園行事でもあった、陸・海・空のクラス別対抗試験も彼が作った。石田の親友でもある彼は、いつも飄々としていて自分の興味のあることしか特に動かない。だがしかし、

一度興味対象となったことには死力を尽くし、一切の妥協なしの成果をあげる。

北の学園都市が長。

『磁帝』、ヴォルト・アーヴィング。

「A H A ! 待たせたあ？」

※ ※ ※ ※ ※

「これで八帝将が三人揃いましたね。豪帝様に磁帝様、お久しゅうございます」

「名前で構わねえぞ、静。歳が一番低いからってそんなに敬服する必要はねえよ」

「Y e a h . それに八帝将中、極めてだらしない二人だしね」

「てめえに言われたかねえんだよ、磁力金髪」

「O h , なんと言われようだ」

「お二人とも、喧嘩しないで下さいませ。私としてもまだ八帝将になって経験が浅いのでどうしてもこういった対応になってしまいます。申し訳ありません……」

ペコリと頭を下げる『紅帝』静に対し、ボリボリと頭をかきながらどうしたもんかと唸る『豪帝』ガロウ。そんな様子をポケットから取り出したチョコレートをカリカリ食べながら笑う『磁帝』ヴォルト。

八帝将――

その強さ、その力、その存在。まさにこの世界において特筆すべき者たち。

この世界に初めてやって来て、龍が王になり、一通りの落ち着きを取り戻した際に「やはり形式的にも管轄すべき者が必要だ」と多くの妖・精霊が思った。すでに述べたが、それと同時に学園を建設

しようという案も浮上。当然ながら学園には多くの妖・精霊が住まうことになる。

そうして、初めは形式的に。徐々に鮮明に具体的に実質的になっていった。

だがしかし、それでも八帝将が集まるという未曾有の事態になることはなかった。

八帝将が集まるということは、それ即ち世界に何らかの異変があるということだ。

「で？ 俺と静を集めた理由は何なんだ、磁力金髪」

「A、僕もその説明をしたいんだけど、あと一人来てないからなあ」

「白帝様ですね、もうそろそろ到着されるかと思い――」

《わ、渡絹様！》

突如、部屋の天井右上にあるスピーカーから女性の大声が発せられた。

この塔を統括している部門、つまり渡絹 静の部下とされる者たちからだ。貿易都市ということもあり、商売人と客、商売人と商売人とのいざこざもあるが、基本は本人らの裁量に任せている。

無責任と思うかもしれないが、彼らは基本自分たちで問題を解決するのだ。であるため、彼らが動くことはあまりないのだが、もちろん例外もいくつかある。

その一つが……

「何事ですか。それに私のことは静と呼んで欲しいと何度言えば」
《今はそんなことを言っている暇はありません！ 南西の上空、距

離三キロより未確認の飛行物体が接近中です!」

「あらまあ」

監視、である。

といっても、外部から不法に都市に侵入して来ようとするお尋ね者や魔物を感知する仕事であるが。都市内部の監視は住人たちに任せればいいし、初代光誕の長が「面倒くさいから嫌」という理由でしていない。

真面目な静は都市内部もやるべきではと思っているが、特に問題も出ていないため今は静観している状態である。彼女が密かに変装して都市内部の治安を警護しているのは内緒だったりする。……何気に住人たちには知られていることではあるが。それを含めて親しまれている彼女だ。

「未確認と言っても、外見はわかるのでしょ?」

《は、はい。ですが、今まで見たこともない物体でして》

「どんなものかわかるかしら?」

《え……とですね。白いです》

「……。他には?」

《白くて動いています》

「……………。他には?」

《白っぽいです》

八帝将三人含め、スピーカーカーで話している彼女も固まる。何とも微妙な空気となった。

ただまあ、紅帝、豪帝、磁帝はそれだけでもうわかっているのだ。三人とも、あいつならやりかねんとほとほと落胆しているのである。

せめて普通に都市に来てほしかったのだが、何故上空からあえて目立つ格好で登場するのか。

自分らを集めようとしたのは他でもない彼であるというのに。

「大丈夫ですよ、その……一応物体みたいなものは安全です。すみませんが天井のパッチを開いてもらえますか？」

「ええ！？ ですがそれではあの白くてウネウネ動いているものを中に入れてしまいますが」

「その白くてウネウネしているものに乗っている方が私と同じ身分の方です」

「ええええ！？ わ、わかりました。姫様がそう言うのであれば」
「「……姫様？」」

ポカン、と豪帝ガロウと磁帝ヴォルトが静を見る。
みるみるうちに真っ赤になる彼女。

「ここでは姫と呼ばないようにと再三言っているではないですか！」
「ああ！ ごめんなさい渡絹様！」

「もう！ さっさとパッチをお開きなさい！」

ガゴゴゴゴゴ……！

大きく軋むような音を響かせながらアビリンス最上階にある天井が開く。同時、その開いた上より太陽の光を背に何かが見える。

光を浴びているため黒く、見づらいのだが徐々に鮮明になっていく。

白く、白く、どこまでも白い『鳥』。羽ばたく音と一緒にその白い鳥はゆっくりと降下してくる。当然ながら、その鳥は生命体ではない。紙で作られた、乗り物に過ぎない。

鳥が中に入ると。天井のパッチが閉じる。

未だ顔を真っ赤にしなげらふうと溜息をつく静。やっと来たかと

呆れ顔のガロウ。親友に再会した喜びを身体全体で表現するヴォルト。そして、そんな三人の視線を受けながら、自慢のヘラヘラ笑いを携えて、男は降りる。

「やあやあ、皆。お久しぶりっすね。そんじゃ、いきなりで悪いけどお」

くるりと一回転、ターンを決めて。

鳥に使っていた紙を分解し、大きな画用紙に変えて。

さらに近くにあった黒い紙を使って画用紙の上部分に文字を描く。それは……

「学園別、南無組対抗血みどろ合戦の会議を始めようか」

瞬間、全員の顔つきが変わる。

知らせで聞いていたが、まさかとは思ったが、やはり本当だった。目の前にいる、男が放った言葉もかなり語弊があるのだろうか。

しかし、けれど、それでも。まさにその言葉に全てが当てはまっていた。

南の学園都市が長。

『白帝』、石田 健次郎。四人の将が集まって、いよいよついに。

ことの真相が明かされる――

明かされた事実

【北・南学園 南無組対抗試合】

双方の学園に存在する南無組の生徒たちによる親善試合をここに提案する。

目的・この世界における二つしかない学園の親交を深め、よりよい未来へと歩むため。

内容・全二試合による総力戦。

一試合目は二試合目に対するポテンシャル試合となる。つまり、一試合目で勝った方が次の試合に幾分か有利となる仕組み。一試合目に勝てばその有利さを次試合で生かせ、負ければ次試合にも響いてしまうもの。ただし、絶対的な有利ではなく、逆転も可能なものとするため、ギャラリーとしてはかなり楽しめるものになるであろう。

なお、一、二試合ともに、ルールや試合内容は全て八帝将が決めること。

これに、他の勢力や一族が関与することは認めない。また、場所は都市ではなく改めて試合に相応しい場所を要求する。理由としては、これからもこの親善試合を行うであろう未来性と、都市となれば、その都市を管轄とする八帝将の独立的な関与を是正するためである。

最後に、健全たる精神と、壮大なる懷により、この提案が許諾されることを、私は願ってやまない。

※ ※ ※ ※ ※

「最初見たときは何事かと思ったが、まあ面白えこと考えるもんだぜ」

そう言って、テーブルに置かれたコーヒーをクビツと飲む『豪帝』ガロウ。

図体がでかすぎるため、右手に持っているコップが子供が遊ぶおもちゃにしか見えない。それほど彼の手は大きいのだ。まだ湯気が立っているものの、彼は一回で全て飲み干した。

それぞれテーブルには四人座っている。白、磁、紅、豪……名だたる将の猛者たちである。

丁寧にコップを取ってゆったりと飲む『紅帝』静が意見を述べる。

「確かに突拍子も無い案だとは思いますが、私たちの観点から見れば、こういう学園同士の交流は賛成ですね。きっと面白いものになるでしょう」

「ああ、まったくだ。さらに言えばこれはお前ら『二人』で充分に対応可能な領域の案件だ。つまり……」

ゴツツと、コツツとガロウと静が飲んだコーヒーを置く。

そしてそのまま視線を同じ階級に位置するであろう二人に向けた。向けられた二人は、同時に頷く。

「Yeah. それだけじゃないのさ」

「すでに連絡はすんでいるはずだよ。その内容が本件の問題だ」

「私に発信された連絡事項では、『単なる交流試合ではない』とありました」

「俺には『非常にまずい試合となる』とあったが」

「Great. その通りだよ。何も隠さず、素直にストレートにキミ達に報告しているぜ」

「問題は、その案を提出した女の子にある」

「「女の子？」」

『磁帝』ヴォルトと、『白帝』石田の発言に、静とガロウは首を傾げる。二人が受け取った連絡は、極めて簡単なものであった。しかし、その連絡の最後に至急集まれたしと書かれていた。

【この交流試合は単なる親善なものではない。非常にまずいものである。外観から見れば問題ないが、内観からはかなり深刻な事情となっている。至急、これに関して集まりたし。事態は火急速やかに対応すべきなり】

これが、二人に配信された内容である。

当然ながら、受け取った二人は疑問を抱く。どこが深刻なのか、中身がまったく書かれていなかったのだ。だが、最後の文中から、非常にまずい状況にありつつあることは間違いない。受け取った直後、すぐさま二人は指定された集合場所光誕に移動……といっても、静は自身が管轄している都市であったため、用意して待つだけであったが。

それでも、この案件がどういう意図があるのか、彼女なりに真剣に向き合っていた。

「何だよおい、二人して生徒の女に夢中ってか？　とんだ馬鹿騒ぎだな……ったく」

「その女の子に何か問題でもあるのですか？」

「ああ、あるよ。大有りだ。この案件は、実はたった一人にのみ向けられた舞台に他ならない」

「Yes. 交流試合？　ハハッ、ちゃんちゃら可笑しいね。その子はそんなゴミみたいなものになんてちっとも考えちゃあいないよ。全ては一人だけのために、さ」

「随分と詳しいじゃねえか、アーヴィングに石田。その女の名前、

教えろよ。どこのお偉い一族ってんだ、ああ？」

鼻で笑うガロウに対し、彼が聞いた質問の答えをじっと黙って待つ静。

ようやく本題に入れそうだと、ヴォルトと石田は顔に出さず安堵する。しかし、問題はここからだ。けれど、言わねばなるまい。彼女の名前を言ってこそ、ようやくスタートラインに立てるから。

二人して、意中の少女の名を言った。

「神宮 千尋」

ガタン！

椅子が勢いよく倒れた。倒したのは光誕を管轄する八帝将。

「……え？」

呆けたような、信じられないといったような、そんな顔をして静は言った。まさか、まさかの名前だった。『まさか』という単語をあと百回は使いたくなるような心境だった。これからの彼女の人生、まず間違いなく聞かないであろう名前だった。ありえない名前だった。

その名は、この世界において唯一、名字に『神』が許された一族。その一族以外、まず使われないとされる文字。黙って座っているはあるものの、声を低音にしてガロウが尋ねる。

「それは本当か？」

「Yes. 僕の管轄する学園に在籍しているよ」

「さらに言えば、俺の学園には龍遠 ハクが在籍している」

「「な!？」」

これにはさすがに『豪帝』ガロウも立ち上がった。

二つの学園に、それぞれ神宮一族と龍遠一族が在籍している。そしてさらにその者たちが交流試合という名目の元、争うというのか。

……いや、別にそれに驚く必要はない。そうだ、驚いて何になる。確かに信じられないことではあるが、ありえないことではない。長年学園という施設があれば、起こりえても不思議ではない。

「そうか、あの神宮一族と龍遠一族が、か」

「かなり驚きましたが、ありえないことではないですね。なるほど、私とガロウ様をお呼びした理由がわかりました。確かにやや衝撃的なものになるでしょう」

「おいおい、何勝手に二人で納得しているんだ？」

「え?」

「んあ? だからこれが俺たちを呼んだ理由だろ？」

「No, 今キミたちも納得したじゃないか。『ありえないことではない』と。だからそれだけじゃ精々キミたちを呼ぶ理由にはならないのさ」

「「……」」

沈黙。

まだ、何かあるというのか。

「この試合の案を出した少女、神宮 千尋の本当の目的だ。彼女はこの試合を、一族同士に関わる……否、僕の学園に在籍している龍遠 ハクに対する契約の場とするつもりだ」

「契約、ですか？」

「ああ、そうだ。彼女はたったそのためだけにこの試合を発案したんだ。『自分だけを選ばせるために、このふざけた試合を発案』したんだ」

「趣旨が見えねえぜ、石田。簡潔に頼む」

「何、簡単なことだよ」

そう言って、石田は三人の前に立った。ヴォルトは目を瞑っている。

対し、ガロウと静はマジマジと石田を見続ける。徐々にわかってきてはいるが、決定打がない。それを彼から聞かねばなるまい。

少女の、目的を――

石田は、深く大きな溜息をつきながら、はつきりと言った。

「ホント、俺ら八帝将も舐められたもんだ。つまりはね、『この試合で勝った者が――』」

※ ※ ※ ※ ※

「嘘、だろ」

そう言ったのは天下に名高きトラブルメーカーこと、京極 誠だった。俺が通っている学園の生徒にして、南無組随一の鉄砲玉、特攻隊長である。いつも自信に満ち溢れ、自分が神だと誇示し、常に前を見続けるその精神力や行動力を見るものを圧倒する。

けれど、そんな彼でも驚くことはある。

嘘だろ、と言ってしまふこともある。

昨日、双子の兄から『一週間後、北の学園と南の学園の南無組による親善試合がある』と聞かされた時はそれはもう歓喜していた。暴りたい歳頃なのかは知らないが、彼にとって目立つ舞台は最高のステージに他ならない。有頂天だった。

けれど、今。

その発案者の名前を聞いた瞬間、彼は凍りついた。隣にいる雪女に凍らされる必要もなく、凍りついた。それは、彼だけでなく、俺と空と小鳥を除いた南無組全員も同じであった。

「お前、昨日はそんなこと一言も」

「当たり前だ、京極 誠。俺が言ったのは一週間後に親善試合があるということだけ。それだけだ。それは言う必要があると思っただけで、千尋の本名を言う時は昨日ではなかった。今、この瞬間だ」

「神宮……だと」

「本当、に？」

そう言って、再度確かめるようにルカとティアが双子の妹を見る。妹はそれに答えるように首を縦に振った。はっきりと、明確に。一切の迷いなく。

そして、言葉が続ける。

「私とお兄ちゃんの主だヨ。龍遠くんと同じように千尋にも守護家があつて、うちはその一家なノ。驚かすつもりはなかったんだけど、ごめんネ」

「今回の、その親善試合は『その方』が発案なんですか？」

「うんそうだよ、音夢ちゃん。全部千尋が考えてやった事かナ。そのために私とお兄ちゃんがここに来たんだけ」

「まあ、私は誠のためだけだね」

にっこりと微笑んで零華は誠の側に寄る。全力で避けようとする誠だが、ロックされた自信の左腕は、まるで接着しているかのようには動かなかった。ぴくりともしない。

そんな中、俺は皆の前に行く。

「今ここで、俺と千尋の関係について話そうと思う」

神宮一族。この世界において、唯一名字に『神』が許された一族。同時に、一つ問おう。

この世界で、王とは誰だ？

貴方ならどう答える？ どう回答する？

きつと、こう述べるだろう。『龍』だと。正解だ。間違いなく、正解だ。

だが、間違いだ。

この世界の住人に同じ質問をしても、きつと間違いなく同じ回答であろう。龍であると。龍遠一族であると。王と言えばあいつらである。しかし、ちよつと待ってほしい。ちよつとそれは待っていただきたい。ちよつとどころではないな、かなり待ってもらいたい。それは本当か、と。

この世界において、種族は大きく分けて二つある。一応は三つだな。一つは妖。一つは魔物。そしてもう一つ。魔物は言語を話さないので、我々と共存はしていないが、もう一つの種族は当然のように我々妖と共存している。それはもうごく当たり前のようで、当然のもの。疑いようなない、真実。

そう、理。で、それがどうしたって？ ……おかしいとは思わないか？

俺は、この世界で王とは誰だと尋ねたのだ。何故、龍と答えるのだ。魔物の中に王はいない。彼らに王を争う歴史はないし、魔物の王なんて決めるだけ意味がないだろう。彼らは自分が生きていれば

それでいいと思っているし、何ら不思議なことではない。

そう、彼らは。もう一つあるだろう。種族が。変わりようのない、間違いようのない種族が。

精霊が――

精霊の王がいないと、誰が決めた。誰が確定させた。いない？

そんなことはないさ。
いるよ。

ただ、俺がさっきした質問の答えじゃあない。何故かって？

答えじゃないからさ。

……悪い、ちよつと意地悪が過ぎたな。正確に言えば、それはもう『考える必要のない』ことだからなんだ。何故生命体は息が出来るのか？ 空気があるからだ。これと同じ質問なんだよ。精霊の王に関する質問は。今のとまったく同じなのさ。つまり……

決定していることなんだ。精霊の王は。

もう必然というか、至極当然のことなんだ。精霊については。だって彼らは、妖とは違い、その歴史が違い過ぎる。下界にあった世界が『生まれた当初』から存在してきた者たち。ずっと下界と共にあり、そしてずっと今もなおあり続けた者たち。

それが精霊。

桁が、違う。

その最高峰と称される精霊を、彼らは一応『王』と呼ぶだろうな。ただ、もう王と称すのも変なのだろう。変どころか、間違いなのだろう。だってそうだろ、何千、何万、何億、何年と「往く末」を見てきた連中だぜ。王なんて、考える必要もないであろう。だから彼らは、あいつの一族は、次第にこういう称号に当てはまっていった

のさ。

神、と。

“幾千幾万幾億幾年、不動たるは、己だけさ”

以前、夢で千尋が言っていた言葉。あれはそれを意味している。
不動なんだ。あいつは。

全知全能なんだ。あいつは。
もう神そのものなのかもなんだ。あいつは。

わかるかな、この考え。理解してくれるとありがたい。そう、最初から誰もが知っている一族、知らないとおかしい一族。それが神宮一族。精霊の王……精霊神とまで称されるもの。

【元の精霊】が一族。三大古代精霊が頂点。存在そのものが、神。

「今回の親善試合。千尋の目的はたった一つ。俺だ」
《ハク？》

「ああ、そうだ。龍遠一族の暗黙のルールとされる、一夫一妻制。俺はそのルールをぶち壊す予定なんだ。ルカとティアを嫁に迎えることで、それを破壊するつもりなんだ」

俺は、ゆつくりと、はっきりと、伝える、意志を、想いを。

「だが、あいつはそれを許さない。『自分だけ』しか、許さない。自分以外なんて、ありえない。それが千尋の考えだ。出会った瞬間に言われた、“必ず結婚する”は、千尋の全てになっている。そして今、俺がそれを、その全てを、壊そうとしている。だから」

だから、あいつは、この試合を創った。
メッセージは極めて簡単。書く必要もなく、言伝にする必要もな

く、会う必要もなく。

あいつにとっては、実にストレートだが、実に一直線だが、それが答え。

「この試合で俺が勝てば、俺の好きにできる」

“この試合で己が勝てば、己の好きにできる”

『この試合で勝った者が、全て好きにできる』

「『つまりは、この試合——』」

俺と、千尋と、八帝将の前にいる石田の言葉が全て合わさり……
同音同語となって、馬鹿馬鹿しいほどの答えとなって、宣告された——

「『ただの痴話喧嘩なのさ。人生を賭けた、ね』」

そう。

実に、くだらないほどに。

けれど、俺と千尋にとっては、人生全てを賭けるのと等しいほどに。この喧嘩は……

世界を揺るがす規模へと拡大してしまったんだ。

そして、物語は進んでいく。舞台は、貿易都市『光誕』と武闘都市『義蘭』の間にあるとされる浮遊島、『ソリア』。かつて下界よ

りこの世界へ降り立った最初の者が着地した場所。

八帝将が、承諾したのだ。この戦いを、この舞台を。

それが何を意味するのか、何故なのか、詳しいことはわからない。
けれど、けれど。

もはや、引き返せない。だから、覚悟を決める。

運命との戦いは、もうすぐそこまで来ているのだから――

ハク・千尋・邂逅

ゴウンゴウン……

「おお、やっぱ空を飛ぶってのは気分がいいぜ。俺様も飛べる妖か精霊に生まれるべきだったかー」

「ダメよ」

「何で即答なんだよ。そして何でお前が俺の小さな夢にダメだし出来るんだよ」

「誠、あなたまるでわかってないわ。本当、頭の上からつま先までわかってないわ。少しはその後のことも考えるべきね。あなたが飛んでしまったら私が。私が」

「……零華」

「凍らせるしかないじゃない」

「いつもやってることだな！」

誠と零華がいつもの談笑をしている中、現在、俺が通っている学園の生徒と職員全員が空飛ぶ船に乗って移動している。

目的地は言うまでもなく、『光誕』と『義蘭』の間にあるという浮遊島『ソリア』。明日、親善試合という名目の元、戦いの舞台となる島。歴史ある大切な島らしいのだが、実際それだけで、特に何かしらの事情があるというわけもなく、すんなり試合場所はここに決まった。

全て、彼女の計算の内なのだろう。

ま、当然のことであるが。

ゴウンゴウン、と確かに空を飛んでいると意識させるような機械音を鳴らしながら飛行する船。二百人以上の結構な数であるのに、船内ではまだまだ空室の余裕がある。それもそのはず、この世界に

おいて船の代名詞とも称される妖、【安宅丸】の所有している船なのだ。二組担任の切柳先生がその一族ということで、生徒職員全員で移動できている。

噂には聞いていたが、ここまで大きいとは思わなかったな。

<『妖』用語辞典>

【安宅丸】 あたけまる

関東の妖。以前、【枕返し】の際にも紹介したが、日本では「もの」に魂が宿するという文化が存在する。それは誇りであるもので、またこれからも繋いでいくべき日本の心でもある。

安宅丸はそんな中でも特別巨大なもの、船が妖となったものだ。

もともとは軍艦であり、戦国時代から江戸時代までその名を轟かせた名のある船だった。自我をもち、志の低い者や罪人が入ろうとすると唸り声（汽笛）を鳴らし乗船を拒否したこともあるという。その気高くも轟々しい心は時たま暴走することもあった。

ある暴風な夜、何かを思ったのか安宅丸が港に繋がれていた鎖を破り「逃走」を試みる。全力で幕府はそれを捕縛し、四十五本もの鎖で船を縛り上げたという。それほど強大で破天荒であったが、その力は幕府が手放すことを頑なにしなかったとされている。

この世界においてはそんな荒々しい気性の一族ではなく、主に船作りに取り組んでいる。空を飛んだり海を渡ったりする妖や精霊も多いが、陸でしか移動できない者も数多く存在するため、彼らの船は必要不可欠であるのだ。ただ、あまりの熱心さゆえか、船に乗り込むと性格が変わる一族の者が圧倒的に多いことでも有名のようだ。

「皆、看板に出てるな」

「昨日、切柳先生から消灯時刻を守らなかったやつがありえねえぐらい怒られていたさ。仏の切ちゃんて言われてるのに、あんなに性格変わるとは思わなかったさ」

「切柳一族は【安宅丸】だから多分、変わるって皆思ってたけど、あれは予想以上だったな」

そう言いながら、俺と空は彼の十八番である“ウィル・ラザード”で滑走しながら会話している。

空飛ぶ船を横に、心地よい風を背に無限なる天を謳歌する。側にいるのは、子供の頃からずっといてくれる親友、八雲 空。雲の精霊が一族の長男。

……空。お前は今何を考えているのだろうか。

俺のことか。千尋のことか。音夢のことか。おそらく、それらは違う。今彼が思っている者、意中にある者はたった一人。まず間違はなく、彼女だろう。

「やっぱ気になるか？ 霧ちゃんのこと」

「……ま、ね」

八雲 霧。空の双子の妹だ。

学園に入る前に空との会話で登場した子だが、彼女はもう一つの学園に在籍している。一族を嫌っている空にとって、唯一、一族関係者で心許せる女の子。理由はわからないが、仲がいいはずの彼女は、こちらの学園に来ず、北の学園へ行った。

何故か。

多分、答えは出ている。空も、それをわかっている。

彼女は、雲の一族である実の兄を慕っていた可愛い女の子であるとともに、自分の一族も大切にしている優しい子であった。だから、話を出さないにしてもどうにかして空を帰ってこれるように試行錯誤していた。それは、度々会っていた俺にもわかる。俺でわかって

いたのだから、一緒にいた空には尚更だろう。そして、きっと彼女は会うだろう。

空の、敵となって。

相手の学園の、南無組となって。

確証はない。絶対ではない。けれど間違いないと確信できる。彼女は南無組にいる。

それも運命であると、俺と空はわかっている。だから彼は今彼女の事を思っているはずだ。思わずにはいられないはずだ。それは同時に、一族と向かい合うことである。空の、一族と。

「まあ、ハクも色々あると思うけどさ。俺にも色々ある試合になりそうさ」

「そうか。でも、それはいずれ来るものだったんだろ？」

「ああ。だからこれでいいと思う。これで、俺もようやく一つの分岐点に立てる」

「……」

空。お前は俺の親友だ。それは偽りのない、一片の曇りもない事実だ。

だから必ずお前を助ける。必ずお前を支える。それが俺にとって精一杯の恩返しだと思っているから。言うまでもなく、言葉に還す必要もなく、その考えを彼に向ける。視線として。

「ちょっと、気持ち悪い視線向けないでくれる？ やっぱあんたホモなの？」

「もうそのネタは止めろ」

※ ※ ※ ※ ※

ハクたちが向かっている浮遊島『ソリア』。そこには現在超巨大な闘技場と、それを囲む宿舎や店で賑わっていた。それら全ての建物と呼べるものを、たった四日で構築したのである。

世界技術都市『総園』^{そうえん}。腕に自慢のある技術者集団が巣くう都市。先ほど紹介した【安宅丸】の切柳一族もこの都市に住んでいる。また、派生して芸術関係の者らも集い、都市は異様ともとれる不思議な街並みとなっている。

治めるは『無帝』こと、アンリ・スチュワート。女性である。

極めて無口とされているが、別段話すのが嫌いなわけではなく単に極度の人見知りなだけである。同じ八帝将である『紅帝』静とも仲がよく、頻繁に会って食事を楽しんでいる。黙々と作業に準じるのが好きで、また基本他人とは関わりを持ちたがらない偏屈な者らが集まる都市ということもあり、住人からは彼女は大変好かれている。

そんな彼女が先頭に立って、彼女を支持する技術屋集団も手伝ってか、石田が提示した四日間を本当に彼女らは実現してみせた。驚嘆に値する。

同時、その四日間を使い、この学園対抗試合は世界へと伝達された。ありとあらゆる方法で試合内容と日時、そして【戦う者らのリスト】が広まった。それはもう、見た者聞いた者全員を驚かせたと言っている。驚かなかったのは技術都市の連中ぐらいなものだ。

龍遠と神宮。

まさに、最高の対戦カード。

その戦いを、否、その一族の者らを人目見ようと、世界中から妖精霊が集まった。極めて短期間ではあるものの、来れる者は全力で

ソリアに集結した。

何せ、神宮家の者が表舞台に立つことなど、過去一度も例がないからだ。

正直、いるのかどうかも定かではなかったからだ。

ゆえに集まる。ゆえに集う。来る理由はそれだけではない。人魚にヴァンパイア、そして相手側の妖・精霊も滅多にお目にかかれないう者ばかり。さらにはこのような斬新な発想の劇場は、世界を生きている皆にとって最高に刺激的な舞台だ。見に行かない方がおかしいといえよう。

宿舎や交通の便は貿易都市『光誕』が静を先頭に尽力。

ソリア内の治安の維持や問題解決には武闘都市『義蘭』がグロウを筆頭にあたっている。

二つの学園に、貿易・武闘・技術都市の三つ。計五つの都市が一同に一つの行事に参加。まず、ありえぬことであった。前代未聞のことであった。

八大都市の残りの三都市も、これに興味がないわけもなく、少なからず動向を見守っていた。

しかし、そんな中、この試合が行われた本当の目的を知っているのはごく少数。

当然なれど、事実なれど、何とも不思議で不可解なものである。

そして、それに関係する主役たちは今——試合前日の今日。

港口に到着した……

「……ハク」

「ああ」

空が言い、ハクが頷く。南無組はもちろん、学園全員が後ろにいる。

誰も動かない。何故か。

今、今日の前に、自分たちが到着した数秒後に、同じ船が港の横に到着したからだ。切柳から事前に知らされていた。自分の一族の一人が、あちらの学園でも教員をとっている。おそらく、あちらの生徒たちも我が一族の船を使って来るだろうと。そしてそれはもしかしたら……

鉢合わせになるかもしれないと。

――ピシリ

空気が変わる。大気が引き締まる。気圧が凍る。

その場にいた全員が、それを感じた。感じさせられた。全て受身であった。受けざるをえなかった。同時、まるで勝手に、自らの意志でそうしたように、船の扉が開いた。

さらに橋から港へ橋が自動的にかかる。

扉が開く。開かれる。橋がかかる。かけられる。

そしてそこから

あ

ら

わ

れ

る

は

「やあ、ハク。久しぶりね」

瞬間、世界が止まる
眼前に佇むは

最強で最凶であり最狂にして最恐でもある最怯という最脅な
ああ、まさに
至高なる

“
相^{あいし}支に來たぜ”

妖の王。精霊の王。役者は揃った。

試合前夜

「己が知っている限りでは、そっちの南無組は全員で十一名と聞いているけど、いいかな？」

「無論だ、それを見越して三人をこちらに転入させたんだろ？」

「ふふふっ、さすがハク。『己の』ハク。正解だよ」

俺、空、ルカ、ティア、音夢、ヴァン、誠、零華、小鳥、双子兄、双子妹。

計、十一名。……今思うと、結局双子の二人は名前、教えてくれなかったな。何度か名前を聞いたのだが、試合前日に言うとして教えてくれなかった。何故教えてくれないのか疑問だったが、本人らが言いたくないのであれば仕方ない。

ま、それは置いといて。改めて前を向く。

今、俺の目の前にいる女性。彼女こそ、この世界最強と称されるべき存在。

神宮 千尋――

髪はショートボブ。色は驚きの白だ。しかしその髪艶は真珠の如しで、キラキラと星の粒子を漂わせているかのようだ。身長は低い女性としては平均よりやや下といったところ。身体が動かしやすいようデニムのパンツと、彼女お気に入り星座を彩った長袖の上着を愛用している。

目は大きくパチツとしていて二重まぶた。常に微笑んでおりそれが本当に笑っているのか、正確に判断できる者はごく僅かである。事実、彼女が本当に笑っていることなど、滅多にない。千尋が心より笑っている時は大抵逆で無表情の場合が多いのだ。

彼女は、嬉しいと悲しいを同一と捉えている。

それはつまり、感情など全て一直線で繋がっているから。

“所詮、感情なんてものは一時の酔狂なのさ。時間がたてば次第に落ち着いてくるもの。ゆえに同一とみてもなんら可笑しくないものだ。己は大体のものは『平等』にみれる女だからね”

平等。彼女はこれをどのような視点で考えているのか。

真面目に語りあえば、十人が十人、お前は狂っていると言うだろう。千尋の考えをわかってくれる者なんて、それこそ夢幻と同義である。

「へえ……となると、その二人がハクの『あれ』というわけかな？」

「ああそうだよ。……そうだな、ここで一つ、お前に言いたいことがあるんだけど、いいかな千尋」

「構わないよ、構わないさ。己はキミの話を無視するような女に生まれた覚えなど塵一つないからね」

「それは上々。千尋、彼女らが俺の嫁さんだよ」

すんなりと。さらりと。

俺はそれを言った。

何の迷いもなく、何の躊躇もなく、何の不安もなく。彼女にその言葉を告げた。一つの槍として、言葉という矛先を彼女に向け、一挙そぐわぬ仕草をもって俺は宣言した。

「だから、俺はお前だけのものにはなれない」

「……………」

俺の言葉に応えたのは、千尋ではなかった。

ヒュン——と千尋の後方より影が二つ見えた。『見えた』と思つた影はそのまま一瞬とも呼べる速度で俺の足元へ着地し……。

ガキイイイン！！！！

鈍く、けれど鋭い衝撃音が鳴り響いた。

「おいおい、神宮家の守護犬は短気な奴らが多いのかよ、ああん？」
「それはなくてよ誠。主の想いを身体で感じ取り、動いたまでのことかしら」

影二人の攻撃を受け止めたのは、俺ではなく誠と零華だった。誠は自慢の槍で一振りの刀を。零華は氷結なる剣で大鎌を。それぞれ、相手の一瞬と同様の速度で反応した。

刀。大鎌。

目の前に映るのは、二つの鋭利。

「リョーマに月下。止めなよ。別に己、怒ってないぜ？」

「……」

そう主から言われた二人は、黙って双方の武器を納め、一蹴りで千尋の後方へ戻った。そしてそのまま俺たちを見る。否、見下ろす。一人は男。一人は女。

男の方は和服姿に先ほどの長刀を腰に携えている。短髪で黒髪。目つきも鋭く殺気も継続している。

もう一人は女だが、こちらは先ほど感じた殺気はもうなくなり、ニコニコと笑顔を向けてくる。しかしその見方は明らかに敵意が感じられ、やはり見下ろすという表現が合っているのだろう。後ろに堂々と構えている、大鎌がその狂気を体言している。

「ごめんね、ハク。驚かしちゃって」

「問題ないよ。こちらにも真実を言ったまでだからな」

「真実、ね。真実、かな？」

「ああそうだよ。まごうことなき、一切の偽りもない、真実だ」

「ふふ、ふふふふふふ。ハク、真実って言うのは残酷でもあるかもね」

「そうだな。お前にとってはそうだろうな」

ふふふふと、先ほどからずっと彼女は笑っている。ずっとずっと笑っている。

もう、今の彼女がどのような感情を抱いているのか、わからない連中も多いだろう。けれど、俺には手に取るようにわかった。悲しいくらい、見る間でもないくらいわかった。

「そんなに嫌か？ 真実は」

「……うん、嫌だね。嫌だなあ。嫌過ぎる。嫌に違いない。嫌に決まっている。嫌しかない。嫌かな。嫌だね。嫌だなあ。嫌過ぎる。嫌に違いない。嫌に決まっている。嫌しかない。嫌かな。嫌だね。嫌だなあ。嫌過ぎる。嫌に違いない。嫌に決まっている。嫌しかない。いや——」

「俺は、この人生を、そう決めたよ」

「うん。“許さない”」

※ ※ ※ ※ ※

夜。試合前日。

案内された宿舎に生徒全員が休んでいて、俺たちも同様。今は、やや大きめの広間に南無組全員が集合している。それぞれ、思い思いの表情をしながら。

あの船に乗ってきたのは、千尋と、守護家の二人だけだった。

彼女たちは、他の生徒とは違い一足先にソリアに到着していたのだ。あの船については、薄々気付いていたがやはり予想通りだった

な。十中八九、創造したのだろう。千尋が。あいつにとって不可能という事象ほど無駄なものはない。

千尋の守護家の二人が降りた途端、千尋が指を鳴らし船を『解体』した。

その実力、圧倒的な妖力、有無を言わさぬ迫力にただただ生徒全員が固まって見ていた。近くにいた観光者らも、息を吞んで呆然としていた。あの程度、彼女にしてみれば造作もないことであるが、見慣れていない者からすれば、無言の圧力だろう。

心が折れる者も、いたであろう。

「テンション上がるぜえ」

静まり返った場に一声を漏らしたのは、先ほど俺を助けてくれたツンツン頭だった。

にたあ……と、どう見ても悪役全開の笑みをこぼしながら誠は立ち上がり、零華も笑顔のままそれに続く。彼女にとって、誠はどれほどの存在なのか、一度聞いてみるのも面白そうだ。

同時、ティアとルカも立ち上がる。二人とも、先ほどから何かを考えている素振りがあったのだ、収まりがついたのか顔に決意の表情が伺える。

「あれが、神宮 千尋なんですね、ハク様」

「あれが、我々が越えなければいけない壁というわけだな、ハク」

「そうだ。あれが精霊王、精霊神とも称される神宮家の精霊だ。そして、俺の、俺たちの必然たる壁だ」

「はい」

「うむ」

そう、これは俺だけの戦いではない。

ルカもティアも、充分に関係のある話だった。俺だけが頑張ればいいと、彼女らには迷惑かけたくないと思う気持ちもあるが、それは二人に対する侮辱に等しい。皆で、三人で乗り越えなければならぬ問題だ。後ろから、誠が仁王立ちしながら問いかけてきた。

「ハク、まあお前が色々あるってのは俺様らにとっちゃ周知の事実だ。あの化け物女のことともそりゃあ驚いたが、『あれ』はお前、ルカ、ティアが相手するんだろ？」

「ああ、無論だ。こればかりは誠でも譲らないぜ」

「ハッ、しねえよそんなもん。さすがに初見であれと闘うってのはキツそうだぜ。だがま、敵はあれ一人じゃねえもんな。おい双子兄、あっちの南無組にも十一名いるんだろ？」

「肯定だ」

そう言って、双子の兄は立ち上がる。

「ま、ここらで俺の名前を明かすのもよいだろうな」

「いらん」

「なっ!？」 おい待て、ここまできてそれはないだろう!？」

「んなこたあどうだっていいんだよ。もうお前双子兄で定着してんだから、よくね？」

確かに、もうそれでいいと思う。一応空も双子の妹さんがあっちにいるだろうが、双子と表現するのはちょっと気が引けるし。かといって双子兄という名前もそれはそれで可哀そうな気がする。

そう思っていると、さすがに納得できないのか双子兄が異議を唱える。

「待て! 俺にも誇りある名前があるのだ! 聞いてくれ、というか憶えてくれ!」

「お前が以前から名前聞いてやってるのに『時が来れば……な』とか気色悪いこと言って拒否してたからだろ」

「そっちの方がよいではないか！ キャラがたつ！」

「ああ、なるほど。ってことはお前……」

「な、なんだ」

「存在感、ないんだな」

「！！」

衝撃的な顔、凶星、的中。色々言葉はあれどその全てが彼の顔から現れていた。ななな、と口をパクパクさせながらどうにか反論を考えているのだろうがそれに思考が周らないようで、なんだか可哀そうな気がしてきた。さっきからしてるが。

それでもどうにか何か言おうと頑張っている兄の後ろから、ぽつりと妹が言う。

「お兄ちゃん。バレちゃったネ」

「ちょ！ クルル、何を言ってるんだ！」

「っていうか私はもう先に女子の皆には言ってるけど」

「何い！？」

「ああ、もう面倒だ。いいんだよお前の名前はよ。クルルの名前が聞けただけで上々だ。話を続けるぜ」

「待てえ！ 俺の名前を聞け！ 俺は」

「クルル、零華。敵の勢力について教えてくんねえか？」

双子兄の話を無視し、とりあえずは敵の勢力について話を聞くことにした。ちなみに後ろの方で双子兄が何か言っていた気もするが、特に誰も反応はせず。次第に落ち込んでいく双子兄であった。

そして、敵勢力たる十一名の詳細が発表される。

※ ※ ※ ※ ※

「まず、皆がさっき見た私とお兄ちゃんの主、千尋だネ。それに私たちと同じ神宮守護三家の黒鉄くろがね リョーマに、白鉄しろがね 月下」

「ああ、俺と零華がぶつかった二人か」

「うん。あの二人はとっても強いヨ。特に目つきが悪かったリョーマは私たちの中では一番強いかな。あの長刀を持っていた男のことネ。接近戦が主軸の長刀使いだよ」

「ほお」

同じ接近戦ということなのか、誠がとても嬉しそうな表情をしていた。先ほど相対したのか相手の力量も何となくわかっていたようだ。

側にいた零華も、それに付け加えてくる。

「あっちの南無組の中では中心が千尋だったわあ。彼女の側にいつもいるのがあの二人だったわね」

「うん。うちの家と二人の家は守護家としての歴史が全然違うから。といっても、千尋の家が守護家をもったのはこちらの世界に来てからだけどネ」

「おっし、まずはその三人だな。で、次は？」

「四人が、俺の守護家だ」

話を広げるため、俺もその中に入る。実際、今日出来ればあの四人に会いたかったのだが会えなかったな……ちょっと残念だ。会って確かめたかったこともあったし、話すこと事態がしかなかったが。まあ、それもすぐ実現するか。ティアがその言葉に疑問を投げかける。

「龍遠守護家は何であっちの学園にいるのだ？」

「さあな。何か『思うところ』があるんだろう。……多分な」

「その四人というのは強いんですか？」

「ああ強いよルカ。とても、とても強い。あの四人は、本当に凄い」

「はあん、テンション上がるぜ。強い奴ばっかじゃねえか。なあヴアン！」

「ううう、僕、棄権できるかな」

千尋に、神宮守護家の二人、そして龍遠守護家の四人。合計七人。十一名のうち半数以上がこの構成か。何とも不思議な感覚だな。しかしわかりやすくしてある意味ありがたい。

残りは、四人。

「次に、八雲 霧ちゃん」

「……」

皆が、空を見た。

俺と双子兄妹と零華以外は意外だという目で彼を見た。当然か、名字が同じ者なのだ。この世界で、名字が同じということはつまり、一族関係者ということである。

ふう、と溜息を漏らしながら空が外に出て行った。彼にとって、相手のクラスに実妹がいるという事実だけでことたりたようだ。彼にとって、他の連中など興味がないのだろう。彼にとって、頭の中はそれだけなのだ。

音夢がその様子を、心配そうに見ていた。ちょっと迷ったけど、俺が空のところへ行ってくれと進言する。少し迷っていた音夢だが、ルカとティアが後で残りの相手を知らせると言う、少々恥ずかしそうにしながらも、「ありがとうございます」と一礼し空の後を追っていく。

俺が皆に、彼女は空の実妹のことを説明した。

八雲一族のことは空から皆に以前から話してある。彼の境遇や一

族関係の問題は既に南無組一同に知られていた。ゆえに皆もその意味を悟る。八雲　霧が何故あちらの学園に行ったのかを。話を続ける。

「残りは、三人か。零華」

「そうね……といっても、これ以上は無理よ」

「あん？　何でだよ」

「残りの三人はクラスにいるのはいるんだけど、自分たちが何の妖精霊なのか教えてくれないのよ」

「おいおいマジかよ！？　つってもここ二ヶ月で色々知る機会はあるんじゃないのか？」

「あるにはあったのだけれど、一切合切自分らの能力を行使しなかったわ」

「千尋の工作だろうな」

ずばりと、俺はそう言った。それを聞いた皆が「え？」という表情で俺を見る。

それは双子兄妹も同様であつた。復活した双子兄が聞いてくる。意外と彼は立ち直りが早いのもかもしれない。

「本当か、龍遠　ハク」

「ああ、千尋にとってこの試合は既に学園に入学した最初から思案していたことだろう。だから先にその三人に根回しをしていた可能性が高い。相手側がそれを承諾していれば、の話だがその三人はクラスには馴染んではいるのか？　クルル」

「うん。普通に仲はいいよ。でも自分のことに関しては申し訳なさそうに教えてくれなかったんだア」

「だろうな。そうした方が『面白い』とその三人は判断したんだろう。結構ノリがいい三人じゃないか」

「随分と楽しそうじゃな、ハク」

「うん？　そう見えるか小鳥？」

ルカの前でちょこんと座っていた小鳥が俺を見てニヤニヤしている。小さい子にニヤニヤされると何だか恥ずかしいというか不思議な感覚になるな。俺、マゾなのか……ロリコンかもしれない。

けれど、楽しそう、か。

うん、案外正解かも。

この状況を俺はもしかしたら楽しんでいるのかもしれない。ずっと勝てなかった千尋に、本気の本気でぶつかりあう試合。この試合で、俺の人生が決まるといっても過言ではないその分岐点に立っている現在。緊張や不安はあれど、それだけじゃあないぜ。

興奮に似た、想いの高鳴りを感じる。それはもしかしたら、皆も同じなのかもしれない。

あの超絶的な力をもった千尋と対戦するというのは、恐怖もあるだろうに、それを携えて望んでくれるのだ。ありがたい。……一応、ヴァンは出来るだけ闘わせたくないけど。彼には辛いであろう試合だ。

そうして、他にも色々話すことはあり、夜は明けていく。

皆で会話した後は、それぞれ考え事をしたのか一人、また一人と抜けていった。一緒の部屋であった空も帰ってきたのはちよつと遅れてのことだった。

笑っていた。

やるしかないさ、と。

十一名、それぞれがそれぞれの想いを胸に、夜が明けていく。

何を想い、何を考え、何をやるのか。

俺も同じようにそれをして、そして――

試合当日を迎える

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4351u/>

人魚と龍とヴァンパイア

2011年12月2日20時00分発行